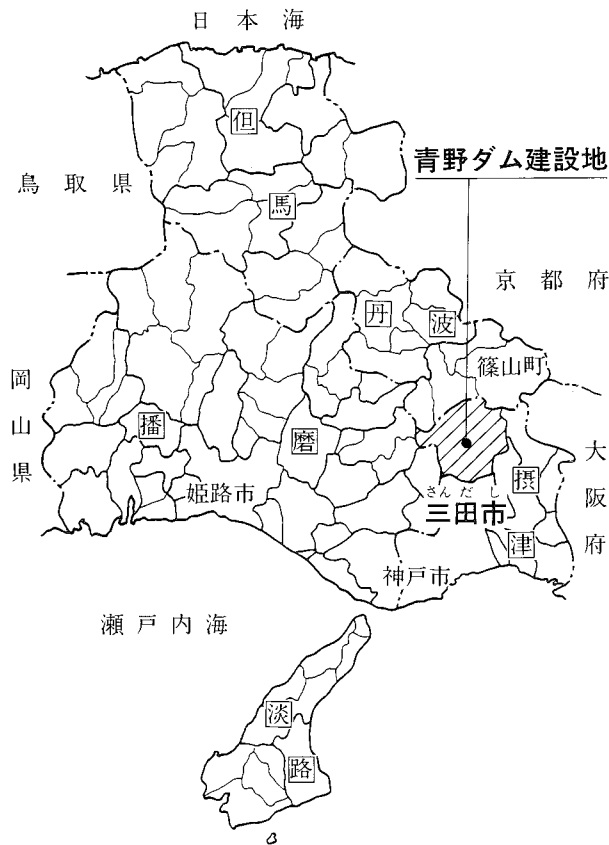


青野ダム建設に伴う
発掘調査報告書(1)

1987年

兵庫県教育委員会

青野ダム建設に伴う 発掘調査報告書(1)

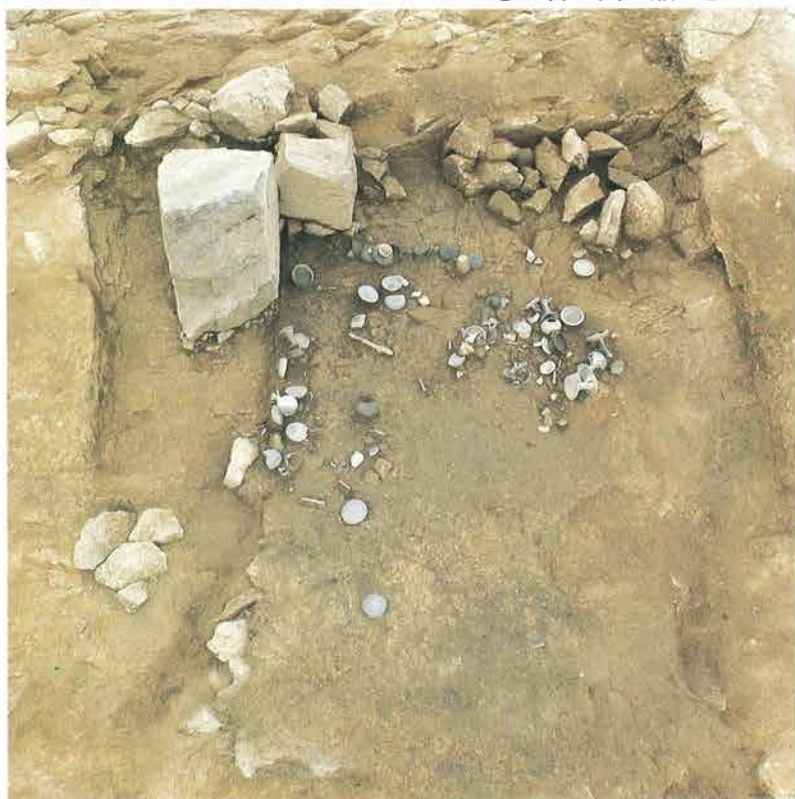


1987年

兵庫県教育委員会



青野ダム建設地景観(南より)



- 1 前ノ谷古墳(南より)
- 2 泓遺跡の立地



1 平井遺跡竪穴住居と掘立柱建物(東より)

2 八木ノ谷1号墳(北より)



- 1 八木ノ谷2号墳(南より)
- 2 庵ノ谷古墳(南西より)



- 1 川端窯(西より)
- 2 郡塚2号窯(南東より)



- 1 道東古墳(西より)
- 2 双子塚2号墳(北西より)



- 1 求メ塚古墳(北より)
- 2 落合古墳(南より)



- 1 落合1号窯(北より)
- 2 落合2号窯(北西より)

本文目次

第1章	はじめに	
第1節	開発事業と事前の調査	櫃本誠一 1
第2節	兵庫県教育委員会による調査	櫃本 9
第2章	周辺地域の歴史的環境	
第1節	先土器及び縄文時代	深井明比古 21
第2節	弥生時代	山本三郎 23
第3節	古墳時代	井守徳男 24
第4節	歴史時代	渡辺 昇 25
第3章	下青野地域の調査	
第1節	前ノ谷古墳 (AS-111)	山本・高島知恵子 27
第2節	泓遺跡 (AS-102)	渡辺・大下 明 54
第4章	末西地域の調査	
第1節	平井遺跡 (AW-54)	深井・岡田章一 63
第2節	八木ノ谷1号墳 (AW-59)	大平 茂 91
第3節	八木ノ谷2号墳 (AW-60)	大平 102
第4節	八木ノ谷中世墓 (AW-130)	岡田 115
第5章	北浦地域の調査	
第1節	庵ノ谷古墳 (AK-92)	井守 123
第6章	末野地域の調査	
第1節	川端窯 (AN-91)	森内秀造 133
第2節	郡塚窯 (AN-88)	井守 159
第3節	道東古墳 (AN-104)	渡辺・高島 167
第4節	双子塚2号墳 (AN-203)	渡辺・高島 173
第5節	求メ塚古墳 (AN-201)	櫃本・高島 182
第6節	求メ塚遺跡 (AN-87)	渡辺 188
第7章	末東地域の調査	
第1節	落合古墳 (AE-24)	櫃本・高島 191
第2節	落合窯 (AE-124)	山本雅和・山田清朝 198
第8章	小野地域の調査	
第1節	伊勢貝遺跡 (AO-3・4)	深井 231

挿 図 目 次

第 1 図 三田盆地遺跡分布図……………	26	第31図 竪穴住居Ⅲ……………	71
第 2 図 位置図(1 : 1000)……………	27	第32図 竪穴住居Ⅲ出土土器……………	71
第 3 図 石室実測図……………	29	第33図 竪穴住居Ⅳ……………	72
第 4 図 墳丘断面図……………	30	第34図 竪穴住居Ⅳ出土土器……………	73
第 5 図 石室遺存状態……………	30	第35図 竪穴住居Ⅴ出土土器……………	74
第 6 図 出土土器(1)……………	32	第36図 竪穴住居Ⅵ……………	75
第 7 図 出土土器(2)……………	33	第37図 掘立柱建物Ⅰ……………	76
第 8 図 出土土器(3)……………	34	第38図 掘立柱建物Ⅱ……………	77
第 9 図 出土土器(4)……………	35	第39図 溝Ⅱ出土土器……………	78
第10図 出土土器(5)……………	37	第40図 溝Ⅲ出土土器……………	79
第11図 出土玉類(1)……………	39	第41図 溝Ⅱ出土耳環……………	79
第12図 出土玉類(2)……………	40	第42図 包含層出土土器……………	80
第13図 出土耳環……………	41	第43図 出土土器(1)……………	84
第14図 出土鉄器(1)……………	42	第44図 出土土器(2)……………	85
第15図 出土鉄器(2)……………	43	第45図 出土土器(3)……………	86
第16図 出土鉄器(3)……………	44	第46図 1・2号墳地形測量図(調査前) ……	91
第17図 出土鉄器(4)……………	45	第47図 1・2号墳地形測量図(調査後) ……	92
第18図 出土鉄器(5)……………	46	第48図 外護列石実測図……………	93
第19図 地形測量図……………	55	第49図 東西墳丘断面図……………	93
第20図 下青野居館跡土壘横断面図…	56	第50図 石室実測図……………	94
第21図 下青野居館跡土壘縦断面図…	56	第51図 遺物出土状況……………	96
第22図 山形文押型文土器拓影・弥生土器(1~3)	57	第52図 出土土器(1)……………	98
第23図 出土石器(1)……………	59	第53図 出土土器(2)……………	99
第24図 出土石器(2)……………	60	第54図 出土土器(3)……………	100
第25図 遺跡全体図……………	64	第55図 出土耳環・鉄器……………	100
第26図 A地区遺構全体図……………	65	第56図 東西断面図……………	102
第27図 竪穴住居Ⅰ……………	66	第57図 石室実測図……………	103
第28図 竪穴住居Ⅰ出土土器……………	67	第58図 出土土器(1)……………	106
第29図 竪穴住居Ⅱ・Ⅴ……………	68	第59図 出土土器(2)……………	108
第30図 竪穴住居Ⅱ出土土器……………	69	第60図 出土土器(3)……………	109

第61図	出土土器(4)……………	110	第94図	1号窯土層断面図……………	159
第62図	出土土器(5)……………	111	第95図	2号窯土層断面図……………	160
第63図	出土耳環・鉄器・管玉……………	112	第96図	2号窯実測図……………	161
第64図	中世墓全体図……………	115	第97図	1号窯出土土器……………	164
第65図	1号墓……………	116	第98図	2号窯出土土器……………	165
第66図	2号墓……………	116	第99図	地形測量図……………	167
第67図	3号墓・土壌4……………	117	第100図	石室実測図……………	169
第68図	近世土壌……………	117	第101図	出土土器……………	171
第69図	出土土器・鉄器……………	119	第102図	出土耳環・鉄器……………	171
第70図	地形測量図……………	123	第103図	1号墳地形測量図……………	173
第71図	石室実測図……………	125	第104図	2号墳地形測量図……………	174
第72図	遺物出土状況……………	127	第105図	東トレンチ南壁土層断面図…	175
第73図	出土土器……………	130	第106図	墳丘北側土層断面図……………	175
第74図	出土耳環・鉄器……………	131	第107図	2号墳第1主体実測図……………	177
第75図	位置図(1:2000)……………	133	第108図	2号墳第2主体実測図……………	178
第76図	地形測量図……………	134	第109図	2号墳出土土器(1)……………	179
第77図	窯体実測図……………	135	第110図	2号墳出土土器(2)……………	180
第78図	坏A(87)へラ描き……………	137	第111図	墳丘図……………	182
第79図	すり鉢(165)底部……………	140	第112図	墳丘東西断面図(右が東)…	183
第80図	出土土器(1)……………	141	第113図	石室図……………	184
第81図	出土土器(2)……………	147	第114図	墳丘表土層出土須恵器……………	185
第82図	出土土器(3)……………	148	第115図	石室内出土須恵器……………	186
第83図	出土土器(4)……………	149	第116図	石室内出土鉄製品……………	186
第84図	出土土器(5)……………	150	第117図	出土土器……………	188
第85図	出土土器(6)……………	151	第118図	調査区平面図・土層断面図…	189
第86図	出土土器(7)……………	152	第119図	地形測量図(調査前)……………	191
第87図	出土土器(8)……………	153	第120図	地形測量図(調査後)……………	192
第88図	出土土器(9)……………	154	第121図	墳丘断面図……………	193
第89図	出土土器(10)……………	155	第122図	石室実測図……………	194
第90図	出土土器(11)……………	156	第123図	出土土器……………	195
第91図	出土土器(12)……………	157	第124図	出土鉄器……………	196
第92図	出土土器(13)……………	158	第125図	1・2号窯地形測量図(調査前)…	199
第93図	1・2号窯地形測量図……………	159	第126図	1号窯・SX01 地形測量図(調査後)	200

第127図	1号窯窯体実測図	201	第140図	2号窯出土土器(2)	220
第128図	SX01実測図	202	第141図	2号窯出土土器(3)	221
第129図	2号窯地形測量図(調査後)	203	第142図	2号窯出土土器(4)	222
第130図	2号窯窯体実測図	205	第143図	2号窯出土土器(5)	223
第131図	坏E内面調整写真	206	第144図	2号窯出土土器(6)	224
第132図	1号窯の甕の拓影	209	第145図	2号窯出土土器(7)	225
第133図	1号窯出土土器(1)	210	第146図	1・2号窯焼成器種構成グラフ	226
第134図	1号窯出土土器(2)	211	第147図	1号窯法量分布図	229
第135図	1号窯出土土器(3)	212	第148図	2号窯法量分布図	229
第136図	1号窯出土土器(4)	213	第149図	調査区遠景	231
第137図	1号窯出土土器(5)	214	第150図	遺構全体図	232
第138図	1号窯出土土器(6)	215	第151図	11・20・21トレンチ円形状遺構	233
第139図	2号窯出土土器(1)	219	第152図	出土土器	234

表 目 次

第1表	地区別分布調査結果	2
第2表	年度別発掘調査地点一覧	12
第3表	管玉長さ別個数分布表	38
第4表	ガラス小玉径別個数分布表	38
第5表	出土土器計測表	48
第6表	管玉計測表	50
第7表	ガラス小玉計測表	51
第8表	土玉計測表	51
第9表	鉄釘計測表	52
第10表	鉄鍬計測表	53
第11表	青野ダム泓遺跡石器一覧表	62
第12表	出土土器計測表	132
第13表	器種構成比較	145
第14表	2号窯遺物出土地点一覧表	209
第15表	1号窯遺物出土地点一覧表	215
第16表	須恵器出土地点別個体数一覧表	227

図 版 目 次

- 巻首図版 1 青野ダム建設地景観(南より)
- 巻首図版 2 1. 前ノ谷古墳(南より)
2. 泓遺跡の立地
- 巻首図版 3 1. 平井遺跡竪穴住居と掘立柱建物(東より)
2. 八木ノ谷1号墳(北より)
- 巻首図版 4 1. 八木ノ谷2号墳(南より)
2. 庵ノ谷古墳(南西より)
- 巻首図版 5 1. 川端窯(西より)
2. 郡塚2号窯(南東より)
- 巻首図版 6 1. 道東古墳(西より)
2. 双子塚2号墳(北西より)
- 巻首図版 7 1. 求メ塚古墳(北より)
2. 落合古墳(南より)
- 巻首図版 8 1. 落合1号窯(北より)
2. 落合2号窯(北西より)
- 図版 1 前ノ谷古墳
1. 石室の遺存および遺物出土状況(南より)
2. 遺物出土状況(南より)
- 図版 2 前ノ谷古墳
1. 遺物出土状況(東より)
2. 遺物出土状況(南より)
- 図版 3 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 4 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 5 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 6 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 7 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 8 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 9 前ノ谷古墳 石室内出土土器
- 図版 10 前ノ谷古墳
1. 石室内出土玉類
2. 石室内出土小玉
- 図版 11 前ノ谷古墳
1. 石室内出土土玉
2. 石室内出土鉄釘
- 図版 12 前ノ谷古墳
1. 石室内出土鉄鏃
2. 石室内出土鉄鏃・刀子・靱金具
- 図版 13 泓遺跡
1. 遺跡付近の景観(南より)
2. 遺跡の現状(北より)
- 図版 14 泓遺跡
1. 土層堆積状況(下青野館跡土壘断面)
2. 焼土壙・土壙
- 図版 15 泓遺跡
1. 出土石器(1)
2. 同上裏面
- 図版 16 泓遺跡
1. 出土石器(2)
2. 同上裏面
- 図版 17 平井遺跡
1. 竪穴住居と掘立柱建物群(東より)
2. 竪穴住居群(西より)
- 図版 18 平井遺跡
1. 竪穴住居Ⅲ(北西より)
2. 竪穴住居Ⅳ(西より)

- 図版19 平井遺跡
 1. 竪穴住居II・III(南西より)
 2. 竪穴住居VI(南より)
- 図版20 平井遺跡
 1. 掘立柱建物I
 2. 掘立柱建物II(北西より)
- 図版21 平井遺跡
 1. 竪穴住居I(2・6・7)、竪穴住居II(8・11・12) 2. 竪穴住居III(18・22)、竪穴住居IV(28)
- 図版22 平井遺跡
 1. 竪穴住居IV(23~25)、竪穴住居V(29~33・35) 包含層(61・65)
- 図版23 平井遺跡 出土土器
- 図版24 平井遺跡 出土土器
- 図版25 平井遺跡 出土土器
- 図版26 八木ノ谷1号墳
 1. 墳丘と埋葬施設(南より)
 2. 墳丘と列石(北より)
- 図版27 八木ノ谷1号墳
 1. 墳丘と列石(北西より)
 2. 列石と盛土(北より)
- 図版28 八木ノ谷1号墳
 1. 石室(南より)
 2. 奥壁部付近の遺物出土状況(南より)
- 図版29 八木ノ谷1号墳 石室内出土土器
- 図版30 八木ノ谷1号墳 石室内出土土器
- 図版31 八木ノ谷1号墳 石室内出土土器
- 図版32 八木ノ谷1号墳 石室内出土土器
- 図版33 八木ノ谷2号墳
 1. 墳丘と横穴式石室羨門部(南より)
 2. 横穴式石室奥壁裏込め(北より)
- 図版34 八木ノ谷2号墳
 1. 石室(南より)
 2. 閉塞石遺存状況(南より)
- 図版35 八木ノ谷2号墳
 1. 奥壁付近の遺物出土状況(南より)
 2. 玄門部付近の遺物出土状況(南より)
- 図版36 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版37 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版38 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版39 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版40 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版41 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版42 八木ノ谷2号墳 石室内出土土器
- 図版43 八木ノ谷2号墳
- 図版44 八木ノ谷中世墓
 1. 全景(南より)
 2. 1号墓(南より)
- 図版45 八木ノ谷中・近世墓
 1. ㊦2号墓上面(南より)
 ㊦2号墓出土状況(南より)
 2. ㊦3号墓(南より)
 ㊦近世墓(西より)
- 図版46 八木ノ谷中世墓 出土土器・鉄器
- 図版47 庵ノ谷古墳
 1. 全景(東より)
 2. 石室石積み(北西より)

- 図版48 庵ノ谷古墳
1. 石室（東より）
2. 遺物の出土状況（北西より）
- 図版49 庵ノ谷古墳
1. 石室掘り方（北東より）
2. 奥壁（北西より）
- 図版50 庵ノ谷古墳 石室出土土器
- 図版51 庵ノ谷古墳 石室出土土器・耳環・刀子・鉄鏃
- 図版52 川端窯
1. 発掘前の状況（北西より）
2. 全景（北西より）
- 図版53 川端窯
1. 土器遺存状況（北より）
2. 灰原堆積状況（南西より）
- 図版54 川端窯 出土土器
- 図版55 川端窯 出土土器
- 図版56 川端窯 出土土器
- 図版57 川端窯 出土土器
- 図版58 川端窯 出土土器
- 図版59 川端窯 出土土器
- 図版60 川端窯 出土土器
- 図版61 郡塚窯
1. 遠景
2. 1号窯全景
- 図版62 郡塚窯
1. 2号窯調査前（南東より）
2. 2号窯調査後（南東より）
- 図版63 郡塚窯
1. 2号窯遺物出土状況（北西より）
2. 1号窯(3・10・17・16)、2号窯(1・3・5・9・16)出土土器
- 図版64 道東古墳
1. 石室遺存状況（東より）
2. 石室石積み（北より）
- 図版65 道東古墳
1. 石室内敷石遺存状況（北東より）
2. 石室内遺物出土状況（北より）
- 図版66 道東古墳 出土土器・耳環
- 図版67 双子塚2号墳
1. 墳丘（北西より）
2. 墳丘北西部須恵器甕出土状況（北より）
- 図版68 双子塚2号墳
1. 第1埋葬施設（西より）
2. 第2埋葬施設（竪穴式石室）（北より）
- 図版69 双子塚2号墳 出土土器
- 図版70 求メ塚古墳
1. 墳丘（北西より）
2. 墳丘列石と埋葬施設（北より）
- 図版71 求メ塚古墳
1. 石室内遺物出土状況（南より）
2. 石室石積み（東より）
- 図版72 求メ塚古墳
1. 石室と盛土（北より）
2. ㊦石室内出土須恵器
㊧石室内出土鉄釘
- 図版73 求メ塚遺跡
1. 水田跡（北東より）
2. 杭列と土層（北東より）
- 図版74 落合古墳
1. 墳丘と埋葬施設（南より）
2. 盛土と埋葬施設（南より）

- | | | | | | | | |
|------|------|-------------------|---------------------------|------|-------|--------------------------------------|----------------------------|
| 図版75 | 落合古墳 | 1. 石室内遺物出土状況(南より) | 2. 墓壙と石室石組み(西より) | 図版79 | 落合窯 | 1. 2号窯全景(北西より) | 2. 窯体内土器(北西より) |
| 図版76 | 落合古墳 | 1. 墳丘基盤と埋葬施設(南より) | 2. 出土須恵器(11・1・2-墳丘、3-石室内) | 図版80 | 落合窯 | 1号窯出土土器 | |
| 図版77 | 落合窯 | 1. 全景(北東より) | 2. 1号窯窯体と土器遺存状況(北西より) | 図版81 | 落合窯 | 1号窯(113・118・121・124・132・130・142)出土土器 | 2号窯(17・33・58・52・94・72)出土土器 |
| 図版78 | 落合窯 | 1. 1号窯灰原の状況(北より) | 2. SX01(北より) | 図版82 | 落合窯 | 2号窯出土土器 | |
| | | | | 図版83 | 落合窯 | 2号窯出土土器 | |
| | | | | 図版84 | 落合窯 | 2号窯出土土器 | |
| | | | | 図版85 | 伊勢貝遺跡 | 1. 遺跡の立地 | 2. 11・20・21トレンチ円形状遺構(北より) |

付 図 目 次

- 付図1 青野ダム建設地内埋蔵文化財包蔵地位置図(昭和49年3月実施)
- 付図2 青野ダム建設地内遺跡分布地図

第1章 はじめに

第1節 開発事業と事前の調査

1. 開発事業

兵庫県三田市域北部に位置する青野ダムは、武庫川の支流である青野川・黒川の流を利用して計画された、多目的ダムである。事業用地は水没面積約245ha（非常水位海拔高186m）と若干の付替工事・代替地等が対象となった。

2. 分布調査

青野ダム建設用地の埋蔵文化財分布調査は、昭和49年3月に磯崎正彦氏に依頼して実施した。その結果は、101ヶ所の包蔵地が記録された（青野ダム建設用地内埋蔵文化財分布調査団『青野ダム建設用地内埋蔵文化財分布調査実績報告書』1974・3）。兵庫県教育委員会はこの資料を基礎に、第1次確認調査の実施を計画した。

3. 確認調査

第1次確認調査は、昭和51年3月に小野地区（AO3～9）、尼寺地区（AG17～21）について、磯崎正彦氏に依頼して実施された。小野地区はAO3およびAO4にまたがって、東西約200m、南北約150mの範囲が、遺構存在可能地区とみられ、また尼寺地区はAG20・21の中間付近において東西約150m、南北約100mの範囲を、遺跡の広がりとする報告であった。

第2次の確認調査は、昭和51年1月～3月に藤井祐介氏によって、末西地区（AW44～48・50・53～58・62・93・98）の調査が実施された。その結果AW54およびAW54南において、東西約63m、南北約39mの範囲（約2,500㎡）、および東西約25m、南北約32mの範囲（約800㎡）の、全面調査が必要であることが指摘された。さらにAW62では約4,500㎡、AW50においては約500㎡が全面調査を要することとなった。

4. 岡ノ谷古墳の発掘

昭和51年7月～10月にかけて、末西地区の岡ノ谷古墳（AW49）の調査が行われた。本古墳の調査は三田市教育委員会の依頼によって、河本健介氏が担当されたが、立地する地点が海拔高186mの非常水位付近にあることから、現状保存を図ることとなり、墳丘の調査は実施されなかった。

（櫃本誠一）

第1表 地区別分布調査結果

下青野 (A S) 地区

地点 番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	分布調査 採取遺物	時代	第1次 確認調 査年度	第2次 確認調 査年度	全面調 査年度	備考
32		下青野、鳴湯通 り・西通り他	散布地	沖積平野	水田 畑	土師器、須 恵器、陶磁 器	平安・ 近世	52			
33		下青野、向通り	散布地	沖積平野	水田	陶器	江戸	52			
34		下青野、泓通り ・岩崎	散布地	沖積平野	水田	土師器、須 恵器、陶磁 器	平安	52			
35		下青野、泓通り ・岩崎	散布地	沖積平野	水田	須恵器	平安	52	56		
36		下青野、泓通り	散布地	台地	畑	須恵器	平安	55			
37		下青野、泓通り	散布地	沖積平野	水田	須恵器		56			
38		下青野、岩崎	散布地	沖積平野	水田	須恵器、陶 質土器	平安	52			
39		下青野、泓通り	散布地	台地	畑	土師器、須 恵器	奈良～ 平安	52			
40		下青野、見瀬野 通り	散布地	沖積平野	水田	須恵器	平安	52			
41		下青野、見瀬野 通り	散布地	沖積平野	水田	須恵器	平安	56			
42		下青野、前ノ谷 通り	散布地	丘陵	畑	土師器、須 恵器	奈良	55			
43		下青野、藪ノ内 通り	散布地	沖積平野	水田	須恵器	平安	52			
97		末西、縄添	散布地	山麓	水田	石鏃、須 恵器	弥生	55			
100		下青野、岩崎	散布地	平地	水田	須恵器		52			
102	泓遺跡	下青野、泓通り	居館跡	丘陵	畑	陶磁器				53・56	
108		下青野、樋口通 り	散布地	平地	畑	須恵器	奈良～	56			
109		下青野、西通り	散布地	平地	畑	須恵器	奈良～	56			
110		下青野、前ノ谷 通り	散布地	平地	畑			56			
111	前ノ谷古墳	下青野、前ノ谷 通り	古墳	平地	畑	横穴式石室	古墳	56		57	
112		末西、縄添	古墳	平地	水田	横穴式 石室?	古墳	56			
113		下青野、小丸付	炭焼窯	山腹	山林		近世～				計画変更して 保存

末西 (AW) 地区

地点 番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	分布調査 採取遺物	時代	第1次 確認調 査年度	第2次 確認調 査年度	全面調 査年度	備考
44		末西、谷通り	散布地	山麓	水田	須恵器、陶磁器	平安	51			
45		末西、谷通り	散布地	山麓	水田	須恵器		51			
46		末西、谷通り	散布地	山麓	水田	須恵器、磁器	平安	51			
47		末西、谷通り	散布地	山麓	水田	須恵器		51			
48		末西、谷通り	散布地	山麓	水田	サヌカイト、須恵器、陶質土器	弥生・平安	51			
49	岡ノ谷古墳	末西、岡ノ谷	古墳	丘陵突端	竹林		古墳			51	
50	岡ノ谷遺跡	末西、岡ノ谷	散布地	谷筋、山麓	水田	土師器、須恵器、陶質土器	奈良・平安	56・58	58	58	
53		末西、西向	散布地	山裾	水田	須恵器	平安	51			
54	平井遺跡	末西、平井・北台	散布地	山麓、平地	水田	須恵器	平安	51	52	52	
55		末西、西向	散布地	平地	水田	須恵器	平安	51			
56		末西、松谷	散布地	谷筋	水田	須恵器		51			
57		末西、松谷	散布地	谷筋	水田	須恵器		51			
58		末西、松谷	散布地	谷筋	水田	須恵器		51			
59	八木ノ谷1号墳	末西、八木ノ谷	古墳	山麓	雑木林		古墳			52	
60	八木ノ谷2号墳	末西、八木ノ谷	古墳	山麓	雑木林		古墳			52	
62	北台遺跡	末西、北台・野手西	散布地	平地	水田	石鏃、須恵器	弥生・平安	51	52・53	52・53	
65	乾遺跡	末西、乾・溝ノ尾他	散布地	谷筋、山麓	水田畑	サヌカイト、土師器、須恵器、陶磁器	弥生・奈良～平安	56・57		60	
66		末西、井樋	窯跡	山麓	道路山林	県遺跡分布地図90		52			近代炭焼窯のため発掘せず
67	乾窯跡	末西、井樋	窯跡	山麓	道路山林	県遺跡分布地図91				52	
70		末西、野手東	散布地	平地	水田	土師器、須恵器		56			
71	溝ノ尾遺跡	末西、溝ノ尾	散布地	丘陵	水田	サヌカイト、須恵器、陶器	弥生・平安	56～60	58～60	59～61	
72		末西、溝ノ尾・蓮池通り	散布地	丘陵	水田	土師器、須恵器	奈良～平安	56			

はじめに

73	南台遺跡	末西、南台	散布地	丘陵	水田	土師器、須恵器、陶器	奈良・平安	55	56		
74		末西、南台・溝ノ尾	散布地	谷筋、丘陵	水田	須恵器、陶器	平安	56	56		
93		末西、野手東	散布地	平地	水田	須恵器	平安	51			
98		末西、西向	散布地	平地	水田	須恵器		51			
115		末西、老ヶ懐	古墳	丘陵	山林						計画変更によって保存
116		末西、老ヶ懐	古墳?	丘陵	山林						計画変更によって保存
117		末西、老ヶ懐	古墳?	丘陵	山林		古墳				計画変更によって保存
118		末西、老ヶ懐	古墳?	丘陵	山林		古墳				計画変更によって保存
130	八木ノ谷中世墓	末西、八木ノ谷	中世墳墓	山麓	雑木林		鎌倉			52	

北浦 (AK) 地区

地点番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	分布調査採取遺物	時代	第1次確認調査年度	第2次確認調査年度	全面調査年度	備考
51		北浦、東浦通り	散布地	谷筋、平地	水田	須恵器					
52		北浦、東浦通り・平井・三ノ谷	散布地	平地	水田	土師器、須恵器、陶磁器	古墳・奈良・平安	52			
61		末東、墓ノ口	散布地	平地	水田	須恵器	平安	52			
63		末東、墓ノ口・中田	散布地	平地	水田	土師器、須恵器、陶磁器	平安	52			
64		末東、中田・二ッ池	散布地	平地	水田畑	土師器、須恵器、陶器	奈良・平安	58			
68		末東、二ッ池	散布地	山麓	水田	須恵器		52			
69		末東、中田	散布地	平地	水田	陶器	近世	58			
75		末東、塩ヶ谷・地福	散布地	平地、谷筋	水田	土師器、須恵器、陶器	平安	58			
76	みどろ池窯跡	末東、地福	窯跡?	山麓	雑木林	須恵器	奈良	59			地形測量のみ保存
77		末東、二ッ池	散布地	山麓	畑	土師器、須恵器、陶器	平安	58			
78	溝向遺跡	末東、溝向	散布地	山裾	水田	土師器、須恵器	奈良・平安	52	59	60	
79		末東、溝向	窯跡?	丘陵	水田	須恵器	平安	59・60			
80	井ノ方遺跡 井ノ方窯跡	末東、井ノ方・庵ノ谷	散布地	丘陵	水田畑	土師器、須恵器	平安	58		60	

はじめに

81		末東、井ノ方	散布地	低地	水田	須恵器		57			
82		末東、庵ノ谷	散布地	山麓	水田	須恵器					再分布調査後 実施せず
83		末東、庵ノ谷・ 貝谷・泥亀他	散布地	平地 丘陵	水田 畑	土師器、須 恵器、陶磁 器	平安	57	58		
84		末東、泥亀	散布地	平地	水田	須恵器	平安	56・57	58		
85		末東、貝谷・落 合	散布地	山腹	畑	須恵器		56			
86	貝谷窯跡	末東、落合	窯跡	山麓	山林	須恵器	奈良～ 平安			52	
92	庵ノ谷古墳	末東、庵ノ谷	古墳?	丘陵末端	宅地	須恵器	古墳			53	
94		北浦、瀧渡	散布地	山麓	水田	須恵器、陶 器		55			
95		北浦、瀧渡	散布地	山麓	水田	須恵器		55			
99		北浦、溝向		平地	水田	土師器、須 恵器					再分布調査後 実施せず
101		北浦、庵ノ谷	散布地	山麓	水田	須恵器		57			
114		北浦、西上通り	散布地	平地	水田	陶器	古墳	56			
119	地福窯跡	北浦、地福・塩 ヶ谷	窯跡	山麓	山林 池	須恵器	奈良		58	58	
120		北浦、地福	散布地	山麓	山林 水田	須恵器	奈良	58			
121		北浦、庵ノ谷	窯跡?	山麓	山林		奈良		57		
123		北浦、上蛭田	窯跡	丘陵	山林		古墳	58			
127		末東、庵ノ谷	散布地	平地	神社境 内	須恵器	平安～	57			
128		末、蛭田	散布地	山麓	山林	須恵器	鎌倉			58	

末野 (AN) 地区

地点 番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	分布調査 採取遺物	時代	第1次 確認調 査年度	第2次 確認調 査年度	全面調 査年度	備考
87	求メ塚遺跡	末野、求メ塚	散布地	谷筋・ 低地	水田	須恵器		54		55	
88	郡塚窯跡	末野、郡塚	散布地	谷筋	水田	須恵器	奈良～ 平安			53	
90		末野、上平山・ 川端	散布地	丘陵	水田 畑	土師器、須 恵器	古墳～ 平安	56			
91	川端遺跡 川端窯跡	末野、道東・川 端	散布地 窯跡?	山腹	道路 山林	須恵器	奈良～ 平安		52	52・53	
104	道東古墳	末野、道東	古墳	丘陵	山林	須恵器	古墳			55	
105		末野、道東	古墳?	丘陵	山林		古墳			55	

はじめに

106		末野、郡塚・道東	散布地	丘陵	山林	陶磁器	近世			55	
107		末野、郡塚	屋敷跡?	谷筋	水田	土師器、須恵器	古墳	55			
201	求メ塚古墳	末野、求メ塚	古墳	山腹	山林		古墳			56	
203	双子塚2号墳	末野、道東	古墳	丘陵	山林		古墳			55	1号墳は地区外地形測量実施

末東 (A E) 地区

地点番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現状	分布調査採取遺物	時代	第1次確認調査年度	第2次確認調査年度	全面調査年度	備考
22		末、下蛭田	散布地	平地	水田	須恵器		55			
23		末、上蛭田・下蛭田	散布地	山麓	水田	須恵器	平安	57			
24	落合古墳	末、落合	古墳	尾根突端	山林	須恵器	古墳			57	
25		末、藤谷	散布地	平地	水田	須恵器、磁器	奈良～平安	55			
26		末、藤谷	散布地	平地	水田	須恵器		55			
28		末東、上黒川	散布地	平地	水田	土師器、須恵器、陶質土器	平安	56			
29		加茂、上山ノ内	散布地	平地	水田	須恵器		55			
30		末、下黒川	散布地	平地	水田	石鏃、須恵器	弥生～平安	56			
31		尼寺、添谷	散布地	山麓	畑	土師器、須恵器	平安				再分布調査後実施せず
89		末東、下黒川・上黒川	散布地	平地	水田	須恵器	奈良～平安	56			
96		小野、長尾	散布地	山裾	畑	須恵器					再分布調査後実施せず
122		末、上蛭田	井戸	山腹	山林			57			
123		末、上蛭田	古墳?	山腹	山林			57			
124	落合窯跡	末、落合	窯跡	山麓	山林池	須恵器	奈良			57	
125		末、落合	窯跡?	山麓	山林		奈良	56			
126		末、上黒川	古墳?	山麓	山林		古墳	57			
130		末東、落合						57			

はじめに

尼寺 (AG) 地区

地点 番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現況	分布調査 採取遺物	時代	第1次 確認調 査年度	第2次 確認調 査年度	全面調 査年度	備考
14		尼寺、流田	散布地	台地	水田	須恵器	平安	52	54		
15		尼寺、岡ノ下	散布地	台地	水田	土師器、須 恵器、陶質 土器		52			
16		尼寺、古谷	散布地	山麓	水田	須恵器	奈良				再分布調査後 実施せず
17		尼寺、古谷	散布地	山麓	水田	土師器、 須恵器	平安	50			
18		尼寺、溝田	散布地	平地	水田	須恵器、陶 質土器	平安	50			
19		尼寺、黒谷	散布地	平地	水田	須恵器	平安	50			
20		尼寺、黒谷・川 田	散布地	平地	水田 畑	須恵器、陶 磁器	平安	50	52		
21		尼寺、黒谷	散布地	平地	水田	須恵器	平安	50	52		
27		尼寺、広畑	散布地	山麓	水田	須恵器	平安				再分布調査後 実施せず

小野 (AO) 地区

地点 番号	遺跡名	所在地	種別	立地	現況	分布調査 採取遺物	時代	第1次 確認調 査年度	第2次 確認調 査年度	全面調 査年度	備考
1		小野、伊勢貝	散布地	平地	水田	須恵器、磁 器	平安～ 近世				AO 103 の 調査結果に より中止
2		小野、伊勢貝	散布地	山麓	水田	土師器、須 恵器、陶磁 器	平安～ 近世				AO 103 の 調査結果に より中止
3	伊勢貝遺跡	小野、伊勢貝	散布地	山麓	水田	石鏃、土師 器、須恵器、 陶磁器、土 錘	平安～ 近世	50	52		2 地点一括 して伊勢貝 遺跡
4	伊勢貝遺跡	小野、伊勢貝、 佃	散布地	山麓、 平地	水田	土師器、須 恵器、陶磁 器	平安	50	52		
5		小野、伊勢貝	散布地	平地	水田	磁器		50			
6		小野、渡瀬	散布地	平地	水田	須恵器	奈良	50			
7		小野、伊勢貝・ 渡瀬	散布地	段丘端、 平地	畑 水田	須恵器、陶 器	平安	50			
8		小野、佃・仲道	散布地	山麓	水田	須恵器、陶 質土器	平安	50			
9		小野、仲道	散布地	段丘	水田	須恵器、陶 質土器		50			

はじめに

10		小野、仲道	散布地	段丘	水田	須恵器					再分布調査後 実施せず
11		小野、仲道	散布地	低地	水田	土師器、須 恵器、磁器	平安				再分布調査後 実施せず
12		小野、渡瀬	散布地	山裾	水田	須恵器					再分布調査後 実施せず
13		小野、渡瀬	散布地	山裾	水田	土師器、須 恵器、磁器	平安				再分布調査後 実施せず
103	伊勢貝遺跡	小野、伊勢貝	散布地	平地	水田、 栗林	土師器、須 恵器			53		保存

第2節 兵庫県教育委員会による調査

1. 調査の経過

昭和52年5月からは、さきの調査結果をうけて、兵庫県教育委員会が発掘調査を担当することとなった。県教委はこれらの調査やその他の調査等から、52年4月1日づけで8名の専門職員を採用して対応することとなった。

発掘調査は昭和61年7月まで、別表のとおり連年実施したが、その調査規模には大小があり、かつ年間の調査に要した期間にも長短があった。また調査を進めるうえで、作業員の確保、調査基地の充実、発掘用器材の確保・運搬、調査員の宿舍の確保など、解決・整備すべき点も多かった。また、青野ダム建設事業の進捗状況も決して平坦ではなかったようで、発掘調査地点の折衝や埋め戻し作業などに、かなりの労力を割くこともあった。

2. 調査の方法

県教委の担当以前に28地点の確認調査が行われていたが、なお73ヶ所の確認を要する地点が残されていた。分布調査結果によるすべての地点に、20～40m間隔の試掘壕・トレンチを入れることを原則として確認調査を実施した。また窯跡の存在が顕著になるにしたがって、再度の分布調査や細長いトレンチ発掘、あるいは磁気探査法などによる調査を随時行った。

その結果、試掘調査を実施した地点は200ヶ所、そのうち遺構の確認されたいわゆる遺跡は28ヶ所であった。遺跡の種別は旧石器時代2遺跡、縄文時代3遺跡、弥生時代2遺跡、古墳時代以降遺跡（時代の重複する遺跡はそれぞれの時代の遺跡数に含む）であったが、弥生時代以前の遺跡については、遺物の出土があったのみで遺構の検出はみられなかった。古墳時代以降の遺跡のうち古墳は10基、窯跡13基であった。

なお遺跡名については、100ヶ所をこえる試掘地点があったことから、確認調査を実施した後、確実に遺跡であることが判明した時点で、小字名を遺跡名とした。

3. 調査及び遺物整理

昭和51年度までの調査については、先に述べたとおりである。昭和52年度から兵庫県教育委員会が発掘調査を担当することとなったが、通算10年間の人事移動は夥しく、逐一列記することを省略するが、すべての調査を兵庫県教育委員会社会教育・文化財課が実施した。現地の発掘調査担当者は、2名～8名が用地買収の進行に伴って参加した。

遺物整理については、昭和54年度から調査の完了した遺跡を順次実施した。その間遺物整理の場所は、王子分館から魚住分館、荒田に所在する県埋蔵文化財調査事務所へと、2度の移転があった。遺物整理は体制が十分でなかったことや、窯跡の発掘が重なったこともあって、昭和58年度以降の報告書の刊行については、次年度に送らざるを得ない状況と

なった。

青野ダム建設事業に伴う発掘調査は、当初10年間の長期におよぶとは想定されていなかった。しかし、遺跡推定地の多さから、3～4年の調査期間は要することが推定されたことから、毎年度調査概報を刊行して一応の取りまとめを行うこととし、昭和52年度から3年間刊行した。概報の表題と報告の遺跡名は次のとおりである。

- ・(兵庫県教育委員会編『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』昭和53年3月)

報告遺跡および
地点名
八木ノ谷1・2号墳(AW-59・60)、八木ノ谷中世墓(AW-130)、平井遺跡(AW-54)、川端遺跡(AN-91)、乾窯跡(AW-67)、貝谷窯跡(AK-86)、伊勢貝遺跡(AO-3・4)、AG-20・21、AS-32～35・38～40・43・100

- ・(兵庫県教育委員会編『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)』昭和54年3月)

報告遺跡および
地点名
庵ノ谷古墳(AK-92)、郡塚窯跡(AN-88)、川端遺跡・川端窯跡(AN-91)、北台遺跡(AW-62)、泓遺跡(AS-102)

- ・(兵庫県教育委員会編『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(3)』昭和55年3月)

報告遺跡および
地点名
双子塚古墳、道東古墳(AN-104)、求メ塚遺跡(AN-87)、南台遺跡(AW-73)、AE-22・25・26・29、AS-36・42・97、AK-94・95、AN-107、分布調査

10年間におよぶ現地調査の期間において、多くの方々から御援助を賜ったが、特に、青野川流域地権者会長畑末政春・黒川流域地権者会長岡本政夫両氏には、発掘調査体制の整わない初期の段階から終了まで、多大の御配慮を頂いた。また、北浦・上青野・下青野・母子・小野・志手原・末野・須磨田・東山・上深田地域の方々には、酷暑、厳寒の季節をも含め、長期間の現地作業に従事していただいた。記して厚く感謝申し上げます。

遺物整理事業は昭和53年度から開始した。53年度は発掘調査基地のプレハブで、水洗い・ネーミング作業を実施した。以後、原則として整理補助員1～3名で、当該年度出土遺物の水洗い・ネーミング作業を行った。

昭和54年度からは王子分館で、接着・復元、実測作業を始めた。実施した遺跡は52年度発掘した、伊勢貝遺跡・平井遺跡・八木ノ谷1号墳・同2号墳・八木ノ谷中世墓・乾窯跡・貝谷窯跡である。

兵庫県教育委員会による調査

昭和54年度は前年度発掘を実施した、郡塚窯跡・川端遺跡・川端窯跡・庵ノ谷古墳を併せて行った。

昭和55年度は平井遺跡・川端窯跡の接着・復元、実測を実施した。

昭和56年度は川端窯跡・前年度発掘の道東古墳・双子塚2号墳の接着・復元、実測作業を行った。

昭和57年度は求ノ塚・南台遺跡・遺跡の整理を実施した。

昭和58年度からは勤務地が明石市の魚住分館に移転し、南台遺跡・前ノ谷古墳・落合窯跡・落合古墳の整理を実施した。

昭和59年8月からは、現在の兵庫県埋蔵文化財調査事務所で、地福窯跡の整理を行った。

昭和60年度は北台遺跡・岡ノ谷遺跡・溝ノ尾遺跡・川端遺跡・地福窯跡の整理を行った。

昭和61年度では、川端窯跡・平井遺跡などのトレース作業や、報告書作製の諸作業を行った。

第2表 年度別発掘調査地点一覧

50年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AO	3	伊勢貝遺跡	51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	柱穴	土師器、須恵器	平安～鎌倉	第2次確認調査の必要あり	
AO	4	伊勢貝遺跡	51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	土壇	土師器、須恵器	平安末～室町	第2次確認調査の必要あり	
AO	5		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		—	調査終了	
AO	6		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		奈良	調査終了	
AO	7		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	
AO	8		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	
AO	9		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		—	調査終了	
AG	17		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	
AG	18		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	
AG	19		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	
AG	20		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	
AG	21		51・3・15 51・3・31	磯崎 正彦	遺構は検出されず		平安	調査終了	

51年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AW	49	岡ノ谷古墳	51・7・29 51・10・10	河本 健介	横穴式石室	土師器、須恵器、鉄器、玉類	古墳後期		保存
AW	44		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	土師器		調査終了	
AW	45		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	石組み遺構	陶磁器		調査終了	
AW	46		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	陶磁器		調査終了	
AW	47		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	土師器、須恵器、陶磁器		調査終了	
AW	48		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	柱穴、溝、土壇	土師器、須恵器、陶磁器		調査終了	

兵庫県教育委員会による調査

AW	50	岡ノ谷遺跡	52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	柱穴、溝	土師器、須恵器、 陶磁器		第2次確認調査の 必要あり	
AW	53		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	—		調査終了	
AW	54	平井遺跡	52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	溝、柱穴	石器、土師器、須 恵器、瓦器	古墳後期	第2次確認調査の 必要あり	
AW	55		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	須恵器		調査終了	
AW	56		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	—		調査終了	
AW	57		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	—		調査終了	
AW	58		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	須恵器		調査終了	
AW	62	北台遺跡	52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	柱穴、杭、溝	弥生土器、石器、 土師器、須恵器	弥生前期 古墳後期	第2次確認調査の 必要あり	
AW	93		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	須恵器		調査終了	
AW	98		52・1・10 52・3・25	藤井 祐介	遺構は検出されず	—		調査終了	

52年度

地点 略号	地点 番号	遺 跡 名	調査年月日	調査担当者	遺 構	出 土 品	遺跡の時代 採取土器の時代	調査後 の措置	遺 跡 の 取り扱い
AO	3・4	伊勢貝遺跡	52・5・24 52・7・18	山本・深井	円形状遺構、柱穴、 溝状遺構	土師器、須恵器	平安	調査終了	工法変更 保存
AN	91	川端遺跡	52・8・9 53・3・15	吉田・岡田 深井	竪穴住居跡1棟、 土壇2基	縄文土器、土師器、 須恵器	縄文、古 墳後期	第2次確認調査の 必要あり	破壊
AW	54	平井遺跡	52・8・1 53・3・15	山本・大平 岡田・深井	竪穴住居跡7棟、 溝3本、掘立柱建 物3棟	土師器、須恵器、 耳環、黒色土器、 瓦器、陶磁器	古墳後期 ～近世	調査終了	埋め戻し 後水没
AW	59	八木ノ谷1 号墳	52・5・23 52・8・19	櫃本・大平	横穴式石室	須恵器、金環	古墳後期	調査終了	工法変更 保存
AW	60	八木ノ谷2 号墳	52・5・23 52・8・19	櫃本・岡田	横穴式石室	土師器、須恵器、 金環、管玉、鉄器	古墳後期	調査終了	工法変更 保存
AW	130	八木ノ谷中 世墓	52・5・23 52・8・19	櫃本・岡田	片口・土鍋を骨蔵 器にした墓3基、 土壇4基	土師質土鍋、小皿、 鉄器	平安～ 鎌倉	調査終了	破壊
AW	62	北台遺跡	52・12・7 53・3・15	吉田・大平	土壇、溝	有舌尖頭器、石鏃、 縄文土器、土師器、 須恵器	先土器、 縄文、 中世	第2次調査の必要 あり	
AW	66		52・10・12 52・10・15	櫃本・大平	遺構は検出されず			調査終了	
AW	67	乾窯跡	52・7・10	吉田・岡田	焚口付近		奈良後半	調査終了	破壊

兵庫県教育委員会による調査

AS	32		52・12・19 53・1・12	吉田・深井	溝	弥生土器		調査終了	
AS	33		53・1・11 53・1・12	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	34		53・1・11 53・1・12	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	35		53・1・11 53・1・12	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	38		53・1・12	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	39		53・1・13	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	40		53・1・13	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	43		53・1・13	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AS	100		53・1・11	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AK	52		53・3・3	深井	遺構は検出されず			調査終了	
AK	61		53・2・28 53・3・3	深井	遺構は検出されず			調査終了	
AK	63		53・2・28 53・3・3	深井	遺構は検出されず			調査終了	
AK	68		53・2・28 53・3・3	深井	遺構は検出されず			調査終了	
AK	78		53・2・28 53・3・3	深井	遺構は検出されず			調査終了	
AK	86	貝谷窯跡	52・7・10 52・9・15	吉田・岡田	窯跡	須恵器(含へら書き文字)	平安	調査終了	保存
AG	14		53・3・6 53・3・14	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AG	15		53・3・6 53・3・8	吉田・深井	遺構は検出されず			調査終了	
AG	20		52・6・14 52・7・18	山本・深井	溝・土塋	弥生土器		調査終了	
AG	21		52・6・14 52・7・18	山本・深井	溝・土塋	弥生土器		調査終了	

53年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AO	103	伊勢貝遺跡	53・11・16 53・11・19	井守・渡辺	ピット	土師器、須恵器	古墳前期	調査終了	保存
AN	88	郡塚窯跡	53・5・23 53・6・14	井守・水口	窯跡2基	須恵器	古墳後期・奈良	調査終了	破壊
AN	91	川端遺跡	53・4・17 53・11・22	吉田・森内	竪穴住居跡2棟、土塋4基	石器、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器	縄文、弥生、古墳後期、奈良	調査終了	破壊

兵庫県教育委員会による調査

AN	91	川端窯跡	53・9・11 53・11・11	吉田・森内	窯跡	須恵器	奈良	調査終了	破壊
AW	62	北台遺跡	53・12・9 53・12・19	吉田・森内	柵列状遺構	石器、土師器、須恵器、瓦器	平安、鎌倉	調査終了	破壊
AS	102	泓遺跡 下青野居館跡	53・4・17 54・3・9	櫃本、渡辺	土塁、石垣、石列、通路跡、ピット	石器、弥生土器、土製品、鉄器、陶磁器	弥生、中世、近世、近代	追加調査の必要あり	
AK	92	庵ノ谷古墳	53・4・17 53・5・22	井守・水口	横穴式石室	土師器、須恵器、鉄鏃、銀環	古墳後期	調査終了	破壊

54年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AN	87	求メ塚遺跡	54・6・28 54・7・19	池田・岡崎	ピット・水田面	弥生土器、須恵器	平安	第2次確認調査の必要あり	
AG	14		54・6・28 54・7・19	池田・岡崎	遺構は検出されず	石器、土師器、須恵器、青磁、丹波焼		調査終了	

55年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AN	87	求メ塚遺跡	55・11・10 55・11・30	櫃本、渡辺	水田跡	土師器、須恵器	室町	調査終了	破壊
AN	104	道東古墳	56・1・6 56・2・6	櫃本、渡辺	横穴式石室	土師器、須恵器、銀環、鉄鏃	古墳後期	調査終了	破壊
AN	105		55・11・15 55・11・16	櫃本、渡辺	遺構は検出されず	—		調査終了	
AN	106		55・11・16 55・11・17	櫃本、渡辺	遺構は検出されず	陶磁器、瓦、鉄滓	近世	調査終了	
AN	107		55・11・18 55・11・19	櫃本、渡辺	遺構は検出されず	土師器、須恵器		調査終了	
AN	203	双子塚2号墳	55・10・6 55・11・10	櫃本、渡辺	横穴式石室	須恵器	古墳後期	調査終了	墳丘裾一部破壊
AW	73	南台遺跡	55・11・29 55・12・12	櫃本、渡辺	ピット、土壇、溝状遺構	土師器、須恵器、陶磁器	鎌倉、室町、古墳後期	第2次確認調査の必要あり	
AS	36		55・11・26 55・11・28	櫃本、渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AS	42		55・11・26 55・11・28	櫃本、渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AS	97		55・11・26 55・11・28	櫃本、渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AK	94		55・11・29 55・12・12	櫃本、渡辺	遺構は検出されず			調査終了	

兵庫県教育委員会による調査

AK	95		55・11・29 55・12・20	櫃本、渡辺	遺構は検出されず				調査終了
AE	22		55・11・20 55・11・25	櫃本、渡辺	遺構は検出されず	石鏃			調査終了
AE	25		55・11・29 55・12・12	櫃本、渡辺	遺構は検出されず				調査終了
AE	26		55・11・29 55・12・25	櫃本、渡辺	遺構は検出されず				調査終了
AE	29		55・11・20 55・11・25	櫃本、渡辺	遺構は検出されず				調査終了

56年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AN	90		56・4・21 56・4・22	櫃本、渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AN	201	求メ塚古墳	56・12・21 57・1・18	櫃本、渡辺	横穴式石室	須恵器、鉄釘	古墳後期	調査終了	破壊
AW	50	岡ノ谷遺跡	56・4・21 56・4・26	櫃本・山本 岡田・渡辺	ピット、土壇	土師器、須恵器	平安～	追加調査の必要あり	
AW	65	乾遺跡	56・5・11 56・5・12	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			追加調査の必要あり	
AW	70		56・5・9 56・5・12	櫃本・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AW	71	溝ノ尾遺跡	56・4・21 56・4・28	櫃本・渡辺	ピット			追加調査の必要あり	
AW	72		56・4・21 56・4・28	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AW	73	南台遺跡	56・5・21 57・3・31	櫃本・山本 岡田・渡辺	掘立柱建物、円形土壇、溝	土師器、須恵器、陶磁器、古銭	古墳後期～室町	調査終了	破壊
AW	74		56・4・21 56・4・23	櫃本・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AS	35		57・1・20 57・2・8	櫃本・渡辺	堀（東）	弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器	室町	調査終了	
AS	37		57・1・20 57・3・31	櫃本・渡辺	堀（北）			調査終了	
AS	41		56・5・11 56・5・12	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AS	102	泓遺跡	57・1・20 57・3・31	櫃本・渡辺	土壘、石垣、土壇	縄文土器、弥生土器、石鏃、陶磁器	縄文前期 弥生後期 室町～	調査終了	破壊
AS	108		56・5・12 56・5・16	櫃本・渡辺	溝状遺構			調査終了	
AS	109		56・5・12 56・5・16	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	

兵庫県教育委員会による調査

AS	110		56・5・16 56・5・17	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AS	111	前ノ谷古墳	56・5・11 56・5・17	櫃本・渡辺	横穴式石室			全面調査 の必要あり	
AS	112		56・4・25 56・4・30	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AK	84		56・4・21 56・4・28	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AK	85		56・4・21 56・4・28	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AK	114		56・4・21 56・5・17	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AE	28		56・4・21 56・4・28	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AE	30		56・4・21 56・4・28	櫃本・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AE	89		57・1・19 57・1・19	岡田・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	
AE	125		56・4・21 56・4・22	岡田・渡辺	遺構は検出されず			調査終了	

57年度

地点 略号	地点 番号	遺 跡 名	調査年月日	調査担当者	遺 構	出 土 品	遺跡の時代 採取土器の時代	調査後 の措置	遺 跡 の 取り扱い
AW	65	乾遺跡	57・12・12 57・12・21	櫃本・山本	柱穴	土師器、須恵器	平安	調査終了	破壊
AW	71	溝ノ尾遺跡	57・12・9 57・12・11	櫃本・山本				調査終了	
AW	74		57・12・8 57・12・8	櫃本・山本	遺構は検出されず	土師器、須恵器		調査終了	
AS	111	前ノ谷古墳	57・12・12 58・1・12	櫃本・山本	横穴式石室	須恵器、鉄器、玉 類、金環	古墳後期	調査終了	破壊
AK	81		57・12・21 57・12・21	櫃本・山本	遺構は検出されず			調査終了	
AK	83		57・11・22 57・12・7	櫃本・山本	遺構は検出されず			調査終了	
AK	84		57・11・15 57・11・20	櫃本・山本	遺構は検出されず	土師器、須恵器	古墳後期	調査終了	
AK	101		57・12・22 57・12・23	櫃本・山本	遺構は検出されず			調査終了	
AK	121		58・1・13 58・1・16	櫃本・山本	遺構は検出されず			調査終了	
AK	127		58・1・10 58・1・12	櫃本・山本	小ビット			調査終了	
AE	24	落合古墳	58・1・30 58・2・28	櫃本・山本	横穴式石室	須恵器、金環、鉄 釘	古墳後期	調査終了	破壊

兵庫県教育委員会による調査

AE	122		58・1・17 58・1・20	櫃本・山本	遺構は検出されず				調査終了	
AE	128		57・12・25 57・12・25	櫃本・山本	遺構は検出されず	須恵器			調査終了	
AE	124	落合窯跡	58・1・23 58・1・29	櫃本・山本	窯跡2基	土師器、須恵器	奈良		調査終了	破壊
AE	130		57・12・24 57・12・24	櫃本・山本	遺構は検出されず				調査終了	

58年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AW	50	岡ノ谷遺跡	59・2・3 59・3・20	吉田・岡田	竪穴住居状遺構1基、掘立柱建物3棟	弥生土器、石器、土師器、須恵器、陶磁器	弥生～近世	調査終了	破壊
AW	71	溝ノ尾遺跡	58・11・24 58・12・10	吉田・岡田	柱状ピット、溝状遺構		平安末	追加調査の必要あり	
AK	64		58・4・14 58・4・18	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AK	69		58・4・18 58・4・18	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AK	75		58・4・11 58・4・11	吉田・岡田	遺構は検出されず	須恵器		調査終了	
AK	77		58・4・12 58・4・12	吉田・岡田	遺構は検出されず	土師器		調査終了	
AK	80	井ノ方窯跡	58・4・11 58・4・12	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査継続	
AK	80	井ノ方遺跡	58・4・13 58・4・13	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査継続	
AK	83		58・4・19 58・4・19	吉田・岡田	柱状落ち込み			調査終了	
AK	84		58・4・19 58・4・19	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AK	119	地福窯跡	58・7・3 58・11・20	吉田・岡田	窯跡6基	須恵器	奈良～平安	調査終了	破壊
AK	120		58・4・21 58・4・21	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AK	123		58・4・22 58・4・22	吉田・岡田	遺構は検出されず			調査終了	
AK	128		58・6・2 58・6・20	吉田・岡田	中世墓、近世墓	須恵器、中国製青磁、丹波焼	13世紀前半、19世紀前半	調査終了	

59年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AW	71	溝ノ尾遺跡	59・12・4 60・3・25	吉識・西口 山田	竪穴住居跡4棟、掘立柱建物12棟、土塋	土師器、須恵器、石小刀、瓦器	古墳後期～平安初期、平安末～	追加調査の必要あり	
AK	76	みどろ池窯跡	60・2・4 60・2・7	吉識・西口 山田	遺構は検出されず	須恵器	奈良末		地区外のため調査を実施せず
AK	78	溝向遺跡	59・12・4 60・3・25	吉識・西口 山田	柱穴	須恵器	平安末～鎌倉	第2次確認調査の必要あり	

60年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AW	65	乾遺跡	61・3・12 61・3・29	岸本・久保	掘立柱建物6棟、溝、土塋	石鏃、土師器、須恵器、緑釉陶器	平安前期	調査終了	破壊
AW	71	溝ノ尾遺跡	60・4・26 61・2・8	岸本・久保 中川	竪穴住居跡1棟、掘立柱建物4棟、土塋	石器、土師器、須恵器	古墳後期	調査終了	
AK	78	溝向遺跡	60・4・17 61・1・31	井守・岸本 久保・中川	掘立柱建物8棟、土塋、池状遺構2基	角錐状石器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄器	平安前期～鎌倉前期	調査終了	破壊
AK	80	井ノ方窯跡	60・4・23 60・11・30	岸本・中川	窯体の底部分	須恵器	平安末～鎌倉前期	調査終了	破壊
AK	80	井ノ方遺跡	60・4・23 60・11・30	井守・岸本 久保・中川	掘立柱建物4棟、土塋12基	土師器、須恵器、中国製白磁碗	平安末	調査終了	破壊

61年度

地点略号	地点番号	遺跡名	調査年月日	調査担当者	遺構	出土品	遺跡の時代採取土器の時代	調査後の措置	遺跡の取り扱い
AW	71	溝ノ尾遺跡	61・5・7 61・8・8	岸本・久保	掘立柱建物17棟、溝、土塋	土師器、須恵器、瓦器	古墳後期～鎌倉前期	調査終了	破壊

第2章 周辺地域の歴史的環境

第1節 先土器および縄文時代

青野ダム建設予定地内の遺跡発掘調査が本格化した昭和52年当時では兵庫県下における先土器・縄文時代の遺跡の発掘例もわずかで、小規模なものであった。しかし、近年、住宅建設・道路建設・ほ場整備などの大規模な開発事業に伴い、その数も増加し、先土器時代の遺跡数は100ヶ所を超えている⁽¹⁾。

青野ダム建設予定地である三田市は丹有地区に位置する。この地区には近畿自動車道舞鶴線、北摂三田ニュータウンなどの大事業に伴って、発掘調査が進められ、近畿自動車道舞鶴線関係では春日・七日市遺跡⁽²⁾や板井・寺ヶ谷遺跡⁽³⁾が発掘された。

春日・七日市遺跡では約6000㎡にわたって、始良火山灰層の下に、ナイフ型石器、局部磨製石斧、搔器、削器、彫器など、チャート製の石器を中心に、20ヶ所以上のブロックが発掘され、中国山地で見られている石器群と関連する様相を呈している。板井・寺ヶ谷遺跡では約7000㎡にわたり、始良火山灰の上・下層に、サヌカイトやチャートを用いた石器群が出土した。上層では角錐状石器、ナイフ型石器、搔器、削器などが5ブロックで出土し、下層ではナイフ型石器、局部磨製石斧、搔器などが7ブロックで検出された。これらの遺物からは、瀬戸内と丹波の接点をうかがい知る資料と考えられ、共に広域火山灰層が確認され、当時の環境が復元できることも、非常に興味がある。この他、数少ない先土器時代遺跡の発掘例として、篠山町の藤岡山遺跡⁽⁴⁾がある。この遺跡は昭和47年河川改修に伴う調査で、先土器時代終末の尖頭器やスクレイパーや石核などが出土し、丹波地方の先土器時代遺跡発掘の口火を切った。

一方、三田市域では木器荘園遺跡⁽⁵⁾で有舌尖頭器が出土した他、北摂三田ニュータウン地区内の溝口遺跡⁽⁶⁾では大規模な発掘調査が行われ、丹波古成層から産出する赤色チャート製のナイフ型石器などが出土した。

兵庫県内の縄文時代遺跡は300ヶ所以上におよび、新発見の遺跡が増加しつつある。

縄文時代における三田市域の遺跡には内神下井沢遺跡⁽⁷⁾があり、後期の元住吉山Ⅰ式の深鉢が出土した。また昭和59年、福知山線複線電化に伴って発掘された桑原遺跡⁽⁸⁾では、中期末の北白川C式4期の深鉢口縁が出土した。三田幹線の道路工事中に発見された対中遺跡⁽⁹⁾では、晩期終末の突帯文土器が出土し、この中には長原式土器も含まれていた。この他、福島長町遺跡では後期の福田KⅡ式土器が出土した。以上の遺跡はいずれも武庫川の河岸段丘や、沖積地に位置し、遺物量もわずかで、遺構も検出されていない。しかし、こ

の武庫川の作用でつくられた自然堤防などの微高地には、縄文時代の古い時期からの遺跡が存在することが予想される。

一方、武庫川の支流域に目をうつすと、羽束川中流域には大藪遺跡⁽¹⁰⁾があり、後期初頭の中津式土器が採集された。

青野ダム建設予定地内は武庫川の支流である青野川と黒川に分かれる。青野川流域では北台遺跡⁽¹¹⁾ (AW-62) ではチャート製で小型の有舌尖頭器や、縄文後期の土壌が数基検出され、石鏃が多数出土した他、後期の磨消縄文土器が出土した。泓遺跡⁽¹²⁾ (AS-102) では縄文早期の山形押型土器が1点出土した。川端遺跡⁽¹³⁾ (AN-91) では縄文早期のチャート製の異形局部磨製石器や後期の深鉢形土器が出土した。

一方、黒川流域では、伊勢貝遺跡 (AO-3・4) から、縄文後期と考えられる粗製土器が若干出土したにすぎない。

以上、青野ダム建設予定地内は、武庫川の支流であり、しかも中流域から先土器や縄文時代の遺跡が点在することから、三田盆地を流れる武庫川本流域や、その支流域には相当数の遺跡が存在することを示唆するものであろう。 (深井明比古)

註(1) 兵庫県下の先土器時代遺跡のプライマリーな状況での発掘は10例に満たない。他は採集資料か或いは発掘の際の遊離した資料である。

- (2) 兵庫県教育委員会『春日・七日市遺跡第3回現地説明会資料』1985
兵庫県教育委員会『シンポジウム旧石器時代の人間と自然』1985
- (3) 兵庫県教育委員会『板井・寺ヶ谷遺跡現地説明会資料』2 1984
- (4) 深井明比古「兵庫における先土器時代終末から縄文時代草創期の石器群の様相一特に藤岡山遺跡・伊府遺跡を中心として」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』1980
- (5) 高島信之「三田市木器・木器荘園内遺跡出土の有舌尖頭器」『三田考古』1 1981
- (6) 山下秀樹・南博史他「兵庫県三田市溝口遺跡—北摂工業地区—」平安博物館 1986
- (7) 神戸新聞社会部編『祖先のあしあと1』1953
- (8) 吉田昇・深井明比古『桑原遺跡』兵庫県教育委員会 1986
- (9) 兵庫県教育委員会が昭和60年発掘調査を行った。
- (10) 高島信之「三田市上槻瀬、大藪遺跡採集の縄文土器片」『三田考古』6 三田市教育委員会 1983
- (11) 櫃本誠一・佐藤良二他「AW-62調査概要」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)』兵庫県教育委員会 1979
- (12) 渡辺昇「AS-102地点(居館跡)」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)』兵庫県教育委員会 1979
- (13) 森内秀造・佐藤良二「AN-91(住居址、窯址)調査概要」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報(2)』兵庫県教育委員会 1979
- (14) 櫃本誠一・深井明比古「AO-3・4第2次確認調査概要」『三田市・青野ダム建設に伴う埋蔵文化財調査概報』兵庫県教育委員会 1978

第2節 弥生時代

青野ダム建設の対象となった武庫川の支流である青野川流域、黒川流域における弥生時代の様相を語り得る資料は、きわめて僅かしか知られていない。この状況は、両流域の遺跡の考古学的な調査が遅れていることが原因ではない。両流域はここ数年の青野ダムに伴う遺跡の調査によって、県下のどの河川流域よりも遺跡の調査密度が高いところと言える。なお、両地域は山間部を流れる両河川によって形成されたきわめて小規模な沖積地を有しているのみである。

青野ダム建設に伴う調査でも、数遺跡において弥生土器片と土器一主に石鏃であるが、僅かに出土しているのみであり、竪穴住居跡などの明確な遺構の伴う遺跡の調査例はない。以下列記すれば次のとおりである。

平井遺跡で弥生時代前期段階の甕破片が出土している。1点だけではあるが、この資料は昭和60年に対中遺跡で前期弥生土器や石庖丁が出土するまでは、三田市域唯一の弥生時代前期の土器であった。

泓遺跡では弥生時代中期から後期の土器片が出土し、岡ノ谷遺跡からは弥生時代中期(第Ⅲ様式)の土器と石庖丁、石鏃が出土している。他に求メ塚遺跡、北台遺跡から弥生時代後期の土器片が出土している。また、黒川流域では黒郷遺跡で弥生土器が採集されている。若干の遺漏があるだろうが、以上が青野ダム関係の調査で判った弥生時代の資料のほぼすべてである。

青野川、黒川流域の以上の様相から、この流域の弥生時代は定住して水田農耕を行った痕跡はきわめて乏しく、仮に将来、竪穴住居跡など居住関係の遺構が調査されたとしても、極めて小規模なものであろう。後述する武庫川中流域に形成された平野の弥生人の狩猟・採集の場として利用されていたと、この両流域を捉えることも可能であろう。

三田市域を流れる武庫川中流域の三田盆地の弥生時代の遺跡の内容については、『北摂ニュータウン遺跡調査報告書』Ⅱで詳しく報告されており参照されたい。

北摂ニュータウンの報告以後では、武庫川右岸の段丘末端に立地している対中遺跡の調査が目される。対中遺跡では、弥生時代前期後半の時期の井堰を伴った水路が調査され、三田盆地の弥生文化が前期に定着していることが明らかになった。また、福島長町遺跡からは沖積地で初めての竪穴住居跡が確かめられた。

盆地の南端部にあたる神戸市北区道場町の塩田遺跡では、石庖丁を中心とした石器の未成品から完成品までの製作工程をたどれる資料が多く出土しており、石庖丁を製作している遺跡として重要であり、今後その分布の範囲を明らかにすることが必要であろう。なお、塩田遺跡からは弥生時代中期の溝、弥生時代後期の竪穴住居跡も確認されている。

(山本三郎)

第3節 古墳時代

この流域では現在のところ、顕著な前期古墳の存在は知られていない。僅かに武庫川右岸の貴志で奈良山1号墳、2号墳が古墳時代前期に溯らしいことや、最近神戸市北区長尾町で調査された定塚古墳群が弥生時代終末～古墳時代初頭の方墳と考えられている。しかし、この地域の古墳時代前期の集落遺跡と想定できる遺跡は、ほとんど知られておらず、顕著な前期古墳の存在する可能性は少ないと考えられる。

古墳が本格的に造営されるのは、5世紀末～6世紀初頭以降である。5世紀末～6世紀前半に築造される古墳は、木棺直葬を埋葬施設とする小規模古墳が中心である。内容については明らかでない古墳が多いが、三田盆地北部の内神、宮脇、三田盆地南部の下田中、日下部などの地域の古墳群が知られている。しかし、これらの古墳は特定の地域に限定されるようで、その他地域ではほとんど造墓活動を行っていないらしい。しかし、この種の群小古墳は最近各地で発見されるようになっており、在地性の強い古墳と考えられる。

6世紀中葉以降になると三田盆地周辺では、それまでの様相とは異なる展開が見られるようになる。その一つは、横穴式石室を埋葬施設とする古墳が築造を開始するようになることである。特に武庫川左岸の加茂、福島付近には大規模な群集墳が築造されているが、発掘調査が行われていないため、詳細は不明である。一方、発掘調査の比較的進んでいる武庫川右岸の貴志周辺の古墳群は、この時期になっても一貫して木棺直葬墳を築造しており、横穴式石室を受容した左岸とは際立った違いをみせている。

6世紀末から7世紀初頭にかけては、武庫川流域でも横穴式石室を埋葬施設とする群集墳が数多く築造されるようになり、本報告の古墳もそのうちの一つである。しかし、7世紀前半には、本流、支流に関係なく、古墳の多くは造墓活動を終了するようである。

こうした一般的には造墓活動の終了する地域が圧倒的に多くなかで、7世紀中葉前後には所謂、終末期古墳が武庫川両岸に築造される。いずれも畿内中心部で築造される横口式石槨を代表とする古墳とはやや様相を異にする古墳で、その系譜は明らかでないが、6世紀中葉前後に古墳の築造を開始する武庫川両岸の諸勢力と関連する古墳とみられている。

今回調査対象にならなかったが、青野川流域で注目すべき後期古墳として石槨を持つ東仲古墳がある。特にこの古墳の石槨が、玄門というような他に類例が無い位置にとりつけられている。また、三田盆地周辺には他に竹内古墳、尼崎学園4号墳と内陸部には数少ない石槨を持つ横穴式石室が数基知られている。

また、今回の調査地域は須恵器窯の分布地域として知られており、調査窯跡のうち、古墳時代の窯跡は後述の郡塚窯だけであったが、青野川流域には古墳時代に溯る窯の存在する可能性が大きい。

(井守徳男)

第4節 歴史時代

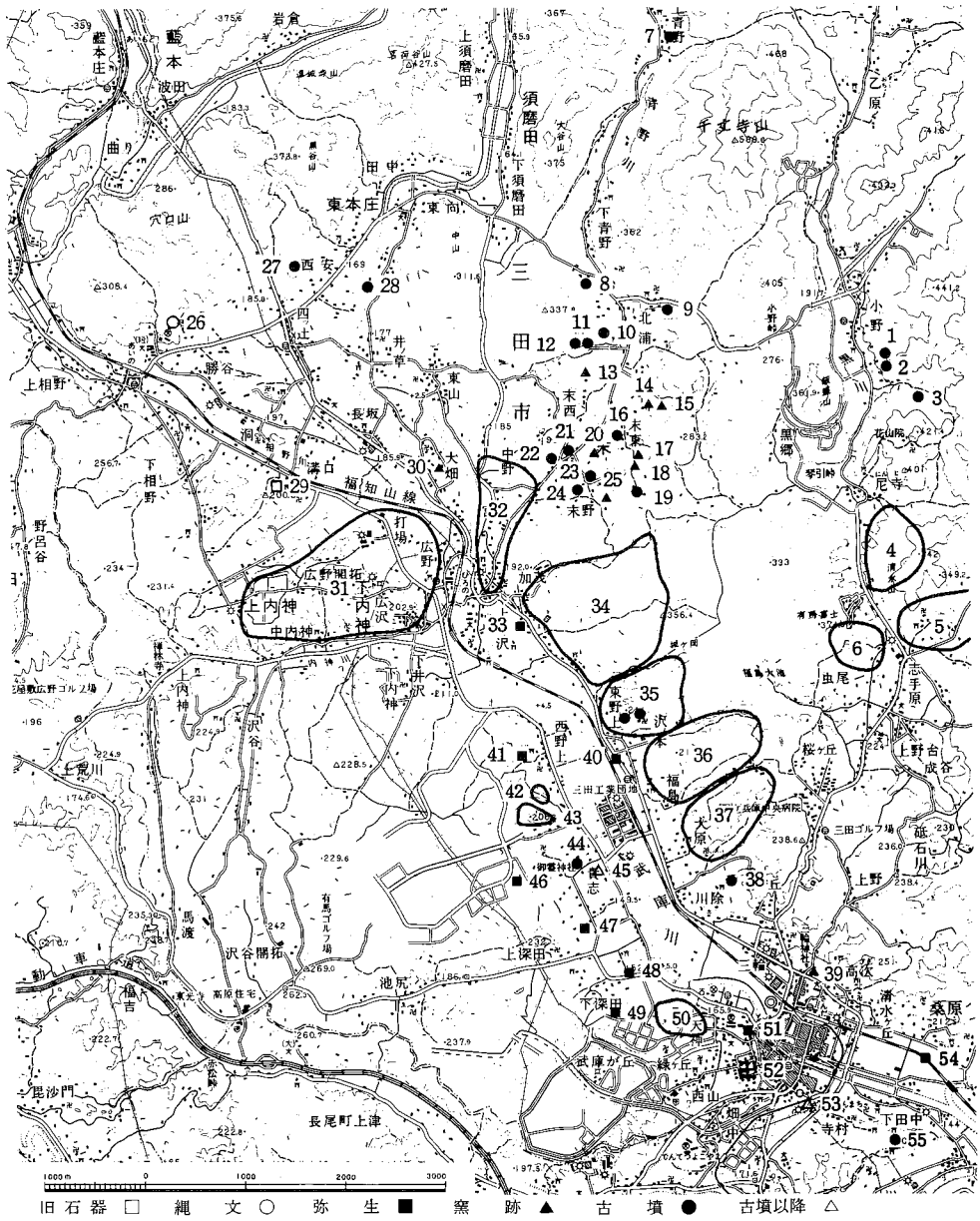
青野川・黒川流域の歴史時代を考える際に、まず挙げられるのは、「末」地区に残っている須恵器窯跡群である。操業を開始するのは古墳時代からであるが、今のところ郡塚1号窯1基だけである。他の確認されている窯跡は全て歴史時代のものである。奈良時代から平安時代末まで生産が行われており、青野ダム建設に伴って13基の窯跡が調査されている。他に用地外でも窯跡が確認されており、調査基数の数倍は存在したものと思われる。青野川の兩岸で窯跡は確認されているが、谷地形の発達した左（東）岸の方が分布密度が高い。歴史時代の窯跡は三田市域において青野川の本流である武庫川右岸に広く散在的に分布する相野窯跡群や武庫川の支流である羽束川によって形成された谷奥部の丘陵上に築窯された木器窯跡など数ヶ所で確認されている。相野窯跡群は近畿自動車道舞鶴線建設に伴って調査が行われ、青野ダム用地内の最も新しい時期の窯跡である井ノ方窯跡（AK-80）との関係が考えられる。

集落は、平井遺跡（AW-54）、北台遺跡（AW-62）、南台遺跡（AW-73）、溝ノ尾遺跡（AW-71）の末西地区の遺跡と井ノ方遺跡（AK-80）、伊勢貝遺跡（AO-3・4）で確認されている。遺構の時期は、平安時代後半から鎌倉時代の遺構が大半である。末西地域に遺跡が集中するのは、可耕地の広さに比例するのであろうか。平井遺跡、南台遺跡、溝ノ尾遺跡、井ノ方遺跡、伊勢貝遺跡では掘立柱建物跡が検出されている。南台遺跡では、集落内から古銭を約6500枚埋納した須恵器甕が出土している。不時発見された例は多いが、発掘調査によって出土した例は稀少であり、資料的価値は高いものと思われる。北台遺跡で確認された大規模な柱穴列は興味深い資料である。大がかりな柵列と考えられている。青野川流域は、平安時代後半は清水寺領の、鎌倉時代は七条院領の仲荘の荘園であった。

戦国時代になると三田盆地周辺に城郭が多数築かれている。盆地周辺が標高220m前後と高さが比較的均等な高位段丘面であるため、視界は広く盆地内に限らず見渡すことが出来る。青野川流域でも青野山城・高根山城とも呼ばれる青野城が標高589.6mの千丈寺山頂に築かれている。その家老屋敷と伝えられる下青野館跡が下青野の水田中に立地している。しかしながら、それ以外の遺跡は青野川流域では見られない。北側の谷である本庄や南側の乙原には城が存在し、青野川上流や母子に築城されていないことを考慮するならば、戦国時代のルートは青野川上流域を經由していなかったと考えられる。その傍証となるように青野ダム用地内では、室町時代以降の遺跡はほとんど確認されていない。末野の求メ塚遺跡で水田跡を検出している程度で、遺構の密度は明らかに減少している。僅かに近世の遺構も確認しているが、少数である。

（渡辺 昇）

三田盆地遺跡分布図



- | | | | |
|-------------|------------|-------------|---------------|
| 1 大基古墳 | 15 地福窯跡 | 29 溝口遺跡 | 43 奈良山古墳群 |
| 2 稻荷山古墳 | 16 庵ノ谷古墳 | 30 大畑窯跡 | 44 貴志古墳群 |
| 3 奥谷口1号墳 | 17 貝谷窯跡 | 31 内神古墳群 | 45 下所遺跡 |
| 4 清水山西古墳群 | 18 落合窯跡 | 32 宮脇古墳群 | 46 奈ノリ与遺跡 |
| 5 志手原古墳群 | 19 落合古墳 | 33 加茂六地藏遺跡 | 47 貴志遺跡 |
| 6 有馬富士東麓古墳群 | 20 郡塚窯跡 | 34 加茂古墳群 | 48 下深田遺跡 |
| 7 感神社古墳 | 21 求メ塚古墳 | 35 青龍寺裏山古墳群 | 49 下深田大山遺跡 |
| 8 前ノ谷古墳 | 22 朱つめ古墳 | 36 福島古墳群 | 50 天神遺跡 |
| 9 東仲古墳 | 23 道東古墳 | 37 大原古墳群 | 51 古城遺跡 |
| 10 岡ノ谷古墳 | 24 双子塚2号墳 | 38 川除古墳 | 52 金心寺跡 |
| 11 八木ノ谷1号墳 | 25 川端窯跡 | 39 三輪窯跡 | 53 村中遺跡 |
| 12 八木ノ谷2号墳 | 26 穴口山山麓遺跡 | 40 福島・長町遺跡 | 54 桑原遺跡 |
| 13 乾窯跡 | 27 東本庄松本古墳 | 41 中西山遺跡 | 55 下田中天満神社2号墳 |
| 14 みどり池窯跡 | 28 井ノ草1号墳 | 42 西山古墳群 | |

第1図 三田盆地遺跡分布図

下青野地域



第3章 下青野地域の調査

第1節 ^{まえのたに}前ノ谷古墳(A S-111)

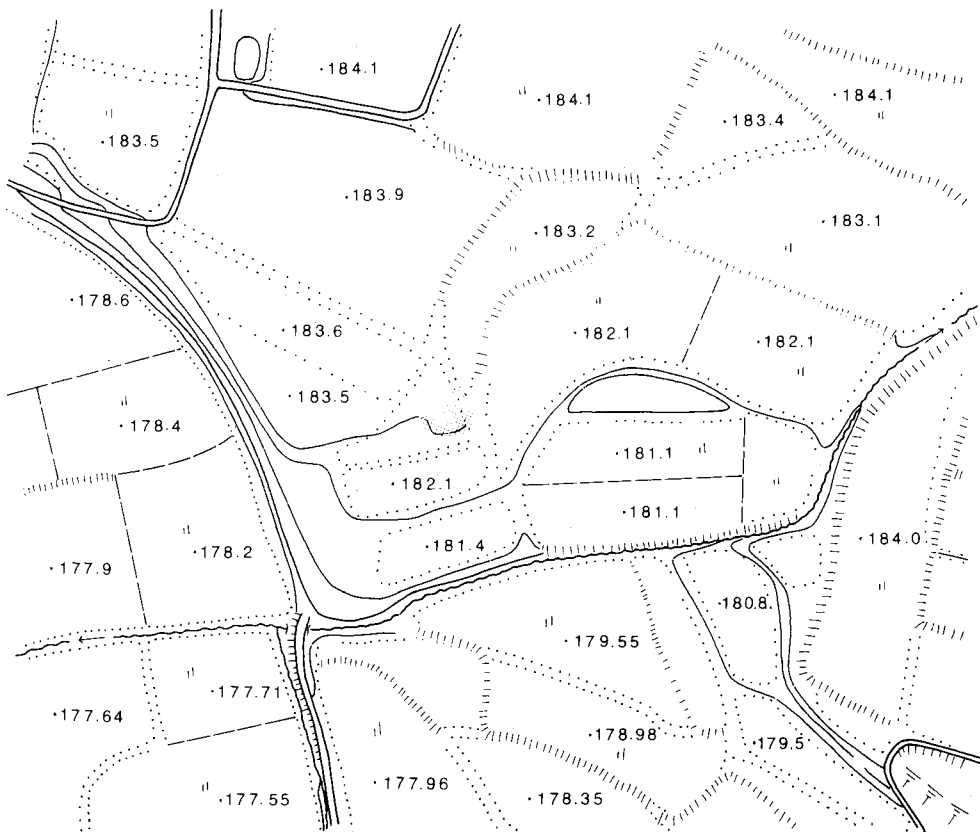
1. 位置

古墳の所在地は、三田市下青野字前ノ谷通りである。古墳の西側の山裾にそって青野川が南流しており、青野川の反対側の山麓に下青野の集落がある。

古墳は山地に挟まれた平地部の中央に位置し、青野川左岸にひろがる平地部の眺望は極めて良好である。

前ノ谷古墳は群集する古墳のひとつではなく、独立して造られていた横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳である。

付近の古墳をみれば、南の方向150mの地点にあるA S 112地点古墳が、最も近接している古墳であるが、築造時期、埋葬施設などは判っていない。岡ノ谷古墳は南方向500mの位置



第2図 位置図 (1 : 1000)

にあり、横穴式石室をもつ径約18mの円墳である。青野川流域において前ノ谷古墳より上流域には4基の古墳が知られている。下青野1～3号墳、上青野感神社古墳であり、いずれも横穴式石室を内部主体とする円墳である。また、前ノ谷古墳と近いのは東の方向約0.8kmのところにある、石棚をもつ東仲古墳が著名である。

2. 立地

前ノ谷古墳は武庫川の支流である青野川左岸の舌状にのびる段丘の突端、標高約183mのところ立地している。古墳の西側から南側にかけて段丘崖が走っている。古墳から段丘崖の距離をみれば、西側で約20m、南側で約150mを測り、その落差は西側で約3.5m、南側で約1.0mである。

3. 外形

調査前の現状は、すでに墳丘の高まりもなく、荒地となり、ゴミ捨て場と化していた。ただ、横穴式石室の一部と思われる石材が露出していること、また、かつてこの地点から庭石として利用するため石を抜き取ったということが調査前の聞き取りによって明らかになっていたことなどから、古墳と考えて間違いないであろうとして取り扱つかわれてきたのである。

調査前の状況から、後世の削平、改変により全く墳丘をとどめていないであろうことは予想されていたところである。調査の結果やはり、墳形、規模を知る手がかりは何も得られなかった。第4図のとおり、盛土の遺存は全くなく、表土下すぐに岩盤であった。岩盤については平坦になるように手が加えられていた。

4. 埋葬施設

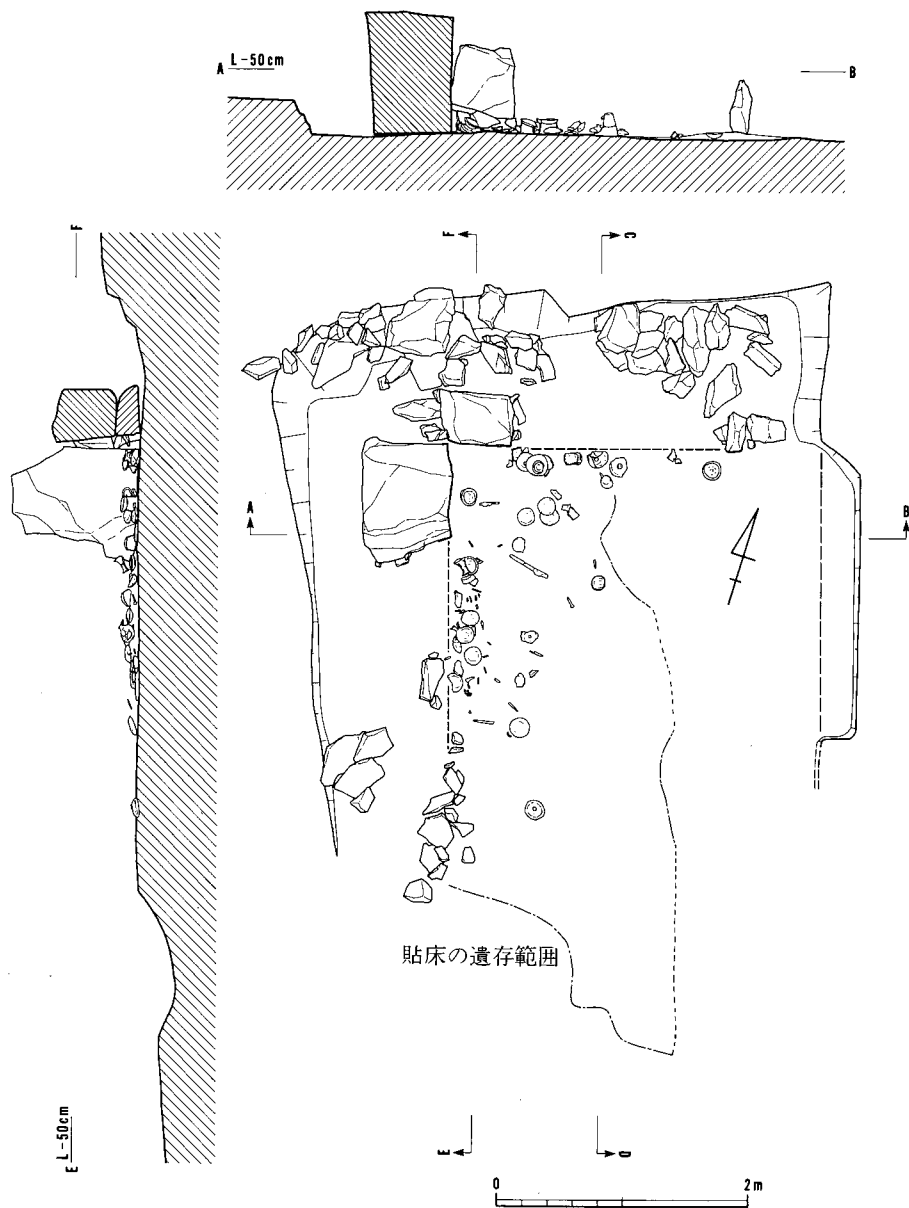
墳丘が築造当時の状態をほとんどとどめていなかったのと同じく、横穴式石室の遺存も極めて悪い状態であった。すなわち、天井石、奥壁、側壁を構成するほとんどの石材が抜きとられており、わずかに、奥壁の西隅の最下段の一石と西側壁の北隅の最下段の一石がプライマリーな状態をとどめていたにすぎない。ちなみに、遺存した石の大きさをみれば、西側壁の一石は、高さ96.0cm、幅86.0cm、厚さ70.0cmの比較的大きな石材を使用している。奥壁の一石は、高さ24.5cm、幅56.4cm、厚さ43.3cmである。なお、西側壁の一石に矢穴の跡があり、この石も後世（昭和初期ごろ）に割って抜き取ろうとした痕跡であろう。

墓壙の掘り方は、岩盤を掘り込んだ部分のみ遺存しており、その深さは浅く、最も深いところで27cmである。奥壁北側の墓壙の東西幅は4.4m、西側の南北の墓壙の長さは5.5mまでは確認できた。

第4図の土層図でプライマリーな状態の土層を維持しているとみれるのは、④・⑤層である。⑤層は岩盤上に置土したいわゆる貼床であり、④層は裏込め用として使用した土と礫石が充填されていた。③層は横穴式石室に空洞が保たれていた時の流入土である可能性

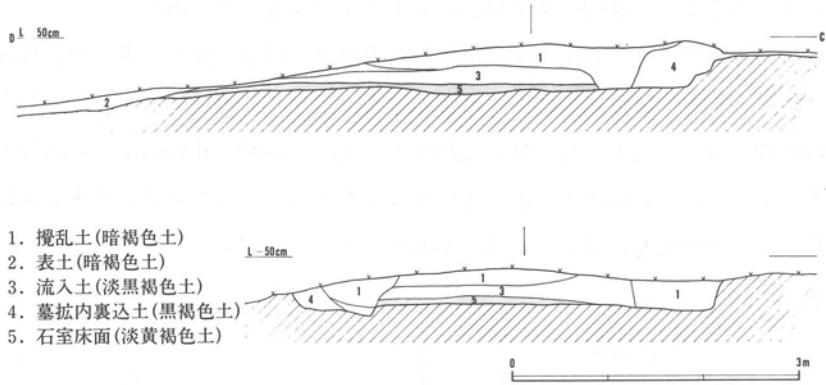
が高いとみておきたい。遺物の多くは、⑤層上および③層中から出土した。

石室の遺存状態に比べて石室内から出土した遺物は、種類、量とも多いが、埋葬時の状態をとどめているものはほとんどないと言えよう。しかし、奥壁に沿って出土した一群の遺物と西側壁に沿って出土した一群の遺物が、二次的な移動が比較的に少ない状況とみることもできるが、それが副葬時の位置に近い状況であるのか、追葬あるいは平安時代の石室再利用時の片づけた状況を示しているのかあきらかでない。



第3図 石室実測図

前ノ谷古墳



第4図 墳丘断面図

以上、埋葬施設で判ったことは、南に開口する横穴式石室であるということのみである。

なお、『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和57年度—』の略報で、奥壁の北東隅にあたる場所に検出された小型の石を調査当時、原位置を保っているのではないかと捉えて、玄室の幅を約2m前後と記述しているのは、ここで撤回しておきたい。あえて、玄室の幅を推定するならば、墓埴と西側壁の長さの関係が、東側にも同様にあてはめることができると捉



第5図 石室遺存状態

えると約1.7m前後になるであろう。

5. 遺物

前ノ谷古墳出土の遺物には、須恵器・土師質土器・鉄器・耳環・玉などがある。このうち古墳に直接関係する遺物は、第10図の土器を除くものである。出土量は比較的多く見られるが、後世の石材抜き取りなどにより、副葬時の原位置を示す遺物は皆無に近い状態で

あった。

(1) 須恵器 (第6～9図)

古墳時代の須恵器は60個体が確認できた。器種には坏・蓋・高坏・提瓶・把手付碗・壺がある。坏・蓋・高坏の占める割合が大きく、全体の約80%である。

坏 (12～21・53)

坏は11個体の出土を見るが、古墳時代の立ち上がりをもつタイプ (12～21) の坏Aと、蓋・坏逆転後のタイプ (53) の坏Bの2形態に大別できる。

坏Aは小型化が始まっているもので、大半が12～13cmの範囲に収まっている。全体的に底部は扁平になっているが、器高からは4cmを境目として、2タイプに分けることが可能と思われる。4cm以上を有するものは、立ち上がりは比較的高く、内傾度もそれほど大きくない。回転ヘラケズリの範囲は、底部全体の約 $\frac{2}{3}$ に亘っているものも見られ、まだ丁寧に行われている。器高の若干低いものは、立ち上がりの内傾度は大きく、全体的には浅く扁平である。回転ヘラケズリも挟まり、粗雑なものも見られる。内面中央は仕上げナデを施しており、1点だけ同心円タタキ目痕の残るもの (20) が認められた。

坏Bは立ち上がり消失後のもので、底部からやや外上方へ内彎気味に丸みをもって伸びる口縁をもつ。底部はヘラキリ後ナデ調整を行っている。

蓋 (1～11、22～34)

蓋はつまみを持たない蓋A (1～11) と、つまみを有する蓋B (22～34) の2形態が見られる。

蓋Aは全体的に扁平な形を採り、天井部と口縁部を画するのが凹線であるものは1点も見られない。鈍い稜によって分けられるものか、稜は全く認められないものである。口縁部が鈍い稜によって天井部との境界をもつものは、端部が内傾する面をもつものと、端に丸く収めているものの2種が認められる。口縁部と天井部を画する稜を持たないものに関しては、口縁端部は丸く収めているだけである。稜を持つ蓋は、回転ヘラケズリの範囲も天井部全面の約 $\frac{2}{3}$ 程度行っているが、稜を持たないものについてはほぼ $\frac{1}{2}$ 以下に狭まってきた。1を除く内面中央は仕上げナデが見られ、同心円タタキ目痕は1点のみ (8) 認められる。

1は前ノ谷古墳においては、ただ1点外面に朱による「×」印を有している。坏・蓋に朱印をもつものは、三田市の最南端に位置する墓山古墳からも出土している。⁽¹⁾ 時期は墓山古墳のほうが古く、点数もこちらのほうでは坏・蓋合わせて3・4点があるらしい。

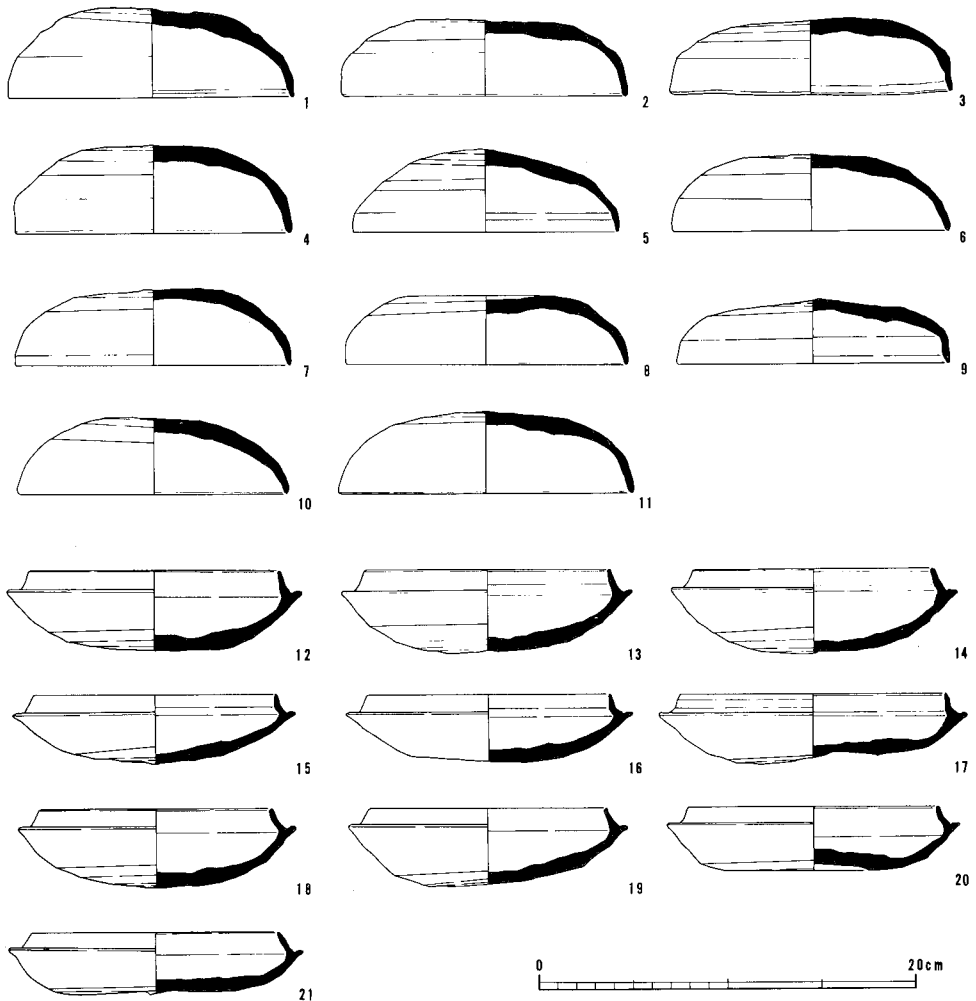
蓋Bは有蓋高坏とセットになるものと思われる。13個体出土のうち2個体はつまみ部が欠損していた。つまみは全て中凹みを呈し、両端を丸く収めるものと、稜をもち尖り気味のものとに分かれる。形態は蓋Aと同様に、扁平な天井部から僅かに稜をもち口縁部へと

続くものが一般的である。22は天井部と口縁部を画する稜線は、殆ど外方へ突出しないながらも認められ、また口縁端部は内傾する面をもつもので、蓋のなかでは若干古相を呈するものである。他の蓋は、蓋Aと比べると口縁端部内面に、僅かながらも段をもつものが多く、丸く収めているだけのものは少ない。回転ヘラケズリ調整の範囲は、天井部の $\frac{1}{3}$ に狭まっているものが大半で、30は1点のみであるがカキ目調整を行なっている。内面中央は一方方向の仕上げナデを施すのを常とするが、24・27・28・33はナデ消されずに同心円タタキ目痕が残存している。

高坏 (35~52)

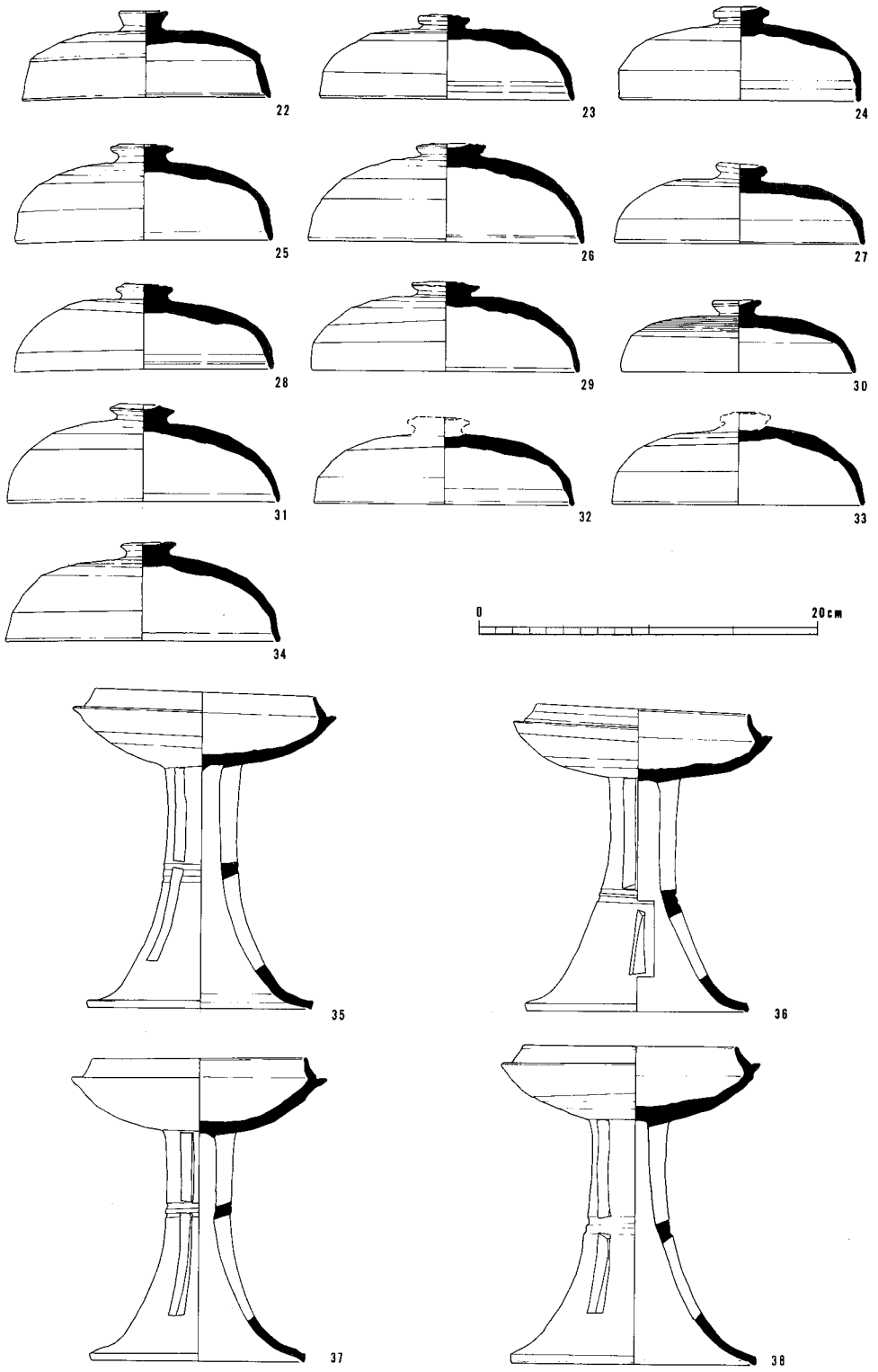
高坏は、有蓋高坏と無蓋高坏とに分かれる。前者を高坏A、後者を高坏Bとする。

高坏Aは、長脚と短脚の2種がある。体部の形態は両方とも基本的には、坏と何ら変わるところはない。長脚部は円筒部を細長く絞り、裾部は外方へ大きく広がる長脚2段透か

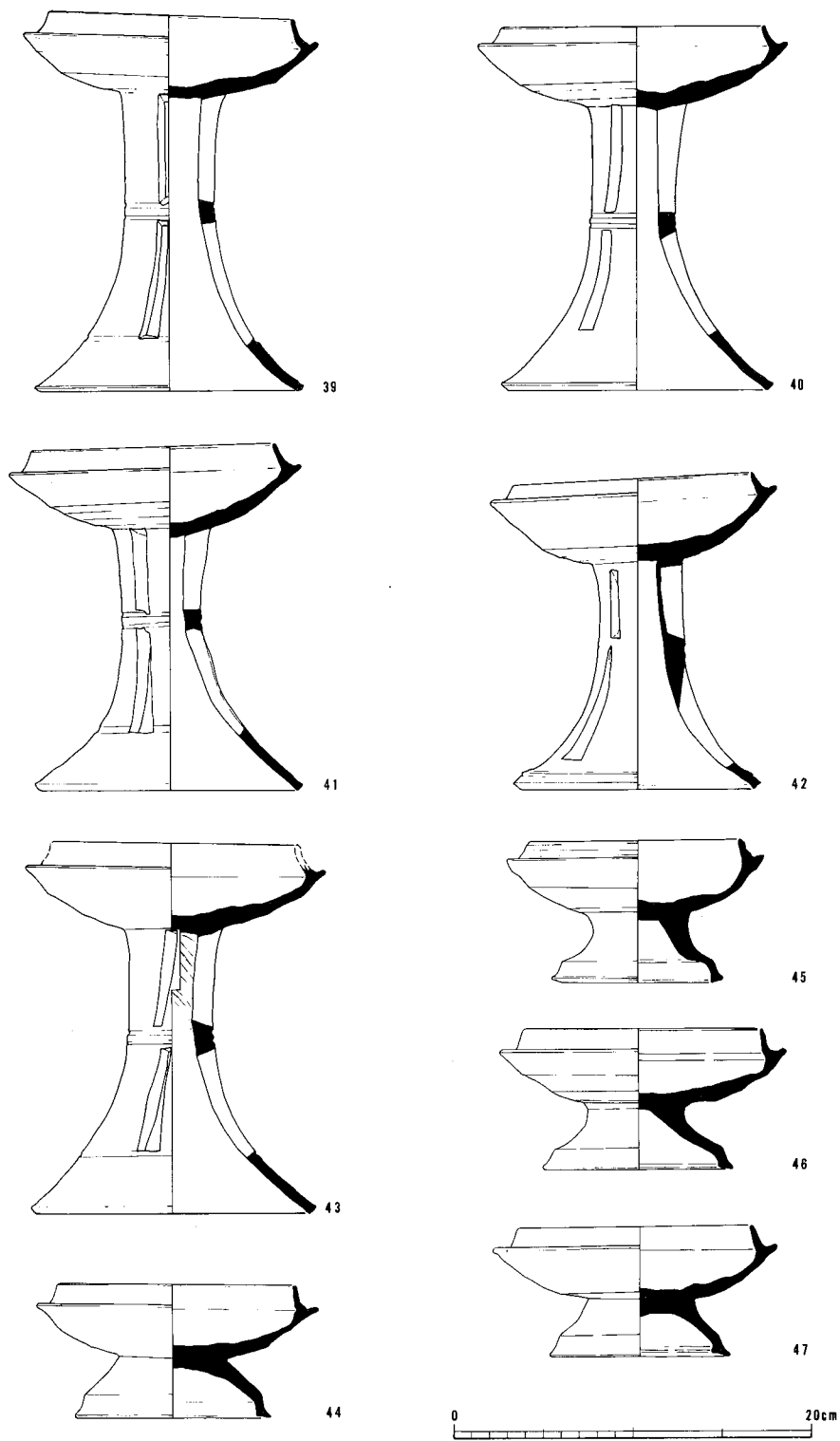


第6図 出土土器(1)

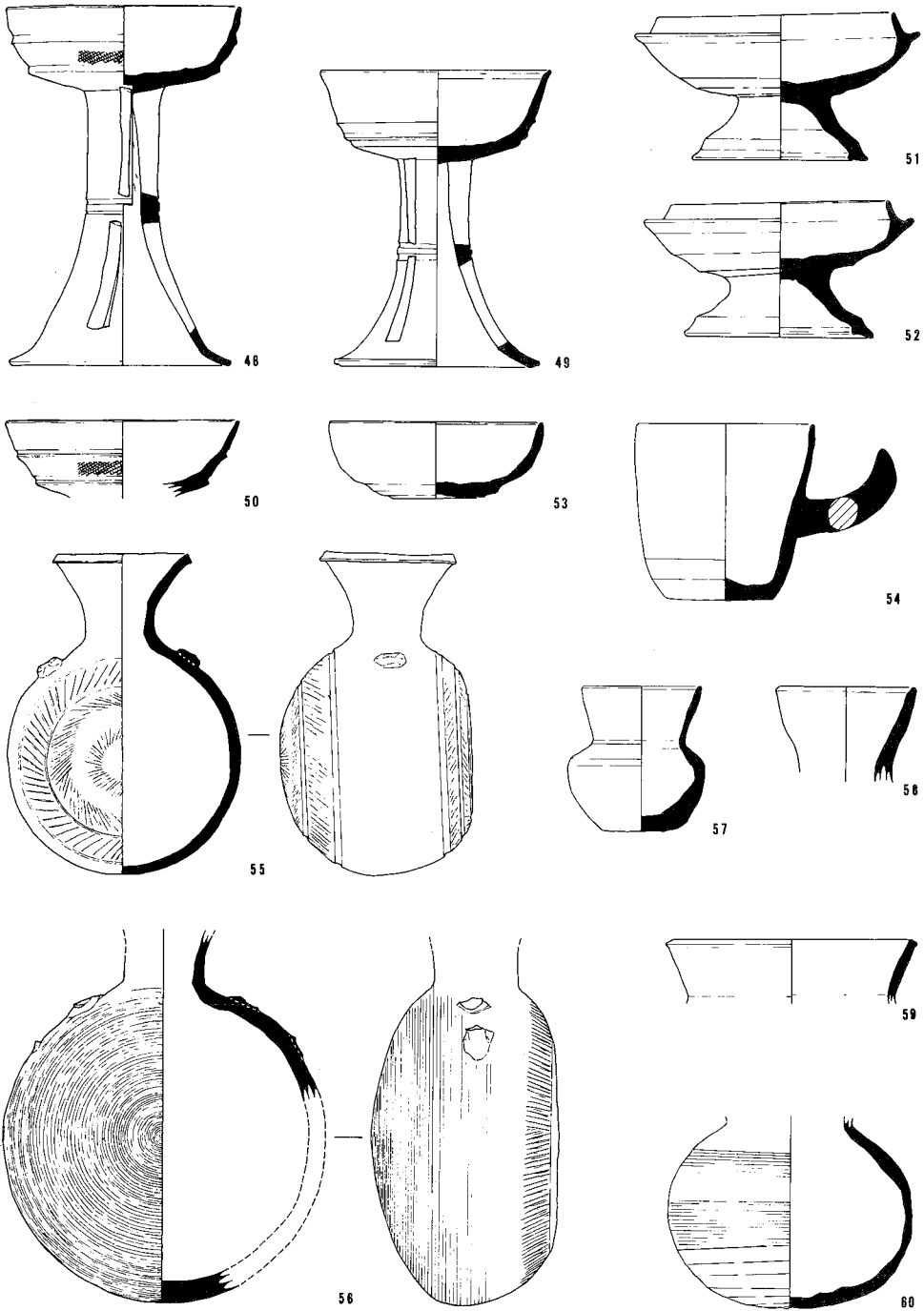
前ノ谷古墳



第7図 出土土器(2)



第8図 出土土器(3)



第9図 出土土器(4)

して、透かしは3方向である。2段の透かしの間は2条の凹線を巡らし、下段の透かし下にも1条の凹線を巡らすものもある。短脚部は裾広がりになったままの状態のものと、下方へ伸びるものが見られる。短脚部は、「ハ」字形に開き裾部付近で稜をもち、下方へ屈曲する。透かしは全く見られない。脚端部は外側に持ち上がっているのが1点あるだけで、あとは内側に上がっており、さらに内側への拡張が見られる。回転ヘラケズリの範囲は $\frac{1}{2}$ 以下が大半を占める。長脚の高坏は坏部内面中央に、同心円タタキ目痕を残すものは認められないが、短脚の高坏は45の1点を除く全てのものに認められる。

高坏Bは3点である。うち1点は坏部のみであるが、形態は48と大差ないと思われる。坏部は口縁部と底部とが、稜とクシガキ列点文とによって分けられるものと、坏部は無文で鈍い稜が付くものがある。脚部は円筒部を細長く絞り、裾部は外方へ広がる長脚2段の3方向透かしである。2段の凹線を巡らす。49は坏部高に比して、脚部高の高いものである。

提瓶 (55・56)

55は完形で、やや小型品である。細くしまった頸部から漏斗状に開く口縁部で、端部は僅かに上下に肥厚し面をつくる。体部は前面が比較的丸くふくれ、背面はほぼ平である。方の両側には小さな円形の粘土粒を1個貼付している。前面・背面とも2条の凹線を巡らし、その間に相互に斜線を施す。

56は口縁部と体部の一部を欠いている。体部前面はやや丸みをもち、背面は平である。肩部の両側に環状の耳が付いていたと思われるが、折損している。前面は回転を利用したカキ目調整、背面は平行タタキ目を施した後、真ん中は回転ケズリを行っている。

把手付壺 (54)

円筒上の体部に角状の把手が付くものである。口縁部は比較的薄い、底部に移行するに従って厚いつくりとなっている。

壺 (57~60)

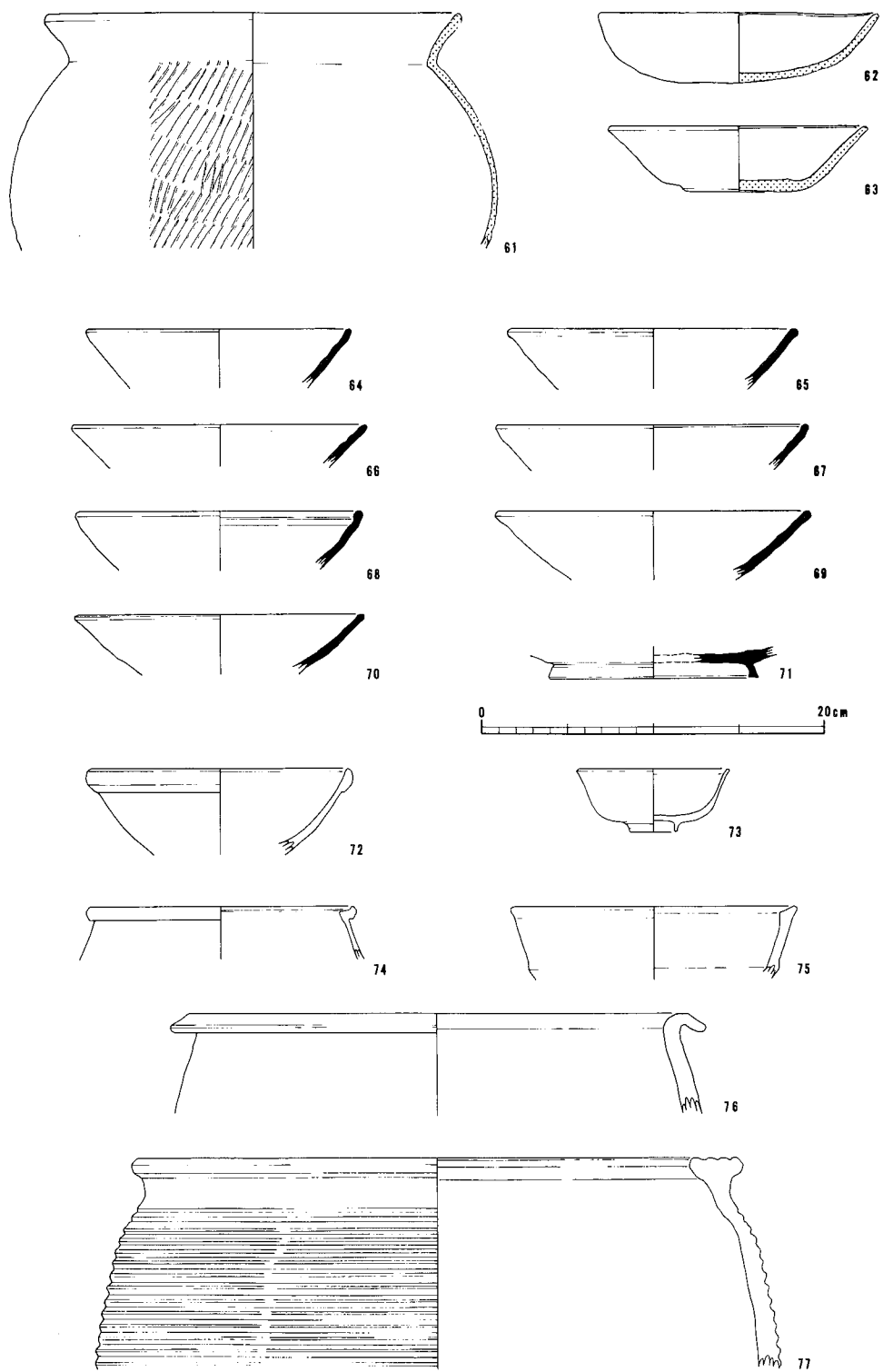
57はミニチュアの直口壺である。外傾しながら比較的長く伸びる口頸部で、体部は肩のところ僅かに稜の付くものである。体部に比して口頸部は薄いつくりである。

58・59は口頸部のみ残存している。58は提瓶の口縁部かと思われる。

60は体部のみで球形を呈す。上半はカキ目調整で、下半は回転ケズリを行っている。

(2) その他の土器

61~72は古墳再利用時の遺物である。61は土師質の甕で「く」の字形に外反する口頸部で、球形の体部へと続く、体部外面は平行タタキ目調整がなされている。ススの付着を見る。62・63は土師質の坏で、62は丸みをもつ体部である。底部内外面に指頭痕を多数残す。63は平底で糸切り調整である。



第10図 出土土器 (5)

64~71は須恵器で、71の高台付底部を除くと全て口縁部である。まっすぐに伸びているものと、若干内彎気味のものがある。口縁端部は丸く収めるが、内面に1条の凹線を巡らすもの(68)も見られる。72は比較的薄い玉縁状口縁の白磁碗である。これらは平安時代~鎌倉時代前半のものである。

73~77は、近世のゴミ捨て場に利用されていたときの遺物である。73は染付山茶碗である。74は西播系の灰釉陶器の鍋で、75は丹波焼の、77は信楽焼の甕である。これらはおおむね18世紀末~19世紀初にかけての甕である。

(3) 玉類

前ノ谷古墳より出土した玉類は合計158個あり、種類としては勾玉、切子玉、管玉、ガラス玉・土製練玉(以下土玉と記す)の5種が見られる。

勾玉(第11図-1)

勾玉の出土は1個のみであった。暗い青みの緑色を呈する碧玉製である。逆コ字形を呈し、最大幅を頭部に持ち、尾部へは除々に狭くなっている。材質は余り良くなく、やや粗いつくりを行っているため、頭部の孔付近には整形時の剝離面が残る。全長は3.1cm、頭部厚7.5mm、胴部厚9.0mmを測り、断面は楕円形状を呈するやや扁平なものである。孔径は3.5~9.5mmで、穿孔は一方からによる。

切子玉(第11図-2~5)

六角錐台の底面を上下に重ねた形の水晶製切子玉は、4個出土している。半透明の乳白色を呈し、器高が2.0cm程度と1.3cm程度の大小に分かれるが、上下面は摩滅し若干剝離するものが多い。正六角形を呈するものはなく、上下面は特に不整な形を採っている。4個いずれも胴部稜線幅は均等でなく、稜線もシャープなものとは言えない。穿孔は一方からなされている。

管玉(第11図-20~63)

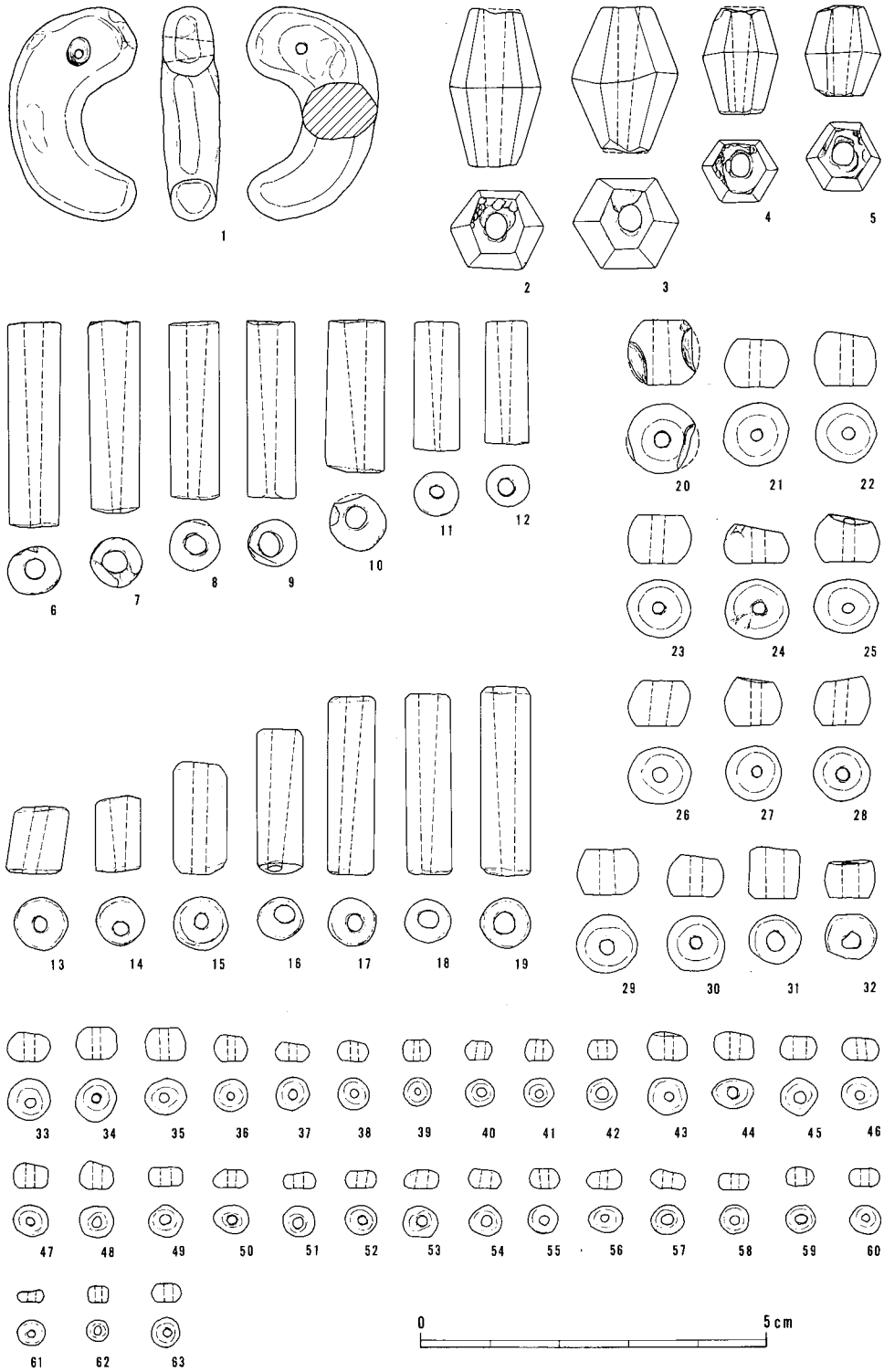
管玉は14個出土している。碧玉製で硬質のもの(6~12)と、軟質のもの(13~19)とがある。長さは統一性がなく不揃で10.2~29.5mmとバラツキが見られる。第3表は個数と長さの数値を幅5mm単位の日盛りで示したものであるが、20mmを境としたところで分別することが可能である。軟質の管玉は上下面の側面端の風化が著しく、シャープさには全く欠けている。穿孔

第3表 管玉長さ別個数分布表

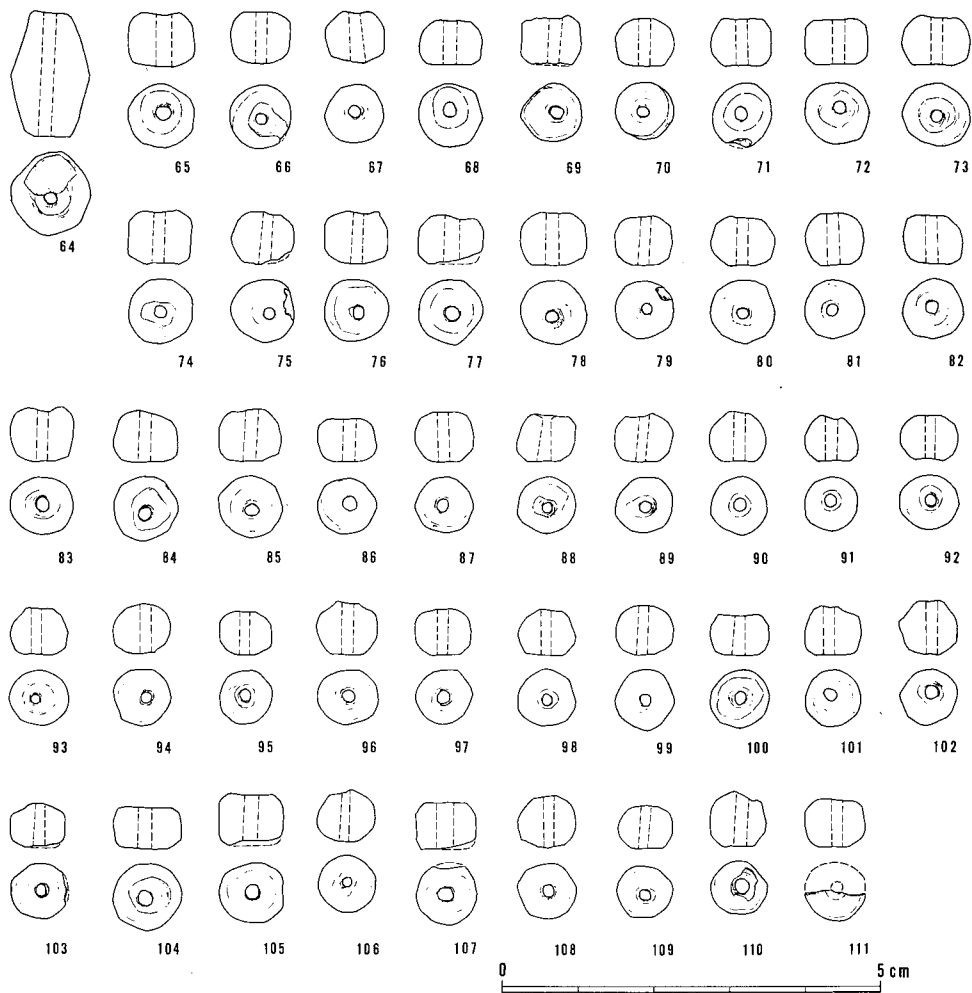
0	5	10	15	個数
100	I			2
150	I**			3
200	I***			2
250	I**			7
300	I*****			
300	I			
300	I			
長さ(mm)				

第4表 ガラス小玉径別個数分布表

0	5	10	15	個数
30	I			1
35	I*			
40	I			
40	I*****			8
45	I			6
50	I*****			11
55	I			2
60	I**			3
65	I***			
70	I			
70	I*			1
75	I			1
80	I*			
80	I***			3
85	I			
90	I			7
95	I*****			
95	I			
100	I			
105	I*			
105	I*			
径(mm)				



第11図 出土玉類 (1)



第12図 出土玉類 (2)

は何れのものも一方から行われているもので、貫入面の孔径は3mmものと、2mm程度のもののである。

ガラス小玉 (第11図-20~63)

出土総数は44個と土玉に次ぐ個数である。第4表⁽³⁾からも指摘可能なように、ガラス小玉は大きさから大(径7.0mm以上)・小(径7.0mm以上)に2大別である。前者を小玉A(20~32)、後者を小玉B(33~63)とする。

小玉Aは13個で20が側面に僅かな欠損を見るほかは完成品である。高さは多少のバラツキがあるものの、径からは9.0~9.5mmの範疇にはいるものが主である。20が若干丸玉に近い形状を呈するが、いずれも上下面に平滑面をもち、胴部縦断面は太鼓胴形を呈するものである。32の上下面の側面端は、ほとんど加工がなされておらず未製品に近い状態のものである。貫孔はいずれもほぼ中央部に垂直に穿たれ、平均径は1.5mmを測る。

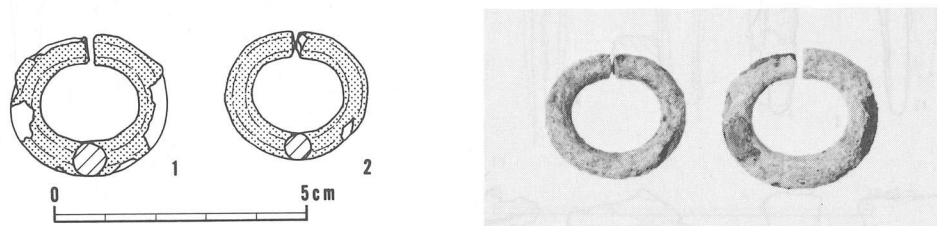
小玉Bは31個が出土している。形状および製作手法は前述の小玉Aと同巧であるが、小玉Bの方は小玉Aと比して上下面に丸みをもつものが多い。第8表より径の数値を5mm単位でまとめると集中する値が4.0~4.5mm、4.5~5.0mm、5.0~5.5mmさらに3種の大きさに分別できる。

土玉（第12図-64~111）

土玉は合計95個分を検出したが、破損品を除くと図示可能なものは60個であった。造りとしては粘土を丸めて焼成しただけのものである。焼成は若干軟質のものも含むが、全体的には良好で黒灰色を呈している。1点だけ64は棗玉状を呈し、縦断面形は中央付近で僅かに稜を有する胴張状となっている。その他のものは、球形に近いもの・円筒形に近いものなど一定せず、歪みをもつものも多い。焼成前の穿孔はほぼ中央部に行っている。

（4）銅製品（第13図）

銅製品には銅芯金張の耳環が2点出土している。1は長径3.1cm、短径2.8cmで、環部径は0.7cmのやや楕円形を呈する。開き部幅は0.15cmを測る。2は長径2.8cm、短径2.55cmで、環部径は0.5cmのほぼ正円に近い形を呈する。開き部幅は0.01cmを測る。いずれも金張の一



第13図 出土耳環（写真左1・右2）

部が剥がれ、銅芯が露出する部分は銹化して緑色を呈している。

（5）鉄器（第14~18図）

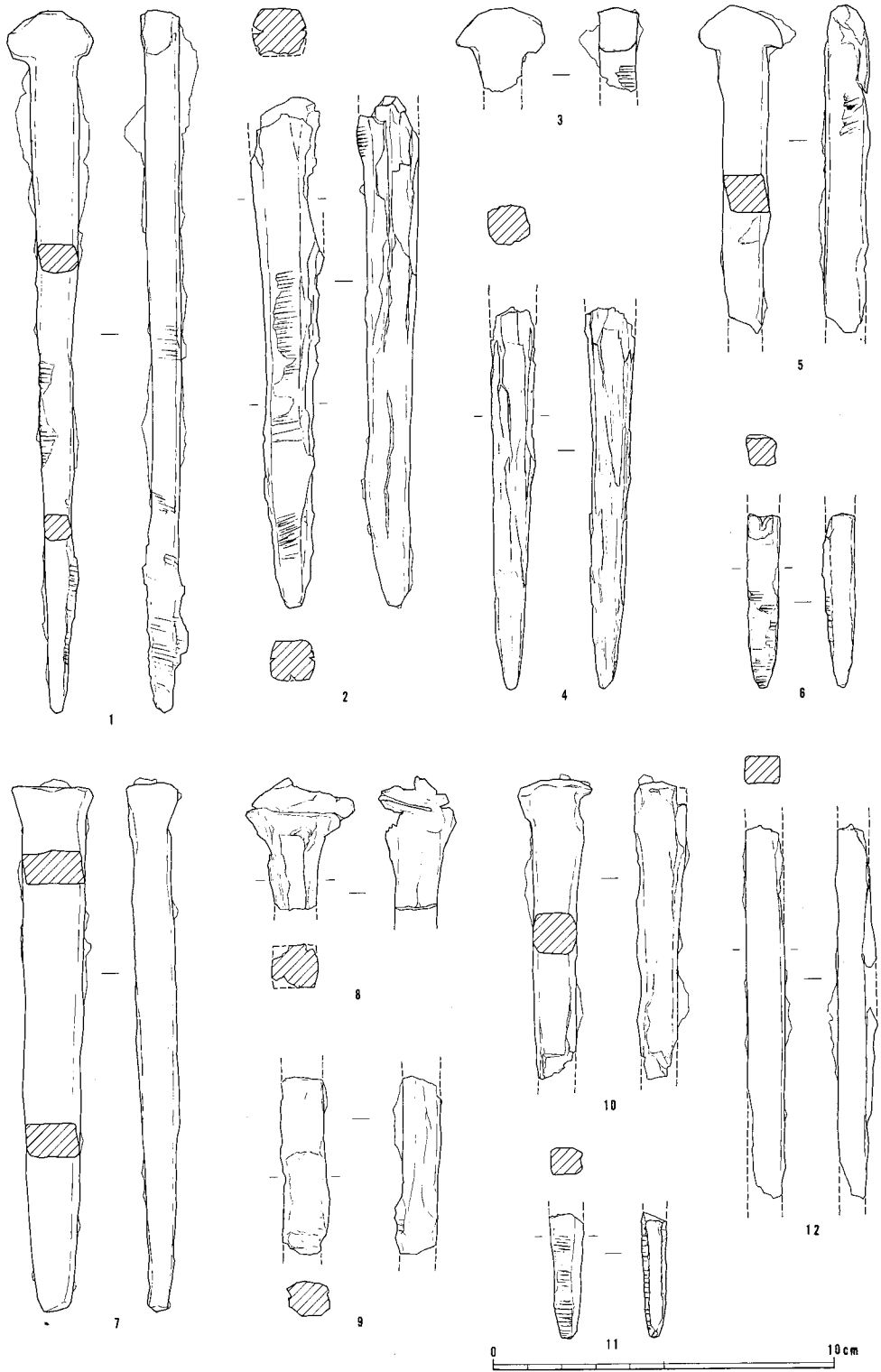
鉄器には、棺材と思われる鉄釘、武器としては鉄鏃・鉄刀・刀子などがあり、馬具としては鞍金具のみが出土した。

鉄釘（第14・15図-1~21）

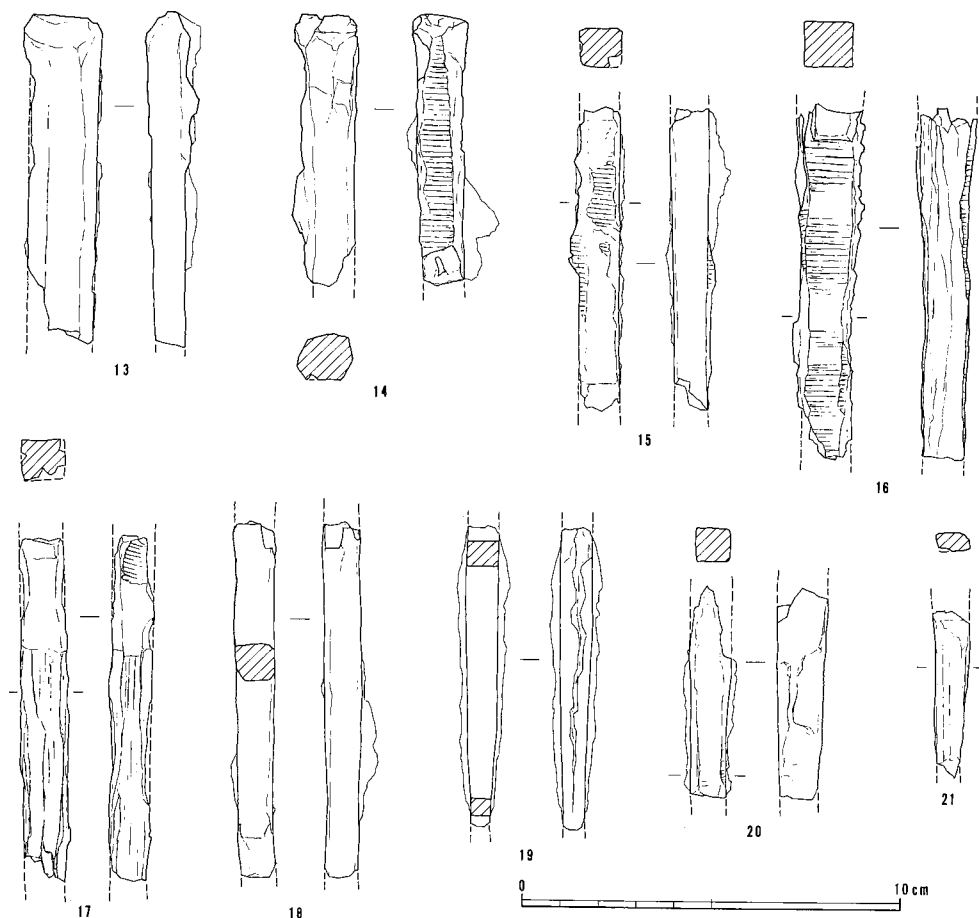
完形品は1・7でほかは折損品であったため、個体数を正確に知ることはできないが、頭部を目安とすれば8本分は確認可能であろう。

原位置を留めているものがなく、どのように打ち込まれていたのか窺い知れないが、何本かは木質部の遺存するものであった。また大半が折損品であったため、釘に付着する木質より棺材の厚さおよび木取りの様子などを推定することは不可能であった。

鉄釘は頭部の形態より2類に大別できる。I類は頭部が四方に張気味のものであるが、頭部が丸い半円球状のもの（I a類）と、平坦なもの（I b類）とに細分できよう。II類は頭部と体部とが同様の太さを呈するものである。



第14図 出土鉄器 (1)



第15図 出土鉄器（2）

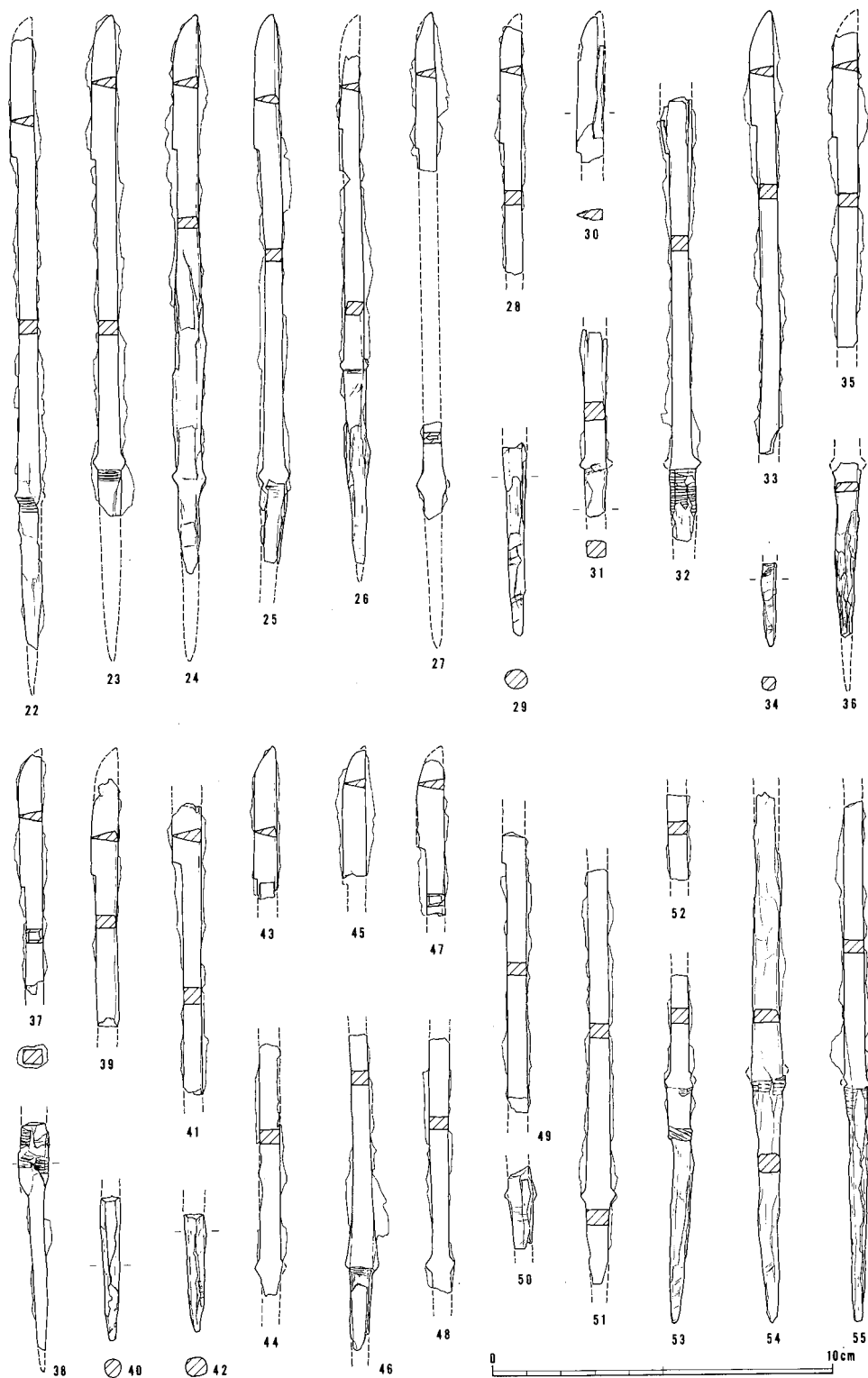
I a類には1・3・5、I b類は7が、II類には13・14などの分類が可能だが、遺存状態も悪く、全長の判明するものも1点と限られていたため、全体からの形態分類が不可能であった。釘の断面は正方形のもの、長方形のものに大きく分かれ、ここでは圧倒的に前者の形状を占める。また折損品ではあるが、2や4などの遺存状態からは比較的大型品を推定することができよう。

鉄鏃（第16・17図-22~78・84~91）

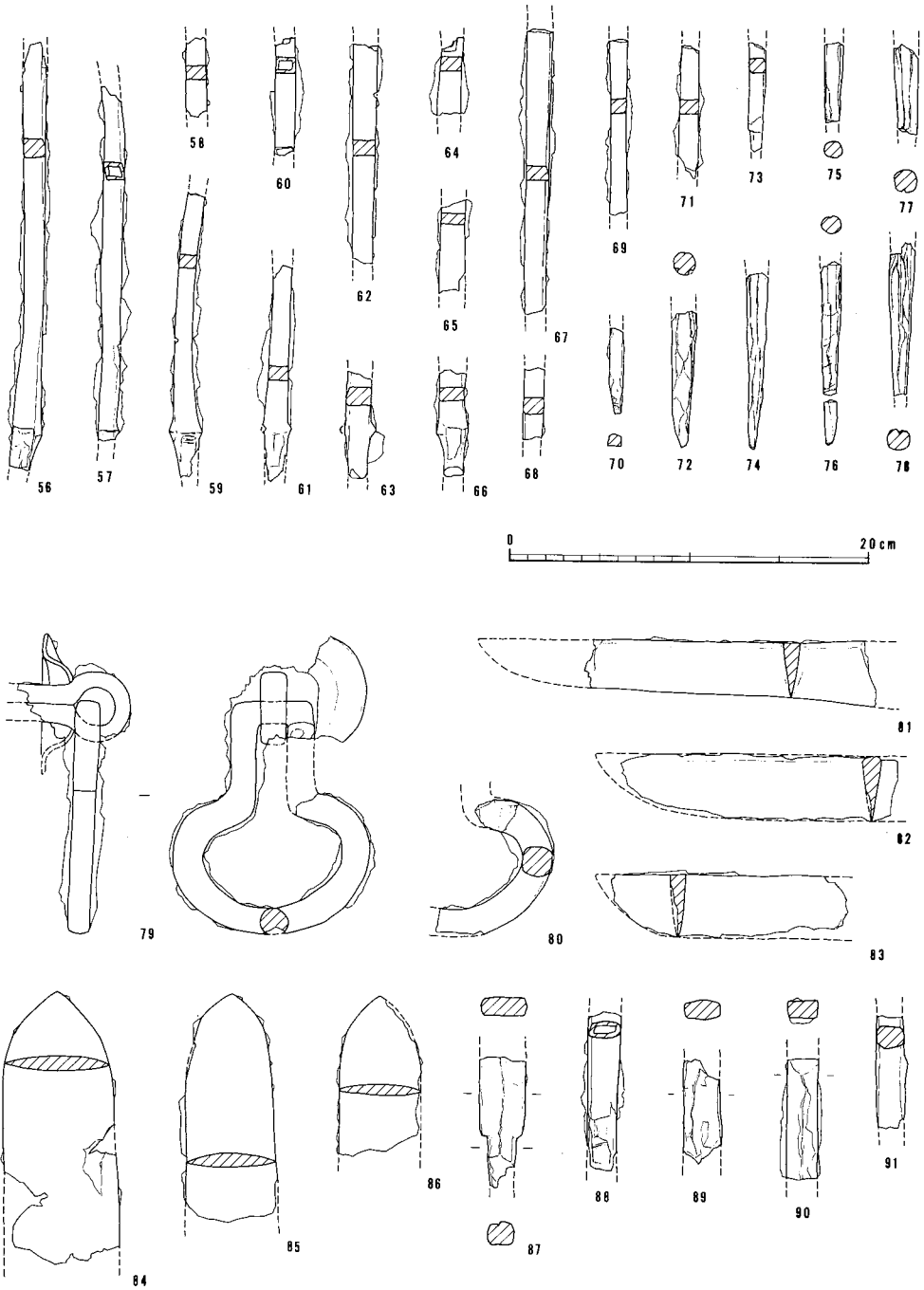
完形を保つものは皆無で、なおかつ錆化が著しく刃関などを明瞭に識別することも困難であった。そのため個体数を推定するにも刃部数では17点とバラツキが見られ、正確な数値を把握することは困難であった。

この古墳出土の鉄鏃の形態は、細根式の長頸鏃である。平均計測値は鏃身長約41.3cm、筥被長約8.9cm、茎長約6.97cmを測る。

刃部は全てが片刃で、横断面は二等辺三角形を呈する。平均刃幅約7.8mm、棟厚約1.5~2.0mmを測り、「L」状の片関を有する。次ぎに筥被部へと続き、長さは刃部長のほぼ2倍強で



第16図 出土鉄器 (3)



第17図 出土鉄器（4）

ある。断面は長方形、あるいは正方形を呈した角柱状で、鏃の一部には断面が中空状となるもの（27・37・47・57・60）も数点ではあるが混在していた。篋被部下端で棘篋被に密着して緊縛痕を残すものもある。茎部は先端に行くにしたがって細まっており、断面は長方形あるいは楕円形を呈する。茎部外表には矢柄材の痕跡を残すものも見られた。

刀子（第17図-81~83）

3点とも折損品で原形を示すものはない。切先を残すものもなく、棟部も銹化が著しく膨張しているが、断面が二等辺三角形状を呈していることから刀子と考える。

鞞（第17図-79・80）

前ノ谷古墳出土の鉄器のうち、馬具と思われるものは鞞のみであった。そのうち80の方は、原形を残す部分はほとんどなく環部分の一部が若干遺存するだけである。79は僅かに欠損部が見られるものの、ほぼ原形を呈していると思われる。座金具の形態は円盤形をとっているが、現状は欠損部が多くやや歪んで不整円となっている。また鞞の環形態は円環形式で、銜脚と環が分離した形態をとっている。

鉄刀（92）

遺存状態の極めて悪いもので、推定復原による。刃部と確認できるところも僅かで、また棟部も銹化で膨らんでおり原状は呈していない。現存長33.2cm、刃幅約3.1cm、棟厚約1.0cmを測る。

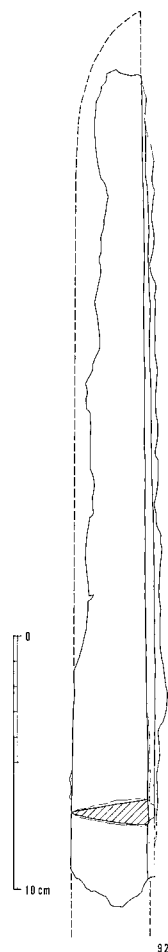
不明鉄器（84~91）

84~86は横断面が両丸造を呈するもので、85・86については、現存長12.8・9.1cm、幅5.1・4.5cmを各々測り、広根式の柳葉形を呈する鉄鏃になる可能性もある。84は幅約6.3cmと前述した2点よりも広く、かつ現存長15.2cmと鉄鏃と考えるには大きく、鉄剣になる可能性を残す。87は両関を呈し鉄鏃になるかもしれない。

6. 小結

前ノ谷古墳は、築造されてから後の人為的改変が著しく、墳形・墳丘規模を調査で把握することができなかった。また、埋葬施設も横穴式石室であるという以外、石室の形態、その規模を知る資料はほとんど遺されていなかった。しかし、副葬品は比較的よく残っていた。そして、副葬された須恵器から前ノ谷古墳が6世紀後半の築造であることが判った。

以下、遺物について若干述べて小結としたい。



第18図
出土鉄器（5）

出土した須恵器は、田辺編年のII期後半に収まるもので、そのなかでもTK209型にほぼ併行しよう。ただし、若干の新・古の関係を次のごとく指摘することができる。すなわち、新しい様相を示す土器として15~17、19~21の坏A、7・8・10・11の蓋Aがある。

これらの坏Aは立ち上がりの比較的低いもので、回転ヘラケズリの範囲も狭まり、他のものと比べると僅かだが、新しい特徴を示している。蓋Bについても同様に、天井部と口縁部を分ける稜は全く認められず、なだらかなカーブを描いているもので、口縁端部を丸くおさめているものは、新しい様相であろう。古い様相を示すものとして、蓋B(22)、提瓶(56)がある。蓋Bは天井部と口縁部を画する稜はまだ明瞭で、口縁端部も段を有するものであり、56の提瓶も環状の耳の痕跡をもち、古い要素をとどめている。しかしながら、古い要素をもつ土器はきわめて少ないことから、両者の関係を時期差とは捉えず、ひとつの型式群として捉えたい。以上の土器の所見から、前ノ谷古墳はTK209型式併行期に築造されたといえる。なお、土器からみる追葬の問題については、言及しえない。また、現地調査においても追葬の有無はわからなかった。なお、54の把手付埴はIII期に入ってから出現する器形と言われていることから、若干時期が下がるかもしれない。

鉄釘は完形になるものは僅かであるが、その特徴は大型化を残している時期の所産で、田中彩太氏の編⁽⁴⁾年にあてはめればII期(緊結金具の普及期)に相当しよう。

馬具は、鞍金具一対が唯一の出土品である。石室内は攪乱を受けているものの多く副葬品が残っている状況からみれば、鞍以外の馬具は副葬されていなかった可能性が高いと言えるであろう。

鉄鏃は、すべて長頸鏃の範疇に属するもので、刃部の形態もすべて片刃箭式である。この形態の鉄鏃は5世紀の後半に出現した型式の武器であり、この副葬品などから古墳の被葬者の身分的な位置あるいは性格等は、周辺の比較資料がととのえば、推定されることも可能になろう。

(山本・高島知恵子)

註(1) 高島信之・西尾知恵子「国道176号線道路防災工事に伴い発見された墓山古墳について」『三田考古』第7号 三田市教育委員会 1983

(2) 第3表と第4表の作成に関しては、兵庫県教育委員会の岸本一宏氏の協力をいただいた。

(3) 田中彩太「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻第20号 考古学研究会 1978

第5表 出土土器計測表

挿図 No.	図版	器種	出土地区	法 量 (cm)				色 調
				口径	器高	最大径 坏高	底径	
1		蓋A		(15.0)	4.75	—	—	青灰色
2		蓋A		14.9	4.05	—	—	暗青灰色
3		蓋A		14.7	4.10	—	—	青灰色
4		蓋A		14.4	4.75	—	—	淡灰色～濃青灰色
5		蓋A		13.9	4.40	—	—	暗灰色
6		蓋A		14.5	4.05	—	—	暗灰褐色
7		蓋A		14.4	4.10	—	—	暗灰褐色
8		蓋A		14.7	3.60	—	—	暗灰褐色
9		蓋A		14.3	3.45	—	—	灰～淡灰褐
10		蓋A		14.1	4.10	—	—	暗灰褐～黒灰色
11		蓋A		(15.4)	4.35	—	—	淡灰色～濃灰色
12		坏A		13.2	4.30	—	—	暗塩灰色
13		坏A		12.8	4.40	—	—	暗塩灰色
14		坏A		12.6	4.35	—	—	青灰色
15		坏A		12.8	3.70	—	—	暗灰～灰色
16		坏A		12.8	3.60	—	—	暗灰色
17		坏A		14.0	3.70	—	—	灰白～淡灰色
18		坏A		12.2	4.20	—	—	暗灰色
19		坏A		12.5	4.15	—	—	灰褐～灰色
20		坏A		13.2	3.40	—	—	暗茶灰色
21		坏A		13.0	3.30	—	—	暗灰色
22		蓋B		14.6	5.10	—	—	濃灰～黒灰色
23		蓋B		14.8	5.00	—	—	灰～暗灰色
24		蓋B		(14.0)	4.85	—	—	暗灰～暗灰褐色
25		蓋B		(15.0)	5.60	—	—	暗灰褐～暗青灰色
26		蓋B		(16.0)	5.80	—	—	暗青灰～暗灰色
27		蓋B		14.6	4.80	—	—	灰～暗灰色
28		蓋B		15.2	5.00	—	—	暗灰色
29		蓋B		15.6	5.80	—	—	暗灰色
30		蓋B		13.7	4.30	—	—	灰～暗灰色

前ノ谷古墳

插图 No.	図版	器 種	出土地区	法 量 (cm)				色 調
				口径	器高	最大径 坏高	底径	
31		蓋B		16.0	5.70	—	—	青灰色
32		蓋B		(15.2)	—	—	—	暗青灰色
33		蓋B		14.8	—	—	—	暗灰~濃灰色
34		蓋B		16.0	5.80	—	—	暗灰褐~暗灰色
35		坏A		12.8	18.8	4.7	13.0	暗灰色
36		高坏A		12.45	18.1	3.6	12.9	濃灰~淡灰褐色
37		高坏A		12.6	17.95	3.75	12.5	暗灰色
38		高坏A		12.45	18.75	3.6	14.1	灰色
39		高坏A		(13.45)	(21.2)	4.0	14.2	灰色
40		高坏A		(13.5)	19.3	5.1	14.4	灰~暗灰色
41		高坏A		14.5	20.35	4.5	14.4	灰色
42		高坏A		(13.3)	17.6	3.65	13.0	灰~暗灰色
43		高坏A		—	—	—	15.2	灰色
44		高坏A		13.2	7.5	4.75	10.8	暗灰色
45		高坏A		11.65	8.0	4.4	8.2	淡青灰色
46		高坏A		13.2	7.9	4.6	10.4	暗灰色
47		高坏A		13.05	7.35	5.5	10.0	暗灰~灰色
48		高坏A		13.05	8.25	3.7	9.6	暗灰~灰色
49		高坏A		(12.0)	7.65	3.1	10.2	灰色
50		高坏B		12.8	19.9	3.8	12.0	灰色
51		高坏B		12.7	16.5	4.3	10.7	暗黄灰色
52		高坏B		(12.8)	—	—	—	淡灰色
53		坏B		11.65	4.3	—	—	灰~暗灰色
54		把手付埴		9.6	9.8	—	5.75	灰白~灰黄色
55		提瓶		—	—	(18.0)	—	灰色
56		提瓶		7.15	17.8	12.9	—	灰~灰白色
57		直口壺		6.4	8.1	7.6	4.1	濃灰色
58		壺		7.6	—	—	—	灰色
59		壺		(13.2)	—	—	—	灰~濃灰色
60		壺		—	—	13.6	—	灰~濃灰色
61		甕		(23.8)	—	—	—	浅黄橙色

前ノ谷古墳

挿図 No.	図版	器 種	出土地区	法 量 (cm)				色 調
				口径	器高	最大径 坏高	底径	
62		坏		(16.0)	4.2	—	—	灰白～淡褐色
63		坏		(14.8)	3.85	—	6.9	淡橙色
64		坏		(15.2)	—	—	—	灰色
65		坏		(18.0)	—	—	—	淡灰色
66		坏		(16.6)	—	—	—	暗灰色
67		坏		(16.4)	—	—	—	灰白色
68		坏		(7.0)	—	—	—	灰色
69		坏		(18.0)	—	—	—	暗灰色
70		坏		(16.6)	—	—	—	灰色
71		坏		—	—	—	(12.0)	灰黒色
72		埴		(15.0)	—	—	—	
73				(15.4)	—	—	—	
74				(16.2)	—	—	—	
75				(29.0)	—	—	—	
76		甕		(8.7)	3.7	—	—	
77		甕		35.0	—	—	—	

第 6 表 管玉計測表

No.	長 さ (mm)	径 (mm)		孔 径 (mm)		色 調
		上	下	上	下	
6	29.5	7.6	7.1	2.7	1.3	125 暗い青みの緑
7	28.0	7.5	6.8	3.7	1.2	125 暗い青みの緑
8	25.7	7.1	7.0	3.0	1.5	125 暗い青みの緑
9	25.8	7.0	7.0	2.9	1.0	125 暗い青みの緑
10	22.0	8.0	8.2	3.1	1.0	125 暗い青みの緑
11	19.0	6.2	6.6	2.1	1.8	125 暗い青みの緑
12	17.5	6.0	6.1	2.0	1.0	127 灰みの緑
13	10.2	8.0	8.0	2.0	2.0	106 うすい緑
14	11.0	6.6	6.5	2.5	2.2	106 うすい緑
15	16.1	7.9	7.3	2.0	2.2	106 うすい緑
16	21.0	6.6	6.5	3.2	2.0	106 うすい緑
17	25.7	6.7	6.6	2.6	1.5	106 うすい緑
18	26.0	6.6	6.3	2.8	1.3	106 うすい緑
19	27.2	7.0	7.0	2.0	2.0	106 うすい緑

第7表 ガラス小玉計測表

(単位: mm)

No.	径	孔径	高さ	色 調	No.	径	孔径	高さ	色 調
20	10.5	2.5	9.3	127 灰みの緑	42	4.5	1.2	3.0	150 つよい紫みの青
21	9.3	1.5	7.0	155 こい紫みの青	43	5.8	1.2	4.0	143 明るい緑みの青
22	9.0	1.7	8.0	155 こい紫みの青	44	5.9	1.2	4.0	147 さえた緑みの青
23	9.1	1.7	7.0	155 こい紫みの青	45	5.4	2.0	3.6	143 明るい緑みの青
24	9.3	2.0	5.7	155 こい紫みの青	46	5.2	1.5	3.1	143 明るい緑みの青
25	9.4	1.5	7.0	154 こい青	47	5.0	1.1	3.6	143 明るい緑みの青
26	9.0	2.5	6.5	150 つよい紫みの青	48	5.0	1.2	4.0	143 明るい緑みの青
27	8.2	1.5	7.0	154 こい青	49	5.0	1.3	2.7	143 明るい緑みの青
28	8.1	2.0	7.0	149 つよい青	50	5.0	1.2	2.5	143 明るい緑みの青
29	9.0	2.0	6.9	150 つよい紫みの青	51	4.8	1.4	2.2	143 明るい緑みの青
30	8.2	1.8	6.0	155 こい紫みの青	52	4.4	1.5	2.5	148 つよい緑みの青
31	7.5	2.5	7.5	155 こい紫みの青	53	5.0	1.5	2.7	143 明るい緑みの青
32	7.2	2.5	5.5	150 つよい紫みの青	54	4.8	1.5	2.7	143 明るい緑みの青
33	6.3	1.5	4.0	115 こい黄みの緑	55	4.5	1.5	2.9	143 明るい緑みの青
34	6.0	1.0	4.9	115 こい黄みの緑	56	5.0	1.0	2.9	143 明るい緑みの青
35	6.0	1.0	5.0	148 つよい緑みの青	57	5.0	1.7	2.7	143 明るい緑みの青
36	5.0	1.0	4.0	150 つよい紫みの青	58	4.5	1.0	2.4	143 明るい緑みの青
37	5.0	1.0	2.8	155 こい紫みの青	59	4.1	2.2	2.8	143 明るい緑みの青
38	4.5	1.0	3.0	155 こい紫みの青	60	4.4	1.2	2.6	143 明るい緑みの青
39	4.0	1.0	3.0	150 つよい紫みの青	61	4.0	3.2	1.7	143 明るい緑みの青
40	4.0	1.2	3.0	155 こい紫みの青	62	3.0	1.0	2.3	130 明るい緑青
41	4.1	1.0	3.0	155 こい紫みの青	63	4.1	1.2	2.8	150 つよい紫みの青

第8表 土玉計測表

(単位: mm)

No.	径	孔径	高さ	No.	径	孔径	高さ	No.	径	孔径	高さ
64	10.5	0.16	16.6	75	8.5	1.5	7.0	86	7.9	1.5	5.8
65	9.0	2.2	7.5	76	8.4	1.7	7.0	87	7.6	1.4	6.6
66	8.0	1.5	7.0	77	8.5	1.9	6.3	88	7.5	1.0	6.2
67	8.0	2.0	7.0	78	8.8	1.7	6.9	89	7.7	1.3	6.2
68	8.3	1.5	6.0	79	7.6	1.5	6.3	90	7.4	1.2	6.6
69	8.0	1.5	6.3	80	8.5	1.8	6.0	91	7.0	1.5	6.0
70	7.8	1.3	6.0	81	7.5	1.6	7.0	92	7.8	1.2	6.0
71	7.9	1.8	6.2	82	8.0	1.6	6.3	93	7.6	1.2	7.5
72	8.4	1.6	6.1	83	8.2	1.5	7.2	94	7.5	1.2	6.8
73	9.0	1.4	6.3	84	8.5	1.6	6.9	95	7.0	1.0	6.8
74	8.5	1.4	7.0	85	8.3	1.5	6.8	96	8.0	1.5	7.0

第8表 土玉計測表

(単位：mm)

97	7.5	1.5	6.0	102	7.5	1.5	7.0	107	8.0	2.0	6.0
98	7.8	1.0	6.2	103	7.3	1.5	6.0	108	7.8	1.5	7.0
99	7.6	1.0	6.5	104	8.0	1.5	5.5	109	7.3	1.3	5.5
100	7.7	1.0	5.3	105	9.0	1.2	6.6	110	7.3	2.0	7.0
101	7.2	1.3	6.3	106	7.8	1.0	6.5	111	8.0	1.2	6.2

第9表 鉄釘計測表

(単位：mm)

No.	a	b	c	d	e	f
1	20.5	2.5	1.15	0.85	0.75	0.75
2	14.3	1.9	1.6	1.45	1.3	1.2
3	2.5	2.6	0.65	0.75	—	—
4	11.2	10.4	10.2	10.2	—	—
5	9.7	2.45	1.75	1.15	—	—
6	5.1	0.95	0.9	0.8	—	—
7	15.4	2.4	1.8	1.0	1.65	1.0
8	3.9	3.2	1.4	1.3	—	—
9	5.2	1.2	1.2	1.05	—	—
10	8.8	2.15	1.25	1.2	—	—
11	3.7	1.05	0.95	0.75	—	—
12	10.85	1.1	1.05	0.8	—	—
13	8.8	2.1	—	—	—	—
14	7.2	1.6	1.45	1.2	—	—
15	8.0	1.1	1.2	1.0	—	—
16	9.3	1.8	1.3	1.2	—	—
17	9.1	1.15	1.2	1.05	—	—
18	9.35	1.05	1.1	1.0	—	—
19	8.0	0.8	0.85	0.7	0.55	0.45
20	5.6	1.2	0.95	0.9	—	—
21	3.8	1.0	0.85	0.5	—	—

註：第7表ガラス小玉計測表の色調に関しては、財団法人日本色彩研究所監修の『色名小事典』1982を使用した。

第9表鉄釘計測表のa：全長、b：頭部幅、c・dは断面幅を示したものである。e・fも同様で2ヶ所の断面を測ったときの下段の方の数値を表わす。

第10表 鉄鍬計測表

(単位: mm)

No.	全 長	鍬身長	鍬身幅	篋被長	茎 長	No.	全 長	鍬身長	鍬身幅	篋被長	茎 長
22	(17.9)	(3.3)	0.7	10.2	(4.3)	54	(15.5)	—	—	—	7.2
23	(14.7)	4.3	0.7	9.0	(1.1)	55	(15.1)	—	—	—	6.8
24	(16.3)	3.9	0.7	9.8	(2.7)	56	(11.9)	—	—	—	—
25	(16.1)	4.1	0.7	9.85	(2.3)	57	(9.85)	—	—	—	—
26	(14.9)	(3.6)	0.5	5.6	(5.7)	58	(12.2)	—	—	—	—
27	(14.6)	4.7	0.6	(10.2)	(0.6)	59	(7.9)	—	—	—	(1.2)
28	(7.1)	(3.5)	0.6	3.7	—	60	(3.1)	—	—	—	—
29	—	—	—	—	5.6	61	(5.9)	—	—	—	(1.3)
30	—	4.25	0.8	—	—	62	(6.1)	—	—	—	—
31	(5.5)	—	—	4.2	10.3	63	(2.9)	—	—	—	(1.2)
32	(13.0)	(1.6)	0.8	9.3	(2.1)	64	(2.1)	—	—	—	—
33	(13.1)	3.5	0.75	(9.6)	—	65	(2.6)	—	—	—	—
34	—	—	—	—	(2.4)	66	(3.0)	—	—	—	—
35	(9.1)	(3.1)	0.7	(6.2)	—	67	(7.9)	—	—	—	—
36	—	—	—	—	(4.9)	68	(2.0)	—	—	—	—
37	(6.9)	(3.9)	0.7	(3.0)	—	69	(4.9)	—	—	—	—
38	—	—	—	—	(6.2)	70	(2.4)	—	—	—	—
39	(7.3)	(2.8)	0.8	(4.5)	—	71	(3.4)	—	—	—	—
40	—	—	—	—	(4.2)	72	(3.8)	—	—	—	—
41	(8.4)	(1.2)	0.85	(6.2)	—	73	(3.0)	—	—	—	—
42	—	—	—	—	(3.5)	74	(4.9)	—	—	—	—
43	—	3.9	0.65	(0.5)	—	75	(2.2)	—	—	—	—
44	(7.4)	—	—	—	(0.6)	76	(5.0)	—	—	—	—
45	—	(4.0)	0.6	—	—	77	(2.6)	—	—	—	—
46	(9.2)	—	—	(6.9)	(2.4)	78	(4.3)	—	—	—	—
47	(4.6)	(2.6)	0.75	(2.0)	—						
48	(7.3)	—	—	—	(0.5)						
49	(8.1)	(0.9)	0.8	(7.1)	—						
50	—	—	—	(0.9)	(1.5)						
51	(12.2)	—	—	—	(2.4)						
52	(2.5)	—	—	—	—						
53	(10.2)	—	—	—	(6.9)						

第2節 ^{ふけ}泓遺跡 (A S—102)

1. 位置

下青野水田地帯の中の孤立した独立丘陵状の高台上に立地する遺跡である。青野の谷の中でも最も広い水田域の部分であるが、周辺は低湿地化しており、居住に適しているとは思われない。西側の山裾を青野川が南流しており、地形的には西側が低く東側から傾斜している。東側の現在の集落部分や県道部分は段丘により一段高くなっている。

遺跡は、高根山城（青野山城）の城主青野氏の家老である後藤氏の居館跡と伝えられる、下青野館跡の下層で検出された遺跡である。遺跡は台地上に立地しており、中央を県道が通っているため、南北に分断されている。さらに、調査前まで家屋が建っており、畑地など生活に使われていたため、大きく改変されている。畑耕土から石鏃等が検出されているが、基本的に遺構面は残っておらず、僅かに土塁下層の一部のみ残存していた。遺跡は本来は台地上に広がっていたかもしれないが、調査では南半に限られている。調査地からの視界は、青野ダム用地内の遺跡としては開けている方である。谷部分の南北方向をはじめ、西方の須磨田方面への峠を見ることが出来る。同時期の遺跡に限れば、南方に北台遺跡(A W—62地点)が視界の中に入ってくる。

2. 遺構

A S—102地点は下青野館跡として約3,800㎡が全面調査された。そのうちの一部約800㎡に限って縄文時代～弥生時代の遺跡が出土している。主に館跡の南から西にかけて出土しており、濃密に出土したのは土塁下層からである。岩盤の割れ目などからも遺物は出土している。

土塁下層に限って、岩盤の上に黒褐色砂質土が堆積しており、これが遺物包含層となっていた。包含層といっても濃密な包含層でなく、出土包含量は少ない。包含層中から石鏃・剥片・弥生土器・縄文土器が混入しており、各期のプライマリーな層に分層は出来ず、同一層と考えられる。

遺構として挙げられるものは、南側土塁の下面で検出された焼土壇など4基だけである。全て浅い遺構で、残存状態は良好とは言えない。1基は方形の落ち込みで、壇内に地山である礫が入っており、遺構のように見えるが、断面が片葉研状になり底が不定形なことから、積極的に遺構であるとは断言出来ない。長径130cm、短径72cmで、最も深いところで36cmを測る。緩かな西側の肩部に角礫が集中している。

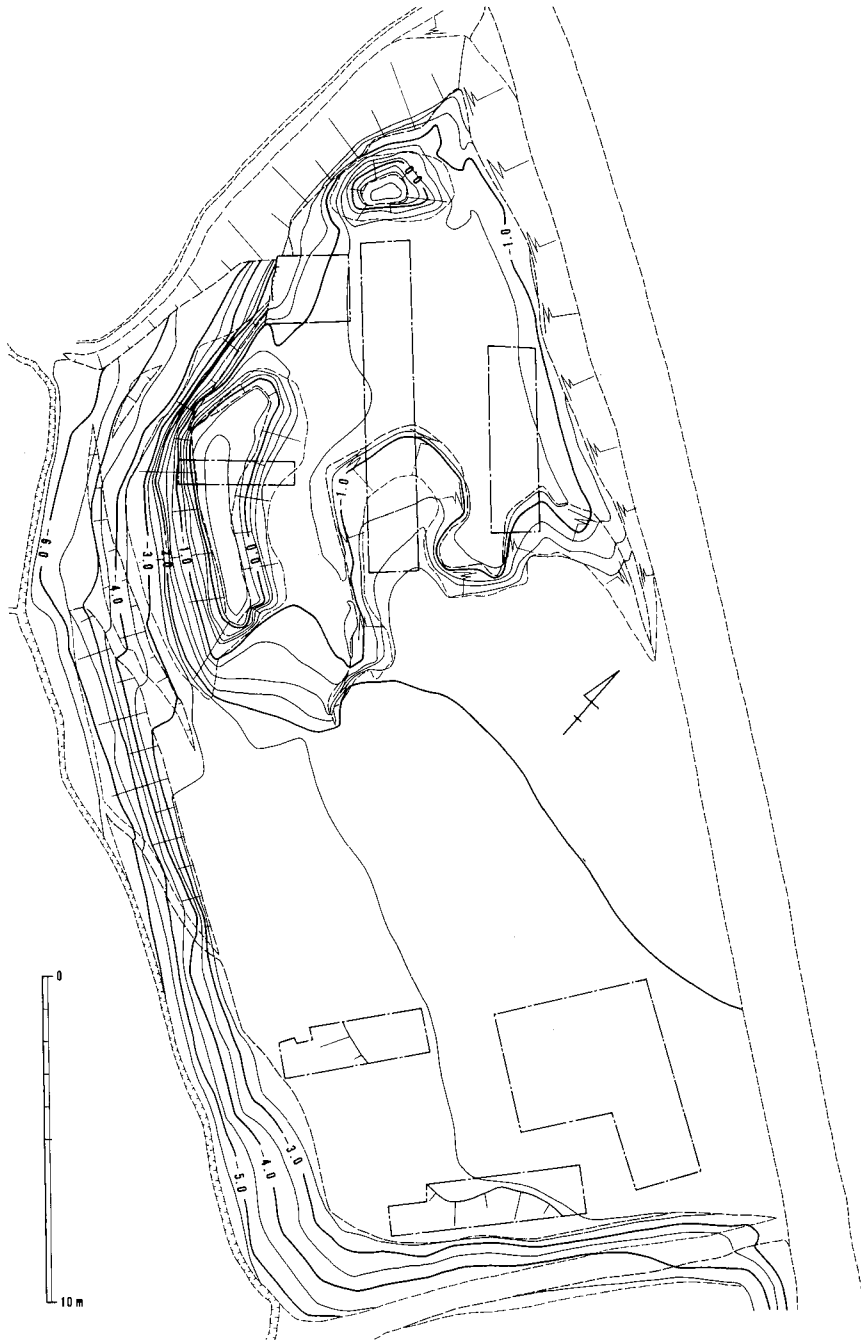
ピットは2基検出しており、小さい方は最大径25cmで深さは25cmのやや不定形の円形である。大きい方は、最大径48cmで深さは20cmを測る。

焼土壇は最大径145cmを測り、南辺は方形で北側が半円形になるトラック形の一辺を切っ

泓遺跡

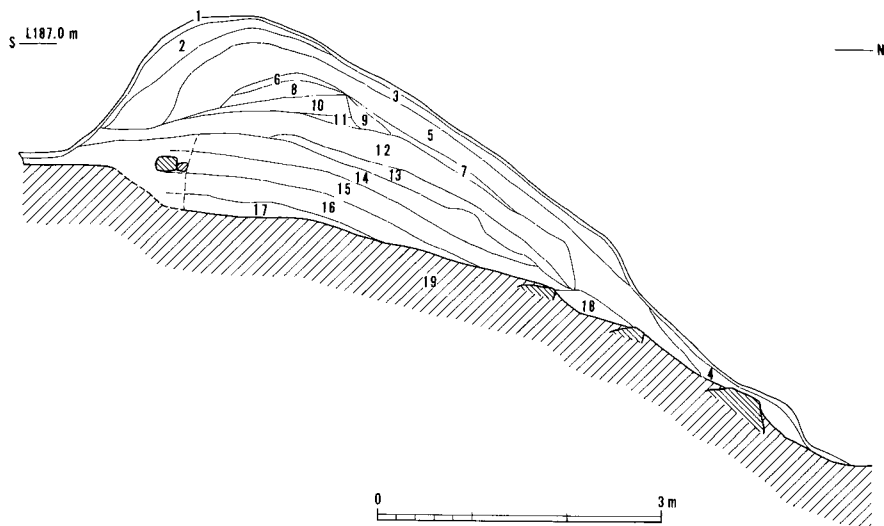
た形状を呈している。南側の方形の部分が高く、北側の方が浅く、壙内には焼土・炭が入っていた。18cmの差を測り、岩盤も焼成を受けている。

全ての遺構とも出土遺物は小片が含まれるのみで決定資料にかけるが、遺構面まで縄文・弥生両時期の遺物が混在していることと、焼土壙周辺で多数の剥片・破片が確認され



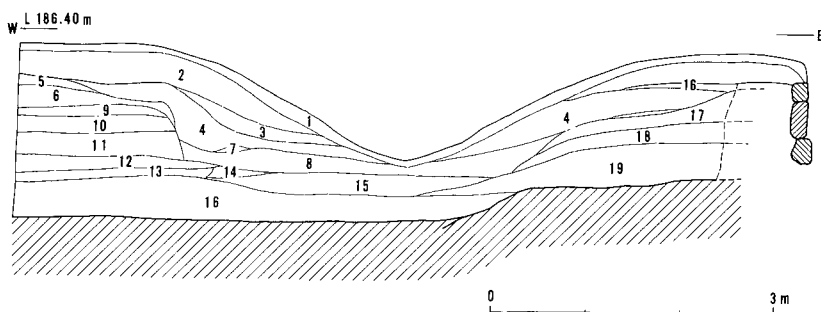
第19図 泓遺跡・地形測量図

泓遺跡



- | | | |
|--------------|------------|------------|
| 1. 表土 | 2. 暗黄色砂質土 | 3. 暗黄褐色砂質土 |
| 4. 茶褐色砂質土 | 5. 黄色砂質土 | 6. 茶褐色砂質土 |
| 7. 暗黄褐色砂質土 | 8. 黄色砂質土 | 9. 暗灰褐色砂質土 |
| 10. 黑色有機質土 | 11. 黄灰色粘質土 | 12. 黑色有機質土 |
| 13. 黑灰色粘質土 | 14. 黑灰色砂質土 | 15. 黑色有機質土 |
| 16. 明茶色粘質土 | 17. 灰褐色砂質土 | 18. 茶褐色砂質土 |
| 19. 黄色~茶色粘質土 | | |

第20図 下青野居館跡土層横断面図



- | | | |
|------------|------------|------------|
| 1. 灰色砂質土 | 2. 暗黄色砂質土 | 3. 暗黄褐色砂質土 |
| 4. 黄色砂質土 | 5. 茶褐色砂質土 | 6. 黄色砂質土 |
| 7. 茶褐色砂質土 | 8. 灰褐色砂質土 | 9. 黑色有機質土 |
| 10. 黑灰色砂質土 | 11. 黑色有機質土 | 12. 黑色有機質土 |
| 13. 黑色有機質土 | 14. 灰褐色砂質土 | 15. 明茶色粘質土 |
| 16. 黑色有機質土 | 17. 黄色砂質土 | 18. 黑灰色粘質土 |
| 19. 灰褐色砂質土 | | |

第21図 下青野居館跡土層縦断面図

ており、その技法から弥生時代中期の遺構と考えると差し支えないと思われる。多数の剥片などの出土から現地で石器製作を行っていた可能性が高く、集落跡を検出出来なかったものの生活に強く関連する遺構と思われる。

3. 遺物

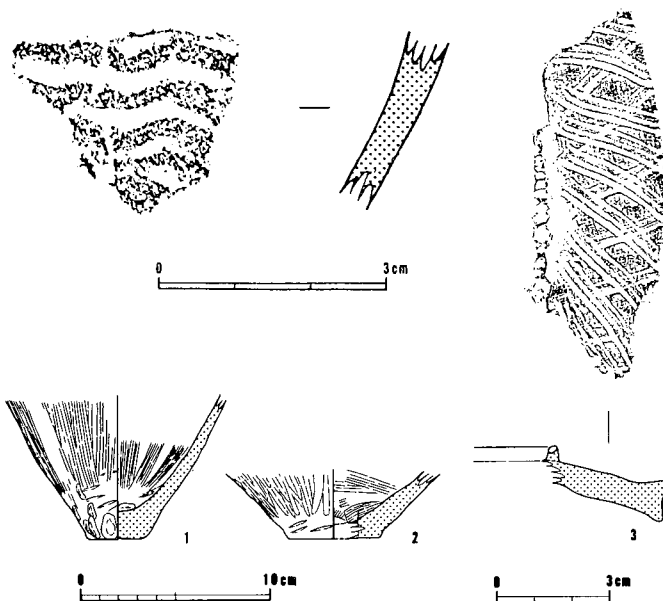
(1) 縄文土器 (第22図)

土壘下層の黒色土層より、破片が1点のみ出土している。長さ22mm、幅30mm、厚さ5mmを測る山形押型文土器の小片である。

外面には、底辺の幅に対して高さの低いゆるやかな山形文が施される。山形文は、陽文部も陰刻部とともに比較的幅広のものである。このような山形文は、押型文土器の中でも、一般にその前半期に見られるものである。

(2) 弥生土器 (第22図1～3)

出土遺物の総量はコンテナ3箱出土しているが、小片が多く図化出来るものはほとんどない。底部5点と口縁部3点が数えられるだけで、他は胴部や高坏の脚部などである。器種には壺・甕・高坏が認められ、壺の占める比率が高いようである。拓本を示した壺口縁部のみ保存状態が良好であるが、他は、丘陵の土器特有の摩滅を受けている。色調は全体的に黄褐色～黄灰色のものが大半で、胎土にはチャート・長石を含んでいる。技法では、外面へラミガキ、内面ハケ、ユビ整形のものがほとんどで、内面へラケズリは認められない。図化可能な土器は3点である。(1)(2)は底部で(3)は口縁部である。(1)は甕で、外面タタキ成形ののち6～7本/cmのハケで整形し、ユビ調整で仕上げている。内面には板ナデが見られる。胎土にチャート・長石の他に白雲母・石英が入っている。(2)は壺で、外面はタタキメののちへラミガキで整形し、内面はハケで整形している。底径4.8cm、残存高3.6cmを測る。内面はユビで消しているが、(1)と同じ工具を使って整形しているものと思われる。(1)(2)ともに土壘外の堆積土から出土している。(3)は、加飾された壺の口縁部で



第22図 山形押型文土器拓影・弥生土器 (1～3)

ある。復元口径は24.0cmで、口縁端部が斜めへ垂下し、内面に突帯を持つタイプである。口縁上面に斜格子文を突帯文に刻目文を施している。中期中葉を代表する壺で、壺Aと呼ばれているものである。

(3) 石器

縄文・弥生両時代のものが認められる。総計176点出土している。その内訳は、石鏃15点、削器2点、楔形石器3点、加工痕のある剥片6点、使用痕ある剥片2点、他に剥片・碎片が148点ある（第11表）。

石材は、石鏃に頁岩製が1点、加工痕ある剥片にチャート製が2点、剥片・碎片にチャート製が5点、鉄石英製が3点認められる以外は、9割以上をサヌカイトが占める。サヌカイトは、二上山産出と観察されるものは一割程度であり、ほとんどが石理が発達し、それに沿って縞状に風化する金山・岩屋産出のものが主体を占める。

トレンチ別の出土点数では、第3トレンチが65点、第5トレンチが93点と、この二地点で全体の9割にも及ぶ。共に、剥片・碎片が主体を占め、周辺で石器製作が行われていたことが推定される。また、第3トレンチからは、石鏃が、欠損品も含めて6点まとまって出土している。次に器種別に形態的特徴を述べる。

石鏃（第23図1～15）

15点出土している。形態別の内訳は、凹基無茎式のもの8点、平基無茎式のもの3点、凸基有茎式のもの2点、不明2点である。

凹基無茎式のもの、いずれも両面に丁寧な調整加工をほぼ全面に施す。1・2は、脚部端がほぼ直線となっている。4は、先端部を新しく欠損している。6は、頁岩製である。平基無茎式の9は、やや厚手で、左右非対称である。調整加工もやや粗い。10は、裏面基部に古い折損面が見られるが、その後には施された調整加工が認められることから、これで完結した形態をもつものと思われる。風化度は比較的弱い。

11・12は、共に弥生時代の所産である。11は、両面の周縁のみに調整加工が施され、背面中央には節理面、腹面中央には主要剥離面がそれぞれ大きく残される。12は、両面とも全面に丁寧な調整加工が施されるが、先端部は先鋭に加工されておらず、未製品とも考えられる。13は、薄手で、調整加工途中の破損品とも考えられる。14・15は、ともに両面に入念な調整加工が施される。15は、先端に打点をもつ截断面状の破損面を有している。

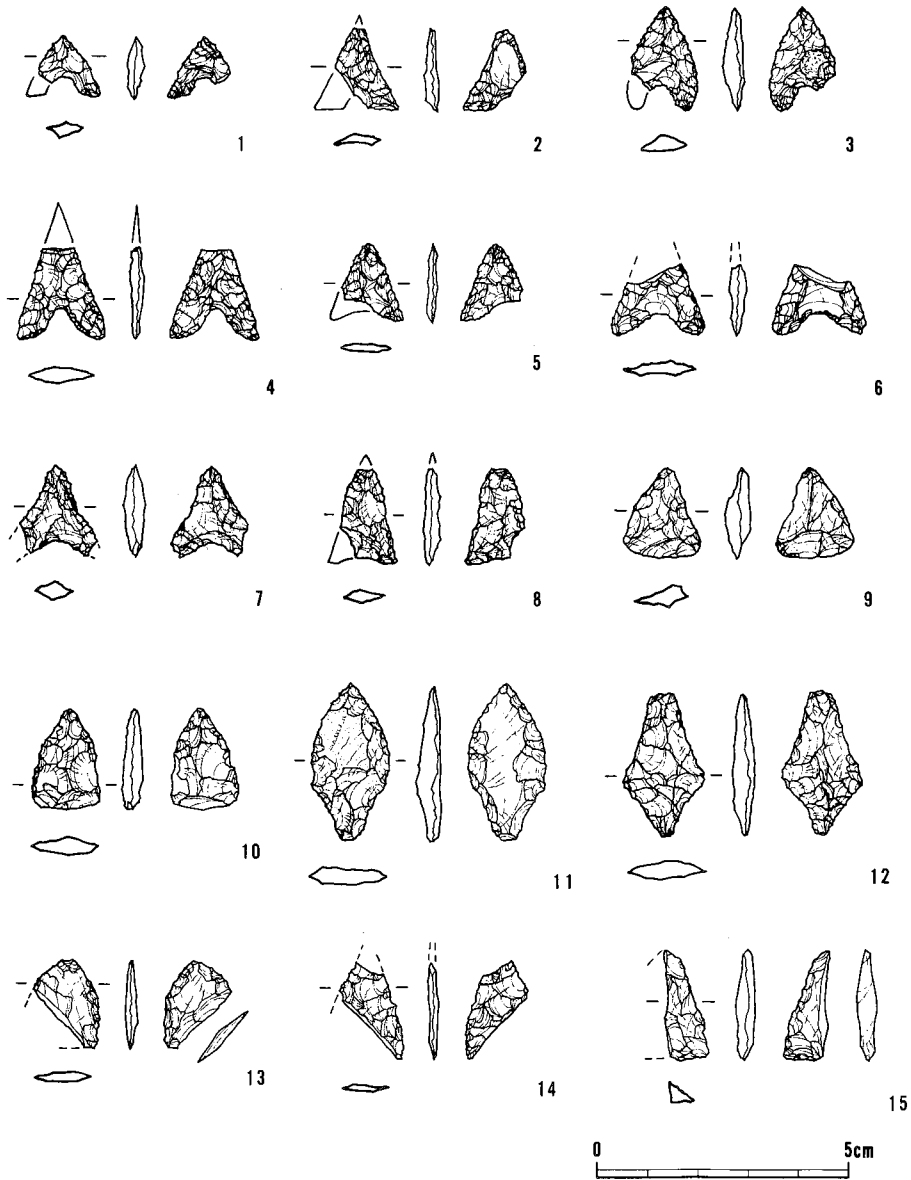
削器（第24図1・2）

2点あり、共に小型品である。1は、小型の横長剥片を素材としており、腹面側に背面からの調整加工により刃部を作出している。背面は全体が自然面である。2は、やや厚手の縦長剥片を素材とする。その打面側に腹面からの比較的角度的のある調整加工によって刃部を作出する。背面には、約3分の1に自然面が残る。一方の側縁は、折断面である。

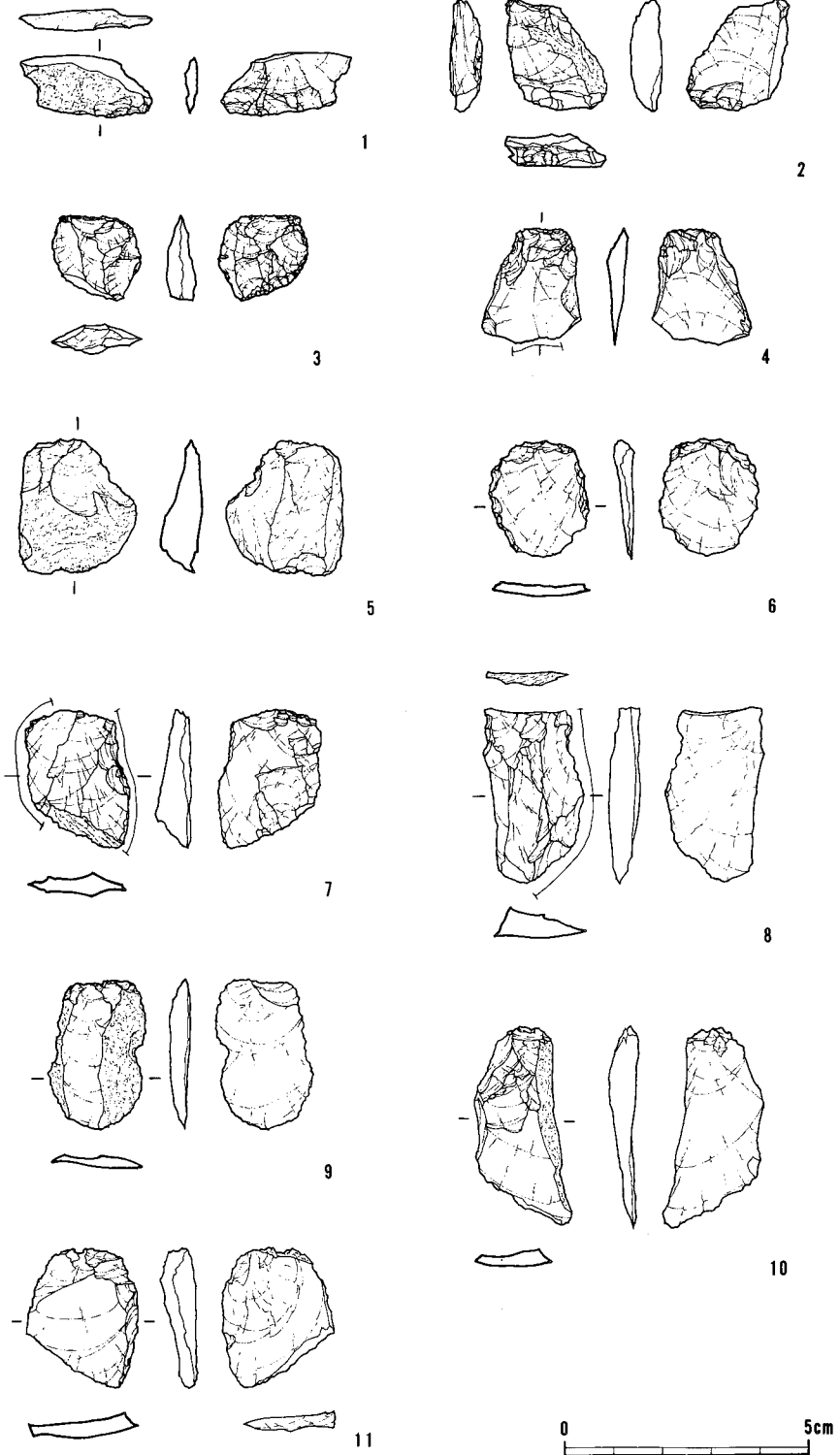
楔形石器 (第24図3~5)

3点ある。3は、最も整った形態を呈しており、ほぼ全周に細かい階段状剥離が残る。下端は折断面となっている。4は、薄手の剥片を素材とする。上縁には、細かい階段状剥離が認められ、下縁には、それと対応するように使用痕様の微細剥離が認められる。5は、やや厚手の剥片を素材とし、上・下縁に弱いながらも階段状剥離が認められる。背面には、自然面が大きく残る。

加工痕ある剥片 (第24図6~8)



第23図 出土石器 (1)



第24図 出土石器(2)

6点出土しており、うち3点を図示した。いずれも、刃部とは認定し得ない細かい調整加工を散漫に施すものである。6は、上面の両縁及び背面側の両側縁に小剥離のややまとまった部分が見られる。7は、両側縁に使用痕が観察される。腹面側右側に、剥離角が小さく深い調整加工が集中してみられるが、刃部とは考え難い。8は、整った縦長剝片を素材としている。一方の側縁に使用痕が認められる。下端を新しく欠損している。

剝片（第24図9～11）

比較的形態の整った縦長のもの3点を図示した。9には、背面に自然面が残り、剥離工程の比較的初期の段階のものである。11は、やや厚手で、下端折断面となっている。

4. 小 結

泓遺跡は、当初下青野館跡として調査が行われた遺跡で、縄文時代・弥生時代の遺構・遺物は予想されなかった成果である。遺構としては、弥生時代の焼土壙とピットだけである。遺構が検出されたのが、土壙部分に限られていることを考慮するなら、下青野館跡の位置する台地上に縄文時代・弥生時代の遺構が存在した可能性が高い。青野川流域では、北台遺跡出土の有舌尖頭器に次ぐ時代の遺物である縄文時代早期の押型文土器を出土していることは、当地域の歴史を考える上に重要であろうと思われる。土器に伴って鋤形鏃も数点出土しており、共伴関係がつかめて興味深い。川端遺跡でも縄文土器と石鏃が出土しており、広く青野川流域に同時期の遺跡が存在することが判明した。台地上に他にも立地している可能性が高く、周辺地域の中でも縄文時代早期・前期の密集地域と言えよう。

弥生時代の遺構は土壙周辺部分に限られており、残存状態も近世以降の生活面によって削平を受けている。焼土壙も最深部で18cmを測る程度で残存度は悪いが、屋外炉の可能性が考えられている。弥生土器は中期～後期の土器が出土している。土器に比べて石鏃が多いのは特徴の一つとして挙げられよう。

今回出土した縄文・弥生時代の遺物のうち、押型文土器は、小片一片のみの出土ではあるが、県東半中央部では初めての出土例である。また、県下でも、但馬地方以外では、神戸市境川、宇治川南両遺跡、芦屋市山芦屋遺跡・多可郡加美町寺の下遺跡と共に数少ない押型文土器文化期前半の遺跡であるといえる。同時に検出された石器類も、2点の凸基有莖式石鏃を除いて、その形態から、押型文土器に伴うものとして大過ないであろう。特に、第24図1・2は、いわゆる鋤形鏃に類似した形態を呈している。

遺物の出土点数が少ないため、本遺跡の縄文・弥生時代における性格は、詳細な検討を行い得ない。しかし、第3・5トレンチ出土の石器類の内容から、この遺跡内で石器製作が為されていたことは、ほぼ確実であるといえよう。碎片類を詳細に観察すると、以前、筆者が同じ三田市内の溝口遺跡において分析を行った「石鏃チップ」（大下1986）と類似した内容を有するものも認められた。

泓 遺 跡

AW-62地点では、やはり押型文土器に伴出する異形局部磨製石器が単独で出土している。今後、周辺の調査が進展するにしたがって、本遺跡を含めた三田市域全体での縄文時代早期の実態はより明確に成るものといえよう。

これらの縄文・弥生時代について遺構は僅かしか検出されておらず、遺物も多量に出土したわけではないが、両時代の青野川流域の歴史を考える上には重要な資料を提出したものである。泓遺跡の両時期の残された遺構は全て調査されたことになり、今後追加資料は遺物の上からしか考えられないが、ほとんど資料を追加することは原則的に不可能であろう。現在与えられた資料で遺跡の意義付けを行うことは容易でなく、本報告から検討されることを望むものである。

(渡辺・大下明)

第11表 青野ダム泓遺跡石器一覧表

(単位はcm, g)

挿図番号	分 別	分 類	出 土 区	石 質	遺 存 状 態	長さ	幅	厚さ	重さ
第23図-1	石 鏃	凹基無茎式	第3トレンチ	サヌカイト	脚部一方欠	1.2	1.2	0.4	0.3
2	石 鏃	凹基無茎式	第3トレンチ	サヌカイト	先端部,脚部方欠	1.65	1.3	0.3	0.3
3	石 鏃	凹基無茎式	第3トレンチ	サヌカイト	脚部一方欠	2.1	1.4	0.45	0.85
4	石 鏃	凹基無茎式	第5トレンチ	サヌカイト	先端部欠	1.8	1.75	0.3	0.5
5	石 鏃	凹基無茎式	第3トレンチ	サヌカイト	脚部一方欠	1.55	1.25	0.2	0.25
6	石 鏃	凹基無茎式	不 明	頁 岩	上半部欠	1.4	1.9	0.4	0.9
7	石 鏃	凹基無茎式	第4トレンチ	サヌカイト	脚部両端欠	1.8	1.55	0.5	0.7
8	石 鏃	凹基無茎式	第4トレンチ	サヌカイト	先端,脚部一方欠	1.95	1.2	0.3	0.7
9	石 鏃	平基無茎式	C-17	サヌカイト	完 形	1.8	1.55	0.55	0.95
10	石 鏃	平基無茎式	L-11	サヌカイト	完 形	2.0	1.35	0.35	0.9
11	石 鏃	凸基有茎式	M-8	サヌカイト	完 形	3.0	1.5	0.45	1.9
12	石 鏃	凸基有茎式	表 採	サヌカイト	完 形	2.8	1.6	0.5	1.4
13	石 鏃	不 明	不 明	サヌカイト	下半1/2欠	1.8	1.35	0.25	0.45
14	石 鏃	不 明	第3トレンチ	サヌカイト	先端,下半1/2欠	1.9	1.3	0.2	0.3
15	石 鏃	平基無茎式	第3トレンチ	サヌカイト	縦に半欠	2.15	0.9	0.4	0.6
第24図-1	削 器	—	第3トレンチ	サヌカイト	完 形	1.3	2.7	0.4	1.4
2	削 器	—	第5トレンチ	サヌカイト	刃部小欠	2.3	2.1	0.7	3.0
3	楔形石器	—	第3トレンチ	サヌカイト	完 形	1.75	1.8	0.6	1.5
4	楔形石器	—	第7トレンチ	サヌカイト	完 形	2.4	2.05	0.45	1.75
5	楔形石器	—	第3トレンチ	サヌカイト	完 形	2.8	2.4	1.9	5.55
6	加工痕有剥片	—	第5トレンチ	サヌカイト	完 形	2.4	2.05	0.45	1.55
7	加工痕有剥片	—	第5トレンチ	サヌカイト	完 形	2.85	2.2	0.8	3.2
8	加工痕有剥片	—	第7トレンチ	サヌカイト	下端部欠	3.6	2.1	0.65	4.15
9	剥 片	—	第3トレンチ	サヌカイト	完 形	3.1	2.0	0.45	2.15
10	剥 片	—	第3トレンチ	サヌカイト	側縁小欠	4.1	2.1	0.6	3.3
11	剥 片	—	第3トレンチ	サヌカイト	完 形	2.4	2.3	0.8	3.55

末西地域



第4章 末西地区の調査

第1節 ^{ひらい}平井遺跡 (AW-54)

1. 立地

平井遺跡は三田市末西字平井に所在し、当初AW-54地点と呼ばれていた遺跡である。この遺跡は、青野川中流域に形成された小盆地の北にあたる北浦地区の南傾斜面に位置している。遺跡は南西に延びる段丘上やその南側斜面にあり、西には青野川が東には谷川が流れている間に立地し、標高176~183m付近にある。

2. 調査の経緯と経過

分布調査では付近一帯に平安時代の須恵器・土師器が散布していることが判明し、昭和52年1月に確認調査が実施され、段丘裾部に広がる地点(約2500㎡)では14箇所もの試掘壕から、溝や柱穴などの遺構や土器包含層が発見された。その南西100mにあるAW54南地点(約800㎡)では若干の須恵器片が出土したが、柱穴等が検出されたことから全面調査の必要があるとの結果が出された。

平井遺跡の全面調査は昭和52年8月から昭和53年3月まで実施された。その結果、溝に囲まれた古墳時代後期の集落跡や、平井遺跡内の北東部では古墳時代後期の集落跡より一段高い段丘面において、中世の溝状遺構、近世の井戸や自然流路跡を検出した。

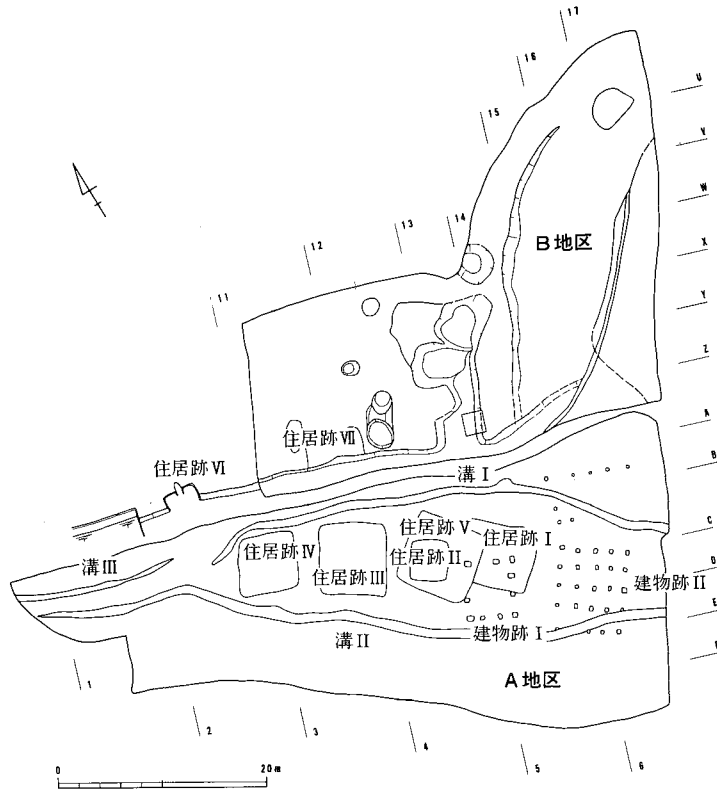
3. 土層

平井遺跡の竪穴住居跡群が検出された場所での基本的な土層は上層から、I層灰色土(耕作土)、II層淡黄色土(床土)、III層灰黄色土、IV層灰褐色土、V層黒褐色土(古墳時代遺物包含層)、VI層黄褐色シルト(遺構面)となっている。調査区内での遺構面が北ではVI層上面であるが南では低湿地の堆積と考えられる黒褐色粘土層である。

各層における出土遺物から堆積時期を判断すると、IV層からは鎌倉時代を主体とする中世の遺物が出土した。このIV層は整地層と考えられ、堆積を観察すると2度の整地が行われたことが判った。V層からは古墳時代後期の土器が多量に出土し、古墳時代の遺構内から出土する遺物と時期差はない。

4. 遺構の状況

調査は当初、段丘下である南部の畦畔をはさんで2枚の水田面を対象としていた。両水田面共、床下げ等による削平を受けており、遺構の残存状況は良くなく、住居跡の周壁の高さも10cm程度しかなかったほどである。同時に北部についても、段丘上からかなりの土砂に押し流された状況を示す箇所もあり、遺構の遺存は悪かった。



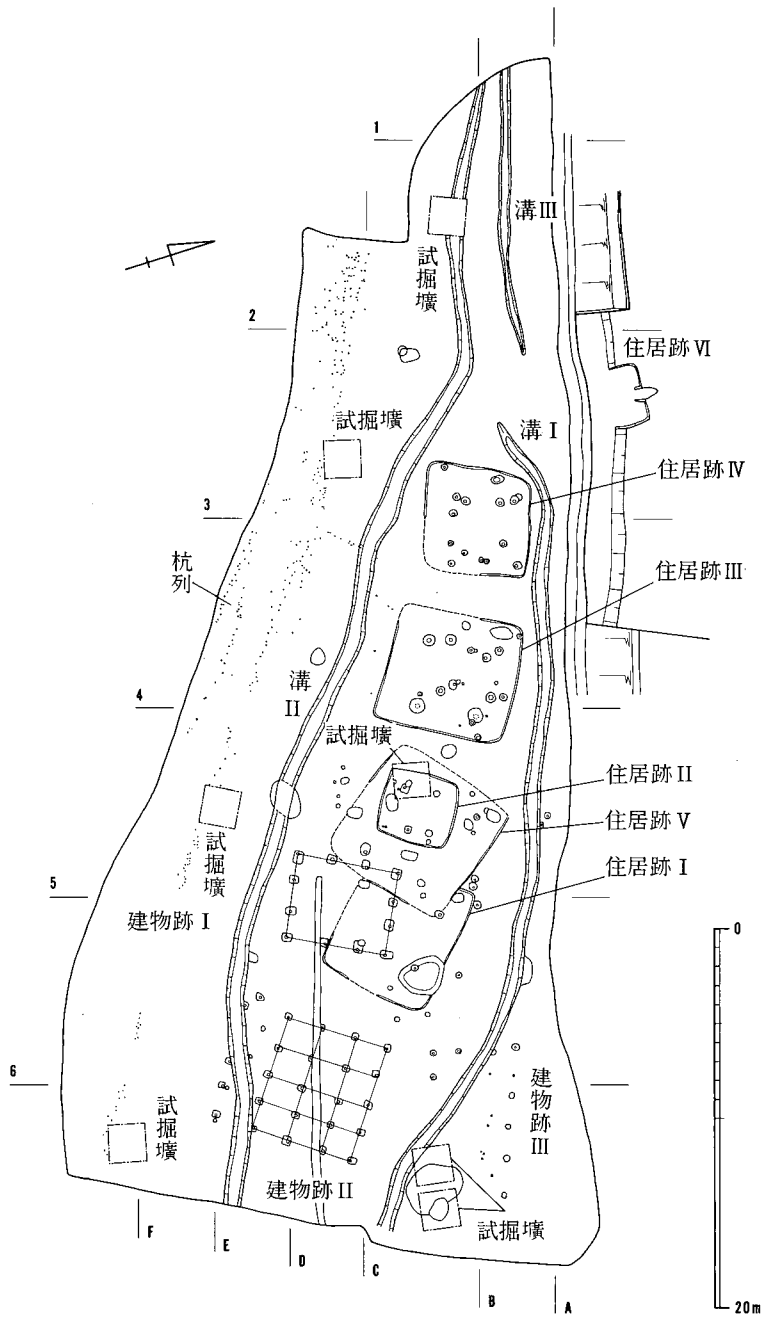
第25図 遺跡全体図

北部の遺構については、古墳時代後期のものとしては、方形竪穴住居跡が2棟発掘されたにすぎない。この他、鎌倉時代と考えられる溝・土壇・ピット・落ち込みなどが検出され、多くの遺物が出土したが、住居に伴う遺構はなく、居住地周辺の土器溜まり的な要素の強い場所であると考えられる。

南部では古墳時代後期の遺構として段丘下に広がる大きな水田面下に、東西方向にはしる2本の溝に囲まれた5棟の方形竪穴住居跡が検出された。この溝に囲まれた集落の範囲は南北7~13m、東西約50mで、およそ500㎡以上あるものと考えられ、集落西端は溝IとIIが接近し、溝Iが消えてしまって集落への通路的な部分の可能性がある。東端は県道黒石-三田線下に溝が延びたが、さほど続くことはない判断した。この長楕円を呈する溝の内側に前述の遺構が存在した。

竪穴住居跡I・II・V・掘立柱建物跡Iは互いに切り合い関係にある。調査時に切り合い関係が判明したのは竪穴住居跡IがVに切られていたということだけで、他の遺構については土層の識別が困難な状況であったことから前後関係については不明である。また、竪穴住居跡IIIの床面で検出された柱穴から3回程度の建替え、あるいは拡張が考えられるが、周壁などでは確かめることはできなかった。また、これら竪穴住居跡の東方には掘立

平井遺跡



第26図 A地区 遺溝全体図

柱建物跡 2 棟、総柱の掘立柱建物跡 1 棟を検出した。

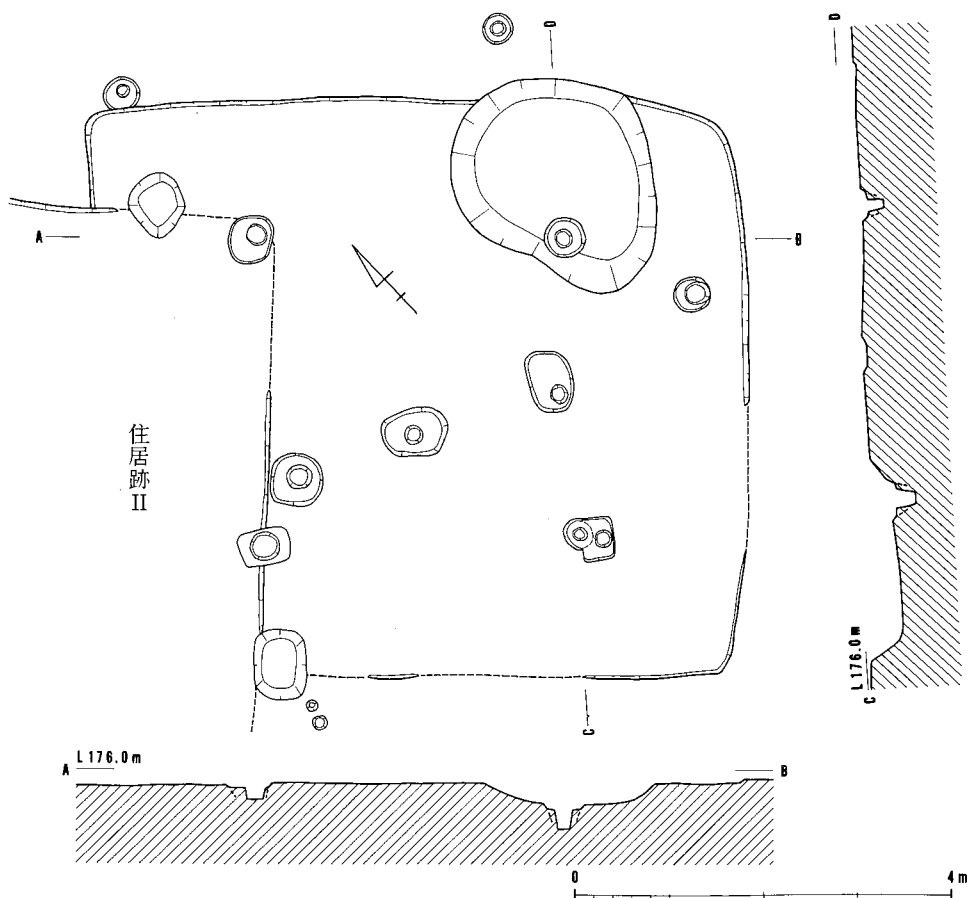
溝IIの南側 5 ~ 6 m 付近の低地に、この溝と併行に杭列が検出された。検出面から考え、古墳時代のもと考えられるが、この集落南一帯に水田が広がることが予想されたが、顕著な遺構は存在しなかった。

以上のように、古墳時代後期の生活面は北から南にむかって、ゆるやかな傾斜をしていたことが判る。この傾斜の上段に少なくとも 2 棟の竪穴住居跡があり、下段には 5 棟の竪穴住居跡が西寄りに集中し、掘立柱建物が東寄りに存在することが判明した。

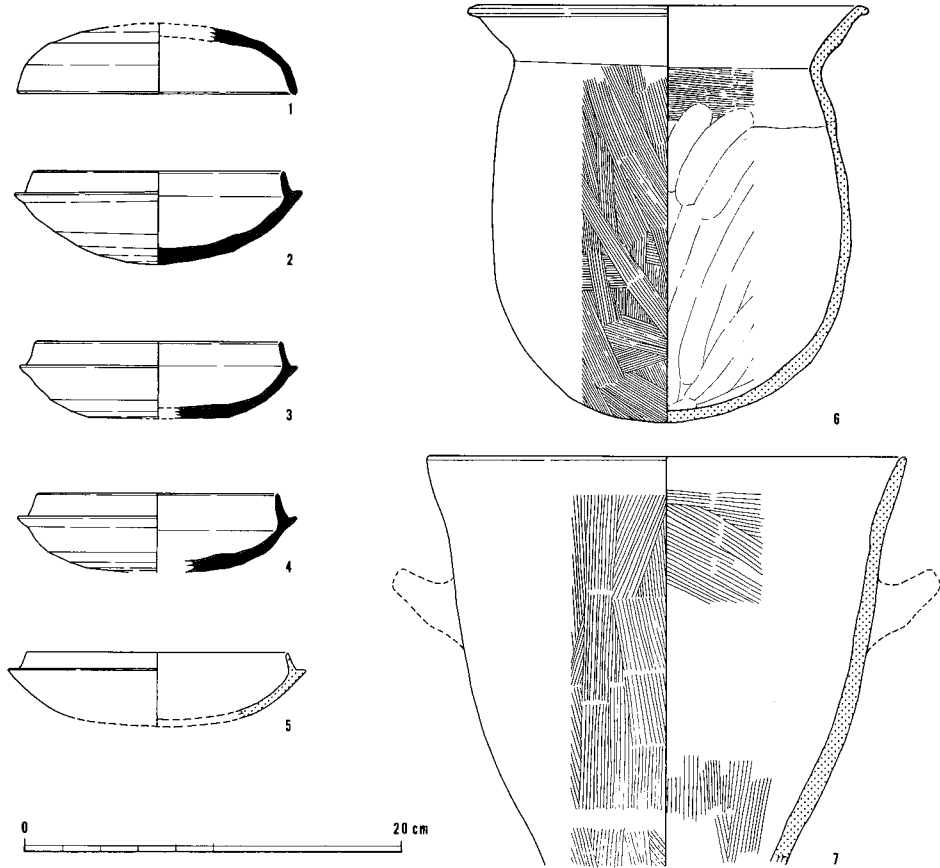
竪穴住居跡 I

竪穴住居跡 I は調査区東方の C-5 区にあり、VI 層上面で検出されたが、南西側が竪穴住居跡 5、掘立柱建物跡 1 が複雑に切り合っていることなどの影響もあり、残存状況は良くなく、3 つのコーナーを確認しえたが部分的に周壁が全くなっているところもあった。

規模は、南北 6.0 m、東西 6.7 m、深さ 5 cm の方形竪穴住居跡である。住居跡内の堆積土は



第27図 竪穴住居 I



第28図 竪穴住居 I 出土土器

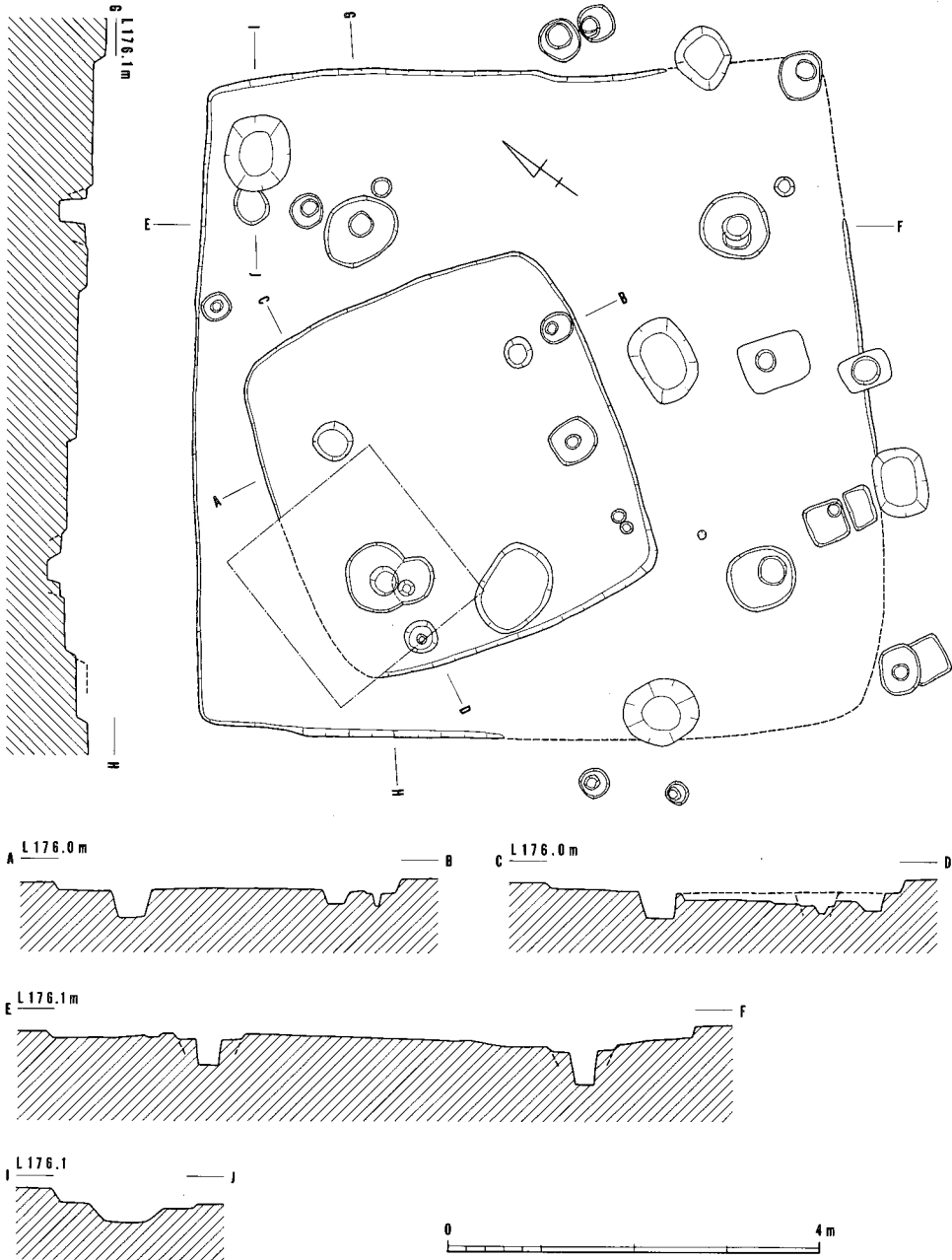
黒褐色土であり、炭・焼土が多量に混入していた。住居跡内の遺構としては周壁溝は検出されなかった。この住居の主柱穴と考えられるものを3箇所検出できたが、おそらく4本柱の構造であったものと考えられる。また北西壁際に不整形な土壇(76cm×56cm)がある。この土壇中央には焼土面が認められ、炭・骨片・土師器の甑・甕、須恵器の坏身が出土した。炉址状を呈するものである。

遺物 竪穴住居跡 I から出土した遺物には須恵器の坏・坏蓋・坏身、土師器の坏身・甕・甑があり、これらが図示しえた。その他須恵器の甕・壺、土師器の壺などが僅かに出土したが図示しえなかった。

須恵器の坏蓋(1)は天井部は丸く仕上げられ、口縁もなだらかに下がり口縁端部にいたる。口縁端部内面には稜もなく全体になめらかな感じをうけるものである。坏身(2~4)は口縁は内傾ぎみにたちあがり、端部内面には僅かに稜を有する。体部外面のヘラケズリは体部中央付近からあり、(2)は底面が尖りぎみに、(3・4)は平坦化している。

土師器の坏身(5)は成形や調整技法からみても明らかに須恵器とは異なるものである。

口縁は内傾ぎみにわずかにたち上がり、端部は丸くおさまられている。体部は半分以上欠失しているが、丸みをおびるものであり土師器の坏としては珍しいものである。甕（6）は口縁が開き、端部上面が平らに仕上げられている。胴部は直線的で底は丸い。胴部外面は斜め方向のハケ、内面は横方向のハケ目の後、斜め方向のケズリがみられる。甗（7）



第29図 竪穴住居II・V

は下端部を欠損するもので、直線的に外傾し端部にいたる。外面はタテ方向のハケ目、内面は斜めやタテ方向のハケ目調整がなされる。

竪穴住居跡II

竪穴住居跡IIは調査区中央付近のC-4区にあり、VI層上面で検出された。この住居跡は位置的には竪穴住居跡Vの中であり、両住居跡共同一面で検出されたことから、住居跡Vよりも後出の住居跡である。

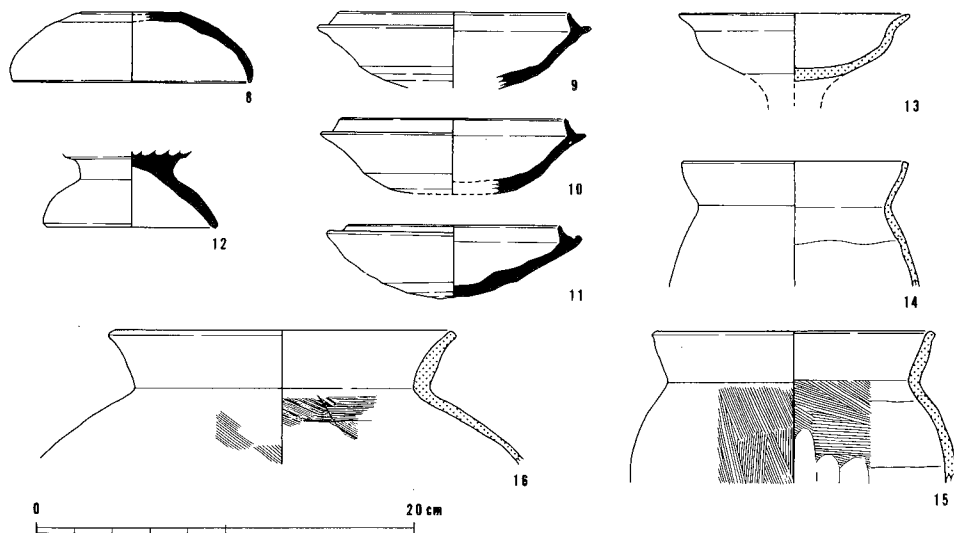
規模は南北4.0m、東西3.75m、深さ10~15cmの方形竪穴住居跡であり、当遺跡で検出された7棟の竪穴住居跡中でも最も小規模なものである。住居跡内の堆積土は黒褐色土であり、地山である黄褐色シルト層と住居跡Vを掘り込んでいた。

住居跡内の遺構として、周壁溝は検出されなかった。また支柱穴と考えられるものは3箇所検出され、床面から20~30cm掘り下げられていた。住居跡内南辺の中央付近に丸みを帯びた方形土壇(97cm×72cm)があり、若干の炭・焼土が検出された。

住居内からの出土遺物は、床面付近に、須恵器の坏蓋・坏身、土師器の甕・高坏の他、滑石製の扁平な紡錘車が出土した。

遺物 竪穴住居跡IIから出土した遺物には須恵器の坏蓋・坏身・高坏、土師器の高坏・甕が図示でき、須恵器の壺・甕の小片は図化できなかった。

須恵器の坏蓋(8)は天井部上面付近にヘラケズリがあるが、その範囲は $\frac{1}{4}$ 以下である。また口縁端部には稜はなく、全体に丸みをおびたものである。坏身(9)の口縁は斜め上方に短くたちあがり、端部内面に僅かな稜がある。体部のヘラケズリは約 $\frac{1}{2}$ をしめ、底にかけてやや尖った形状を示す。(10)の口縁は斜め上方に短くたちあがり、端部はほぼ丸く



第30図 竪穴住居II出土土器

おさめられている。体部のヘラケズリは $\frac{1}{2}$ 以下で、底にかけて彎曲しているが、底面は平坦化しており、(9)と同形態である。(11)の口縁は短く斜め上方にたちあがり、端部には僅かな稜線がうかがえる。体部のヘラケズリは $\frac{1}{3}$ 以下で、底にかけてほぼ直線的になり、尖っている。(12)はやや内彎した脚部をもち、端部は丸く仕上げられているもので、短脚の高坏である可能性がある。

土師器の高坏(13)は脚部が失われている坏部のみ資料である。坏部の体部は内彎ぎみにたちあがり、口縁付近は鋭く外反しており、端部は丸く仕上げられている。土師器甕は(14・15)があり、胴部があまり張らず、口縁が僅かに内彎しながら、平らに押しえられた口縁にいたる。(15)は外面がタテ方向のハケ目、内面はヨコ方向のハケ目がうかがえる。甕(16)は前者よりも大型である。口縁部はゆるやかに外反し、端部外面に稜線がある。内外面に細かい斜め方向のハケ目がうかがえ胴部が張る資料である。

竪穴住居跡Ⅲ

竪穴住居跡Ⅲは調査区中央付近のC-3区、住居跡Ⅱの西方2mに隣接しておりVI層上面で検出された。他の住居跡と同様に周壁は完全には残存しておらなかった。

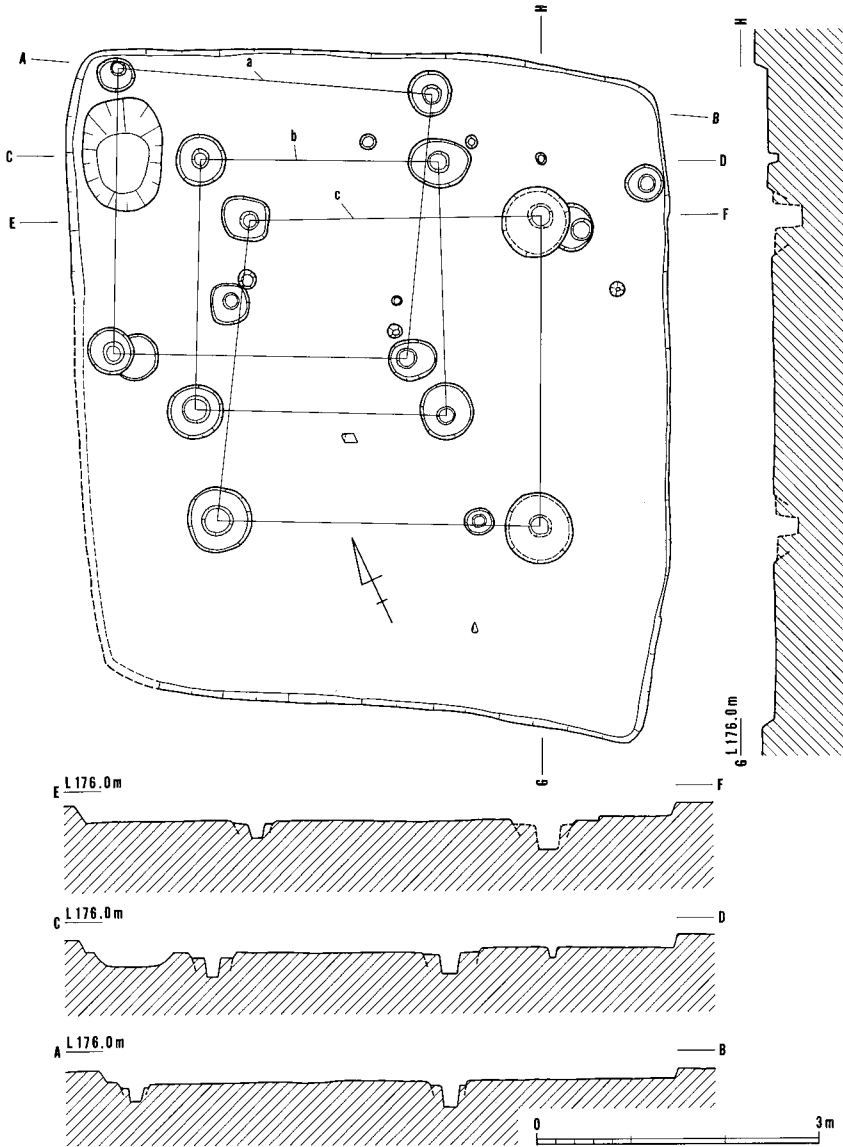
規模は南北6.9m、東西6.35m、深さ15~20cmの方形竪穴住居跡である。住居跡内の堆積土は黒褐色土であり、地山の黄褐色シルト層を掘り込んでいた。

住居跡内の遺構として、周壁溝は検出されなかった。しかし、住居跡北西隅に85cm×120cm、深さ15cmの楕円形を呈した土壌が検出された他、主柱穴と考えられるものは4本単位で3組検出された。これら3組の主柱穴は南西隅から南東方向にかけて検出されたが、いずれも切り合い関係がないことから前後関係については不明と言わざるをえない。柱間はaが2.8~3.35m、bが2.55~2.7m、cが3.1~3.3mであり、住居跡の規模も若干変化していたように思われるが、検出された住居跡の範囲は柱間cが考えられる。a・bの柱間に対応する住居跡周壁はすでにc段階の住居跡拡張時に削平されたものであろう。

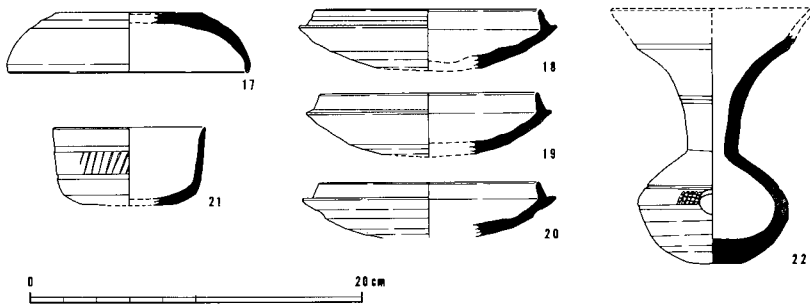
遺物 この住居跡からの出土遺物は床面直上にて、須恵器の坏蓋・坏身・埴などが出土した。

須恵器の坏蓋(17)は、天井部上端は平坦に仕上げられ、外面のヘラケズリは天井部の $\frac{1}{2}$ 以下である。口縁部付近は丸みをおび、端部も丸く仕上げられている。坏身(18・19)は口縁は直立ぎみにたちあがり、端部はほぼ丸く仕上げられている。体部外面のヘラケズリは体部中央付近からはじまり、器高は4cm程度のやや低めのものである。(20)は口縁が直立ぎみに短くたちあがり、端部は丸く仕上げられている。体部外面のヘラケズリは $\frac{1}{2}$ 以上をしめており、器高が4cm程度で、やや低めのものである。(21)は口径9.2cm、器高4.8cmの深い埴である。底面はほぼ平坦で体部は僅かに外傾しながらたちあがり、口縁にいたる。体部には2本の浅い凹線があり、その間をタテ方向にヘラによる沈線文がつけられて

平井遺跡



第31图 竖穴住居III



第32图 竖穴住居III出土土器

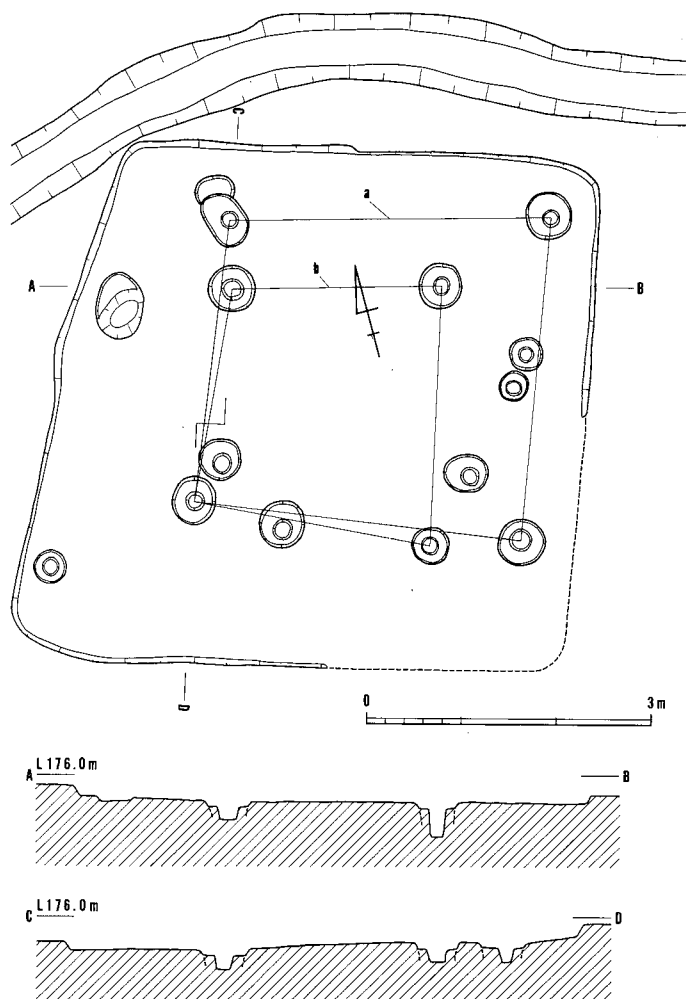
いる。口縁端部内面は僅かに外方に傾き、端部は仕上げられている。(22)は口縁上端部を欠失する資料である。体部はややそろばん玉を呈し、最大径付近に2条の凹線があり径1.5cmの孔をもち、その凹線の間をクシ状工具にて連続文が施されている。細くしまった頸部から大きく開く口縁にいたるもので、部分的に浅い凹線がみられるものである。

竪穴住居跡IV

竪穴住居跡IVは調査区西方で、住居跡群の最も西に位置しており、VI層上面で検出された。この住居跡は南東部の周壁部分は失われ、全体に残りの悪いものであった。

規模は南北5.3~5.5m、東西5.0~5.9m、深さ10~15cmの方形竪穴住居跡である。住居跡内の堆積土は、黒褐色土であり、地山である黄褐色シルト層を掘り込んでいた。

住居跡内の遺構として、周壁溝は検出されず、西側壁際に楕円形(50cm~70cm)の土壇が検出された。この他住居内には炭化材が放射状に出土し焼土面が存在したことから焼失

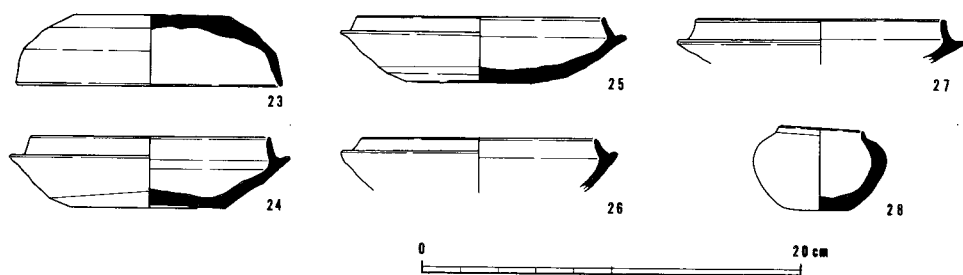


第33図 竪穴住居IV

住居と考えられる。支柱穴と考えられるものは4本単位で2組検出されたが不整形な配列を示すことや、この他に若干柱穴が存在することから、さらに組み合わせができる可能性がある。柱間はaが3.0~3.5m、bが2.25~2.75mであり、aの段階からbに変化し、検出された周壁はbの段階のものかもしれない。

遺物 住居跡IVからの出土遺物は覆土中に須恵器の坏蓋・坏身・小壺が出土した。特に(23・24)はセットで出土した。また土器以外に砥石が出土した。

須恵器の坏蓋(23)は天井部上面が平坦に仕上



第34図 竪穴住居IV出土土器

げられ、ヘラケズリは天井部の約 $\frac{1}{2}$ におよぶ。天井部と体部とを分ける稜線はなだらかで、口縁端部も丸く仕上げられている。坏身(24)は底部の底面は平坦で、受部に向かって体部が開き、短く直立するたちあがりがあり、口縁端部は丸くおさまられている。(25)は体部と底部を分けるヘラケズリの稜線は下半部にあり、受部以下の範囲の $\frac{1}{2}$ 以下である。口縁にかけては斜上方に短くたちあがり、口縁端部にはわずかな稜線がみとめられるもので、器高が3.8cmしかなく扁平な感じである。(26)は底部を欠く資料である。体部は僅かなカーブをえがき底部にいたっているようで、口縁は斜め上方に短くたちあがりを見せる。端部は丸みをおび、シャープさに欠ける資料である。(27)も底部を欠くもので、水平に張り出した受部から垂直に短くたちあがりを見せ口縁端部は丸い。小壺(28)は最大径7.2cm、高さ4.2cmをはかる小型のもので、短く直立した口縁から器壁が厚く仕上げられた丸みをおびた壺である。

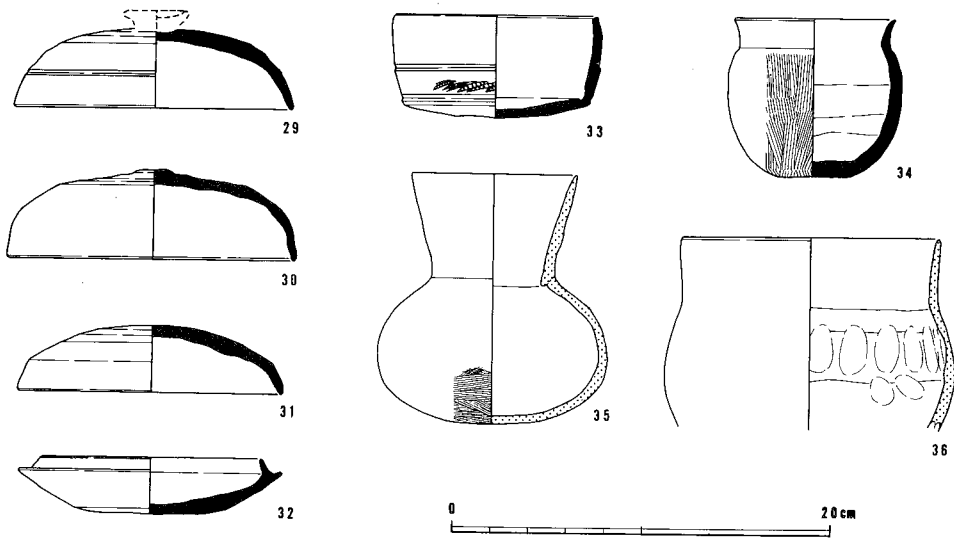
竪穴住居跡V

竪穴住居跡Vは調査区中央付近C-4区にありVI層上面で検出された。この住居跡は住居跡Iを切り、住居跡IIに切られていることから住居跡Iより新しく、住居跡IIより古いものであると考えられる。

規模は南北7.2m、東西7.2m、深さ10~15cmの方形竪穴住居跡であるが、北東と南東隅の残存状況が悪く不明な点が多いがこれら住居跡群中最大のものである。住居跡内の遺構として、土壇があげられるが、3箇所すべてがこの住居跡のものかについては不明である。主柱穴は4本単位で1組検出され、柱間は3.8~4.2mをはかる。

遺物 住居跡Vからの出土遺物として、須恵器の坏蓋・坏身、土師器の罎・甕が出土した。

須恵器の坏蓋(29)は天井部と体部を分ける境に低い沈線がめぐらされ、口縁端部内側の稜線はない。天井部の $\frac{1}{2}$ 以下はヘラケズリされ、頂部につまみの痕跡をとどめる。(30)は天井部と体部を分ける境はなく、丸みをおびたもので、口縁端部内側に僅かな稜線がある。天井部の狭い範囲でヘラケズリをとどめ、頂部は突起状に残る。(31)は天井部と体部を分ける境には僅かに稜線状をなし、天井部は $\frac{1}{2}$ にヘラケズリがされているもので、器高



第35図 竪穴住居V出土土器

は3.6cmしかない扁平なものである。坏身(32)は底部の底面は平坦で、受部に向かって体部が開き、短く斜め上方にたちあがりを見せる。口縁端部は稜線がなく丸い。器高3.0cmと低く扁平なものである。おそらく(31・32)はセット関係になると考えられる。埴(33)はほぼ平らな底部と高く直立する体部から口縁にいたる。口縁端部内面には稜線がめぐる。体部外面の下半部に低い沈線が2条あり、その間を斜め方向にクシ状工具にて連続施文している。(34)は小さな底部から僅かな胴部の張りをみせ、短く外反した口縁部をもつ。外面はタテ方向のハケ目、内面は粘土継目を残す、小型の壺である。

土師器の埴(35)は扁平で丸く仕上げられた胴部に外傾しながら連続的に開く口・頸部をもつ。頸胴部間には屈曲線がみられ、胴部外面の下半部にヨコ方向の細かいハケ目がうかがえる。(36)は僅かに張った胴部から、ほぼ直立する口頸部にいたり、口縁端部は丸い。外面の調査は不明であるが、内面は粘土ひもの継ぎ目があり、その間を指押さえ跡が連続してついている。中型の甕である。

竪穴住居跡VI

竪穴住居跡VIは住居跡群I～Vの調査区北西方向A-2区にあり、一段高くなった段丘地山層黄色細砂層を切り込んだ状態で検出された。

規模は南北2.0m以上、東西3.5m、深さ25cmの方形竪穴住居跡になるものと考えられ、住居跡内の堆積土は暗茶褐色土であった。

住居跡内の遺構として、北辺の中央に幅55cm、長さ140cmの炭・焼土が堆積したかまどを有しこの両側から周壁溝は幅10～20cm、深さ5～10cmでめぐっていた。支柱穴を入念に精査したが検出できず、土壌もなかった。

平井遺跡

この住居跡内からの出土遺物は、かまど付近で甕の破片が出土したが、図示しえるものではなく、土師器片が出土したにとどまった。

竪穴住居跡Ⅶ

竪穴住居跡Ⅶは調査北東部の段丘上Z-12区に位置し、段丘地山である黄色細砂層を切り込んでいた。

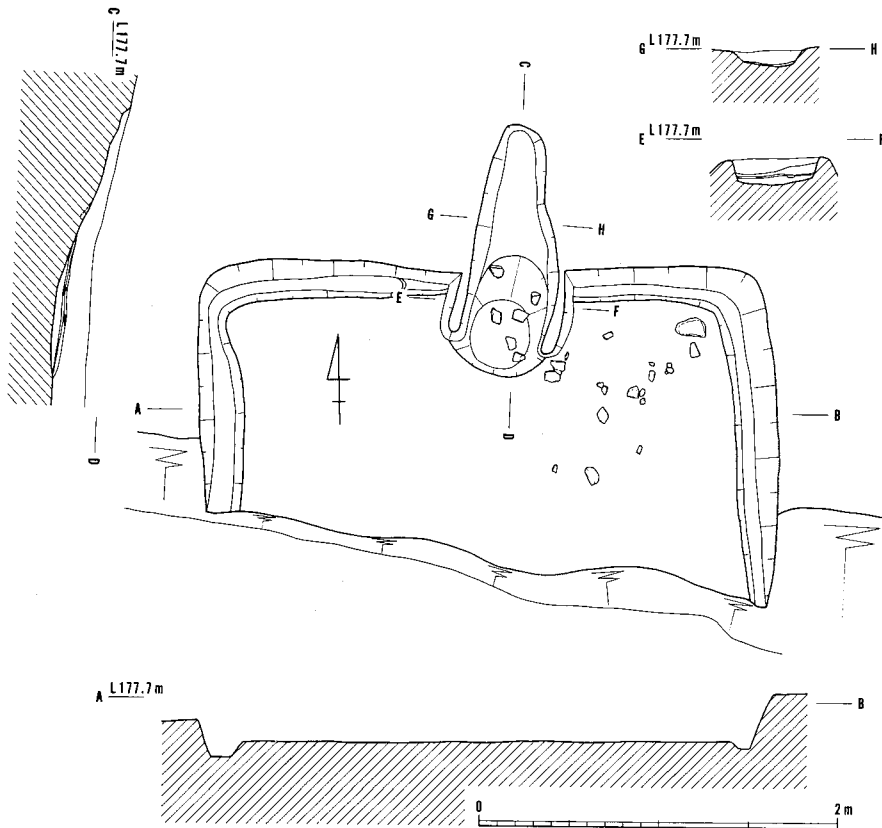
規模は残存部で南北3.1m、東西5.5m、深さ25cmの方形竪穴住居跡である。住居跡内の遺構は主柱穴と考えられるものや、土壙が存在したが、上層の中・近世遺構の影響が大きく、土壙も複雑で、この住居跡に伴うものがどれであるか決め手に欠ける。

この住居跡からの遺構は僅かに須恵器片・土師器片が出土したのみで図示しえるものはなかった。

掘立柱建物跡Ⅰ

掘立柱建物跡Ⅰは調査区東方付近のD-5区、竪穴住居跡Ⅰ～Ⅴを切っており、Ⅵ層上面で検出された。

規模は南北の桁行3間、東西の梁行3間、(4.4m×5.5m)で床面積はおよそ25㎡の南北



第36図 竪穴住居Ⅵ

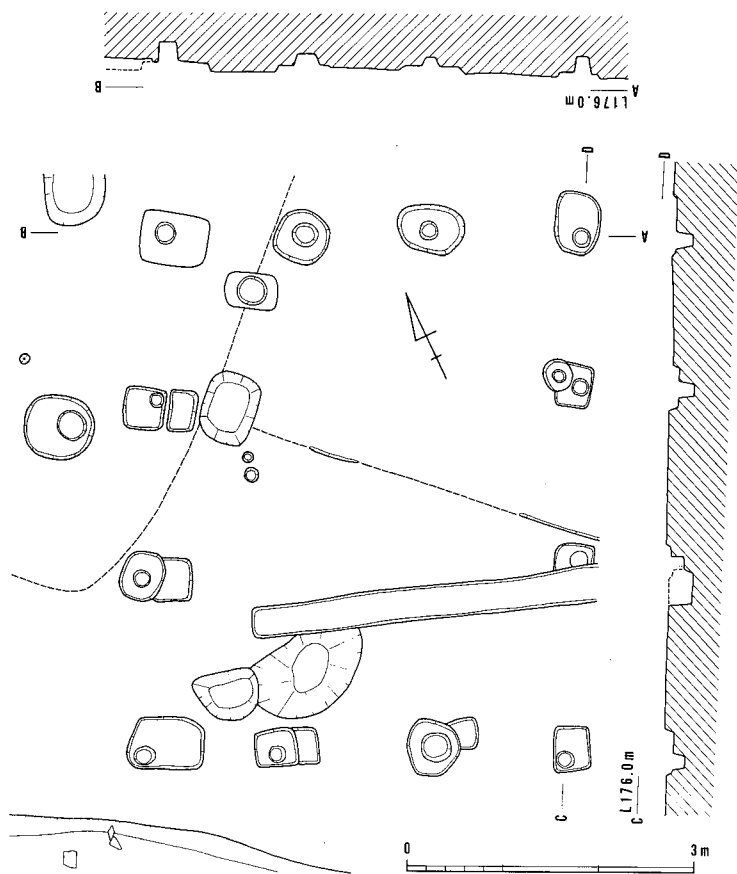
棟側柱建物である。桁行の柱間寸法は1.55m～2.1mと長く、梁行は1.35m～1.7mと短く、長方形を呈している。各柱の掘り方は50cm～70cmの円或は方形のもので、柱痕の直径は15cm～20cmである。検出面からの柱の深さは20cm～30cm程度で残存状態はあまり良くなかったが、明らかな建て替え等が判るものではなかった。

出土遺物としては柱穴の掘り方内から僅かに土師器片、須恵器片が出土したのみで、とても時期判定しうる資料ではなかった。

掘立柱建物跡II

掘立柱建物跡IIは調査区東端のD-6区にあり、掘立柱建物跡Iの東方4.5mに隣接している。この建物跡もVI層上面で検出された。

規模は東西の桁行4間、南北の梁行3間(6.3m～5.3m)で、床面積はおよそ33㎡の東西棟の総柱建物である。桁行の柱間寸法は1.45m～1.7mで、梁行の柱間寸法は1.5m～1.95mと長く長方形を呈している。各柱の掘り方は一辺40cm程度の方形を呈し、柱痕は15cm～25cmのものである。検出面からの柱の深さは15cm～30cmで深さは均一ではなかった。



第37図 掘立柱建物I

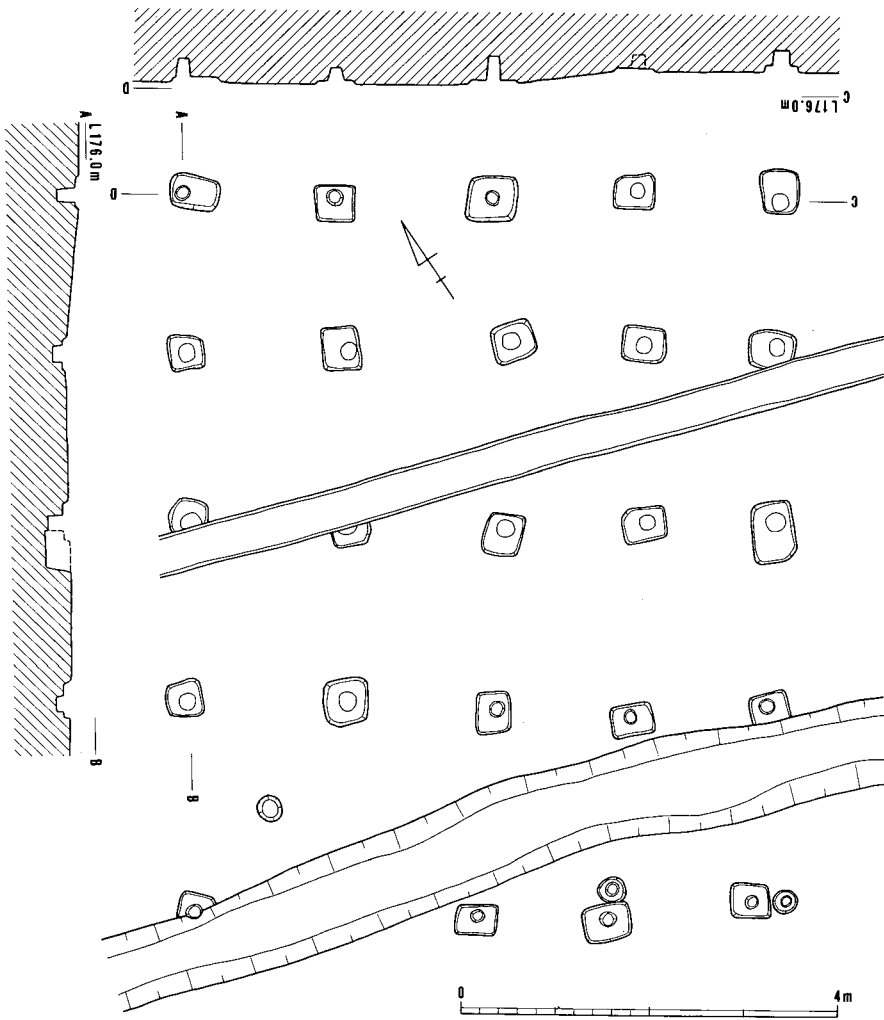
この建物跡も建て替え等の痕跡はなかったが、南方に東西方向の柱列が確認できたが、柱間が長くなり、柱穴の深さも異なることからこの建物とは別個のものと考えた。

出土遺物としては柱穴から土師器・須恵器片が若干出土したものの、時期を押しさえる資料はなかった。

掘立柱建物跡III

掘立柱建物跡IIIは調査区東部のB-6区にある。

規模は東西の桁行



第38図 掘立柱建物 II

5間、南北の梁行3間、(8.0m×4.4m)で東西棟の建物と考えられるが、南東部分の柱穴が検出できなかったことや、北西隅が直角にならないことがあるが、柱穴の並びなどから前述の規模を考えた。

出土遺物は土師器・須恵器片が出土したのみで時期は不明である。

溝 I

溝 I は南側の調査区の竪穴住居跡 I ~ V の北側に東西方向に掘られたものである。

規模は、溝幅約70cm、深さ50cm前後で、全長40cm以上のもので西端は住居IVの西側で途切れているが、東はまだ続いている。

出土遺物としては須恵器・土師器片が少量出土したにとどまった。

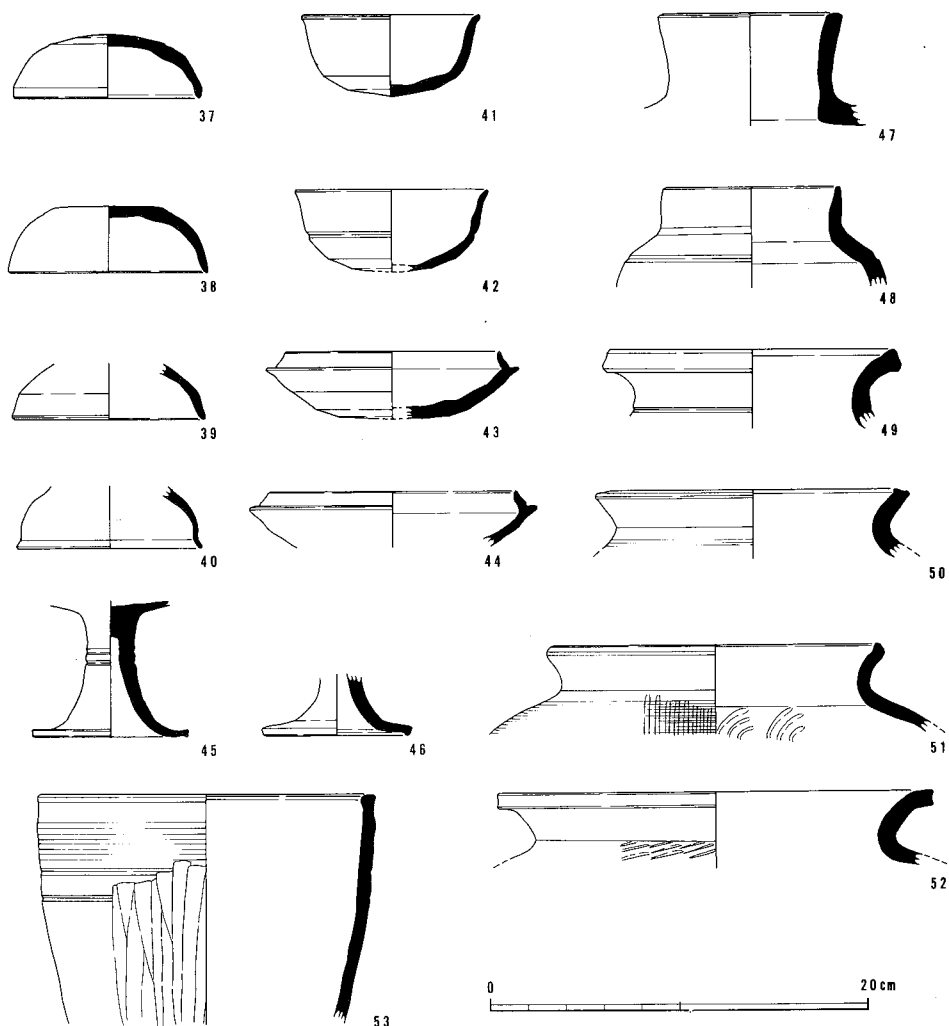
溝II

溝IIは南側調査区の竪穴住居跡I～Vの南側に沿った東西方向に検出されたものである。規模は溝幅80～100cm、深さ約60cmで平面的には60m確認したがまだ東・西方向に延長している状態である。ただ西方に行くにしたがい溝幅が狭くなり、深さも浅くなりつつある。

溝は黒色シルト質極細砂層が堆積しており、滞水していたように思われる。

遺物 溝IIからの出土遺物は須恵器の坏蓋・坏身・高坏・壺・甕などが出土した。特に溝上層から金環1点が出土した。

須恵器坏蓋には、全体が丸く、天井部と体部を分ける稜線がなく、口縁端部内側に僅かな稜線が入るもの(37・38)がある。この他天井部と体部を分ける稜が僅かにあり、体部から口縁にかけ外方に開くもの(39)がある。また口縁端部が外反するもの(40)がある。



第39図 溝II出土土器

坏身では底部から口縁にかけて開きぎみのもの(41・42)や、短く斜め上方にたちあがりがあるもの(43・44)がある。高坏は脚端部にかけて大きく開き、端部が外方に踏んばるもの(45・46)が出土した。甗(53)は口縁から胴部の資料で、口縁付近はヨコ方向の直線文と浅いへら状工具の沈線があり、口縁上端は平坦である。壺(47)は頸部が長く直口壺に、(48)は短頸壺になろう。甕には、小型で頸部から口縁にかけてなだらかなもの(49)や口頸部に屈曲をもつもの(50)がある。中型のものでは口頸部がゆるやかなもの(51)や屈曲部をもち、端部が鋭いもの(50)と種々のものがある。

金環(135)は直径14mmあり、この種の耳環としては小型のものである。

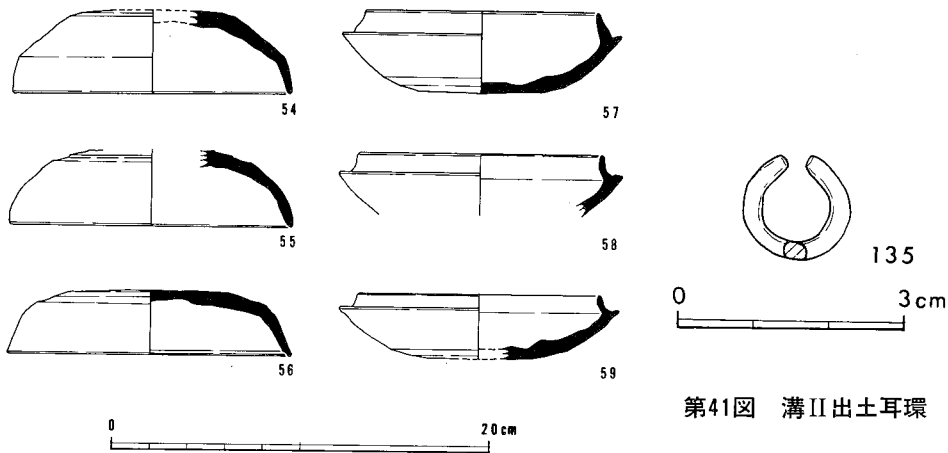
溝III

溝IIIは南側調査区西端付近で東西方向に検出されたもので、溝IIの北3mに併行している。

規模は溝幅約1m、深さ40cmで東端は住居跡IVの西方5mで途切れているが西側は調査区外に延びている。まだ溝Iと方向が同一でしかも、住居跡群の北辺を流れているため、同一の溝であることも考えたが、相互の近接した端部がずれることから別個の溝である。

遺物 溝IIIからの遺物としては須恵器の坏蓋・坏身・甕胴部などが出土した。

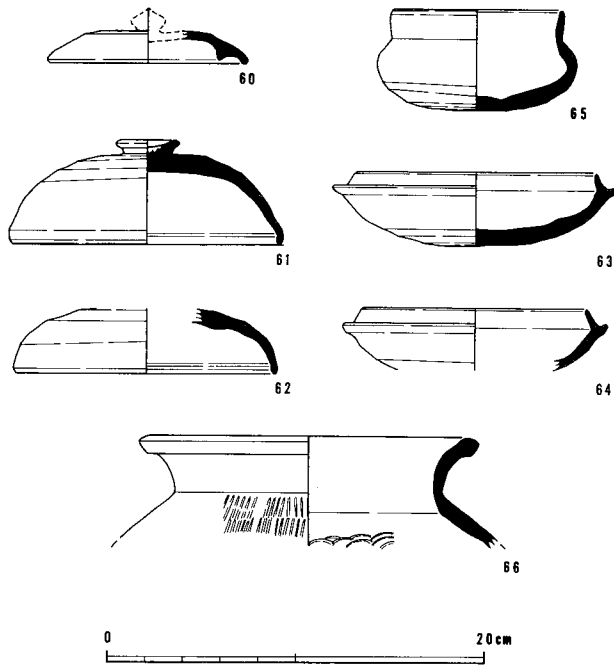
須恵器の坏蓋(54~56)はいずれも扁平な感じで、やや大型である。この中には天井部と胴部を分ける稜をもつもの(54)や、口縁端部内面に稜をもつもの(56)がある。坏身(57~59)がある。(57)は口縁のたちあがり斜め上方に大きくあり、他に比べて器高が高い。(58・59)はたちあがりも短く、扁平なものである。



第41図 溝II出土耳環

第40図 溝III出土土器

包含層出土の遺物 平井遺跡の包含層出土遺物のうち、古墳時代のものを選別して掲載した。この中には須恵器・土師器のあらゆる器種があるが、形態が判明したもののみ図化した。



第42図 包含層出土土器

もので、下半にヘラケズリがみられるものである。

甕(66)は頸部胴間に屈曲部をもち、口縁へは大きく開きぎみで、端部は肥厚させている。胴部へも大きく開き、タテ方向の平行叩き目を有し、内面は青海波叩き目文を残すものである。
(深井)

5. 中・近世の遺物

平井遺跡ではIV層包含層中及び北調査区の流路中より中・近世の遺物が出土している。

これらの遺物は、大部分が遺構には伴わず、遺構とは遊離した形で出土している。したがってここでは、通常、消費地出土の遺物を取り扱うに際して通用いられている方法、則ち、遺構に伴う一括遺物を取りあげ、そのセット関係から相対的な前後関係を論ずるという方法は事実上とりえない。今回の報告では、出土した遺物を種類別にとりあげ、その概要を述べ、他地域での類例との比較からその所属時期について若干触れるにとどめたい。

(1) 中世の遺物の概要

本遺跡で出土した中世の遺物には、土師器、瓦器、須恵器、丹波系陶器、白磁がある。

土師器 (第43図67~92・第44図93~98)

土師器には、羽釜、埴、坏、埴、皿がある。第43図67~71は羽釜である。67は口径32.7cm、鏝径41.4cmを測る大型で厚手の器形を呈する。口縁部は若干内傾しながら立ち上がり、口縁部外面にはヨコナデによる凹部が認められる。体部内外面ともロクロナデ調整が施さ

坏蓋(60)は口縁端部にかえりをもつもので、天井部にはつまみが存在するものであろう。(61)は天井部の上端につまみを有し、大きく彎曲する体部からやや屈曲する口縁端部にいたるものである。

(62)は扁平で、全体的に丸みをもつものである。

坏身(63・64)はいずれも、たちあがりは短く斜め上方に張りだすもので、底部のヘラケズリの範囲も狭い。埴(65)は短く直立する口縁で、僅かに端部は内側に屈曲する。体部から底部にかけては扁平な

れる。68、69、70、71は口縁部がやや内傾し、口縁部直下に低い断面三角形の突帯状の鐙をもつ。調整技法は、口縁部内外面にロクロナデ調整が施される。体部外面は未調整で右上りの平行叩目が認められる。68は口径20.8cm、69は口径18.4cm、70は口径23.0cm、71は口径18.4cm、72は埴形土器である。内彎気味に立ち上がる体部をもち、口縁部は「く」の字状に外反する。調整技法は、口縁部内外面はヨコナデ調整が施され、さらに口縁部外面は強くヨコナデされ、2条の凹線が認められる。体部外面は未調整で右上りの平行叩目が残る。口径19.6cm。73は平底で体部が外方へ直線的に立ち上がる坏である。調整技法は、内外面共ヨコナデ調整を施す。口径14.4cm、器高3.6cm。74は平底で、体部が外上方に開く埴形土器である。調整技法は体部内外面共ロクロナデ調整が施され、底部には糸切痕が認められる。口径15.0cm、底径6.0cm、器高4.0cm。75~81は皿である。皿はロクロ使用のもの(70~81)とロクロ未使用のもの(75)とがある。ロクロ使用のものには平底のもの(76、78、79、81)と若干あげ底風のもの(77、80)がある。ロクロ未使用のもの(75)は体部内面及び口縁部内外面にヨコナデ調整が認められる以外は外面の底部から体部にかけては未調整である。ロクロ使用のものは、体部内外面共ロクロナデ調整が施され、底部外面には糸切り痕が認められる。75は口径9.9cm、底径5.0cm、器高2.1cm、76は口径8.9cm、底径6.0cm、器高1.55cm、77は口径9.6cm、底径5.7cm、器高1.9cm、78は口径9.0cm、底径6.5cm、器高1.4cm、79は口径7.8cm、底径5.0cm、器高1.3cm、80は口径7.2cm、底径6.0cm、器高1.0cm、81は口径7.7cm、底径6.5cm、器高1.0cm。82は埴形土器である。平底で体部が内彎気味に立ち上がり、口縁端部は丸く収まる。調整技法は器面が磨滅している為明らかでないが、口縁部内外面にはヨコナデ調整が施されている。口径8.8cm、底径4.0cm、器高3.0cm。

瓦器 (第43図83~92・第44図99・100)

瓦器には埴 (83~90、93~98)、皿 (91、92、99、100) がある。83は、断面逆台形の高台をもち、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁部は外方に開く。調整技法は、口縁部外面にナデによる2段の稜が認められる。体部内外面には細かい分割ミガキが、底部内面には横方向のミガキの後、ハケ調整が加えられる。口径14.3cm、底径6.5cm、器高4.85cm。84は体部が内彎気味に立ち上がる。調整技法は、口縁部外面にはヨコ方向のミガキが、体部内外面には右上がりの粗い分割ミガキが施される。口縁部内面には型造りの際出来たと思われる沈線が1条認められる。86は断面逆台形の高台をもち、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法は、口縁部外面にナデ調整による1段の稜が認められる。体部外面にはヨコ方向のミガキが、体部内面にもミガキが加えられる。87は口縁部外面に面取りの稜が認められる。89は断面三角形を呈する高台をもち、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。調整技法は口縁部外面にナデによる1段の稜が見

られる。体部外面及び内面の底部から体部にかけて粗いミガキが加えられる。また底部内面には暗文が見られる。90は断面逆台形の高台をもち、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法は、口縁部外面にナデによる1段の稜をもつ。体部外面にはミガキが体部内面には細かいミガキが加えられる。84は口径16.0cm、86は口径16.1cm、底径5.7cm、器高6.2cm。87は口径18.0cm、89は口径16.1cm、底径6.2cm、器高5.4cm。93は内彎する体部をもつ。調整技法は口縁部外面にナデによる1段の稜を形成する。体部外面には粗いミガキが、体部内面にもミガキが加えられる。口径18.0cm、94は断面逆台形を呈する高台をもち、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法は口縁部外面に、ナデによる1段の稜をもつ。体部外面にはヨコ方向のミガキが、体部内面には細かいミガキが加えられる。口径16.4cm、底径7.4cm、器高5.6cm。95は内彎気味に立ち上る体部をもつ。調整技法は口縁部外面にナデ調整によって稜がつくられる。体部外面下半部は未調整で、指頭圧痕が残る。口縁部内面には型造りの際生じたと思われる沈線が1条認められる。口径15.4cm、96は断面逆台形を呈する体部をもち口縁端部は丸く収まる。調整技法は口縁部外面にナデ調整による1段の稜が認められる。体部外面にはヨコ方向のミガキが体部内面には、細かいミガキが加えられる。口径15.0cm、底径5.6cm、器高6.0cm。97は断面三角形の高台をもち、体部は内彎気味に立ち上る。口縁端部は丸く収まる。調整技法は口縁部外面にナデによる稜が形成される。体部外面には粗いミガキが、内面の底部から体部にかけては、ミガキが加えられる。口縁部内面には、型造り成形による1条の沈線が認められる。口径16.0cm、底径7.0cm、器高5.85cm。98は口縁部が内彎気味に立ち上がり口縁端部は丸く収まる。調整技法は口縁部外面にナデによる2段の稜が認められる。体部外面には分割ミガキが、体部内面には横方向の細かいミガキが加えられる。口径18.0cm。91、92、99、100は皿である。91は、体部内外面とも細かいミガキが加えられる。ミガキの方向はヨコ方向のミガキの後、タテ方向のミガキが加えられる。口径10.2cm、器高2.0cm。92は体部外面には横方向の粗いミガキが加えられるが、底部外面は未調整で、指オサエ痕が認められる。底部内面には縦方向のミガキが加えられる。

須恵器（第44図101～121）

須恵器には壺、坏、皿、甕、鉢がある。101～108は壺である。101は平底高台で、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナデ調整で高台部外面の再調整は認められない。底部の切り離し技法は糸切りである。口径15.5cm、底径6.1cm、器高5.3cm。102は平底高台で体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナデ調整で高台部外面の再調整は認められない。底部の切り離し技法は糸切りである。

103は平底高台で体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法はロク

ロナテ調整で高台部外面の再調整は認められない。底部の切り離し技法は糸切りである。

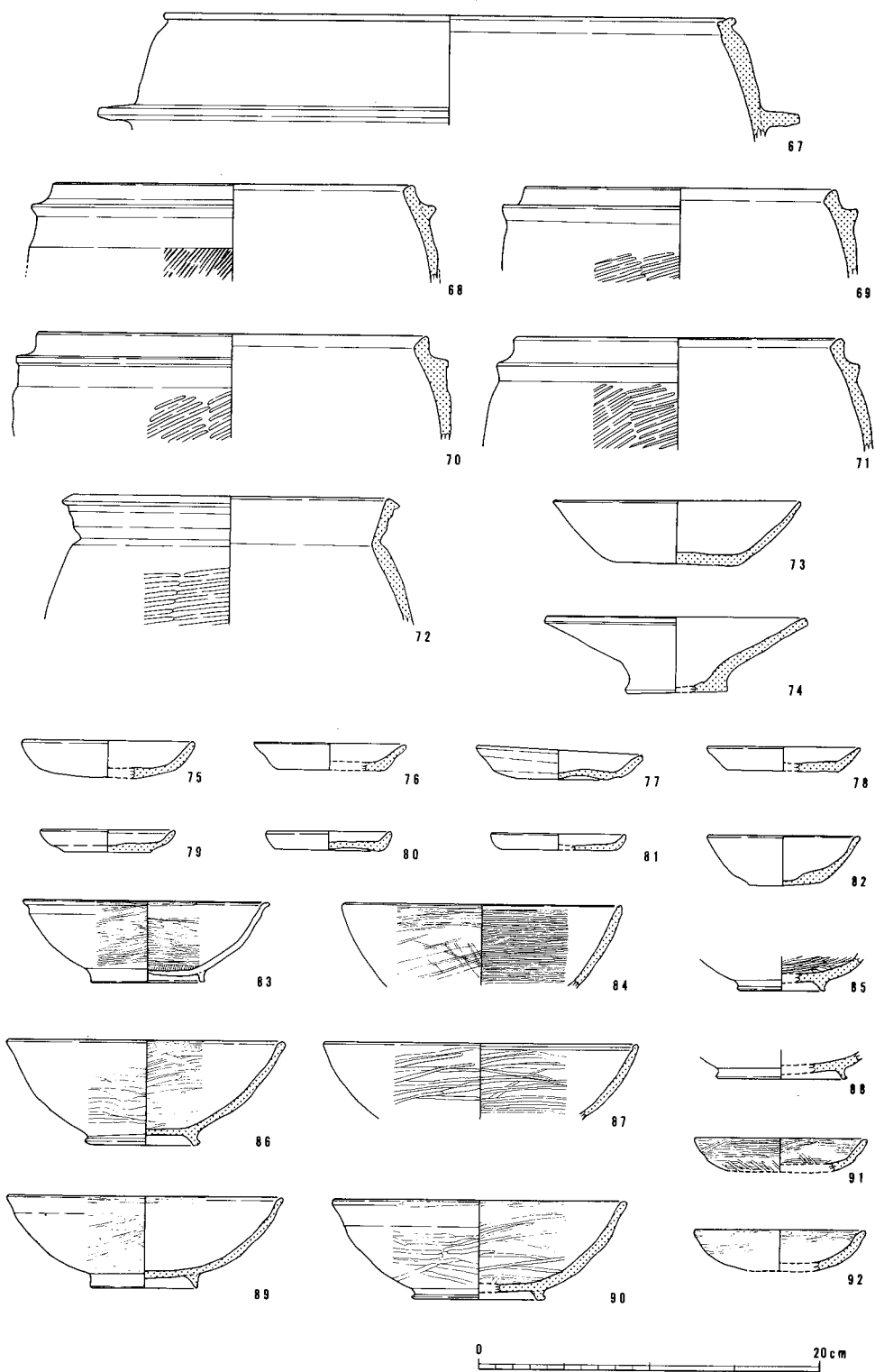
口径15.1cm、底径5.0cm、器高5.2cm。104は平底で体部は内彎気味に立ち上がり口縁端部は丸く収まる。内外面ともロクロナテ調整されており、底部の切り離し技法は糸切りである。口径14.4cm、底径6.0cm、器高4.6cm。105は平底高台で、体部はやや内彎気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に収まる。調整技法はロクロナテ調整で、高台部外面には再調整が加えられる。底部の切り離し技法はへら切りである。口径13.7cm、底径7.7cm、器高4.5cm。106は平底で体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナテ調整で底部の切り離し技法は糸切りである。口径16.8cm、底径6.0cm、器高5.3cm。107は平底高台で、体部は内彎気味に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナテ調整で、高台部外面の再調整は認められない。底部の切り離し技法は糸切りである。口径16.2cm、底径15.0cm、器高5.2cm。108は平底で、体部はほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収まる。調整技法はロクロナテ調整で、底部の切り離し技法は糸切りである。口径16.6cm、底径12.8cm、器高4.5cm、109は内外面共ロクロナテ調整を施す。口径17.2cm。110は坏である。平底で体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に収まる。調整技法はロクロナテ調整で底部の切り離し技法はへら切りである。口径14.8cm、底径10.4cm、器高3.0cm。111～118は皿である。全てロクロ成形されており、内外面共ロクロナテ調整が施される。底部の切り離し技法は糸切りである。形態的には体部が内彎気味に立ち上がるもの（111、112、113）と直線的に立ち上がるもの（114～118）とがある。111は口径7.8cm、器高1.5cm、112は口径8.8cm、器高1.45cm、113は口径8.8cm、器高1.9cm。114は口径8.6cm、器高1.5cm。115は口径8.7cm、器高1.4cm、116は口径7.5cm、器高1.2cm。117は口径8.8cm、器高1.9cm。118は口径8.6cm、器高2.3cm。119は甕である。口縁部は「く」の字状に外反し口縁端部は上方につまみ上げる。体部外面には縦方向の平行叩き目が残る。口径20.4cm。120、121は鉢である。120は体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は上方につまみ上げる。内外面ともロクロナテ調整を施す。口径23.4cm。121は直線的に立ち上がる体部をもち口縁端部は上下に拡張する。調整技法は内外面共ロクロナテ調整を施す。口径34cm。

丹波系陶器（第45図122～128）

丹波系陶器には鉢（122）と甕（123～128）がある。122は鉢である。直線的に外上方へ立ち上がる体部をもち口縁端部は上下に拡張する。口径29.6cm。123～128は甕の口縁部である。123、124、125は口縁部を外方に折り曲げ、端部を下方に拡張するいわゆる「N」字状口縁を呈する。126は、口縁部を外方に折り曲げ、端部は上方に引き上げる。127、128は、口縁部は外反し、口縁部内面には1条の沈線が施される。

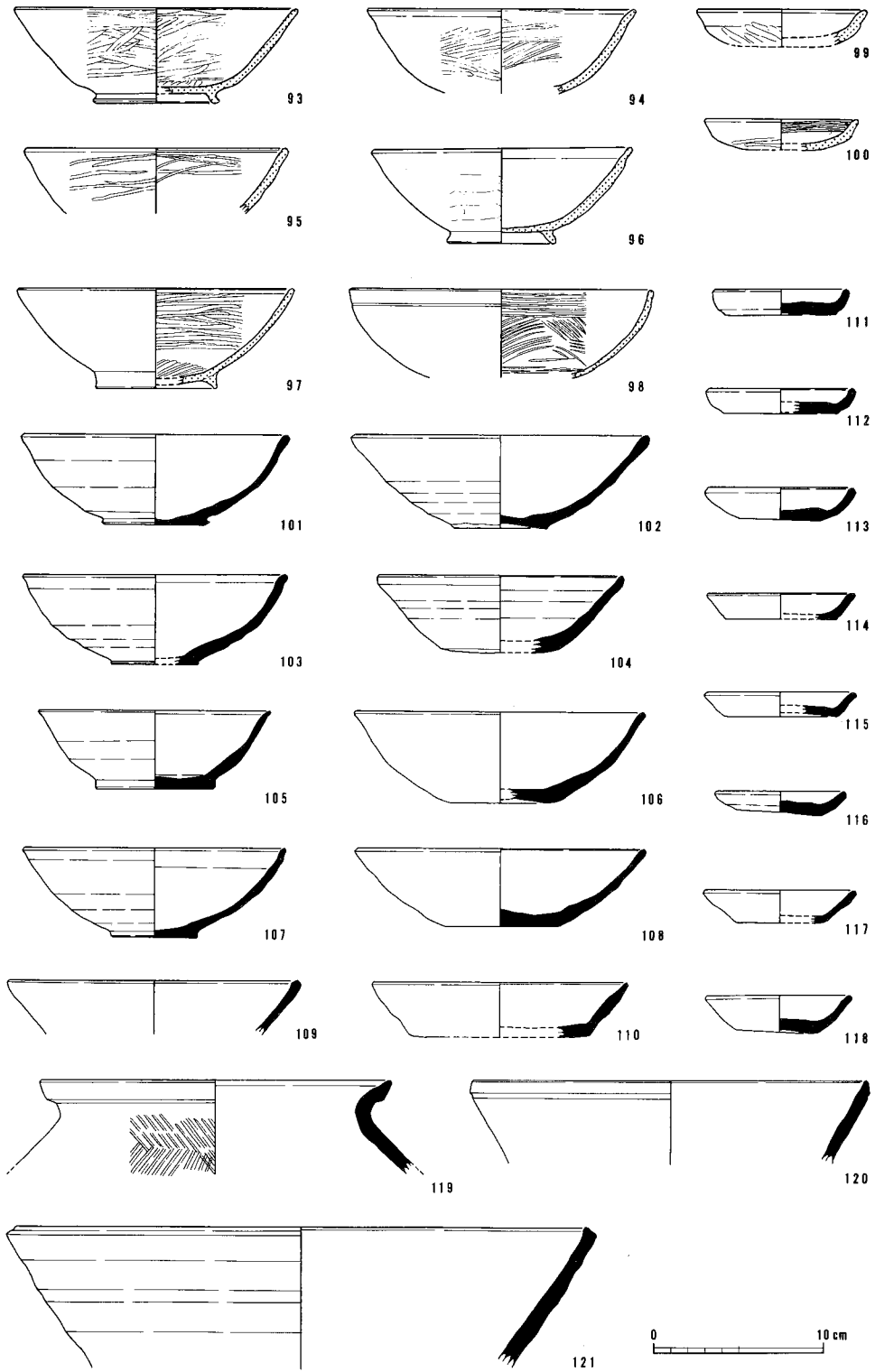
白磁（第45図129・130）

129、130は白磁埴である。129は高台は幅広で削り出しも浅い。またその結果、底部の器



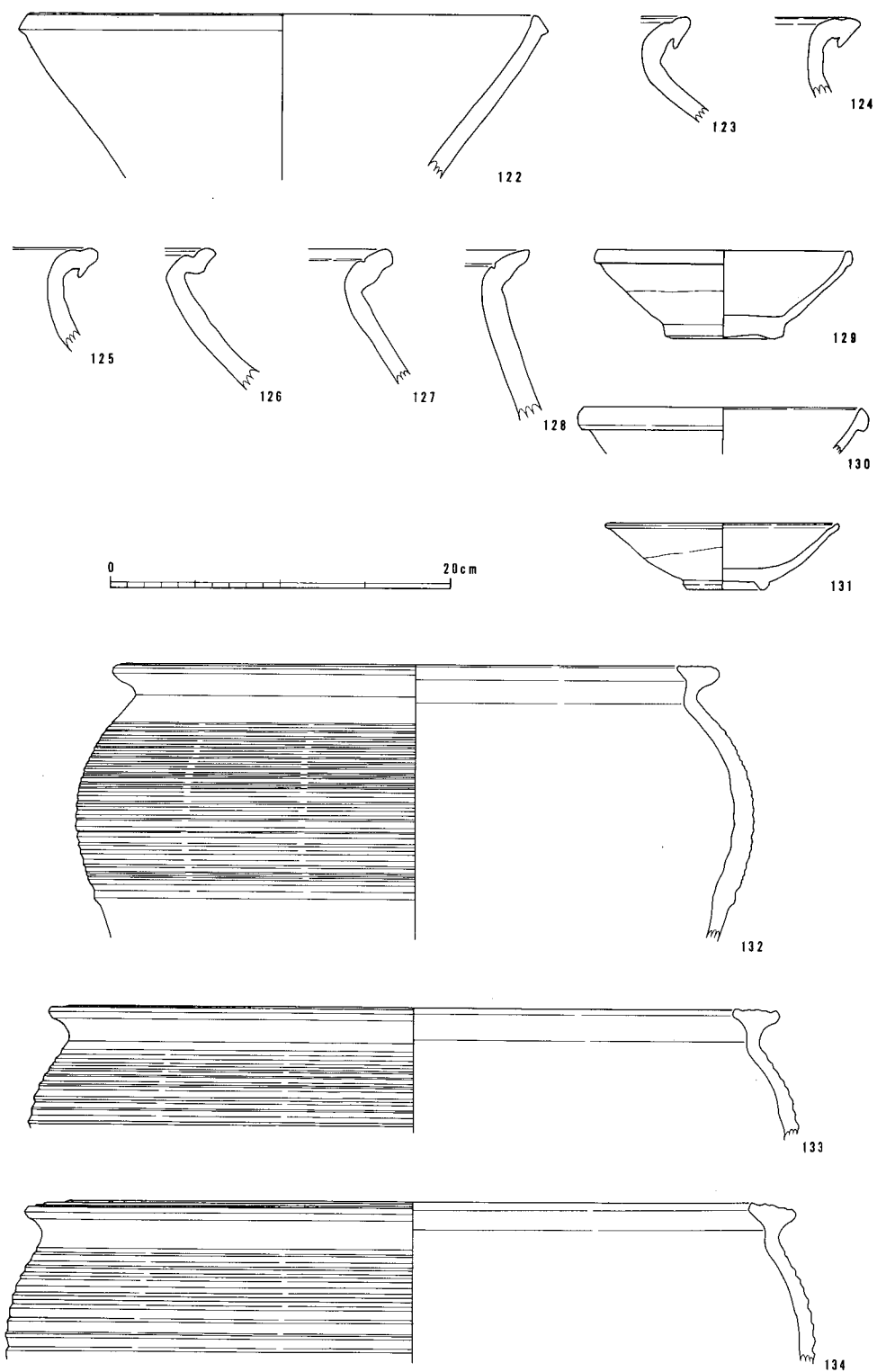
第43図 出土土器(1)

平井遺跡



第44図 出土土器(2)

平井遺跡



第45図 出土土器(3)

肉も厚くなっている。口縁部は肥厚し玉縁状を呈する。釉は、灰色を帯びた白色を呈し、外面の体部下半及び底部は露胎である。口径14.6cm、底径7.0cm、器高5.2cm。130は口縁部が玉縁状を呈する。口径16.4cm。

(2) 近世の遺物 (第45図131~134)

近世に属する遺物には施釉陶器皿及び丹波系無釉陶器の甕がある。131は施釉陶器の皿である。幅広の比較的浅く削り出す高台をもち、体部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収まり、口縁部内面には一段の凹部をもつ。釉は淡黄緑色を呈し、内面及び体部外面に施釉するが、外面の体部下半及び底部は露胎となっている。口径13.8cm、底径5.0cm、器高3.8cm。132~134は丹波系無釉陶器甕である。いずれも、口縁端部は水平に内外面に拡張し、上面には4条の沈線を施す。粘土の積み上げの後、体部内面にケズリが加えられ、さらにロクロナテ調整が体部内外面に施される。体部外面の上位にはロクロの回転を利用した沈線が施され、その後外面にのみ化粧土が塗られる。132は口径31.2cm、133は口径37.8cm。134は口径40.0cm。

中近世の遺物をまとめると次のようになる。

中世の資料に関しては、その殆どが包含層中及び自然流路中より出土しており、層位的な検討を経ての時期把握はなし難くここでは、先に概要を述べた各種の遺物について、他地域での類例との比較からその所属時期について若干触れてみたい。

土師器

土師器には羽釜形土器、塀形土器、坏、埴及び小皿がある。羽釜形土器には大型で厚手の器形を呈するもの(67)と口縁部がやや内傾し、口縁直下に低い断面三角形の突帯状の鏝をもつものがある。前者は、西宮神社境内地内遺跡⁽¹⁾及び金楽寺貝塚出土のものに類例が見られ、それらの遺跡での共伴関係から12世紀後半~13世紀前半の時期が与えられる。後者は、播磨地域での類例との比較から、15世代を中心とする時期が与えられる⁽³⁾。また坏(73)にはその形態及び調整技法の特徴から、10世紀前半の時期が、埴形土器(74)には、10世紀後半から11世紀前半の時期がそれぞれ与えられる。

瓦器

今回の調査では、瓦器埴が比較的多数出土した。これらの瓦器埴は、形態及び調整技法の特徴から、外面に2段の稜をもち、分割ミガキを施すもの(A類、83、84)、外面に1段の稜をもち、外面にミガキ、内面に分割ミガキを施すもの(B類、86、89、90、93、94、96)、型造り成形によって、口縁部内面に沈線の残るもの(C類、95、97)とに分類される。時期的にはA類のものが最も古く、12世紀代に属するものと考えられる。B類は、最も出土量が多く、時期的には13世紀前半から中葉の時期が考えられる。C類は、今回出土した瓦器埴の中では、最も新しいタイプに属し、13世紀後半の時期が考えられる。

須恵器

須恵器には、埴、皿、高坏、甕、鉢がある。埴は、形態及び調整技法の特徴から、平底高台のもの（A類、101、102、103、105、107）、高台をもたないもの（B類、104、106、108）とに大別される。さらにA類は調整技法の差異から、高台部外面に再調整を施し、底部の切り離し技法がヘラ切りのもの（A-I類、105）及び、高台部外面の再調整を行わず、底部の切り離し技法が糸切りのもの（A-II類、102、103、107）とに細分される。型的には、A-I類→A-II類→B類の変遷が考えられ、A類には10世紀後半の時期が、A-I類には12世紀中頃から後半の時期が、B類には13世紀前半の時期が考えられる。坏（110）はその形態から、9世紀後半から10世紀前半の時期が与えられる。鉢（120・121）は、東播系のもと考えられ、12世紀後半～13世紀前半の時期を与えることが出来る。⁽⁴⁾

丹波系陶器

丹波系陶器には、鉢、甕がある。鉢（122）は、内面に播目は施されていないか、形態的には稲荷山タイプのもとの類似する。また、これと同様のタイプの鉢は最近調査された近舞線関係の調査で類例が認められており、これらの結果から、現在の所、15世紀代を中心とする時期を考えておきたい。

甕は、形態の特徴から、いわゆるN字状口縁を呈するもの（A類、123～125）、口縁を外方に折り曲げ端部を上方につまみ上げるもの（B類、126）口縁部が外反し、内面に沈線をもつもの（C類、127、128）に分類される。型的には、A類→B類→C類の変遷が考えられ、A類には14世紀初頭、B類には14世紀中頃、C類には14世紀後半から15世紀前半の時期が考えられる。⁽⁵⁾

白磁

白磁（129、130）は僅れも、横田、森田分類の白磁埴IV類⁽⁶⁾に属するもので、11世紀後半～13世紀前半の時期を与えることが出来る。

近世陶器

近世陶器には、皿（131）及び甕（132～134）がある。皿は丹波系のもと考えられ、18世紀後半から19世紀前半の時期が考えられる。甕は、何れも丹波系のもと考えられ、形態及び調整技法の特徴から18世紀前半～後半の時期に属するものと考えられる。⁽⁴⁾

以上見て来たように、平井遺跡では、明確な遺構は検出されなかったが、包含層及び自然流路から、12世紀後半～13世紀前半の時期を中心として、9世紀から15世紀代及び、18世紀から19世紀代の遺物が出土している。

このことから、平井遺跡周辺には、9世紀から15世紀に迄及ぶ中世遺跡及び18世紀代を中心とする近世遺跡の存在した事がうかがわれる。 (岡田章一)

註(1) 古川久雄『西宮神社境内地発掘調査報告書』1983 西宮市教育委員会

- (2) 村川行弘『金楽寺貝塚発掘調査概報』1964 尼崎市教育委員会
- (3) 山本博利・秋枝芳『加茂遺跡』 1975 姫路市教育委員会
- (4) 大村敬通・水口富夫『魚住古窯跡群』 1983 兵庫県教育委員会
- (5) 大槻伸「丹波」『世界陶磁全集』3 1977 小学館
- (6) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978
九州歴史資料館
- (7) 岡田章一・長谷川真「特別史跡姫路城跡、県立博物館建設に伴う発掘調査報告書」1983 兵庫県立
博物館

6. 小結

(1) 平井遺跡の発掘の結果、古墳時代後期～中世の遺構・遺物が検出された。

A地区、古墳時代後期の竪穴住居跡が7棟、掘立柱建物跡3棟、溝3本などが検出され、これらは建て替え或は切り合い関係からある程度の集落構成の変遷過程がうかがえる。

竪穴住居跡についてはカマドを持つ住居跡IV、持たないもの住居跡I～V・VIIがある。前者には周壁溝をめぐらすが、後者には検出されなかった。カマドをもたない住居跡I～V・VIIでは一辺が約4mのものから7.2mのものまでである。

竪穴住居跡など同時存在する集落構成のパターンは、(1) 竪穴住居跡I・II・III・IV、掘立柱建物跡I・III。(2) 竪穴住居跡V・III・IV、掘立柱建物跡II・III。(3) 竪穴住居跡II・III・IV、掘立柱建物跡I・II・III。以上の3つのパターン内では切り合いしていないことから可能性がある考えである。これらの前提条件をもとに変遷を考えてみたい。

竪穴住居跡I・V・掘立柱建物Iの3つの構造物が重なっていることから3回程度の集落変遷が考えられる。竪穴住居跡IIIは支柱穴の数からa～cの3期の建物が存在し、IVについてはa・b、2期以上の存在が予想される。

これらの基礎的な考えから、I期では竪穴住居跡I・III・IV、掘立柱建物跡II・III。II期では竪穴住居跡V・III・IV、掘立柱建物跡II・III・III期では、竪穴住居跡II・III・IV、掘立柱建物跡II・III、という集落構成の変遷の可能性が考えられるが、あくまで、各棟の廃絶期間が一定であるという条件から考えたものである。しかし溝Iと掘立柱建物跡が重複していることや、竪穴住居跡VI・VIIが北に隣接した所に立地し、A地区の溝に囲まれた集落内との関連が不明であり、建物の耐久年数や改築の程度によって集落構成も数多くのパターンが考えられる。

(2) A地区の出土遺物には田辺昭三編年のTK10(新)からTK209まで、6世紀後半～7世紀前半あたりまでの遺物が各遺構に混在しており、図示できたものの土器にも各時期のものが混在している。

平井遺跡

- (3) 古墳時代後期の集落としては畿内及びその周辺の遺跡と比べ小規模な部類に入るが、三田地方では集落構成がある程度つかめるものはなく、現在のところ、貴重な例と言える。また当時の発掘では解明されなかったが、この集団の生産地（水田）等はおそらく、南に広がる低地に存在することが、南辺に位置する杭列などから予想される。

(深井)

第2節 やぎのたに 八木ノ谷1号墳 (AW-59)

1. 位置と現状

八木ノ谷1号墳は、三田市末西字姥ヶ懐・八木ノ谷に所在する2基の円墳のひとつ、東側に位置する古墳である。古墳の所在地は、末西の北西部にあたり、青野川（武庫川の支流）右岸の丘陵（深崎山）が南に緩く張り出す山裾の斜面に立地している。古墳基底部の標高は186mで、末地域がほぼ全望出来る地点である。

周辺には、青野川を挟んで岡ノ谷古墳（横穴式石室）が存在し、さらに南側の低丘陵に4基の古墳（未調査）があり、末西古墳群とも呼称すべき群を形成している。

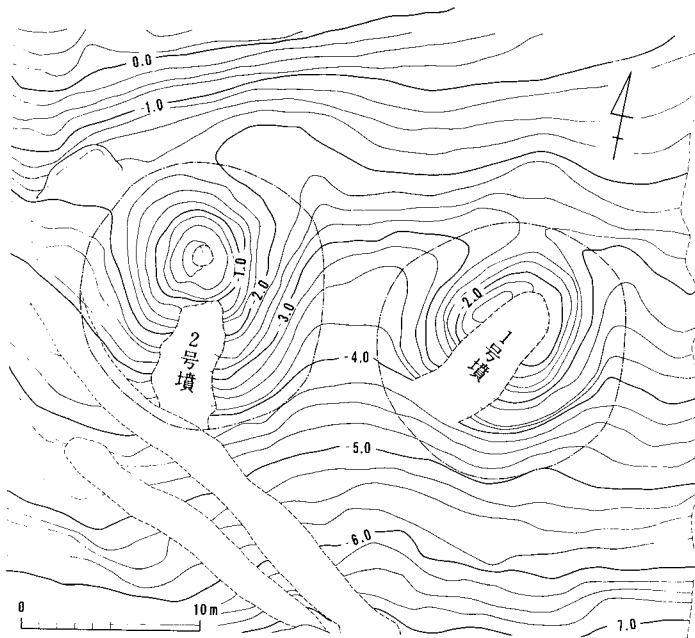
現状は雑木林で覆われているものの、墳頂部が石材の抜き取りを受けて、大きく破壊されており、石室内にかなりの流入土・石材が見られ、また石室が南西方向に開口していることも確認出来た。

さらに、斜面上方部（墳丘北側）には半月形の窪み（掘りわり）が認められ、すぐ西側には2号墳が掘りわりを接して築かれている。

2. 墳丘と外部施設

標高186m、傾斜度約20°の斜面に造られた古墳である。墳頂部から石室開口部にかけて、約3m×8mの攪乱層があり、墳丘はかなり削平されている。

平面の形態は、東西13.0m・南北13.5mを測る円墳で、現況での高さは北側（斜面上方部）



第46図 1・2号墳地形測量図（調査前）

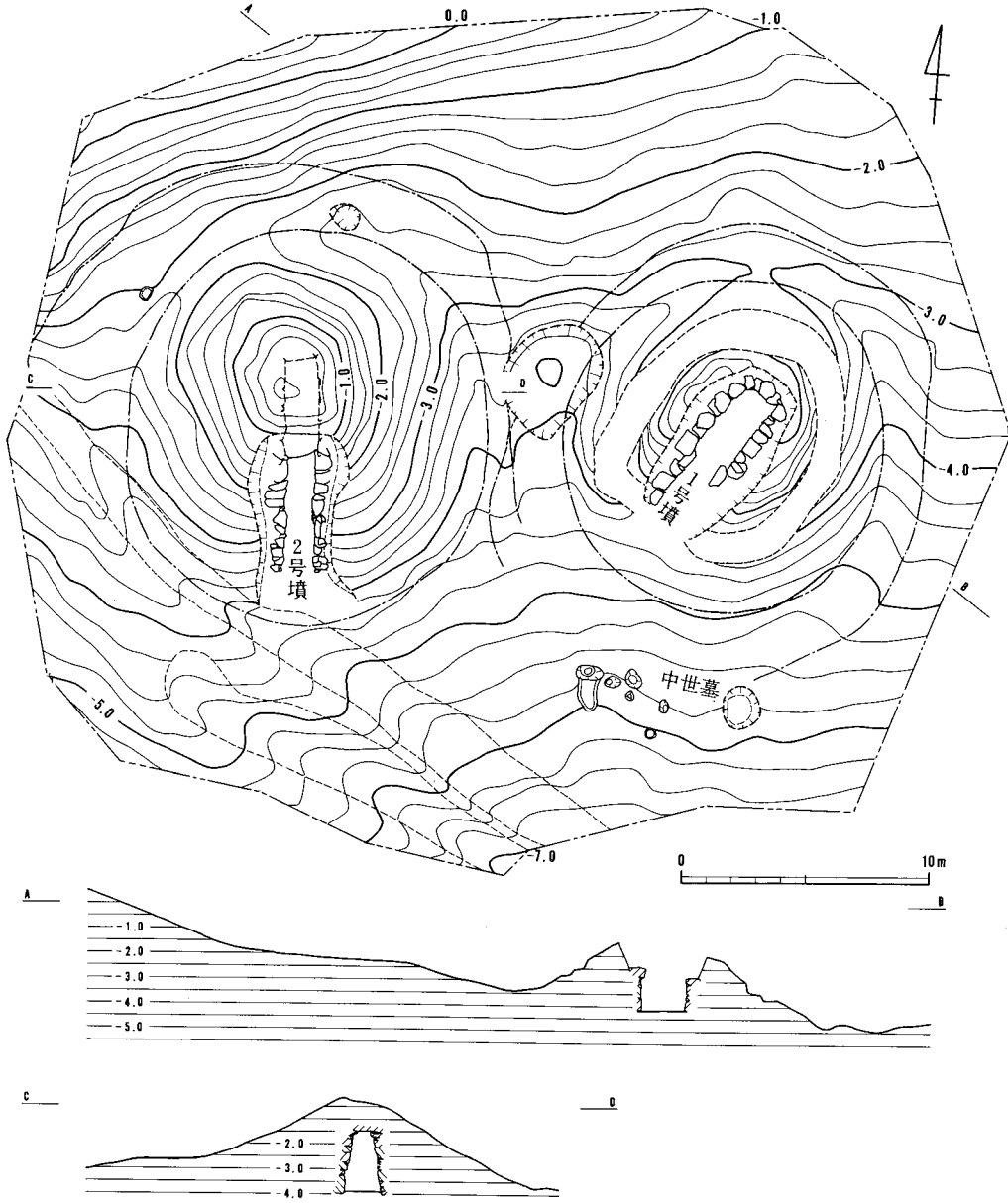
で1.5m・南側（斜面下方部）で3.0mである。また、斜面上方側に馬蹄形を呈した掘りわりをもっている。規模は、幅1.5m～2.0m・深さ0.2m～0.5mで、断面の形が皿状を呈し、溝底は墳丘北が最も高く、徐々に東西へ低くなっている。

さらに外部施設

八木ノ谷1号墳

として、墳丘の2ヶ所から列石を検出している。一つは、石室西側の墳丘中段位に位置する。長さ約9mの半楕円形を呈し、石室を囲むかのように存在し、一部2段に巡っている。もう一つは、石室東南部の墳丘中段位に認められた。長さ約2.5mの範囲にわずか4石のみであり、接合状態も雑である。

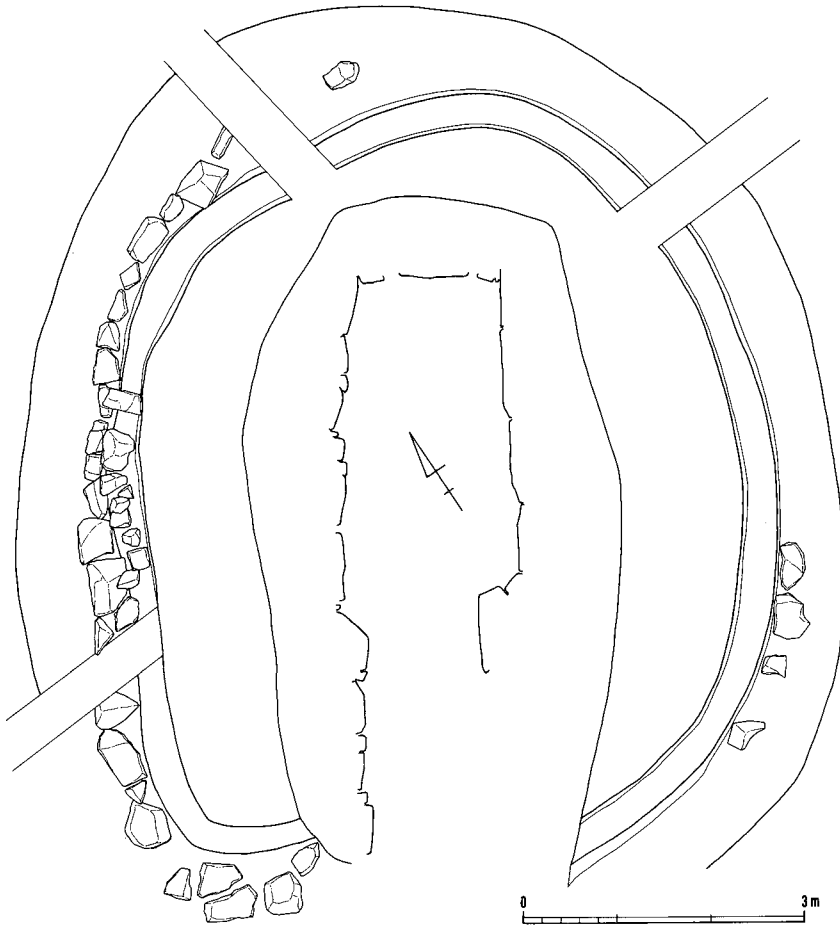
この状況からみれば、列石は本来墳丘中段位に全周する形で存在していたと推測される。なお、墳丘裾部を巡る列石はなく、この列石の性格は封土の流失を防ぐものと考えられる。



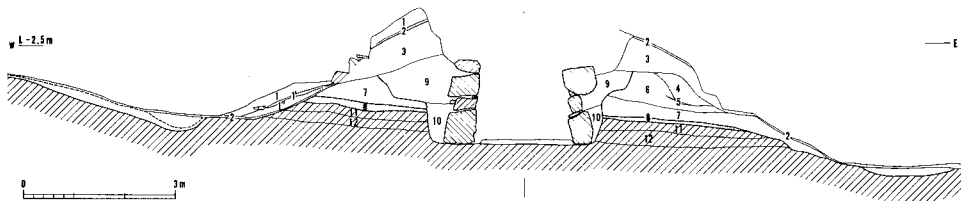
第47図 1・2号墳地形測量図（調査後）

八木ノ谷1号墳

墳丘の築造は、まず旧地表面である斜面の削り出しによる整地を行うとともに、斜面上方に馬蹄形の掘りわりを造り、土を盛っていく。その後、石室を構築しながら、その上へ黄褐色及び灰褐色の盛土を行い、さらに途中で墳丘中段位に列石も配している。なお、現存する封土の高さは墓壙底面から2.7mである。



第48図 外護列石実測図

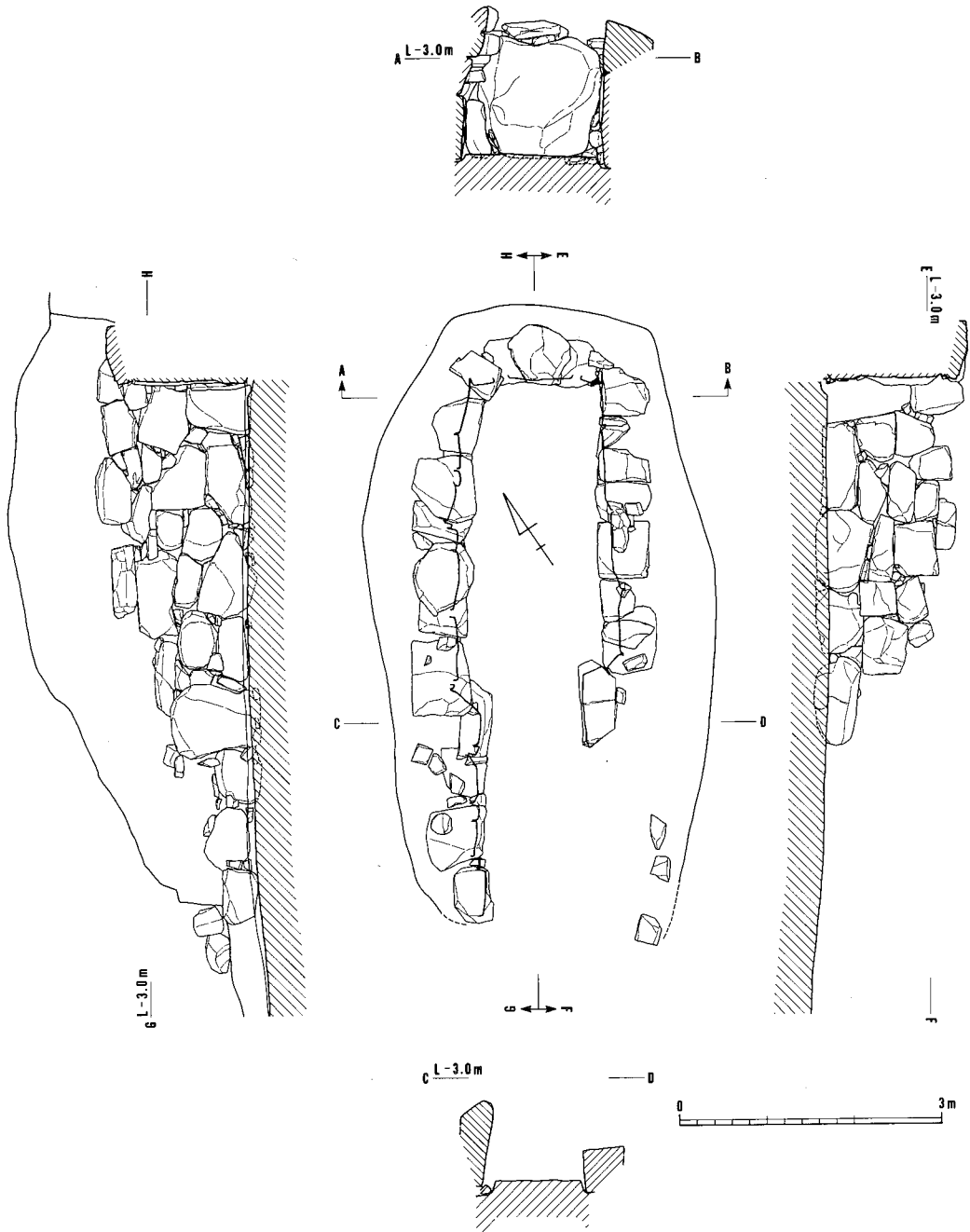


1. 1・1・1. 流土 2. 表土 3. 黄色土 4. 灰黄色土 5. 炭層 6. 淡黒灰色土
7. 褐色土 8. 灰黒色土(旧表土) 9. 淡黄褐色土 10. 淡褐色土 11. 黄褐色土 12. 赤褐色土

第49図 東西墳丘断面図

3. 埋葬施設

掘り方 墓墳の掘り方は、石室中央部東西断面で見ると盛土の中段位付近から掘りこみ、約0.5m下がったところで一度段をもち、さらに旧地表面及び地山層を約0.6m切りこんでいる。また、墳底は最下段の石を安定させるため、外周を溝状に一段深く掘り下げ、床面



第50図 石室実測図

の部分のを台状に残している。

墓壙の規模は長さ7m、幅は玄室部上段で5.0m・下段で3.5m、羨道部は3.5mを測る。

内部構造 内部主体は主軸をN35°Eにとり、南西方向に開口する両袖型の横穴式石室である。なお、後世の攪乱により、天井部・側壁上部等が破壊されている。

石室の現全長は6.0mを測る。玄室部の平面形は、玄門側が広がる長方形を呈し長さ3.4m、奥壁の幅1.5m・玄門の奥1.9mである。現存石積高は1.7mを測る。

石材の積み方は、奥壁基底部に1.3m×1.3m×0.5mの大きな一枚石を使用し、左下部を根石で支え、さらに右下空隙に小さな石を充填している。

両側壁は基底部の奥壁側石のみ縦長に使用し、他は横長に据え、その上に現状で3～4段分を若干持送り気味に積んでいる。概ね、基底部のものより小型の石材であり、特に横に目地を通すような積み方ではない。

袖石は、左側が現状で横積みとなっているが、後世の石材盗りで割られた可能性が高い。右側は縦積みであり、両石間は1.3mを測る。

羨道部は、右側壁にしか石材が残存せず、しかも基底部のみであった。現長は2.6m。

その他、床面に閉塞石は残っていない。また、石敷もなく排水施設も認められなかった。

4. 遺物の出土状況

石室内には石材及び盛土の一部が流入していたためか、遺物は比較的良好な残存状況を示し、ある程度のまとまりが認められた。

このまとまりからみると追葬が行われたことは明らかであり、とりあえずこれらの遺物を出土地点から7つの群に分けて説明してみたい。なお、墳丘及びその周辺では、若干の須恵器片が出土したのみである。

第1遺物群 玄室奥壁部に散漫と広がる一群である。坏・坏蓋等の須恵器13個体、土師器1個体、鉄器片2点がある。

この群は追葬時にとりまとめられたもののようで、須恵器は破片が多く、また重ねられたものもある。しかし、坏と坏蓋がセットの状態出土したものはない。

第2遺物群 2群は1群のすぐ南、左側壁付近の一群で、土師器甕1個体、鉄器片1点、耳環1点である。鉄片は甕の上に載った状態で出土している。なお、この南には無遺物空間があり、おそらく棺体が置かれていたのであろう。

第3遺物群 1群のすぐ南、2群と対になるような形で右側壁部に集中する一群である。坏・坏蓋・短頸壺等の須恵器4個体、砥石1点があり、(15・17)の坏・坏蓋はセットと考えられる。

こども、南の無遺物空間は棺体が置かれた地点と思われる。

第4遺物群 玄室左袖部に点在する一群である。坏・坏蓋・高坏等の須恵器11点、耳環

1点があり、そのうち須恵器では高坏が比較的多い。

この群も1群と同様、追葬時にとりまとめられたものであろう。しかし、(20・22)の坏・坏蓋はセットと考えられ、別群の可能性はある。

第5遺物群 玄室右袖部に位置する群で、須恵器坏1個体、鉄器片1点があるが、2者間の距離は0.8mあり、厳密に言えば群と呼べるものではない。

第6遺物群 羨道中央部に存在する一群であり、須恵器坏蓋1個体、耳環2点がある。

耳環がセットで出土することから、ここにも棺体があったと考えられる。

第7遺物群 石室前庭部に散在する一群である。長頸壺・横瓶等の須恵器があるが、すべて破片であった。

その他 なお、埋葬面に伴わないが、玄室及び羨道埋土中にも、短頸壺・壺蓋等の須恵器がある。

5. 遺物

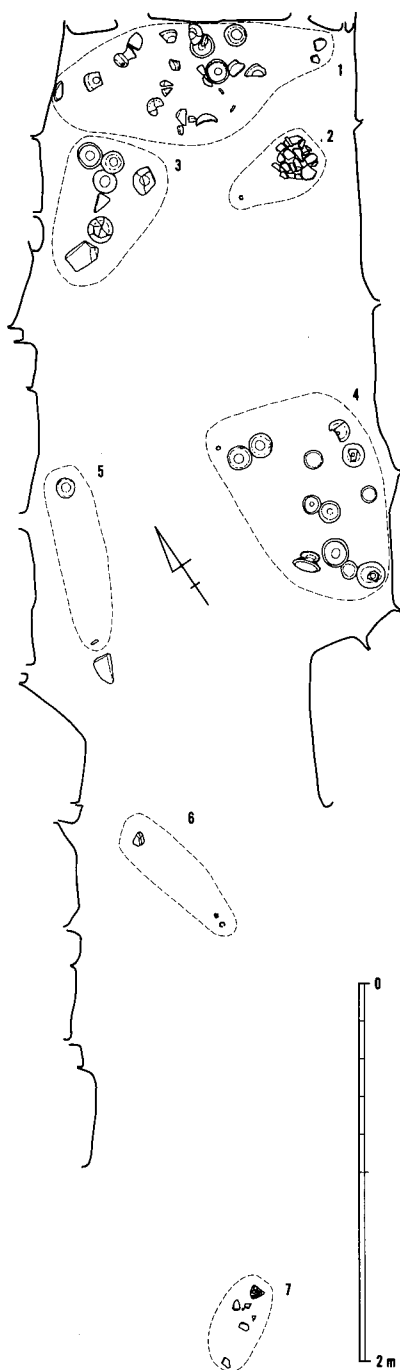
遺物は、前記のように出土状況から7つの群に分けることができた。ここでは、その内須恵器のみ群ごとに記述し、他の遺物は少数であるから器種別に一括で説明する。

(1) 須恵器

第1遺物群 坏蓋9・坏3・甕1 (第52図)

坏蓋は全体に丸みをもった器形で、口縁部は外方に張り出すタイプのもが多く、端部は丸くおさめている。ヘラ削りは天井部のみで、(1・2・6)のようにヘラ切り未調整のものもある。焼成は良好で色調は灰色ないし青灰色。口径は10.2cm~13.2cmと小型である。器高は3.4cm~4.2cmを測る。

坏身の受部は外上方にのび、立ち上がりは短く、内傾度が強い。受部・口縁とも端部は丸く



第51図 遺物出土状況

おさめる。底部は(10)がへら削り、他はへら切りの後雑なナデ仕上げを施す。焼成は良好で、色調は灰色ないし青灰色。口径9.6cm~10.7cm。器高3.6cm~3.75cm。

甕の口頸部は外彎気味に上外方に立ち上り。3/4上方で断面三角形の凸帯を有し、更にやや内彎気味に立ち上がる。体部は若干扁平で肩部に一条の凹線をめぐらし凹線直下に円形透しをもつ。

第3遺物群 坏蓋1・坏身3・短頸壺1 (第52図)

坏蓋は扁平気味の器形で天井部は平らである。口縁部は外方に張り出し、端部は丸くおさめる。

坏身は立ち上がりが短く内傾する。受部は外上方にのびる。口縁・受部とも端部は丸くおさめる。底部はへら切りで、内面は仕上げナデを施す。焼成は良好で、色調は青灰色。口径10cm~11cm。器高3.5cm~3.75cm。

短頸壺は体部が球形に近く、最大径は器高の中間よりやや上位にあり、ここに浅い沈線がめぐる。口頸部は直立し、口縁端部は丸くおさめる。底部は外面をへら削りするが、器壁は厚い。口径5.6cm。腹径10.45cm。器高9.75cm。

第4遺物群 坏蓋2・坏身1・壺蓋3・坏1・高坏3 (第53図)

坏蓋の体部は丸い。口縁部は外方に張り出し、端部は丸くおさめる。天井部はへら切りで、(21)は未調整である。焼成は良好で、色調は青灰色。口径10.4cm~11.85cm、器高3.7cm~4cm。

坏身の受部は外上方にのび、立ち上りは短く内傾度が強い。受部・口縁とも端部は丸くおさめ、立ち上がりとの境には凹線が認められる。底部はへら切りで未調整である。焼成は良好で、青灰色を呈す。口径10.4cm、器高3.5cm。

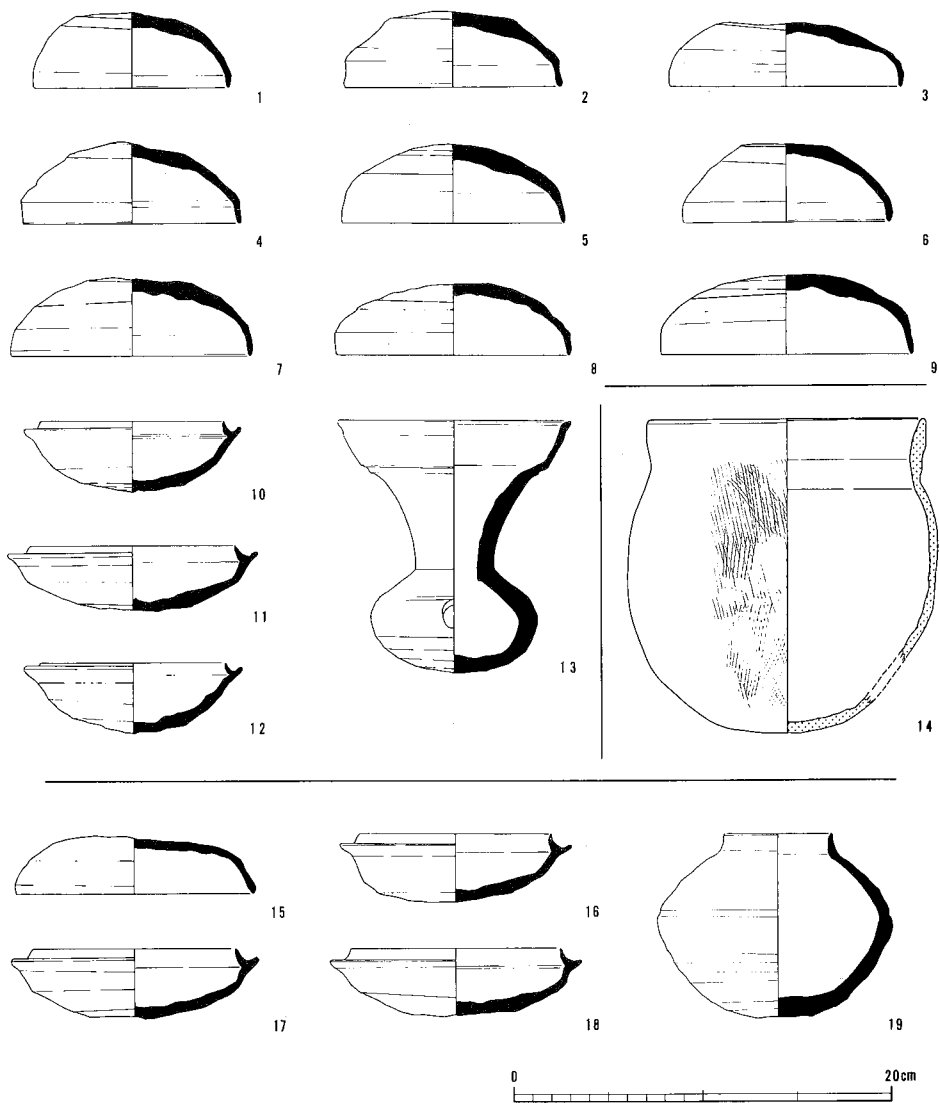
高坏は全て短脚の有蓋タイプで透かしはもたない。脚は、甕の口縁部を逆さに着けた形態で、外反した後、段をもち端部を高く外方に踏ん張るもの、(24・25)と、大きく外反し端部を低く外側に着地させるもの(26)に分かれる。坏部は前述坏身と同様のタイプであるが、内面に同心円文が残るものもある(24・25)。焼成は良好で、自然釉が付着している。口径10.7cm~11.6cm。器高7cm~7.4cm。

壺蓋はつまみのつくもの(30)は、水平にのびる天井部にかえりが垂直につく。つまみのないもの(27・28)は短頸壺の蓋である。水平な天井部から、口縁部は若干外方に張り出し、体部に浅い凹線をもつ。

第5遺物群 坏蓋1 (第53図)

坏蓋は扁平な天井部に、外方に張り出す口縁部をもつ。口縁端部は丸く、へら削りは天井部のみである。口径10.5cm、器高3.85cm。

第6遺物群 坏1 (第53図)



(1~13: 1群、14: 2群、15~19: 3群)

第52図 出土土器(1)

坏は丸味のある体部にやや外方にのびる口縁部をもつ。なお体部に一条の沈線が巡る。坏として図化したが悪蓋の可能性もある。口径10cm、器高4.4cm。

第7遺物群 長頸壺1、横瓶1 (第53図)

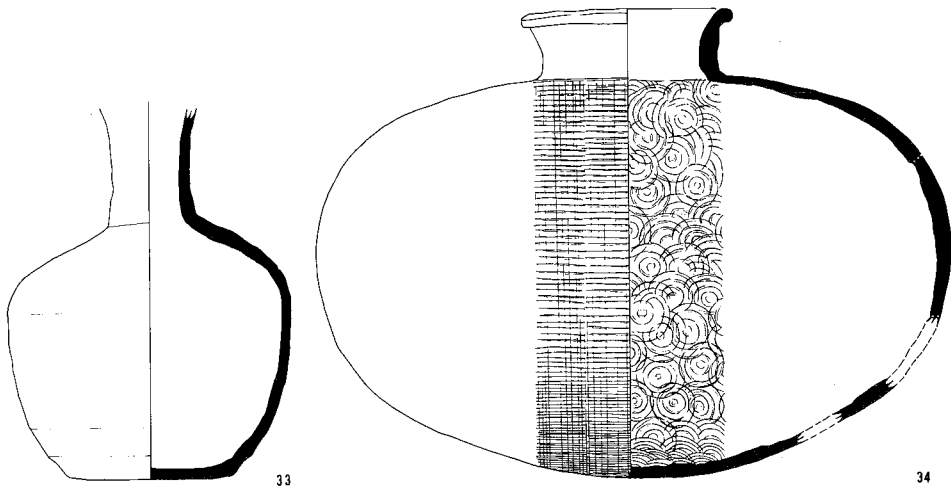
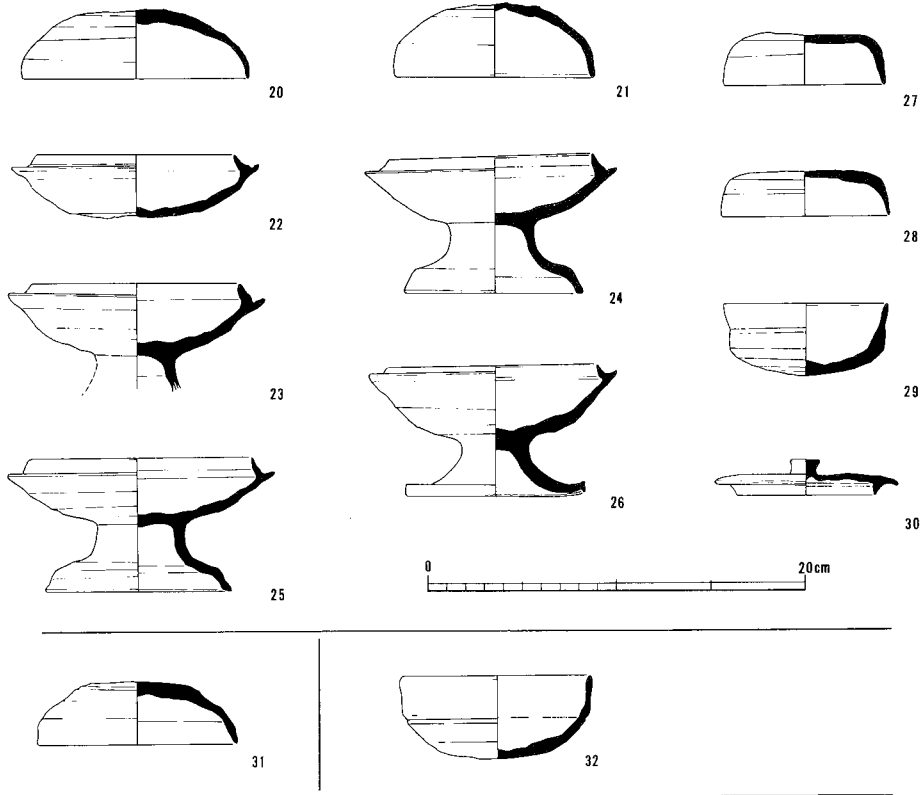
長頸壺の頸部は細長く直立するが、口縁部の形態は不明である。体部は肩の張る器形に平底の底部がつく。

横瓶の口頸部は外反して短い。端部は外方へ丸くふくらみ、段をなす。体部は胴張りのある球形で、器表に平行叩き目文、内面に同心円叩き文を施す。

(2) 土師器 (第51図)

八木ノ谷1号墳

第1遺物群（埴）と第2遺物群（甕）に1個体ずつ出土した。甕は丸底の底部に少し内彎する胴部がつき、そして若干外反する口縁部が立ち上がる。口縁部は肥厚し、端部は丸い。外面はハケ目、内面はナデを施す。口径14.6cm、復元高16.4cm。



(20~30 : 4群、31 : 5群、32 : 6群、33・34 : 7群)

第53図 出土土器(2)

(3) 金属器 (第54図)

耳環4点と不明鉄製品4点がある。

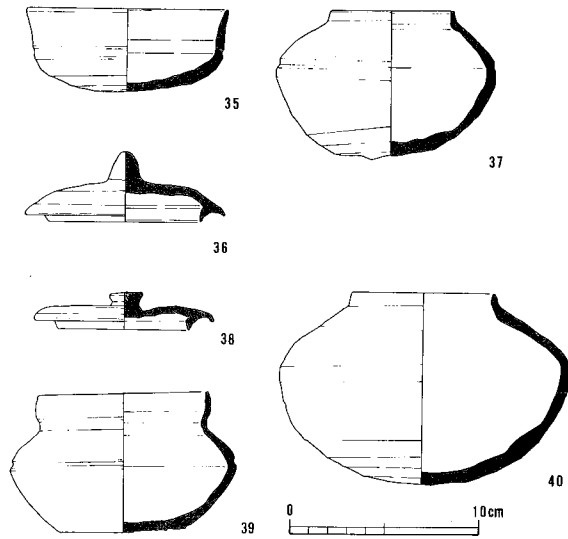
耳環(1)(2)は羨道部から検出したセットのもので、第6遺物群に含まれる。ともに銅芯銀張りの楕円形で、(1)は長径3.4cm、短径3.05cm、断面径0.8cm。

(2)は長径3.25cm、短径2.9cm、断面径0.8cm。(3)

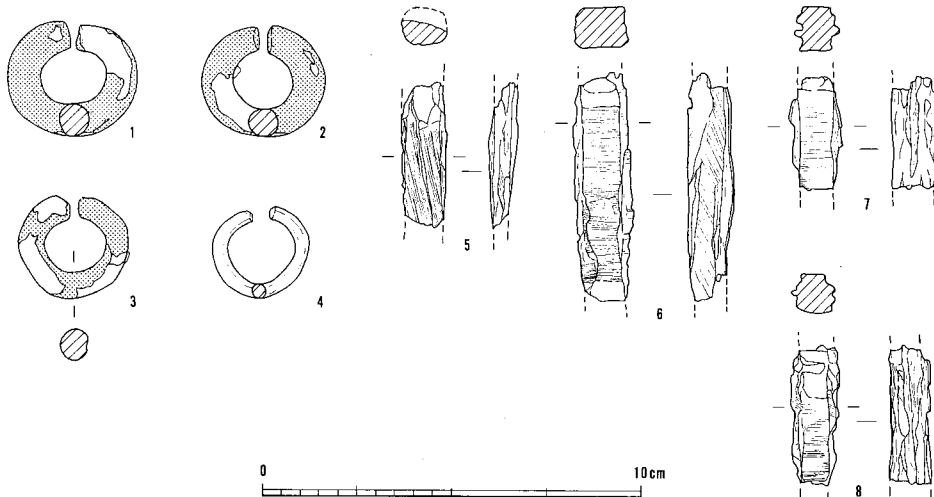
(4)は玄室部発見で、それぞれ第2・4遺物群と伴出している。(3)は銅芯銀張りのほぼ円形で長径2.9

cm、短径2.7cm、断面径0.8cm。(4)は錆化が著しく、銅芯のみである。現長径2.5cm、現断面径0.35cm。

不明鉄製品(1)・(3)は第1遺物群、(2)が第2遺物群、(4)が第5遺物群と伴出している。いずれも破片で、断面は長方形を呈す。残存長3.0cm~6.1cm、断面幅0.8cm~1.3cm。なお、鉄鍔の茎の考え方もあるが、他に刃部をもつものがないことと、外面には板材



(35~37:玄室覆土中、38~40:羨道覆土中)
第54図 出土土器(3)



(耳環1・2:6群、3:2群、4:4群、鉄器1・3:1群)
第55図 出土耳環・鉄器

の木目が付着することから棺材を組むための鉄釘の可能性が高い。

6. 小結

立地 八木ノ谷1号墳は、南に張り出す丘陵山裾の傾斜変換線のすぐ下に立地する。

墳丘 墳丘は削平され、石室上面に封土は残存しない。墳形は、掘りわりの状況等から13m×13.5mの円墳と考える。封土は石室の構築と併行して盛りあげ、現高は石室床面から2.7mである。外部施設は墳丘北方部に掘りわりを有し、墳丘中段位に列石を配する。

埋葬施設 墓壙は盛土の下層部から掘りこみ、旧地表面及び地山層を切りこんでいる。掘りかたの平面形はコの字形を呈する。

内部構造は、南西に開口する両袖型の横穴式石室である。なお、石室上部の石材と天井石は残存せず、閉塞石・石敷・排水等の施設は認められない。

遺物 比較的残存状況が良く、7つのグループに分けられる。大半は須恵器で、他に土師器・耳環・鉄器・砥石がある。なお、玉類は見当らない。

年代 遺物を出土状況から7群に分け追葬があったことが確認出来た。しかし、年代幅については、各群土器とも大きな時期差は認められない。

最もよく土器変化の指標となり、時期差が認めやすい坏類についてみれば、坏蓋には天井部と口縁部を分ける稜や凹線がなく、坏身は立ち上がりが短く内傾し、口縁端部は丸くおさめている。これらの特徴から、本古墳出土の土器は陶邑古窯址群によるTK209形式の範疇で捉えられる。⁽¹⁾ 中村氏の編年でいえばII型式第5段階にあたる。⁽²⁾

また、第4遺物群の高坏の坏内面には、古い様相の同心円文スタンプが残るが、同群の坏をみても、ヘラ削りのあるものから、ヘラ切り未調整のものまで含まれ、各群ごとの時期差をあまり考えない方がよいと思われる。なお、末地域には当該時期の窯を発見していないが、これらの須恵器は地元産の可能性が高い。⁽³⁾

実年代については、前述の土器から考えて6世紀末から7世紀初頭と推定しておきたい。

(大平茂)

註(1) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966年

(2) 中村 浩『陶邑』III 大阪府文化財調査報告書第30 1978年

(3) 同心円文スタンプが、兵庫県内では姫路市三方古墳・相生市小丸古墳等に、TK209形式になっても残存することが知られ、それぞれの地域で焼成したと考えられる。『小丸古墳群』小丸古墳群調査団 1985、「三方古墳」『播但連絡有料自動車道建設にかかる文化財調査報告書』II 兵庫県教育委員会 1980

第3節 やぎのたに 八木ノ谷2号墳 (AW-60)

1. 位置と現状

八木ノ谷2号墳は、1号墳のすぐ西側に占地し、掘りわりを接して存在する円墳である。傾斜度20°の傾斜変換線のすぐ下に造られた古墳で、標高は187mを測る。

現状は雑木林で覆われ、石室の石積みの墳丘ともに残存状態は良好である。また、調査前から斜面上方には半月形の窪みが認められ、羨道部が一部埋まっていたものの、石室はほぼ南に開口していることも確認出来た。

なお、玄室内は床面が掘りかえされており、何度か盗掘を受けていた。

2. 墳丘と外部施設

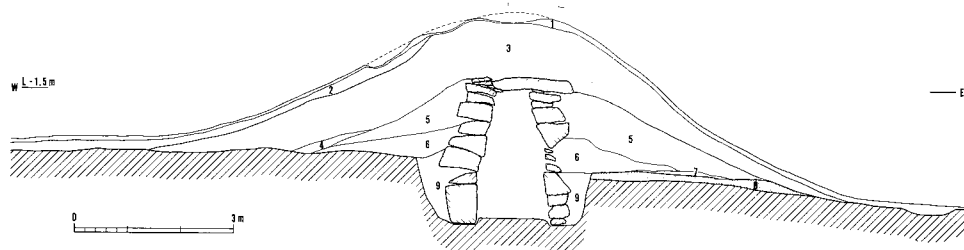
平面の形態は、東西14.4m、南北15.8mを測る円墳で、高さは北側（斜面上方部）が1.8m、南側（斜面下方部）が4mである。また、斜面上方側には馬蹄形を呈した掘りわりをもっている。規模は、幅1.5m～4m・深さ0.3m～0.5mで、断面の形が皿状を呈し、北々西の溝底が最も高く徐々に東西へ低くなっている。他に外部施設は認められなかった。

墳丘の築造は、1号墳同様に旧表土面を整形し、馬蹄形の掘りわりを造り、石室を構築しながら黄褐色や褐色の盛土をしている。封土の高さは墓壙底面から約4mを測り、天井石からでも1.2mの厚さがある。

3. 埋葬施設

掘り方 墓壙の掘り方は、石室中央部東西断面で見ると、旧表土面及び地山層を約1.2m掘りこんでいる。この付近では石室の高さの約 $\frac{1}{3}$ が掘り方内におさまり、その平面形は南に開くコ字形を呈している。規模は幅3.6m、長さ9.5m。また、壙底は最下段の石を安定させるため、外周を溝状に一段深く掘り下げ、床面の部分を台状に残している。

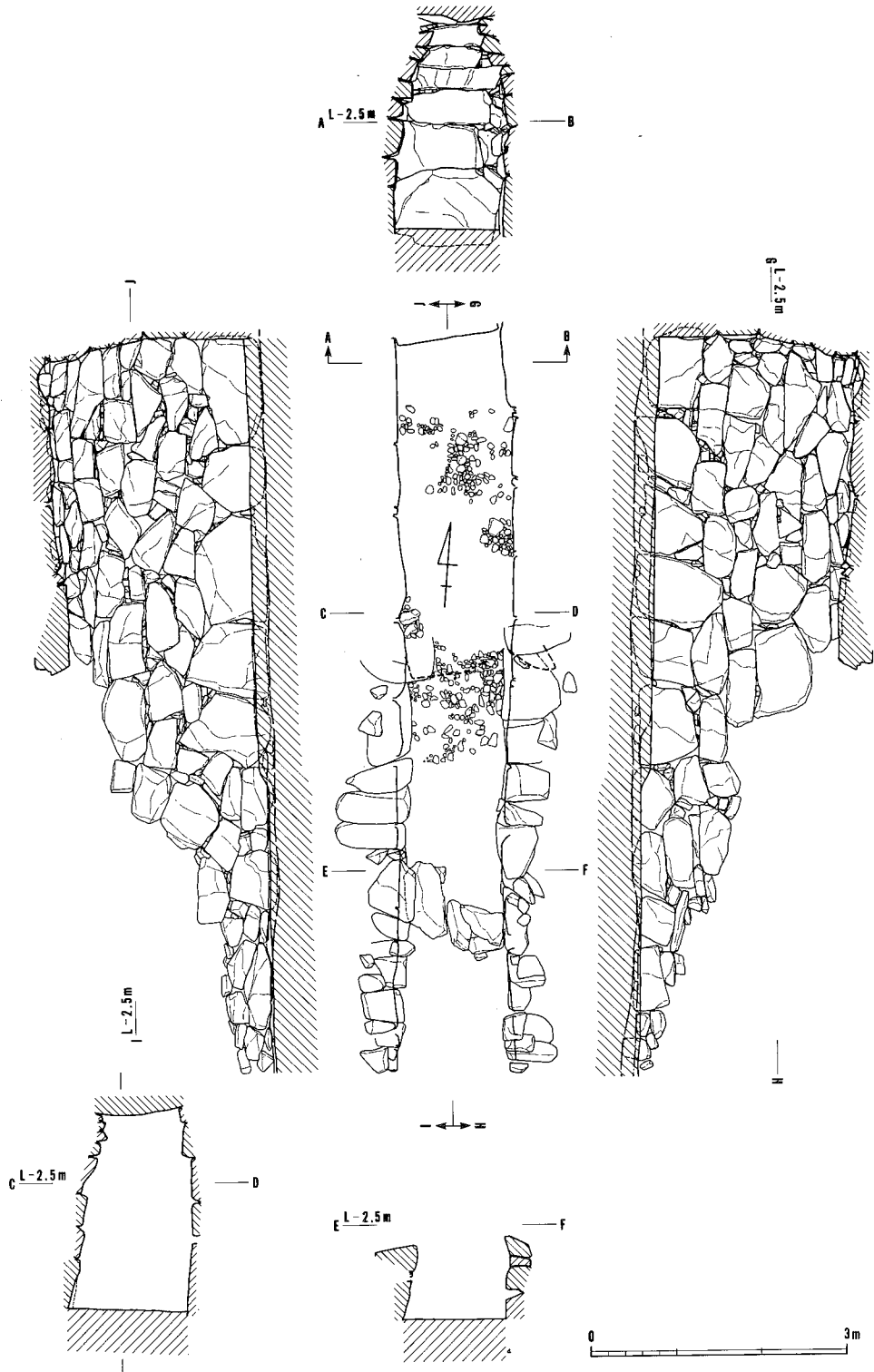
内部構造 内部主体は主軸をN5°Wにとり、ほぼ南方向に開口する無袖型の横穴式石室である。残存状態は良好で、羨道部の天井石と側壁の一部を除くと石室はほぼ完存し、閉



- | | | |
|---------|----------------|--------------|
| 1. 表土 | 2. 流土 | 3. 黄褐色土 |
| 4. 暗褐色土 | 5. 暗黄褐色土 | 6. 明褐色混り灰黒色土 |
| 7. 灰褐色土 | 8. 灰黒色粘質土(旧表土) | 9. 灰赤褐色土 |

第56図 東西断面図

八木ノ谷2号墳



第57図 石室実測図

塞石が若干残っていた。

石室の全長は8.5mを測る。玄室の平面形態は、左側壁部が若干胴張りを呈する長方形で、長さ4.8m、幅奥壁部1.25m・中央部1.35m・玄門1.2mである。高さは奥壁部で2.4mを測る。

石材の積み方は、奥壁は一枚石を横積みにし、持送りながら6段重ねとしている。両側壁は基底石のみ1m×0.8m前後の比較的大きな石材を据え、横積みを基本に一部玄門側の石を縦積みとしている。その上に0.4m×0.7m前後の石を、6～7段分横積みで若干持送り気味に使用している。特に、横に目地を通すといった方法は採られていない。さらにその上には、現在4枚の天井石が載っている。

羨道部は長さ3.7m、幅は羨門側で1.4mを測り前庭部に向かってやや開いている。

石材の大きさ、積み方は、玄室部と較べ基底に大きな石を据えず、特に閉塞石の所から小型の石(0.4m×0.3m前後)を使用し、横積みなしは小口積みとする。現状で玄門側が3～4段分高さ約1.6m、羨門側が2段分高さ0.6mである。

石室の床面には、玄室中央付近と玄門付近の2ヶ所約1.0m×1.5mの範囲にわたり石敷(河原石径3～12cm)を検出した。本来は玄室部全面に敷かれていたものと考えられる。

さらに、前記のように奥壁から6.5mのところまで石室の閉塞を行っており、0.5m×0.2m前後の石が、床面から2段分約0.4mの高さまで確認された。

なお、床面下に排水施設は認められなかった。

4. 遺物の出土状況

石室石積みはほぼ完存していたものの、玄室内はかなり盗掘を受け攪乱されていた。そのため、わずかに石敷が残っていた部分2ヶ所にのみ遺物が散在している状況である。これに引き替え、羨道部・前庭部は閉塞石及び流入土が厚く堆積しているため、遺物は若干壊れているが、量は多い。

このように遺物は、原位置を保っているものは少ないが、発掘状況からみると比較的集中した箇所が認められたため、出土地点から4つに分けて説明したい。なお玄室覆土上部の焼土層中から古銭(寛永通宝)3点が出土している。その他、墳丘及びその周辺からの遺物として若干の須恵器片があり、旧表土層中からは弥生時代の石鏃2点を検出した。

第1遺物群 玄室奥壁部から手前1m付近に散在する一群である。坏蓋等の須恵器3個体、鉄器4点、耳環1点、管玉2点がある。盗掘されてわずかに残った石敷上に遺物が点在する状況で、須恵器は破片ばかりであった。玉類も管玉のみで、鉄器同様に攪乱後の残存状態である。

第2遺物群 玄門から奥1.5mまでに存在する一群で、坏・坏蓋・短頸壺・高坏等の須恵器14個体、土師器1個体がある。1群と同様に石敷の残った部分にのみ散在する状況で、

須恵器の破片が多い。

第3遺物群 羨道部閉塞石付近に集中する一群である。坏・高坏・平瓶・甕等の須恵器7个体、耳環3点がある。大半が閉塞石下にあり、須恵器は破片した状況である。この群には耳環が埋土中のものも含め3点検出されたことから、羨道部に存在したと思われる棺体及び副葬品を、追葬にあたってかき出したものと考えられる。

第4遺物群 羨道入口及び前庭部に検出した一群である。高坏・甕・平瓶・提瓶等の須恵器があり、発見時には壊れていたものの、埋土中のもの（大甕）も含め完形復元出来るものが多い。羨道部からかき出された可能性もあるが、出土位置・状況から考えて墓前祭祀に供したものと理解したい。

その他 攪乱のため埋葬面には伴わないが、玄室及び羨道埋土中にも坏・壺・提瓶等の須恵器が多く存在した。

5. 遺物

遺物は、前述のように出土状況から4つの群に分けた。大半が須恵器であるため、須恵器のみ群ごとに記述し、他の遺物は器種別に説明する。

(1) 須恵器

第1遺物群 坏蓋2・坏1（第58図）

坏蓋は天井部が丸く口縁部が外方に張り出すもの（2）がある。いずれも口縁端部は丸く、天井部外面はへら削りを施す。（1）は焼成良好、色調は青灰色。口径12.8cm、器高4.3cm。

坏の丸味のある体部に、やや外方にのびる口縁部をもつ。底部はへら削りをし、体部に一条の沈線が巡る。口径9.6cm、器高3.7cm。

第2遺物群 坏蓋5・坏3・短頸壺2・高坏4（第58図）

坏蓋の体部は丸く口縁部へなだらかに移行する。口縁部は外方に張り出すもの（4・5・7・8）と内彎するもの（6）がある。端部は丸くおさめる。へら削りは天井部のみで、（4・7・8）のようにへら切り未調整のものもある。焼成は（4）を除き良好で、色調は青灰色、（4）は灰白色を呈す。口径11cm～13cm、器高3.7～4.3cm。

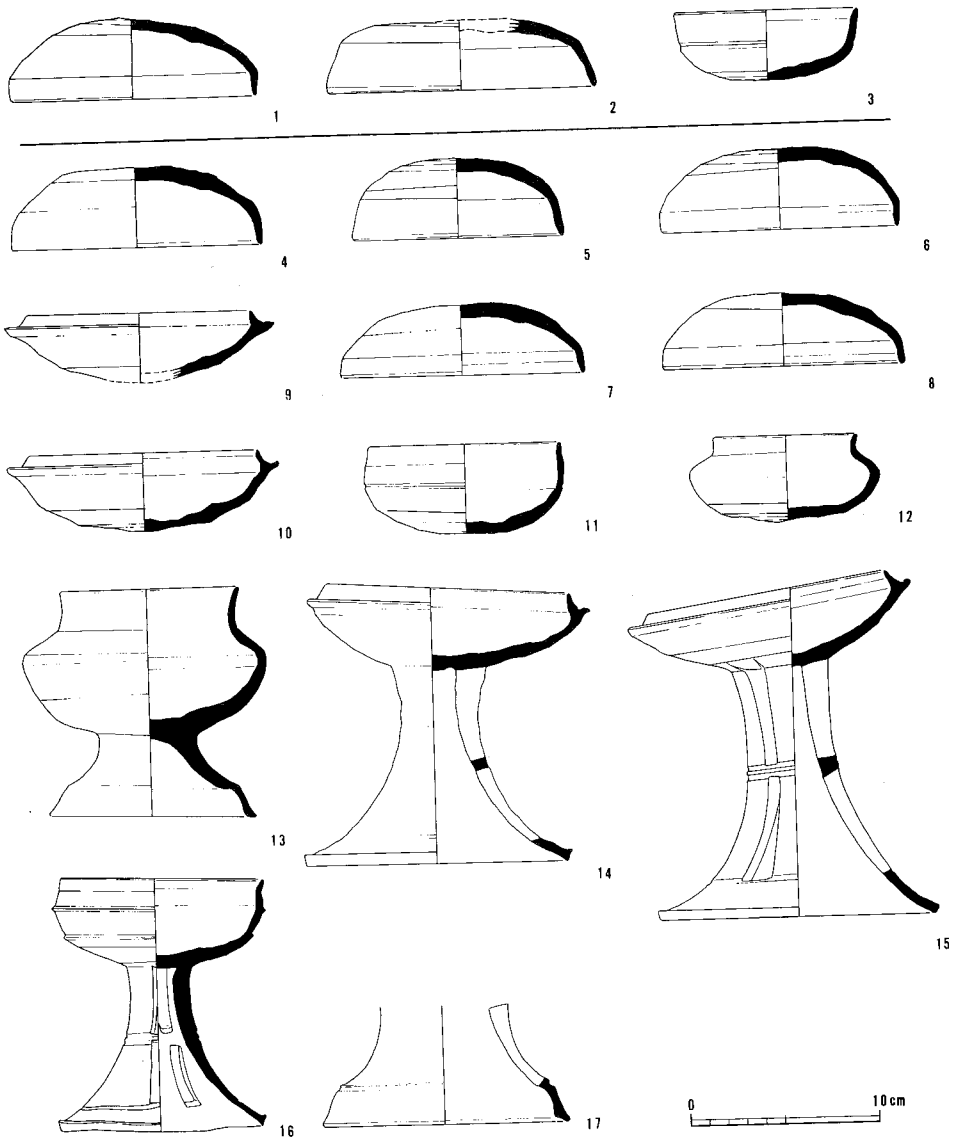
坏の立ち上がりは短く内傾し、受部は外上方にのびる。口縁・受部とも端部は丸くおさめ、立ち上がりとの境には凹線が認められる。底部はへら削り、焼成は良好で、色調は青灰色。（12）は口径12cm、器高4.1cm。（11）は丸味のある体部に、若干内傾気味の口縁が立ち上がる。なお、体部には一条の沈線が巡る。

短頸壺の口頸部はやや外傾して立ち上がり端部は丸い。体部は扁平気味で、最大径は体部の上から $\frac{1}{3}$ にあり、底部は平ら、焼成は良好、色調は灰色。口径7.4cm、器高4.6cm。（13）は脚をもつ。

高坏には有蓋高坏(14・15)と無蓋高坏(16)がある。無蓋高坏は坏部外面に二条の突帯を巡らす。脚は2段の透かしを二方にもつ。有蓋高坏(14)は2段二方透かしの脚、(15)の脚は2段の透かしを三方にもつ。焼成はいずれも良好で、色調は灰色。(15)の口径12.6cm、器高18.2cm。(16)の口径10.6cm、器高13.55cm。

第3遺物群 坏1・壺1・甕1・平瓶1・高坏3(第59図)

坏の受部は外上方にのび、立ち上がりは短く内傾度が強い。受部・口縁とも端部は丸くおさめ、立ち上がりとの境には凹線が認められる。底部はヘラ削り。焼成は良好で、色調



(1~3 : 1群、4~17 : 2群)
第58図 出土土器(1)

は青灰色。口径11.9cm、器高4.45cm。

壺は小型で、口頸部は外傾しながら立ち上がり、端部は丸い。体部は若干肩がはり、最大径は中央部やや上位にあり、その上部に一条の凹線を巡らす。底部は手持ちのヘラ削り。焼成は良好で、色調は灰色。口径5.1cm、器高6.5cm。

甗の基部は細く、口頸部はラッパ状に外反する。口縁部と頸部の境に端部の丸い稜を有す。体部は若干扁平で、最大径はほぼこの中央部にあり、円形の透かしをもつ。口径12cm、器高14.4cm。

平瓶の口頸部はほぼまっすぐ上方にのび、端部は丸い。体部は下外方へ内彎気味に下がり、底部はやや平ら。最大径は体部の $\frac{1}{2}$ より下位にある。上面は基部よりなだらかに外下方へ張り出し内彎して底部につながる。体部外面には、中位に平行叩き目、上・下位にカキ目を施す。さらに、体部上面に小さな円形粘土を3ヶ所貼付する。焼成は良好で、色調は灰色。口径5.25cm、器高15.2cm、腹径16.6cm。

高坏はすべて長脚の有蓋高坏である。坏部は前述の坏と同様の形態で、脚は大きく緩かに外方向へ拡がる。(20・21)は2段三方の透かし、(22)は2段二方の透かしがある。焼成はいずれも良好で、色調は灰色。口径12.15cm～13.2cm、器高12.9cm～19.2cm。

第4遺物群 甗1・高坏1・提瓶1・平瓶1 (第59図)

甗の基部は細く、口頸部はラッパ状に外反する。口縁部と頸部の境に断面三角形の稜をもつ。体部最大径は中央部上位にあり、ここに注口突出部を着装する。口径12.3cm、器高14.9cm。

高坏は長脚の有蓋高坏である。坏部は立ち上がりが短く内傾度が強い。受部は外上方にのび、立ち上がりとの境に凹線が認められる。脚部は大きく緩やかに外に拡がり、中央部・裾部にはそれぞれ二条・一条の凹線が巡る。透かしは2段二方である。口径11.7cm、器高16cm。

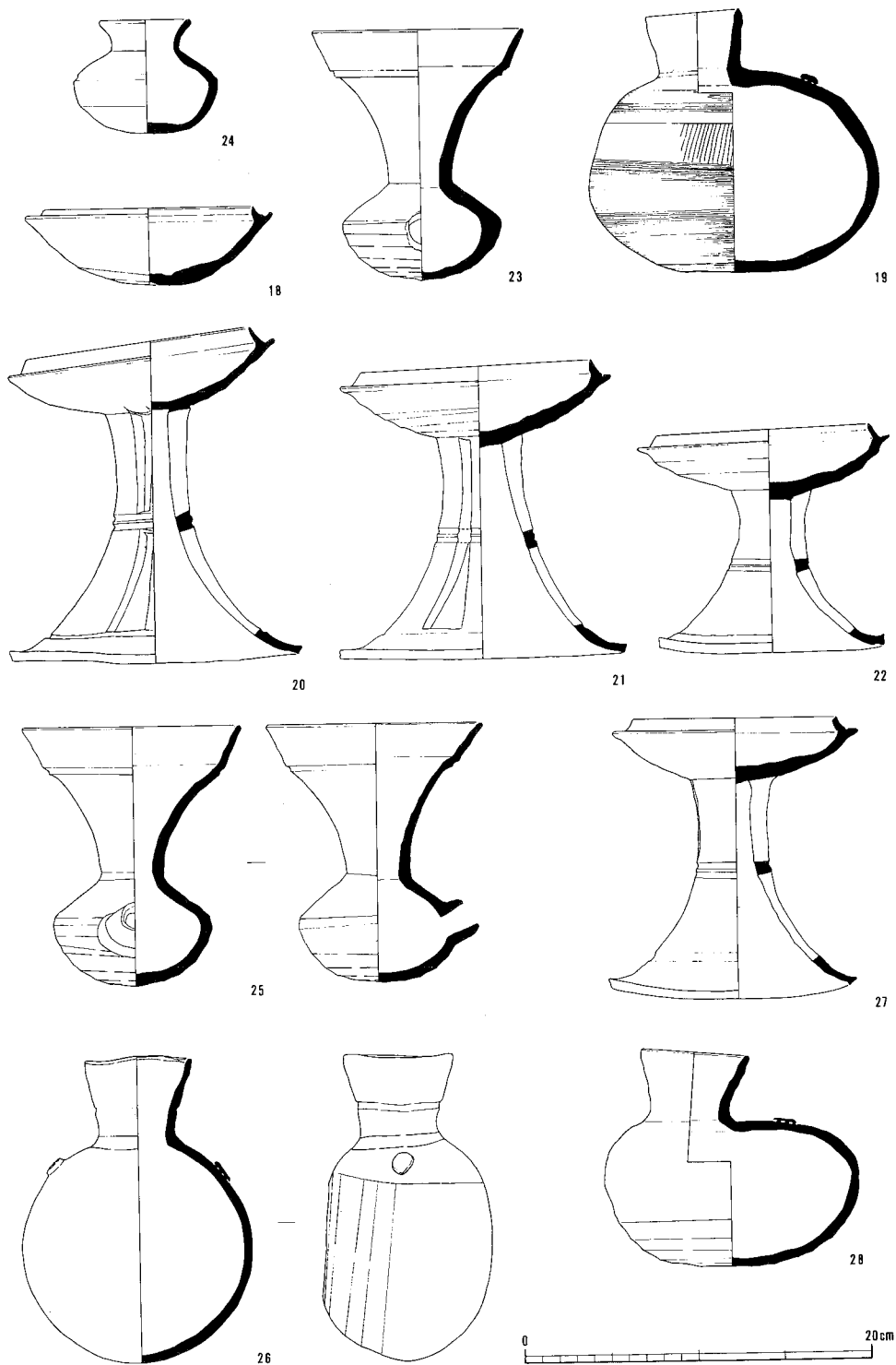
提瓶の口頸部は若干外傾し上方にのび、口縁付近でやや内彎する。端部は丸くおさめ、頸部下半に一条の凹線が巡る。体部は前面が丸く、背面はほぼ平らである。体部両側の耳は扁平な丸形であり、口頸部と体部の境が若干凹む。焼成は良好で、色調は灰色。口径6cm、器高17.6cm、腹径13.2cm。

平瓶の口頸部は外傾してほぼまっすぐにのびる。端部は丸い。体部は丸味をおびながら外上方にのび、次いで内上方にまがり口頸部に続く。上面は基部からほぼ水平にのび、後なだらかに外下方に張り出す。底部は少し丸味がある。口径6.05cm、器高12.5cm、腹径14.65cm。

玄室内覆土中出土土器 坏蓋5・坏3・高坏4・長頸壺1 (第60図)

坏蓋は全体に丸味のある器形で、口縁部は外方に張り出すもの(29・31・32)と内彎気

八木ノ谷2号墳



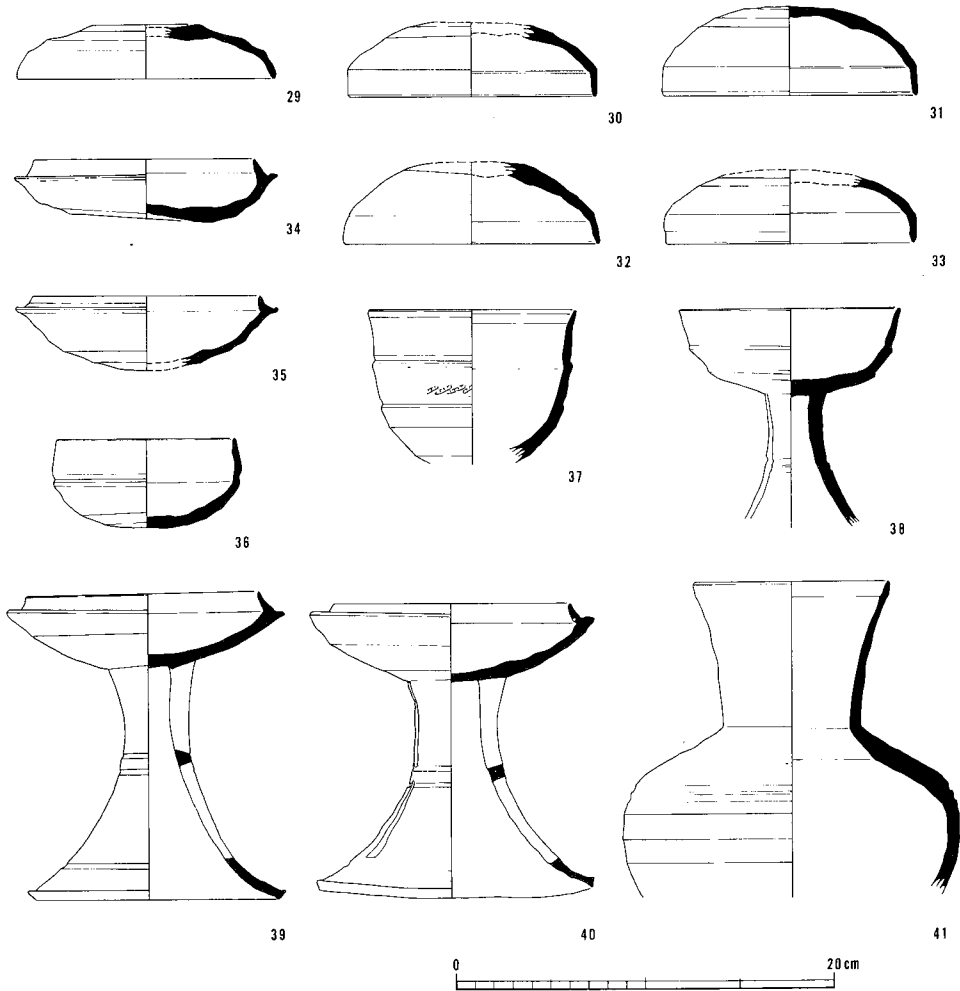
(18~24 : 3群、26~28 : 4群)
 第59図 出土土器(2)

味のもの (30・33) がある。端部は丸くおさめる。天井部はへら削りとへら切り未調整のものがある。口径12.9cm~13.45cm、器高2.85cm~4.7cm。

坏の立ち上がりは短く内傾し、受部は外上方にのびる。口縁・受部とも端部は丸くおさめる。底部はへら切り未調整とへら削りのものとがある。口径11.6cm~12cm、器高3.3cm~3.9cm。(36)は無蓋坏である。丸味のある体部に内彎する口縁部をもち、体部との境に一条の沈線が巡る。特記すべきは、外面に×印のへら記号をもつことである。

高坏には無蓋高坏と有蓋高坏がある。無蓋高坏は坏部に二条の突帯を巡らす。脚は2段二方透かしをもつ。(37)は脚を欠く。有蓋高坏はどちらも2段二方透かしをもつ。口径12.3cm~12.6cm、器高14.9cm~16.25cm。

長頸壺は体部下半を欠く。口頸部は外傾し、やや外彎気味である。肩部に二条の凹線が

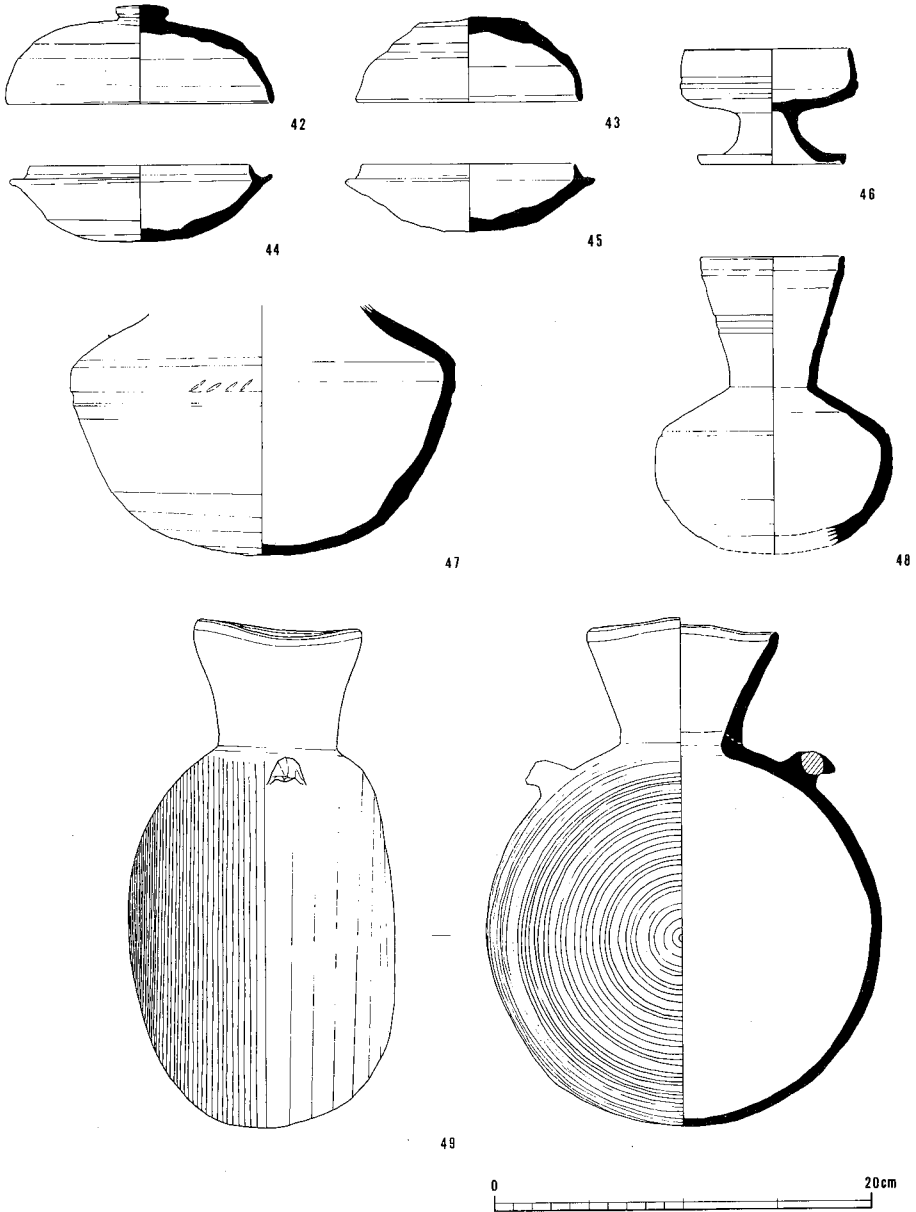


(27~41: 玄室内覆土中)
第60図 出土土器 (3)

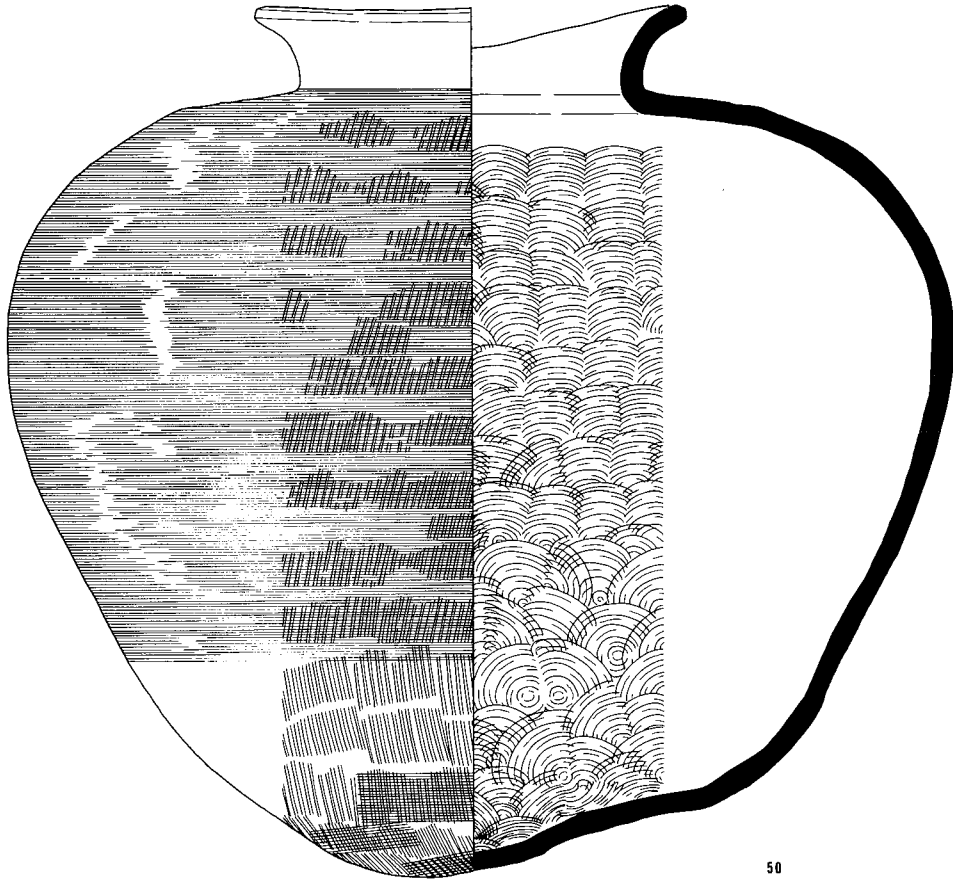
巡る。脚部がつく可能性もある。

羨道部覆土中出土土器 坏蓋2・坏2・高坏1・壺2・提瓶1・甕2 (第61・62図)

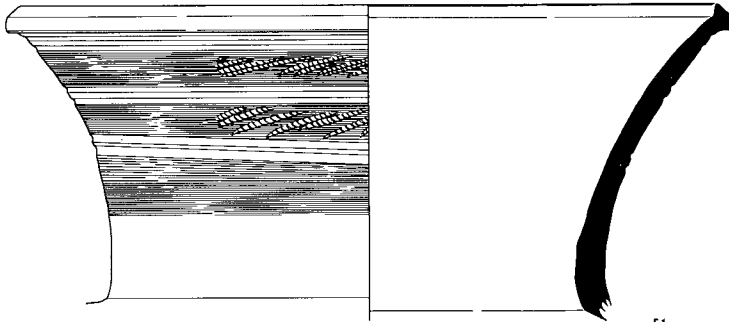
坏蓋にはつまみのつくもの(42)とないもの(43)がある。(42)は体部が丸く、口縁部は外方に張り出す。端部は丸く、天井部はへら削りを行う。口径14cm、器高5.2cm。(43)は平らな天井部で、外方に張り出す口縁部をもつ。端部は丸く、天井部はへら切り未調整。



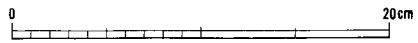
(42~49: 羨道覆土中)
第61図 出土土器(4)



50



51



(50~51: 羨道覆土中)
第62図 出土土器(5)

口径11.7cm、器高4.5cm。

杯の受部は外上方にのび、立ち上がりは短く内傾する。どちらも底部はヘラ削りを行うが、体部は厚手である。口径11.2cm～11.5cm、器高3.6cm～4.05cm。

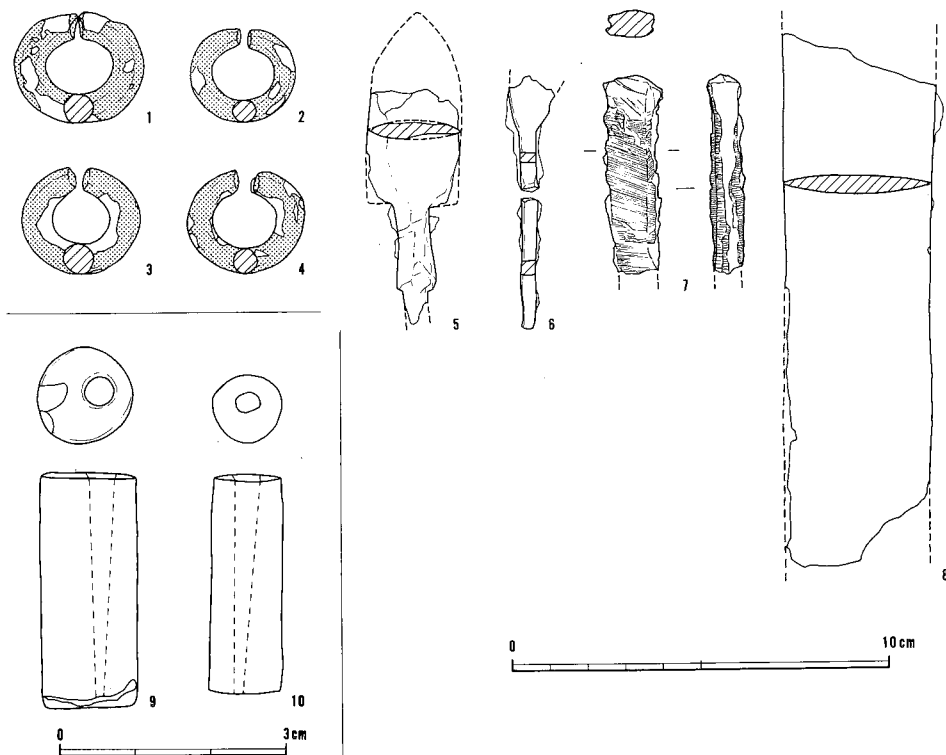
提瓶の口頸部は緩やかに外傾し、端部は丸くおさめる。体部前面は丸く、カキ目を施す。背面はほぼ平らでヘラ削りが見られる。体部両側には手鉤状の耳がつく。

甕(50)は肩の張った体部に、外反する頸部がつく。体部外面には平行叩き目が、また内面には同心円文が残る。口径22.5cm、器高46cm。(51)は口縁部の破片である。頸部に断面が丸味をもつ2条の突帯を巡らせ、その上に櫛歯刺突文を施す。

(2) **金属器** (第63図) 耳環4点と鉄鏃2点、不明鉄製品2点がある。

耳環(1)(2)は閉塞石下から検出したもので、第3遺物群に含まれる。ともに銅芯銀張りの楕円形を呈し、(1)は長径3.45cm、短径2.9cm、断面径0.8cm。(2)は長径2.8cm、短径1.9cm、断面径0.6cm。(3)は羨道覆土中発見で、長径3.1cm、短径2.8cm、断面径0.8cm。(4)は玄室内検出のもので、第1遺物群に含まれる。長径3.1cm、短径2.8cm、断面径0.65cm。

鉄鏃はいずれも第1遺物群に伴う。(1)は有茎三角式鏃と呼ばれるタイプである。現存



(耳環1・2：3群、3：羨道覆土、4：1群、鉄器5：1群、管玉9・10：1群)
第63図 出土耳環・鉄器・管玉

長6.2cm、刃幅2.5cm。(2)は長頸鎌の基部であろう。現存長6.7cm。

不明鉄製品(7)(8)とも第1遺物群に含まれる。(7)は断面長方形を呈し、長軸に直行する残存長5.2cm。鉄釘であろうか。(8)は残存長14cm、幅3.8cmを測る、両刃をもつ剣の一部であろう。

(3) 玉類 (第63図) 管玉2点。

(9)(10)とも第1遺物群に伴う。どちらも碧玉製で、片面穿孔である。(9)は長さ6.2cm、径2.5cm。(10)は長さ5.8cm、径1.8cm。

6. 小結

立地 八木ノ谷2号墳は、1号墳と同じ丘陵山裾の傾斜変換線のすぐ下に立地する。

墳丘 残存状況の良好な14.4m×15.8mを測る円墳である。封土は石室を構築しながら積みあげ、現高は石室床面から約4mである。外部施設として、墳丘北方部に掘りわりをもつ。

埋葬施設 墓壙は旧地表面から地山層を掘りこんでいる。掘りかたの平面形はコ字形を呈する。

内部構造は、ほぼ南に開口する無袖型の横穴式石室である。石室石積みの残存状態は良好であるが、玄室床面は盗掘を受け攪乱されていた。また、玄室床面には石敷があり、羨道部には閉塞石が一部残存していた。

遺物 盗掘のため石室内の残存状態は悪いが、前庭部に須恵器が集中して認められた。出土位置・器種内容からみて墓前祭祀と考えられる。石室内には須恵器の他、土師器・耳環・鉄器(鎌)・玉類(管玉)がある。注意すべきは、玄室埋土中の無蓋坏に×印のヘラ記号が認められることである。

年代 遺物を出土地点から4群に分け検討してみたが、各群とも大きな時期差は認められない。

坏類で見れば、坏蓋には天井部と口縁部を分ける稜や凹線が認められず、坏身は立ち上がりが短く内傾し、口縁端部は丸くおさめている。この特徴から、2号墳出土の土器は陶邑古窯址群の編年によるTK209型式の範疇で捉えられる⁽¹⁾。

実年代をあたえれば、土器から考えて6世紀末から7世紀初頭と考えられる。

最後に、1号墳との新旧関係・前庭部での祭祀について若干の考え方を提示し、まとめにかえたい。

1号墳とは近接しているものの切り合い関係はない。そこで石室の形態・遺物から比較したい。1号墳は両袖型、2号墳は無袖型であり、石室形態は1号墳が明らかに古い様相をもつ。一方、石室内出土土器をみれば、坏ではヘラ削りを行うものとヘラ切り未調整のものが供伴するなど各群に若干の時期幅は認められるものの、両墳ともTK209型式の中で

おさまり、年代差を見出すことは難しい。ここでは、石室形態を優先し1号墳がやや古い築造と考えておく。⁽²⁾

また、1・2号墳の被葬者について、墳丘裾を接して築造されることは被葬者の血縁的つながりを想定させる。さらに出土遺物をみると、須恵器に比べ鉄器・玉類が極めて少ないことがあげられ、須恵器はその形態特徴からみて地元産と考えられ、須恵器生産に関わる人とも推定させる。

次に前庭部出土の土器である。甕は破碎されていたため、他の古墳例⁽³⁾のように中に他の須恵器が納められていたかどうか明らかでなく、穿孔も認められないが、大甕・高坏の他特異な壺など須恵器の器種内容と、その出土位置・状況から埋葬後の墓前祭祀を想定させるものである。

(大平)

註(1) 田辺昭三『陶邑古窯址群』I 1966年

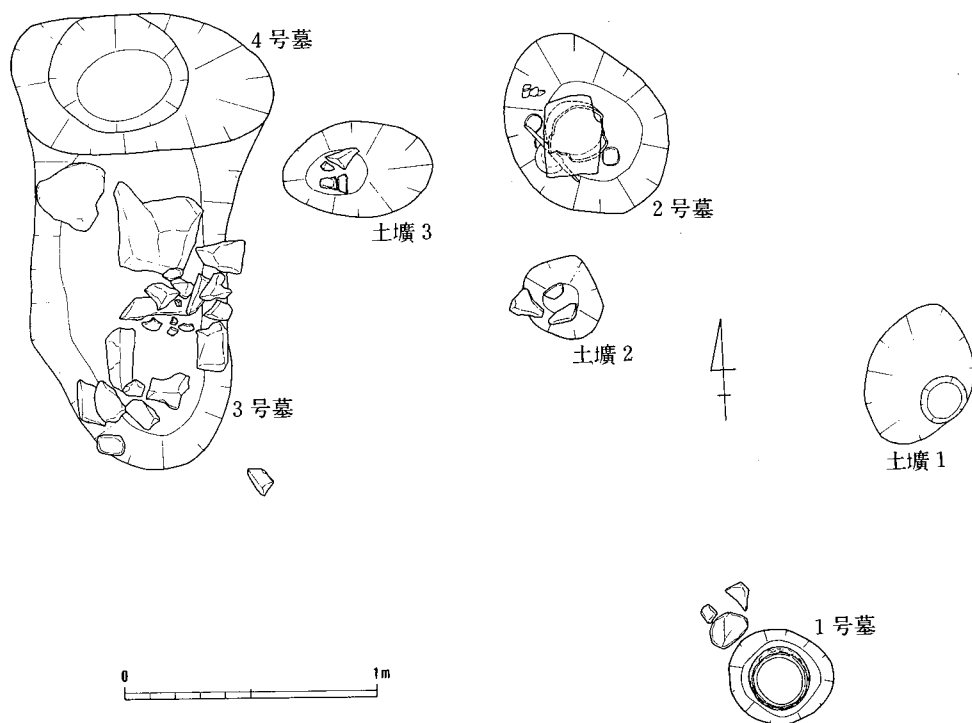
(2) 当古墳概報中には、若干の出土遺物の比較のみで、2号墳を古く考えていたが本報告をもって訂正しておきたい。

(3) 『片江古墳群』福岡市教育委員会 福岡市埋蔵文化財調査報告書 第24 1973年、『小丸古墳群』小丸古墳群調査団 1985年

第4節 やぎのたに 八木ノ谷中世墓 (AW-130)

1. 位置

中世墓群は、八木ノ谷1号墳のⅢ区南側墳裾部分で検出されている。それらの内訳は、埴を蔵骨器として埋納するものが2基、墳内に石組施設をもち、片口鉢を埋納するものが1基、遺物を出土せず、墓壙もしくは墓壙に附随すると思われる土壙が4基の計7基である。



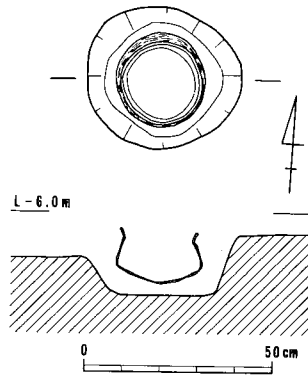
第64図 中世墓全体図

2. 遺構の概要

1号墓 1号墓は検出された墓壙群の中では最も南側に位置する。径40cm、確認面からの深さ約15cmを測るほぼ円形の平面形状を呈する墓壙を掘り込み、壙内に陶質の土埴を埋置している。土埴を埋置した後、壙内には炭化物を多量に含む暗黒褐色土が充填されている。墓壙上面には、調査時点では墓標状の施設は確認されていないが、墓壙の北東側には、長さ15~16cm、幅12~15cmの自然石を3石配している。また土埴中からは多量の骨片が検出されている。

2号墓 2号墓は1号墓の北約2mの地点に位置する。長軸75cm、短軸60cm、確認面からの深さ約20cmを測るほぼ楕円形の平面形状を呈する墓壙を掘り込み、壙内には土師質の土

鍋を埋置している。土塙の周囲には鉄製刀子、土師器皿を副葬した後、炭を多量に混える黒褐色土を充填する。墓塙上面には短辺20cm、長辺60cmを測る長方形



第65図 1号墓

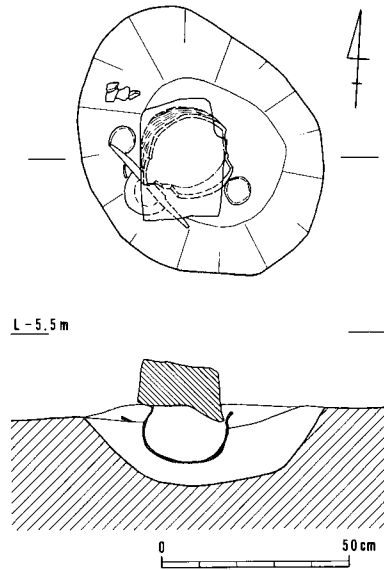
の自然石を墓標として配置している。また土塙中からは多量の骨片が検出されている。

3号墓 3号墓は墓塙群の中では最も西側に位置する。北側部分が、土塙4によって切られている為、全体の規模は不明であるが、長軸130cm以上、短軸80cm、確認面からの深さ約12cmを測る細長い楕円形の平面形状を呈する墓塙を掘り込む。塙内には長さ10~30cmの不整形の自然石を10数個配置しているが、その配置を見ると、南側部分では、1辺25cmの方形に配置されており、石組の内側で土師器皿、陶質の片口鉢などの遺物が検出されている。1・2号墓とは異なり、3号墓では蔵骨器として明確なものは出土していない。このことから3号墓の構造は、墓塙内に、方形の石組を構築してその中に納骨し、片口鉢は、あるいは石組みに対する蓋として利用されていた可能性も考えられる。

土塙1 1号墓の北東側で検出されたもので、長軸60cm、短軸40cmを測る楕円形の平面形状を呈する土塙の西隅に、さらに径20cm、確認面からの深さ約30cmを測る円形のピットを掘り込んでいる。塙内からは骨辺あるいは副葬品などの遺物は出土しておらず、構築時期、遺構の性格については不明であると言わざるをえないが、立地の状況から考えて、おそらく、墓塙もしくは墓塙に伴う施設と判断される。

土塙2 2号墓の南側で検出されたもので、径30cm、確認面からの深さ約80cmを測る不整形の平面形状を呈する柱穴状の遺構である。塙内には多量の小礫が充填されていた。規模、構造から見て、墓塙とは考えられず、あるいは、2号墓に附随して、卒塔婆状のものを立てる為に掘られたものである可能性も考えられる。

土塙3 3号墓の東側で検出されたもので、長軸60cm、短軸40cm、確認面からの深さ約80cmを測るほぼ楕円形の平面形状を呈する土塙である。塙内には多量の小礫が充填されていた。土塙2同様、3号墓に附随して卒塔婆状のものを立てるために掘られたものである



第66図 2号墓

可能性が考えられる。

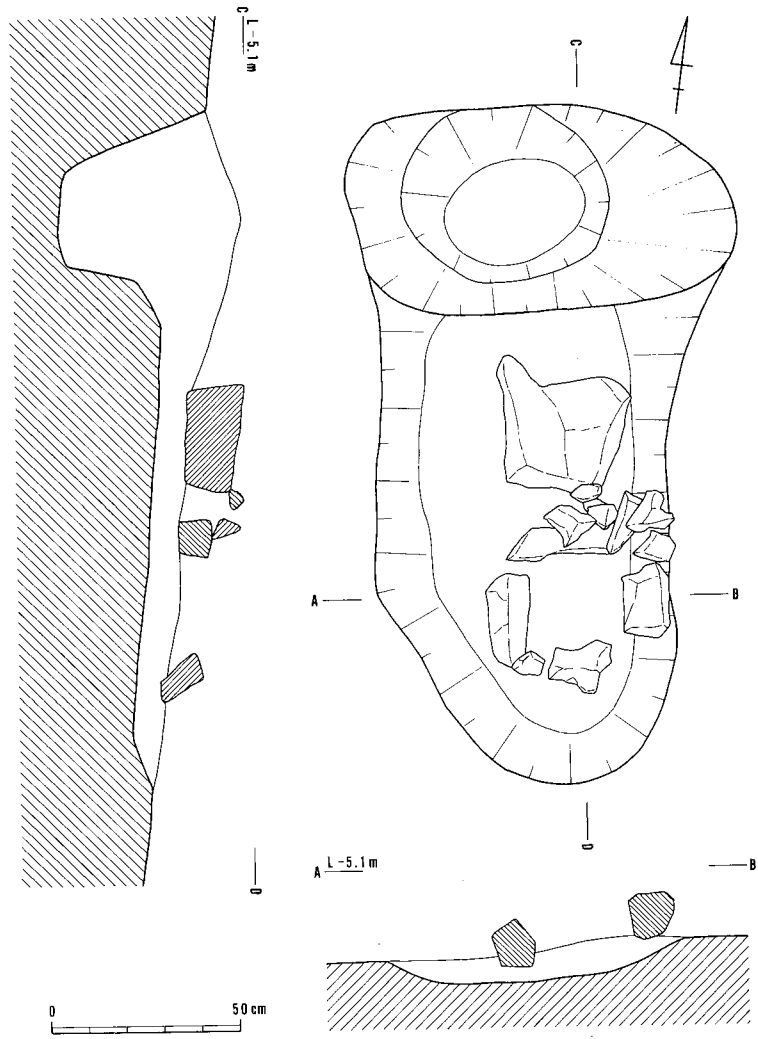
土壌 4 3号墓の北側で、3号墓を切る形で検出されたものである。長軸100cm、短軸50cm、確認面からの深さ約20cmを測る楕円形の土壌を掘り込み、さらに中央部に、長軸55cm、短軸40cm確認面からの約30cmを測る土壌を掘り込んでいる。壙内からは、骨片あるいは副葬品などの遺物が出土していないことから、墓壙であるとは

断定し難いが、立地、規模、構造等の点から考えて墓壙である可能性が高いと判断される。

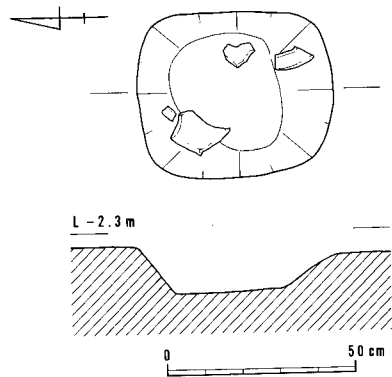
近世土壌 2号墳の北側墳裾で検出されたもので、長辺55cm、短辺35cm 確認面からの深さ約18cmを測る長方形の平面形状を呈する土壌である。壙内からは、丹波焼徳利、染付磁器皿等の遺物を出土している。

3. 遺物の概要

八木ノ谷中世墓群からは、墓壙内及び周辺の流土中により、土師器皿、埴、塙、陶質の塙、片口



第67図 3号墓・土壌4



第68図 近世土壌

鉢、鉄製刀子などの遺物が出土している。

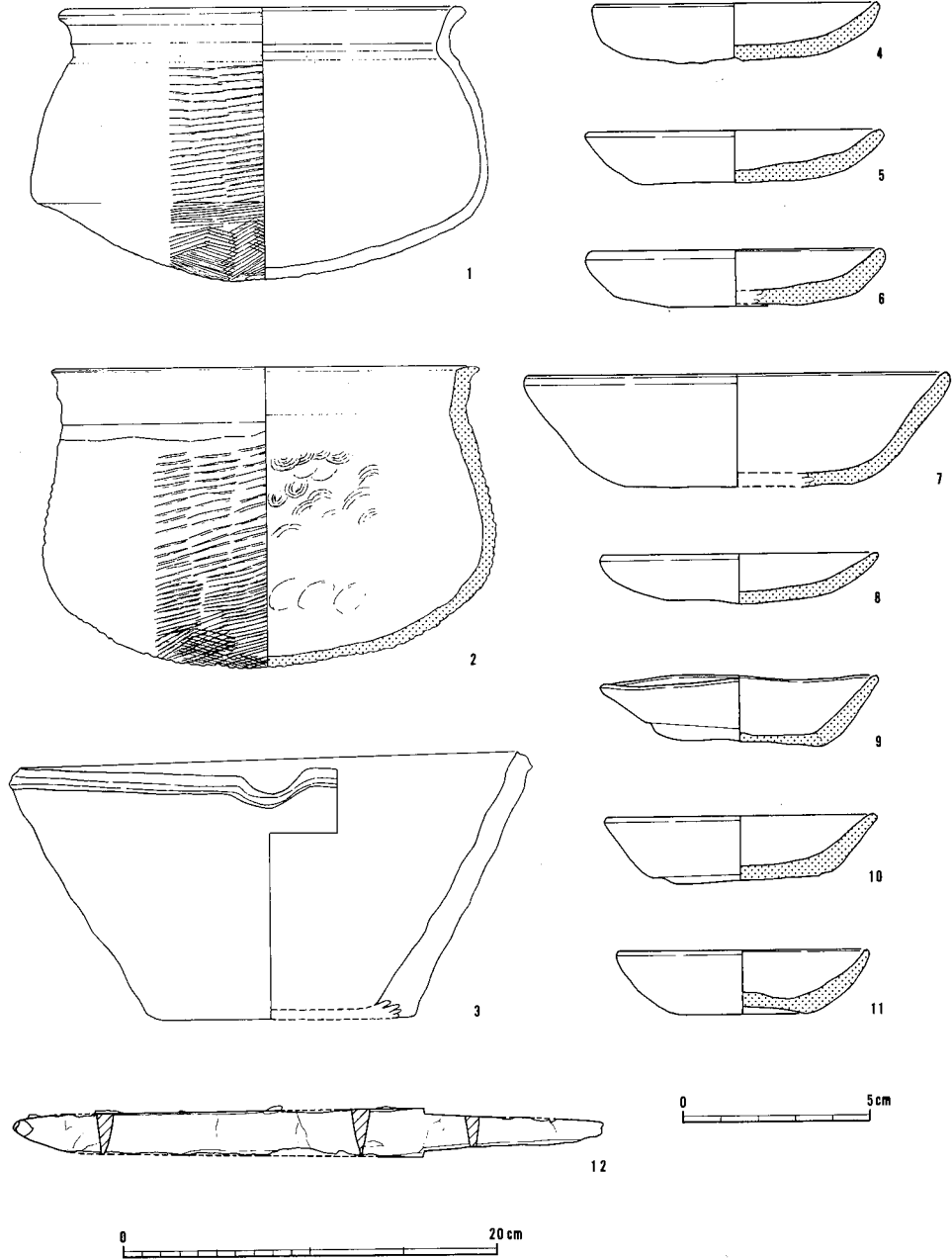
1号墓出土遺物 1号墓からは陶質の壺が出土している(第68図1)。壺はほぼ完形で、底部は丸底風に成形する。体部は内傾気味に立ち上がり、口縁部は外方にひらく。口縁端部は丸く収める。調整技法は、粘土紐巻き成形の後、内面の底部から体部にかけて不定方向のナデ調整を加え、さらに口縁部内外面に強いヨコナデ調整を加える。外面の底部から体部にかけては未調整で、平行叩き目が残る。非常に堅緻に焼成されており、色調は茶褐色を呈する。口径21.0cm、器高14.6cm、最大径24.5cm。

2号墓出土遺物 2号墓からは、土師器壺(第68図2)、皿(第68図4・5・6)、坏(第68図7)及び鉄製刀子(第68図12)が出土している。2は土師器壺である。底部は丸底風に成形し、体部は内傾気味に立ち上がる。口縁部はほぼ直立し、端部は外方につまみ出す。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内面の底部から体部にかけてはナデ調整を加えるが、調整が不十分な為、体部内面下半では指頭圧痕が、また内面上半では同心円文の叩き目が一部残されている。外面の底部から体部にかけては未調整で、平行叩き目が残る。口縁部内外面には強いヨコナデ調整が加えられている。口径22.5cm、器高16.1cm、最大径24.2cm。4・5・6は土師器皿である。手捏ね成形の後、内外面にナデ調整を加える。4は口径7.6cm、器高1.0cm、5は口径8cm、器高1.4cm、6は口径8.0cm、器高1.5cm。7は土師器坏である。底部から直線的に立ち上がる体部をもち、口縁端部は丸く収まる。調整技法はクロコナデ調整で、底部外面に僅かに糸切り痕が観察される。口径11.4cm、器高3.0cm。12は鉄製の刀子である。全長31.7cm、刃部長22.1cm、刃部最大幅1.9cmを測るが、錆及び表面に残っている木質の為正確な数値ではない。木質は鞘及び柄の一部であろうと考えられる。刃部については、ほぼ直線を呈する背とそれに並行して延び先端から約3cmのところで切っ先をつくる刃をもつ。刃部は両関をもって茎に続くが、茎は徐々にその幅を狭める。茎の断面形は背側の厚さが大きい台形を呈している。関から2.7cmの位置に目釘穴が観察される。

3号墓出土遺物 3号墓からは、陶質の片口鉢(第68図3)、土師器皿(第68図8・9)が出土している。3は陶質の片口鉢である。焼成は軟質で、色調は淡赤褐色を呈し、一見土師器を思わせる。直線的に斜め上方に立ち上がる体部をもち、口縁端部は上方につまみ上げる。調整技法は粘土紐巻き上げ成形の後、内外面にヨコナデ調整を加え、さらに口縁部内外面に強いヨコナデ調整を加える。体部外面にはへら描きの窯印が認められる。口径26.4cm、器高14.3cm、底径13.5cm。8・9は土師器皿である。8は底部から内彎気味に立ち上がる体部をもち口縁端部は丸く収める。調整技法は手捏ね成形の後、内面の底部から口縁部にかけてはナデ調整を加えるが、外面の底部から体部にかけては未調整である。9は、底部から直線的に立ち上がる体部をもち口縁端部は丸く収まる。調整技法はクロコナデ調整で、底部外面には僅かに糸切り痕が認められる。8は口径7.5cm、器高1.0cm。9は

口径7.4cm、器高1.8cm。

遊離遺物 中世墓周辺では、墓壙に伴わず、墳裾の流土中から遺構とは遊離した形で土師器皿が2点出土している（第68図10・11）。10は平底で、底部から直線的に立ち上がる体部をもち口縁端部は丸く収める。調整技法はロクロナデ調整で、底部外面には僅かに糸切り痕が認められる。11は、あげ底風の底部をもち、口縁端部は尖り気味に収まる。調整技



第69図 出土土器・鉄器

法は口縁部内外面にヨコナテ調整が認められる他は、外面の底部から体部にかけては未調整である。10は口径7.4cm、器高1.7cm。11は口径6.8cm、器高1.7cm。

4. 小結

八木ノ谷中世墓群では、合計7墓の土壙が検出され、内3基については、骨片、蔵骨器、副葬品などを出土している事から確実に墓壙であると判断される。また、遺物の出土の見られなかった土壙4についても、立地、形態、規模などの点から考えて、墓壙である可能性が高い。以上の事を前提として考えると、今回検出された墓壙は合計4基となり、それらは、埋納形態から、壙を蔵骨器として埋納するもの（1・2号墓）、墓壙内に石組を構築するもの（3号墓）、蔵骨器、石組などの施設をもたず直接墓壙内に埋葬するもの（土壙4）の3種類に分類される。ここでは、他地域での類例との比較、出土遺物の検討を通じて、これらの墓壙の構築時期について若干考えてみたい。

先ず、墓壙内に壙を蔵骨器として転用して埋納するものは、県下ではかなりの類例が認められる。現在迄に知られているものには、神戸市塩田中世墓⁽¹⁾、多可郡中町高岸遺跡⁽²⁾、同郡加美町門村遺跡⁽³⁾、加東郡社町四ッ辻5号墳⁽⁴⁾、水上郡市島町喜多中世墓⁽⁵⁾、加古川市大国山遺跡⁽⁶⁾などがある。しかし、これらの遺跡で出土した壙については、現在の所、それに編年の年代観を与える作業は未だ途上にあると言え、必ずしも明確な年代は与えられていない。1号墳出土の壙は、形態的には土師器壙と類似するが、焼成の点から見ると、むしろ陶質のものと言える。これと、形態、焼成の点で類似するタイプの壙は、多紀郡今田町三本峠北窯灰原⁽⁷⁾より出土している。三本峠北窯については、出土した甕の形態より13世紀中頃の時期が与えられており、このことから、1号墓出土の壙についても、一応13世紀中頃の時期を考慮しておきたい。2号墓出土の土師器壙については、1号墓出土のものが、口縁部が「く」の字形に外反するのに対し、2号墓出土のものは、体部から口縁部かけての境が不明瞭になり、体部から口縁部まで直口気味にのびる。口縁部が僅かに外反する点、及び内面の調整が不十分で、指頭圧痕、叩き目を残す点などから考えて、明らかに、1号墓出土のものより後出するタイプのものであると判断される。

但し、1号墓出土のものと2号墓出土のものとの間にどの程度の時間的隔りがあるのか現在の所は判然としない。ここでは、播磨地域における消費地出土のものとの比較から、14世紀後半から15世紀前半の時期を考慮しておきたい。

3号墓と同様に、墓壙内に石組を構築する例は、多紀郡西紀町上板井中世墓⁽⁸⁾、同郡丹南町庄境中世墓⁽⁹⁾に見られる。両者とも時期決定の決め手となる遺物が見られないため、明確な時期は与えられていない。3号墓から出土した片口鉢は、焼成が非常にあまく一見土師器を思わせるが、形態、調整技法及び体部外面に窯印が見られる事などから丹波系陶器であると判断される。丹波焼については、大槻伸氏による基礎的研究⁽¹⁰⁾が行われているが、生

産地での調査例が乏しいこともあって、その詳細な実態把握には至っていない。今回出土した資料については、内面に播目を施さない点を除外すると、形態の上からみると、稲荷山タイプのもよりは後出するものと考えられる。内面に播目を施さないこのタイプの丹波系播鉢に関しては、最近、多紀郡内で行われた近舞線関係の調査で漸く、類例が知られるようになってきた。現在これらの資料は整理中で、詳細は論じられないが、ほぼ15世紀代に属するものと考えられている。

以上述べてきたように、土師器埴、丹波系陶器の埴、片口鉢については、最近迄の調査で、その実態については漸く明らかになりつつあるが、これに編年の年代観を与えるという基礎的作業は未だその途上にあると言え、現状では今回出土した資料に正確な実年代を与えることは不可能であると言わざるをえない。今回の報告では、敢えて、他地域での出土資料との比較検討から一応の実年代を与えてはいるが、もとより、一定の手続きを経て得られた年代ではない。今後、消費地における出土例の増加を待って、再考したいと思う。

(岡田)

- 註(1) 丸山 潔「塩田中世火葬墓群」『古代・中世の墳墓について』 1983
 (2) 神崎勝「高岸遺跡」『古代・中世の墳墓について』 1983
 (3) 神崎勝「門村遺跡」『古代・中世の墳墓について』 1983
 (4) 森下大輔「四ッ辻5号墳」『古代・中世の墳墓について』 1983
 (5) 村上賢治「喜多中世墓」『古代・中世の墳墓について』
 (6) 兵庫県教育委員会によって、昭和61年度に調査が実施された。
 (7) 大村敬通『三本峠北窯調査報告書』 1981 兵庫県教育委員会
 (8) 池田正男・水口富夫・市橋重喜『上板井古墳群』「近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(III)」 1986 兵庫県教育委員会
 (9) 岡田章一・渡辺昇・別府洋二「庄境1号墳」「近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(V)」 1987 兵庫県教育委員会
 (10) 大槻伸「丹波」『世界陶磁全集』 1977 小学館

北浦地域



第5章 北浦地域の調査

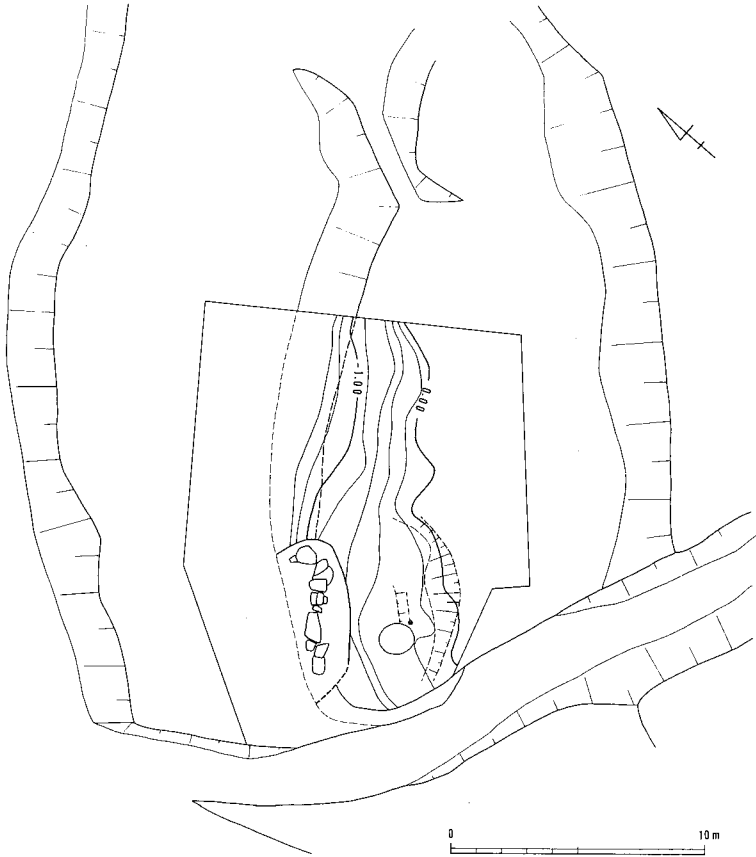
第1節 庵ノ谷^{あんのたに}古墳 (AK-92)

1. 立地

庵ノ谷古墳は三田市末字庵ノ谷344に所在する横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。本報告まではAK-92地点としていた古墳であるが、小字名をとり庵ノ谷古墳と改称する。

古墳は、昭和49年に実施された青野ダム建設予定地内の分布調査の際に発見された。古墳発見時には、墳丘は勿論、石室の大半も宅地によって消滅しており、僅かに宅地の法面に石室の一部と思われる石材が露出している程度で、分布調査結果でも古墳とされているものの、疑問符が付けられていた。

調査開始当時の現状観察でも、墳丘は全く認めることができず、古墳の残欠が残っている可能性はあるかも知れないが、大半は既に消滅しているのではないかとと思われるほどの



第70図 地形測量図

状況であった。さらに、南側は小径があり、これによっても削平されているらしい状況であった。しかし、調査を開始すると、当初の予想に反して石室の過半は失われているものの、奥壁、片側の側壁が遺存していることが判明した。また、遺物も相当量検出することができ、青野川流域の後期古墳

に一資料を加えることができた。

庵ノ谷古墳は武庫川の支流である青野川中流域左岸の標高約177m付近の丘陵先端部に立地する。古墳は標高283.2mの山塊から西方に延びる尾根稜線上に位置している。青野川からは約170mの距離があり、比高差は約20mほどである。古墳の位置する地点は宅地となっていたが、斜面上方は畑や果樹園となっており、下方は狭少な水田が青野川に沿って広がっている。

青野川流域の後期古墳は第2章でも触れたように大規模な群集墳は形成されていないが、数基単位のまとまりからなる古墳群の存在が知られていることから、庵ノ谷古墳周辺にも他に後期古墳の存在した可能性も考えられるが、現在のところ、この庵ノ谷古墳の外には古墳は発見されていない。最も至近距離にある古墳でも約500mほどの距離があり、地形的にみても同一古墳群とは見なしがたい。

2. 墳丘

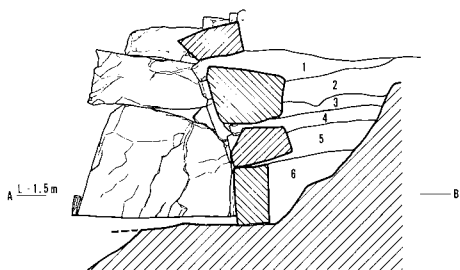
墳丘は宅地により完全に消滅していると考えられたが、その痕跡が残っている可能性も考慮して、石室を中心に南北約17.0m、東西約12.5mの調査区を設定し、墳丘残存部の検出に努めた。その結果、墳丘は全く残存していないことが判明したが、丘陵斜面上方の石室東側で円弧状を呈する溝を検出することができた。この弧状溝は地山を掘り込んでつくられ、現存する長さ約6.5m、幅2.4m、最も深い部分で15mを測る。溝は古墳の全周に巡っていたのかどうかは明らかではないが、埋土や位置からみて、古墳に伴うものと考えられ、斜面上方部の墳丘を画する周溝の一部であろうと判断された。この弧状溝を墳丘基底部とし、石室の位置を墳丘中心部分に位置したと仮定すると、庵ノ谷古墳は径約9m程度の円墳であったと推定される。

弧状溝の西側底面で須恵器の坏が1点出土しており、供献された土器ではないかと想定されるが、他には出土遺物は検出されなかった。

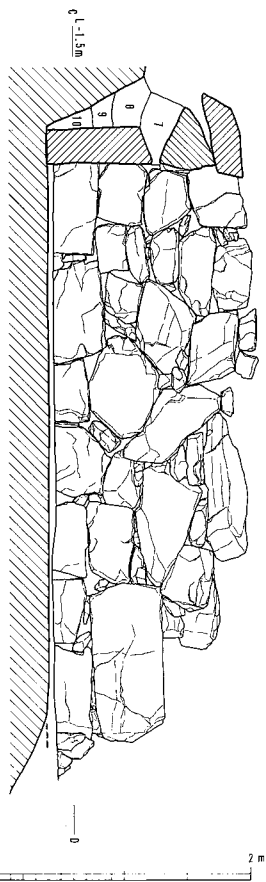
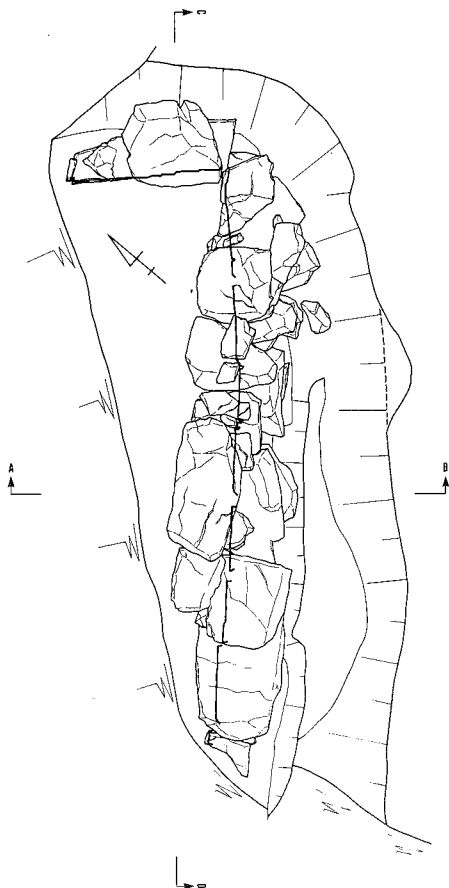
3. 埋葬施設

庵ノ谷古墳の埋葬施設は、主軸をS50°Wにおく横穴式石室である。墳丘は勿論、石室も宅地によって大きく損なわれているため、石室の規模などについては不明な点が多いが、奥壁と開口部に向って左側壁が遺存していることが判明した。

石室の構築は、南東から北西に向かって延びる緩やかな丘陵斜面の先端頂上部付近に、南西方向に開口するように、旧地表面を「コ」字形に墓壇掘方を穿つことから開始したと考えられる。掘方は墳丘が全く遺存していなかったため、調査の結果では奥壁側と左側壁側の2方の地山面からの掘り込みが確認できただけである。現存する掘方の規模は、長さ約6.05m、幅約2.65m、深さ約1.1mで、左側壁側では一部2段に掘り込まれている。掘方内には石室の3段目までが据えられているが、底面には石室最下段を据えるために1段深



1. 暗茶褐色土
2. 淡茶褐色土
3. 暗茶褐色土
4. 暗茶褐色土(黄褐色土混)
5. 淡茶褐色土
6. 茶褐色土
7. 茶褐色土
8. 黄褐色土
9. 暗茶褐色土
10. 茶褐色土



第71図 石室実測図

の上端は、ほぼ掘方の上端面と一致している。最下段に使用された石材からみて、奥壁の規模はほぼ現存長と大差ないと考えられる。2段目からは小口積みされているが、奥壁が何段から構成されていたかは不明で、3段目までは持ち送りはそれほど顕著ではない。

側壁は現存する長さ約4.55m、高さ約1.6mを測る。ただ、左側壁には袖部が認められず、検出できた側壁が玄室に止どまるのか、あるいは羨道にかかっているのかは明らかにすることができなかった。なお、左側壁は中央部でやや膨らむいわゆる「胴張り」状を呈している。

く掘り込まれているような形跡は認められなかった。

石室は奥壁と左側壁のみが遺存していたが、いずれも完存しているわけではない。

奥壁は現存する長さ約1.25m、高さ約1.5mを測り、3段目までが遺存している。最下段には幅約1.18m、高さ約0.95m、厚さ約28cmの扁平な大型の石材を立てて据えている。奥壁最下段の石材

側壁は石材の大きさに制約されて、やや不揃いであるが、4～5段目までが遺存していると思われる。石材は良く面の整えられた割り石が多く用いられ凹凸はほとんど認められない。また、隙間には小ぶりの石材を埋め合わせている。

最下段は高さ約95cm程度の扁平な石材を奥壁と同様、立てて構築している。2段目から上方は、小口面を石室内側に向けて横積みされ、3段目程度までが掘方内に構築されている。石室背面の掘方との隙間は石材を据えるたびに土砂を充填して良くつきかため、さらに上部の石材を据える作業が繰り返し行われている。しかし、2段目から上方の側壁は不揃いで、斜め方向に積まれた石材もみられ、整然とした構築方法は採られていない。側壁の上部は前方へ迫り出しているが、本来は奥壁に近い部分で見られるように、持ち送りはそれほど明確ではない。

天井石は全く認められず、持ち去られたのであろう。したがって、石室の高さについては不明である。

石室は奥壁端と側壁端を結んだ、ちょうど石室の対角線で切り取られたように残っている。左側壁端が石室のどの部分に当たるのかは明らかではないが、石室平面の約2分の1弱が遺存していると思われる。石室内は宅地を造成した際の盛土と考えられる攪乱土が充満していたが、それを除去すると、黒褐色土の堆積がみられ、鎌倉時代の土器が出土したことから、石室が後世に再利用されたいことが判明した。黒褐色土の下層は薄い茶褐色土の堆積があり、石室床面に及んでいる。石室床面には敷石や排水溝などの施設は認められず、地山面が直接、床面として利用されている。

石室の平面形は左側壁には袖部が認められず、少なくとも両袖式石室では無いらしいことは明らかで、出土遺物の時期からみて、無袖式石室とするよりは、片袖式石室であったと考えた方がより妥当性があるかも知れない。

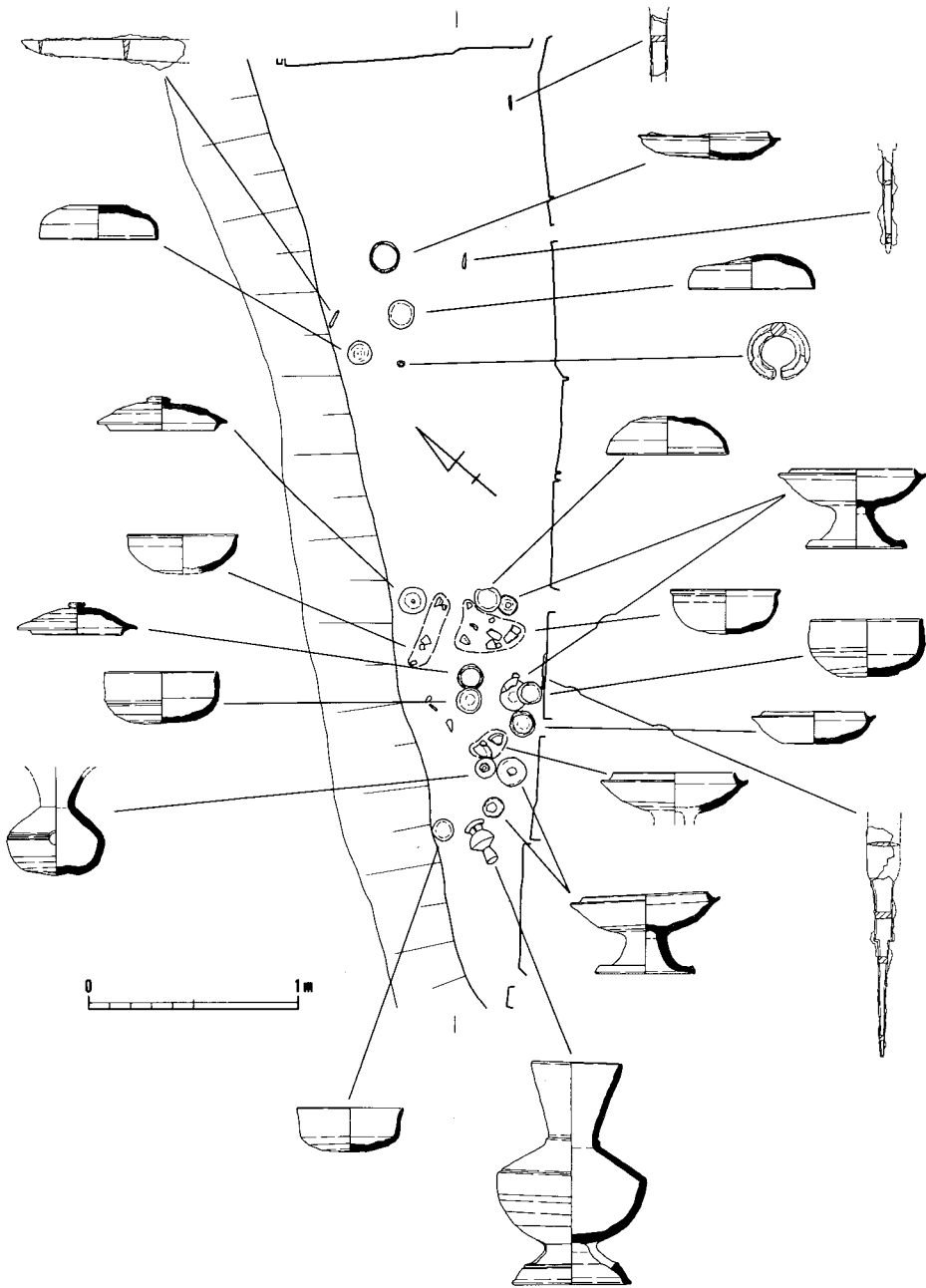
4. 遺物の出土状況

既にこれまで触れたように、古墳の遺存度は極めて悪く、遺物の出土もほとんど期待できなかったが、石室床面が遺存していた部分で耳環、鉄器、須恵器などが検出できた。また、墳丘を画する弧状溝からは須恵器が1点出土している。

石室外では墳丘を画する弧状溝から須恵器の坏が出土した他、攪乱土中から甕腹小片が1点出土している他は、全く出土遺物は認められなかった。

石室床面上層に堆積していた黒褐色土中から土師器の小皿2点と、土師質の土鍋片が1点出土した。黒褐色土層からは他に出土した遺物がないことから、少なくとも鎌倉時代までは天井石が残存していたのではないかと思われ、石室が利用されたことを示している。

石室床面は約二分の一が消滅していたが、残存する床面にはまとまった遺物を検出することができた。床面の遺物は出土状態から、大きく3群に分けることが可能である。



第72図 遺物出土状況

第I群は最も奥壁に近い部分で検出された鉄鍔片で、1点のみである。左側壁とのコーナー付近で出土したが、第2群とは約70cmほどの空白部分があり、第I群として分離した。第II群は奥壁から約0.9~1.5m隔てた石室中央部分で検出された1群である。須恵器の蓋

2点(2・4)、坏1点(7)の他、耳環1点、鉄鏝片2点がみられるが、やや散在した出土状況を示している。

第Ⅲ群は奥壁から約2.5～3.8mの間で検出された1群で、床面の遺存する面積は少ないが、前2群に比較すると密集した出土状況を示している。また、奥壁に最も近い部分は、左側壁の4石目と5石目の境で側壁と直交するように直線状に並んでいるが、床面の遺存部分が少ないこともあり、何等かの意味を持つかどうかは明らかでない。この1群には完形品を含む須恵器の坏(8・9)、蓋(4～6)、高坏(15～16)、埴(10～13)、甕(17)、脚付長頸瓶(18)の他、放射状暗文を施す土師器坏片、鉄鏝片1点、刀子片1点がある。須恵器には完形品の他、高坏の坏部と脚部とがやや距離をおいて二つに分離したもの、及び小片に破砕したものがある。ただ、小破片のものも、同一個体が至近距離にまとまっている傾向がある。

以上のように、床面には3群からなる遺物がのこされていたが、いずれも散乱した状況を示し、二次的に移動しているのではないかと考えられる。

5. 遺物

庵ノ谷古墳出土の遺物には、須恵器、土師器、土師質土器、鉄器、耳環などがある。このうち、古墳に直接関係する遺物は、須恵器、土師器、鉄器、耳環である。

(1) 須恵器

古墳時代の須恵器は墳丘を画する弧状溝から出土した坏1点と、石室床面から出土した17点の合わせて18点である。

坏(1、7～9)

4個体出土した。1は墳丘周溝中の出土で、その他は石室床面出土のものである。なお、坏(7、8)は胎土、技法などに共通点があり、蓋(3、4)とそれぞれセットになるものと思われる。

坏は立ち上がりをもつ古墳時代通有のタイプのもの(1、7、8)と、蓋・坏逆転後のタイプ(9)の2形態がある。立ち上りのある坏も、形態的差異があり、形式的には7→8→1と変化が窺える。

1は小型化の著しい坏で立ち上がりは低く、受部端とはほぼ同じ高さである。底部外面はヘラ切りのまま不調整で、回転ヘラケズリは行われていない。7は浅く扁平な底部に矮小化した立ち上がりをつける。底部外面は粗雑な回転ヘラケズリ調整が行われている。底部内面には仕上げナデが施されている。8は小型化が著しい坏で、扁平な底部から彎曲して体部に続く。

9は立ち上りの消失後の坏で、口縁部上半は外反する。底部は丁寧に回転ヘラケズリ調整が行われている。

蓋 (2~6)

蓋には2形態がある。3は坏(7)とセットになる蓋である。天井部と口縁部の境界は不明瞭で、端部は丸くおさめている。4は坏(8)とセットになる蓋で、坏に対応するように、扁平な天井部から大きく彎曲した口縁部をつける。いずれも極めて粗雑な回転ヘラケズリ調整が行われている。内面中央には仕上げナデを施す。口径に比して器高が高く形態的にはやや古相を呈するが、調整技法などに新しい要素があり、3、7の蓋・坏より後出するものであろう。2は口縁部がわずかに屈曲しているが、天井部と口縁部の区別が困難である。天井部外面には極めて粗雑な回転ヘラケズリが行われているが、切り離し痕との区別が不明瞭である。

5、6はかえりをもつ蓋で、口径にやや大小があるが近似した器形である。つまみは宝珠つまみではなく、5は中央でくぼみ、上端部で面を作る。天井部は回転ヘラケズリされ、内面中央には仕上げナデを施す。10、11などのような壺とセットになるとする考えもあるが、少なくとも庵ノ谷古墳出土のものは、胎土などに相違があり、セットになるのかどうかは明らかではない。

壺 (10~13)

壺には2形態ある。10、11は直立する口縁部をもつ壺で、底部と口縁部の境に浅い凹線を1条巡らしている。11の口縁部は内彎気味で端部は直立する。底部外面は粗雑な回転ヘラケズリが行われている。10は口縁部内面を僅かに肥厚させている。

12、13は底部が丸みを持ち、口縁端部を外反させる壺で、形態的には土師器の影響があるのかもしれない。いずれも底部外面はヘラ切りのまま不調整である。

有蓋高坏 (14~16)

いずれも灰白色を呈し、軟質で焼成が悪く、同じ生産地のものであろう。15は脚部が出土しなかった。坏部の立ち上がりは低く、端部はやや尖り気味である。脚部は底脚で無透かしである。

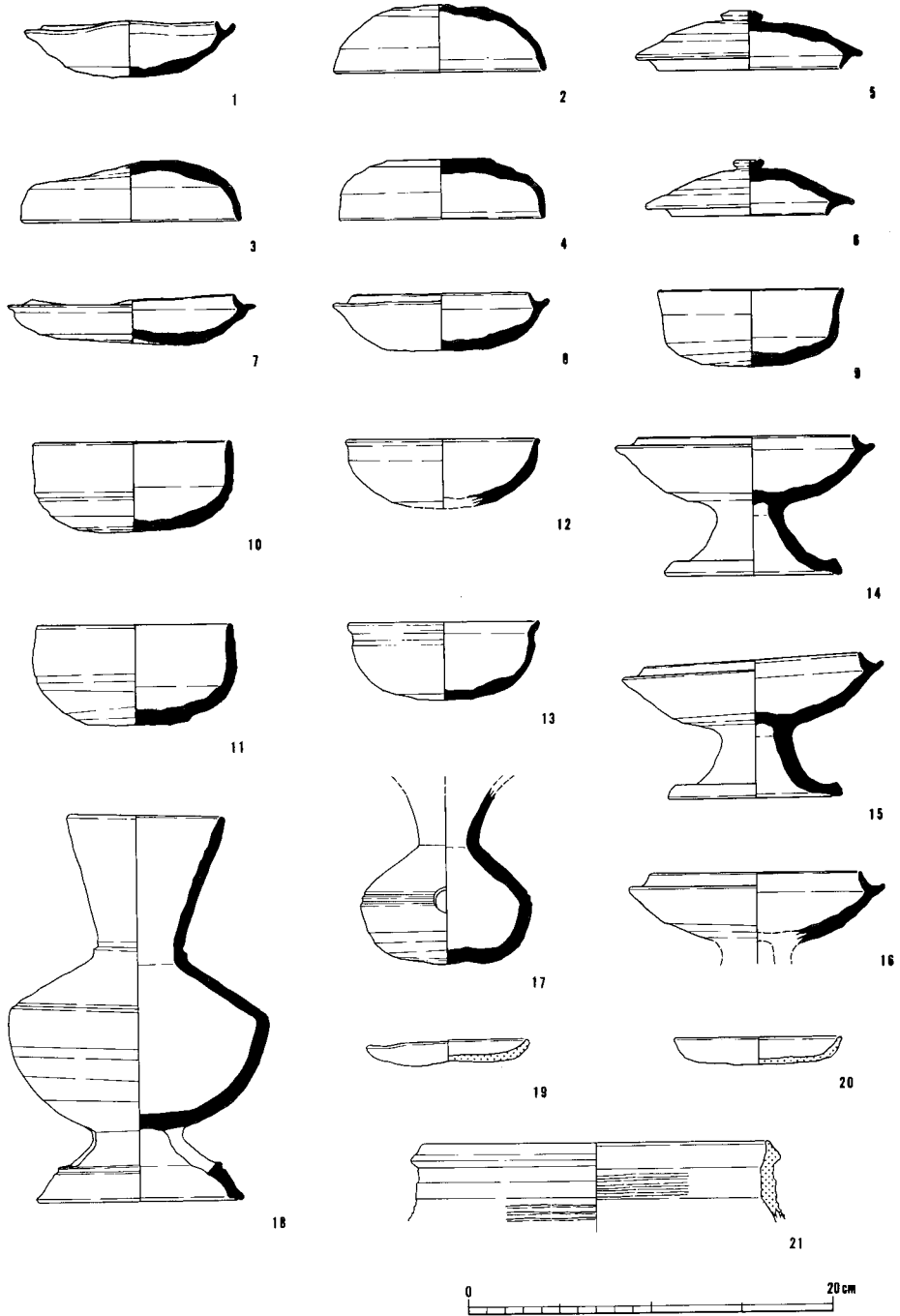
甗 (17)

口縁部を欠出しているが、長い口頸部をもつ小型甗であろう、体部中央には2条の凹線が巡らされている。底部は回転ヘラケズリ調整されている。

脚付長頸瓶 (18)

長い漏斗状の口頸部をもつ脚付長頸瓶である。体部は直線的にのびる肩部から鋭く屈曲して、彎曲する胴・底部へ続く。頸部と胴部の境界に凹線を巡らしている。底部から胴部下半にかけて回転ヘラケズリ調整されている。外方にふんばる脚部には方形の透かしが3方に穿たれている。

(2) 土師器



第73図 出土土器

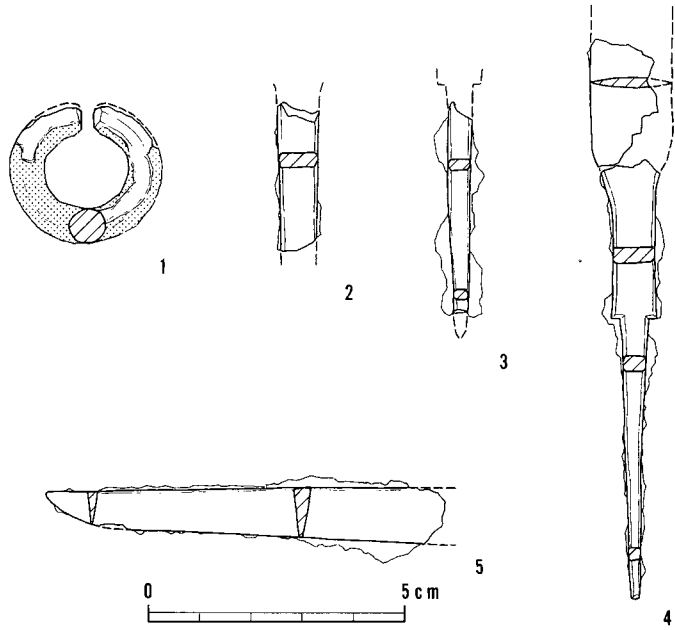
なお、出土土器には須恵器の他、土師器片がある。土師器は放射状暗文が施された坏であらう。

(3) その他の土器

19~21は古墳再利用時の遺物で、土師器の小皿(19、20)と、土師質土鍋(21)がある。21は外面に煤が付着しており、土鍋としておく。

(4) 銅製品

銅製品には銅芯銀張りの耳環(1)が出土した。長径2.95cm、短径2.7cmで、環部は径6.5mmを測る。銀張りの一部が剥がれ、銅芯が露出する部分は錆化して緑色を呈している。



第74図 出土耳環・鉄器

(5) 鉄器

鉄鏃(2~4)

いずれも破片である。最も残りの良い4は、おそらく両丸造筧被柳葉式に属する鉄鏃であろう。筧被長2.5cm、茎長5.5cmである。2は筧被片で現存長2.9cm、3は茎片で現存長4.1cmである。

刀子(5)

身部片で、切っ先から7.8cmが残存する。棟厚は切っ先部で1.5mm、中央部で3mmを測る。

6. 小結

以上庵ノ谷古墳の調査結果について触れたが、墳丘や横穴式石室は後世の削平のため、必ずしも十分な成果を得ることができなかったが、床面から出土した遺物によっておおよその築造時期を知ることができた。

庵ノ谷古墳出土の須恵器は、その特徴からII期最終末からIII期初頭に属する須恵器であろう。石室床面の出土地区と比較すると、出土量は少ないが床面II群(2、3、7)は古い様相を示す1群で、TK209型式に併行すると考えられる。一方、最も出土量の多いIII群はII期に入る可能性のある須恵器も含まれているが、概ねIII期初頭のTK217型式に併行するとみられ、6世紀末から7世紀初頭に築造され、7世紀前半まで追葬が行われたのであろう。

庵ノ谷古墳

ただ、青野川流域を含め、三田盆地の古墳時代須恵器の特色が今ひとつ不明瞭である現在、庵ノ谷古墳出土の須恵器の位置付けは、将来の課題として置きたい。(井守)

第12表 出土土器計測表

挿図 No.	図版	器 種	出土地区	法 量 (cm)				色 調	備 考
				口 径	器 高	最大径 坏 高	底 径		
1	50	坏	弧状溝	9.6	(2.8)	—	—	灰~青灰色	須恵器
2	50	蓋A	石室床面Ⅲ群	11.1	3.3	—	—	灰白色	"
3	50	蓋A	石室床面Ⅱ群	11.9	(3.4)	—	—	灰色	" 7とセット
4	50	蓋A	石室床面Ⅱ群	11.5	3.7	—	—	青灰色	" 8とセット
5	50	蓋B	石室床面Ⅲ群	10.0	3.2	2.6	—	灰~青灰色	"
6	50	蓋B	石室床面Ⅲ群	8.4	3.1	2.5	—	灰~黒灰色	" 3とセット
7	50	坏	石室床面Ⅱ群	11.2	(2.5)	—	—	灰~赤灰色	" 3とセット
8	50	坏	石室床面Ⅲ群	9.6	3.1	—	—	灰白色	" 4とセット
9	50	坏	石室床面Ⅲ群	10.0	4.2	—	—	青灰色	"
10	51	埴A	石室床面Ⅲ群	10.8	4.9	—	—	青灰色	"
11	51	埴A	石室床面Ⅲ群	10.4	4.3	—	—	灰色	"
12		埴B	石室床面Ⅲ群	(10.5)	—	—	—	青灰色	"
13	50	埴B	石室床面Ⅲ群	10.6	5.5	—	—	灰色	"
14	50	高坏	石室床面Ⅲ群	11.8	7.6	3.7	9.5	灰白色	"
15	50	高坏	石室床面Ⅲ群	11.8	7.6	3.5	9.4	灰白色	"
16		高坏	石室床面Ⅲ群	11.6	—	—	—	灰色	"
17	51	脚付長頸瓶	石室床面Ⅲ群	8.4	21.2	14.4	11.2	灰色	"
18	51	甗	石室床面Ⅲ群	—	—	9.5	—	青灰色	"
19		小皿	石室埋土	9.1	1.5	—	—	赤褐色	土師器
20		小皿	石室埋土	8.7	1.3	—	—	赤褐色	"
21		鍋	石室埋土	(19.0)	—	—	—	赤褐色	土師質土器

末野地域



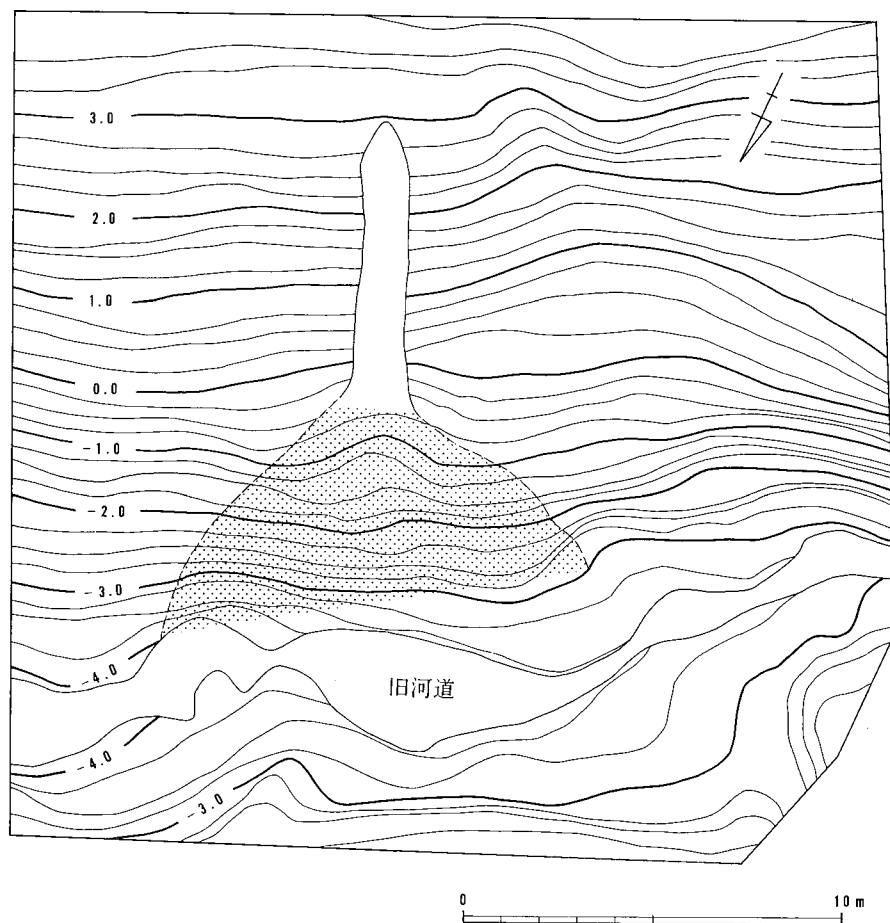
した。

2. 窯の構造

窯は全長8.5mの半地下式の窖窯である。窯体の幅は焚口で1.8m、焼成部で1.5m、先端部で0.8mを測る。焚口が「ハ」の字形に開き、奥に行くほど床幅が狭まる構造の窯である。側壁の垂直高は最も高い所で、0.8mである。床面傾斜は下方では、25°であるが、焼成部の上方から煙道部にかけて、弓なりに立ち上がり、40°の急傾斜となっている。窯体主軸の方位はS21°Eである。

窯体内部には、200点以上の遺物が残されていた。残されていた遺物はほとんどが蓋・坏類である。完形品は皆無に近く、いずれも割れやひびのあるもので、2次焼成を受けているものも多数含まれる。

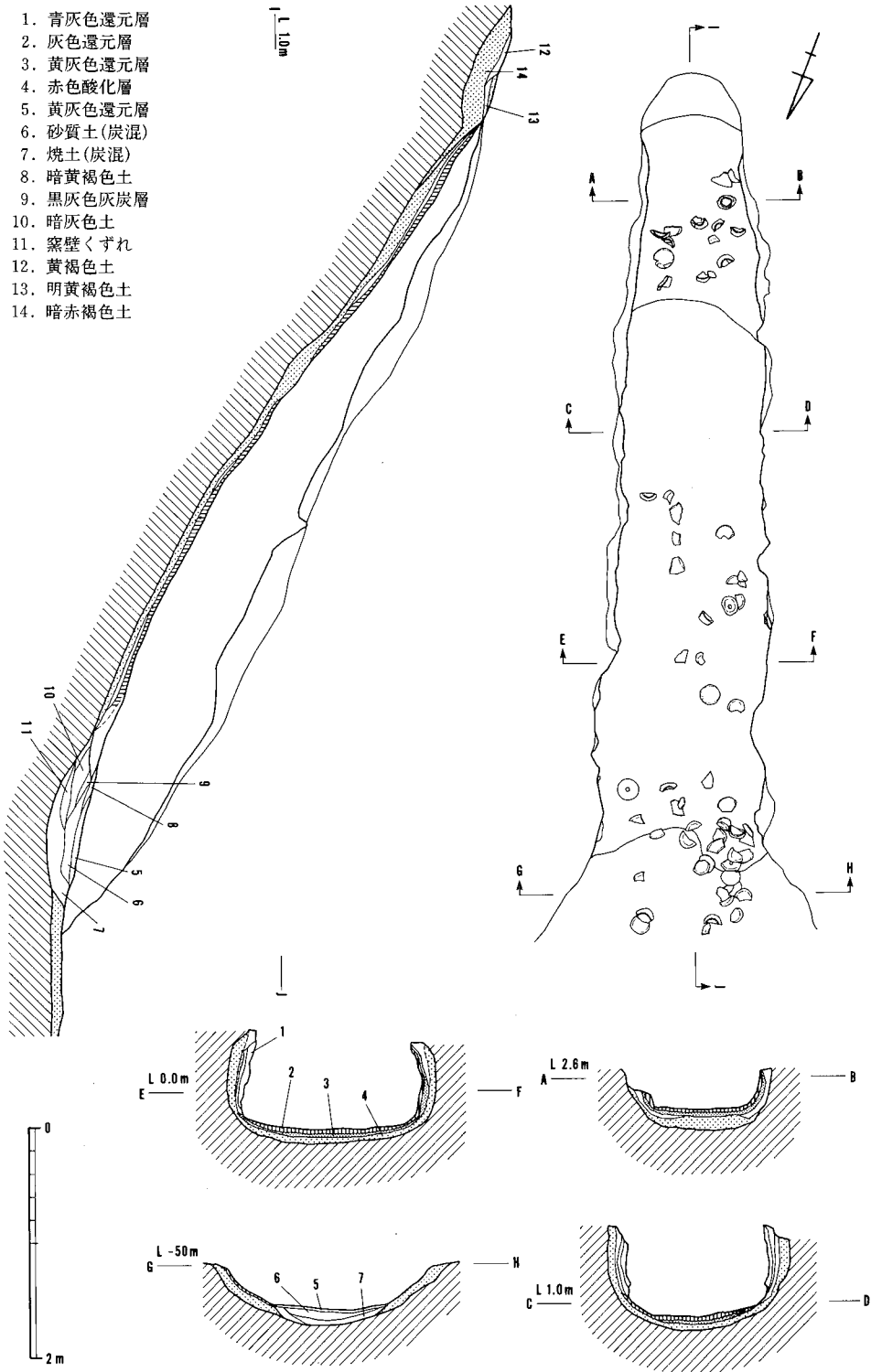
側壁はスサ混じりの粘土を貼りつけて部分的に補修している。床面の枚数は基本的には1枚であるが、燃烧部の床面の下には、灰・窯壁片・焼土の堆積があり、掘り下げると、



第76図 地形測量図

川端窯

1. 青灰色還元層
2. 灰色還元層
3. 黄灰色還元層
4. 赤色酸化層
5. 黄灰色還元層
6. 砂質土(炭混)
7. 焼土(炭混)
8. 暗黄褐色土
9. 黑灰色灰炭層
10. 暗灰色土
11. 窯壁くずれ
12. 黄褐色土
13. 明黄褐色土
14. 暗赤褐色土



第77図 窯体実測図

長径1.5m、短径1.0m、深さ0.3mの舟底形の浅い土壇となった。このことから、操業開始段階には、燃烧部が少し掘り下げられ、烧成部と燃烧部とが明確に区分されていたが、操業の最終段階には、烧成部と燃烧部の間にほとんど傾斜変換点をもたない構造につくりかえたことがわかる。

前庭部そのものは奥行き1m前後であるが、前庭部から続く斜面上の灰層の堆積を利用することによって、焚口の前面に、前後約2mの作業スペースを確保している。灰層の厚さは斜面で40～50cmの厚さである。灰原の下半分は谷の旧河道にある。谷の旧河道中の灰層は砂層と互層になって堆積していた。

3. 遺物

本窯跡は奈良時代に属する窯跡である。窯体・灰原からは各種の須恵器が出土しているが、器種の大まかな分類および名称については、基本的に奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書XI』（以下、『平城宮XI』と略する。）の記載に従った。但し、各器種の細分については、ローマ数字等の記号を便宜的に付した。

蓋 I (1～26)

天井部は比較的丁寧なへら削りを行い、扁平である。4～6のように天井部が笠形になるものもある。つまみはほとんどが扁平な笠形であるが、10のように頂部を陥没させるものがある。

口縁部の形態は、1～12のように口縁端部を短く内側に屈曲させるものと13～25のように口縁の長さが長く、口縁端部の屈曲の程度がゆるやかなものと大きく2つのタイプに分かれる。このほか、26のように、天井部と口縁部の境の稜があまり明瞭ではなく、口縁部の屈曲があまりシャープでないものがある。口径は17～18cmであるが、14・17・20のように13～14cm前後の小型のものもある。

蓋 II (27～28)

つまみが宝珠形をなし、口径が20cmの大型のものを蓋 I から区分した。天井部は笠形のもの(27)と扁平なもの(28)がある。

壺蓋 (29～31・119)

29～31は天井部までの高さが高く、短頸壺類の蓋になるものである。29・30のように、つまみが扁平な笠形になるものと31のように、乳頭形になるものがある。口縁端部はシャープである。このほか、119のように小型の壺の蓋になるものもある。

坏 B I (32～35)

器高が3.5～4cm前後、口径が9～11cm前後の小型のものである。32は断面三角形の付高台をもつ。

坏 B II (36～63)

高台の形態によって、大きく2つのタイプにわかれる。1つは36~53のように、高台が短く直立するが、わずかに外側に踏ん張るもので、高台の断面が四角形になる一群である。あと1つは54~63のように、高台の底面を内側に傾ける一群である。高台の幅も前者に比べて広い。

口径は15~16cm、器高は3.5~4cmのものが大半を占めるが、42・43・52・53・60~63のように器高が4cmを超えるものがある。中でも、63は器高5.2cm、口径17.1cmと大型である。43・54~56・61・63は体部下半から底部外面にかけてへら削りしたあとが残る。

坏BⅢ (64~68)

各々タイプが違うが、坏BⅠ・Ⅱに含まれないものを一括した。

64は体部下半に鈍い稜をもち、外側に踏ん張る付高台をもつ。形態的には、稜塊に近いが、稜塊とするには、稜が鈍く、作りも雑である。

65は口径12cmに対して器高が5.6cmと高く、体部は付高台より直ちに立ち上がる。体部はやや丸みをもつ。高台は外側に踏ん張る。

66は器高が4.2cmと高く、体部は付高台より直上方向に直ちに立ち上がる。高台は外側に踏ん張る。67は66と比べ、口径が18.2cmと広く、器高も6.4cmと高い。高台がやや内側にはいる。体部は直線的で直上方向に立ち上がる。

68は器高4.6cmに対して口径が19.4cmと広く、口径20cm前後の蓋Ⅱがこれに対応するものと思われる。

皿 (69~84)

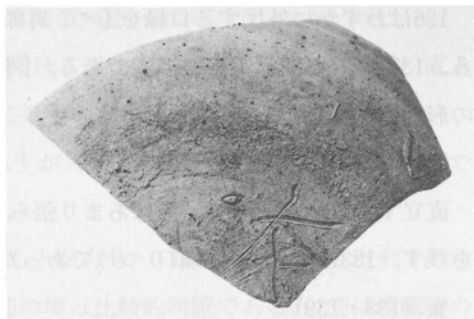
小型のもので、いくつかのタイプがある。69~72は口縁部を外反させる。『平城宮Ⅺ』の皿Eに該当しよう。73・74は口径6.5cm前後のミニチュアのもので、底部外面に丸みをもつ。75・76は体部外面下半を強く横ナデしている。77~84は坏Aを小型化した形態である。

坏A (85~109)

底部へら切りの平底の坏である。底部と体部の境が丸いものと体部と底部の境が明瞭に区分できるものがある。器高は3~4cm前後である。口径は109のように15cm前後のものがあるが、ほとんどは12~13cm前後である。

底部片の中には粘土紐の巻き上げ痕に沿って割れ目があるなど、粘土紐巻き上げの痕跡を明瞭に残すものがある。

108は体部下半から底部外面をへら削りしている。109も体部下半をへら削りしている。108・109とも体部の形態、体部下半のへら削りなどの特徴から明らかに高台をも



第78図 坏A (87) へら描き

たない坏B形態そのものである。

87の底部外面には、「卒」のヘラ描きがある。文字か記号か不明である。

長頸壺 (110~118)

細長く伸びる頸部をもち、口縁部はハの字に開く。肩部が扁平で、体部との境が稜をもち、両者の境は沈線を巡らしている。高台は外側に踏ん張る。114のように体部が箱形に近いものや117・118のように肩が丸く算盤形に近いものがある。頸部には118のように沈線を巡らすものもあるが、数は少ない。口頸部は体部の上に乗せて接合している。体部外面に叩きの痕跡を残すものがある。

器高は19cmから24cmのものが多いが、115のように、口径16cm、頸部の長さが16cm、復元高が30cm以上の大型の長頸壺もある。

短頸壺・直口壺 (121~130・134~137)

121~126のように小型の一群と127~130・134~137のように大型の一群がある。

120は内傾する短い口縁部をもち、体部は扁平である。『平城宮XI』の壺Dに該当すると思われる。

121・122は肩に稜角をもち、体部は扁平である。『平城宮XI』の壺Cに該当しよう。124は後述の136を小型化した形態の壺で、『平城宮XI』の壺Eに該当しよう。125も短く直立する口縁部をもつが、肩は丸く稜角をもたない。

127~130は短く直立する口縁部をもち、肩は直線的である。口縁端面を平坦にするものと丸く収めるものがある。器形としては、136のような体部が稜角をもつ『平城宮XI』壺Eか、いちじく形の体部をもつ『平城宮XI』壺Aになるものと思われる。128は蓋の口縁部の破片が付着している。

134は肩部と胴部の境に沈線を巡らし、口縁部をわずかに外反させる。135は直立する口縁部をもち、やや胴がはる。肩部と体部の境に沈線をめぐらす。

136は短く直立する口縁部をもち、角形の耳をもつ四耳壺である。耳の中央部は穿孔されている。『平城宮XI』の壺Bに該当しよう。

126はわずかに外反する口縁をもつ。肩部に鈍い稜をもつが、体部はやや扁平な球形になる。137も126と同様の形態の壺である。『平城宮XI』壺Aの形態に近いが、典型的な壺Aの形態とやや異なる。

直口壺 (131~133)

直立する口縁部をもつ。肩はあまり張らない。外面に平行叩き、内面に同心円文の叩きを残す。133は体部外面に取りつけてあった把手がはずれた痕跡が残る。

壺 (138・139)

138は口縁部を外反させ、端部を上方につまみあげる。頸部に2本の沈線を巡らす。『平

城宮 XI』の壺 L に該当しよう。139 は口縁端部を欠いているが、長い頸部をもち、肩部に 2 本の沈線を巡らしている。『平城宮 XI』の壺 L に該当すると思われ、体部は卵形になるう。

高 坏 (146~150)

146・147 は小型高坏の皿部である。底部には、外縁に沿って 1 条の沈線状の圈線を巡らす。底部外面をへら削りしている。148・149 は 146・147 形態の皿部をもつ脚部である。149 の内面には×印のへら描きがある。150 は大型の高坏であるが、皿部および脚端部を欠く。

水 瓶 (140)

頸部に 2 条の沈線を 2 組巡らす。口縁端部を外反させる。

広口壺 (141~145)

145 は口縁部を外反させ、端部を直上につまみあげる。肩部から体部にかけて「く」の字形に屈曲させる。高台は長頸壺とほぼ同じ形態で外側に踏ん張る。形態としては、『平城宮 XI』の壺 Q にあたるものである。144 は小型の壺で、口縁端部を上方と下方にそれぞれつまみ出している。

平 瓶 (151~153)

小型の平瓶 (151・153) と大型の平瓶 (152) が出土している。体部は稜角をもつ。151 の口縁部は提梁の角度からみて、ほぼ、直上を向くと思われる。151 の提梁断面は扁平な長方形であるが、153 の提梁断面は台形状である。151・153 の体部背面の中央には成形時の円孔があり、粘土板で埋めた上に提梁を接合している。この他、図化していないが、口縁部に 2 条の沈線をもつものがある。

鉢 I (154~162)

大きく 4 つのタイプに分かれる。1 つ目は口縁部を内側に傾けるもので、このタイプとしては 155・157・161 がある。体部はやや斜め直線的に立ち上がる。161 は口縁部外面に 1 条の沈線を巡らす。159 は口縁部を欠くが、形態からみて 155・157・161 と同様のタイプになるとと思われる。体部と底部の境付近をへら削りしている。

2 つ目は 154・156 のように、口縁部を内側に傾けるが、体部をあまり外傾させず、直上方向に立ち上がらせるものである。154 は左右に把手をもつ。

3 つ目は 160 のように、体部を直上方向に立ち上がらせ、口縁部を内傾させないタイプである。体部と底部の境付近をへら削りしている。

4 つ目は 158・162 のように、体部を斜めに立ち上がらせ、口縁部付近を強くナデて、わずかに外反させるものである。162 の体部と底部の境は比較的明瞭である。162 は焼成時のひずみ等を考慮すれば、口縁部・底部とも、もう少し径が小さくなる可能性がある。

鉢 II (163~165)

底部外面に刺突をもつもの (164・165) ともたないもの (163) がある。

163は内面が吹き飛んで、原形を留めないが、粘土板を何枚か重ねて底部を作っている。底部外周の段は成形時の粘土の積み重ねの痕跡を示す。

164の体部は底部の外縁より、約8mm程度内側にはいったところから立ち上がる。底部外面は丸みもち、幅8mmの先の尖ったヘラ状工具による刺突がある。刺突は底部内面ぎりぎりまで及んでいるものもある。底部外面は丸味をもつ。



第79図 すり鉢 (165) 底部

鉢 III (166)

口径14cmの椀型の器形であるが、一応鉢に分類した。口縁部を外反させ、ヘラ切りの平高台状の底部をもつ。体部外面に成形時の段が残る。

鉢 IV (169~176)

口縁部は「く」の字形に屈曲する。口縁端部は平坦。体部はほぼ直線的である。175は外面に叩きの痕跡が残る。

鉢 V (177)

体部外面に半環状の把手を持つ。頸部は「く」の字形に屈曲し、口縁部に続く。口縁端部を上方につまみあげる。

甗 (167・168)

167・168ともに上部の破片で底部を欠くが、167は体部上半に2条の沈線、168は把手をもち、外面に同じく2条の沈線をもつ。

盤 (178)

口径41cmの大型の盤である。口縁端部は内側にわずかに突出するが、口縁端面は平坦である。左右に把手がつく。中ほどに2条の沈線をもつ。

甗 I (179~183・194)

あまり、肩の張らない比較的小型の甗である。頸部は「く」字形に屈曲する。口縁端面が平坦で、端部は内側に突出する。

甗 II (184~186・189)

口縁部が大きく外反するため、口縁端面は横方向に向く。甗 I と同じく肩の張らない比較的小型の甗である。

甕Ⅲ (187・188・190・199~201・212)

肩に張りをもつ大型の甕の一群である。187・188・200は頸部を直立させ、口縁部を直上方向につまみあげる。口縁部外面を丸く収める。201・202は端部を下方につまみ出す。201は頸部に叩きの痕跡が残る。212は歪みが大きい、復元高30cm余りの甕である。

甕Ⅳ (202~211)

口縁部から頸部にかけて波状文または、突帯をもつ一群である。

202は頸部に細かい波状文が施されている。体部は上部に最大径をもつ。復元高は約80cmに達する。口縁端部を下方につまみ出している。

206~208は「ハ」の字形に開く頸部をもつ。口縁端部を下方につまみだし、口縁部の下に突帯を1本巡らす。203~205も「ハ」の字形に開く頸部をもち、口縁部の下に突帯を1本巡らし、頸部に1段ないしは2段の波状文を巡らす。口縁端面は平坦で水平方向を向く。

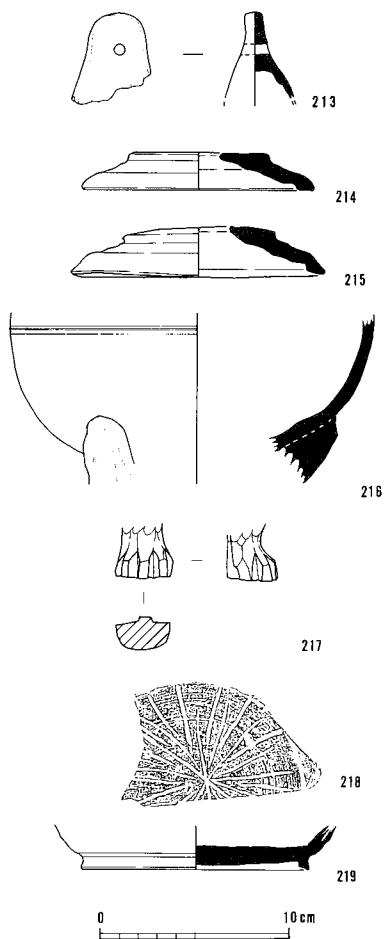
210の頸部は「ハ」の字形に開くが、口縁部付近で角度を変えてわずかに内彎させる。口縁外面は段をもち、口縁端面は平坦である。頸部から口縁部にかけて、5段の細かい波状文を巡らし、各波状文の間には、各1本ずつ沈線を巡らす。211も頸部は「ハ」の字形に開き、口縁部付近で角度を変えてわずかに内傾させる。頸部から口縁部にかけて、3段の粗い波状文を巡らす。各波状文の間には、各2条の沈線を巡らす。

209は「ハ」の字に開く口縁部をもち、口縁端面は平坦である。口縁部外面に粗い波状文をもつ。

甕Ⅴ (191・193・195~197・198)

前述の甕Ⅰから甕Ⅳに含まれないものを一括した。

191は短く直立する口縁部をもつ。口縁端面にはナデによる段がある。193は直立する口縁部をもち、内面の同心円文の叩きをハケ状の工具で消している。肩はほとんど張らない。195は直立する頸部をもち、口縁部を丸くおさめる。196は口縁端部を直上につまみあげる。肩はほとんど張らない。197は外面及び頸部内面にハケの痕跡が残り、土師器的要素をもつ。



(213~219: 灰原)
第80図 出土土器(1)

横瓶 (192)

端部を187~188と同じく丸く収める。体部外面は叩きの後、カキ目を施す。

その他 (213~219)

213はたこ壺のつり手であろう。つり手の中央部には直径5mmの穴が穿孔されている。

214・215は頂部が平坦で、中央部が穿孔されている。作りはあまり丁寧ではない。陶邑高蔵寺217号窯でも出土例があり、焼成台と考えられている。本窯跡での出土点数は、この2点だけであるので、焼成台として使われたかどうかは不明である。

216は上部を欠くが、短頸壺の底部であろう。三方に脚をもつが、脚部の先端は失われている。217は獣脚と呼ばれるもので、206形態の脚の先端部である。

218は坏Bの底部片である。内面には、おろしめ状に引かれたへら描きがあり、半径4cm前後のへら状工具で引いた後、何本かの直線を中央で交錯するように引き、各直線の間の空間を埋めるように、短い直線を引いている。

4. 小結

本窯跡における器種構成は蓋・坏などの小型供膳形態と壺・甕などの貯蔵形態のものからなる。個体数の上では、坏・蓋などの小型供膳形態のものが圧倒的に多いが、壺・甕などの貯蔵形態の量も決して少なくない。壺類の中では、長頸壺の占める割合が高いのと多種の小型の壺が焼成されていることが注目される。本窯跡では、皿類が、小型のものを除いて、見当たらないが、奈良時代に見られる器種のほとんどが含まれており、きわめて多様な器種構成をもつ。

次に個々の器種の特徴について述べておきたい。まず、坏Bの蓋については蓋I・蓋IIと2種類に大まかに分類できる、数量の上では蓋Iの形態が圧倒的に多い。蓋IIはむしろ数の上からは特殊なタイプとなる。

蓋Iについては、前項で述べた通り、口縁端部を短く内側に屈曲させるものと(a)口縁部の幅が前者に比べて長く、口縁端部をあまり内側に強く屈曲させないもの(b)がある。両タイプは灰原だけでなく、窯体内からも混在して出土しており、時期による手法の差ではなさそうである。また、両タイプは本窯跡だけにみられるのではなく、同じ落合1・2号窯にもみられるが、本窯跡のaタイプの口縁端部は落合1・2号窯に比べて、比較的シャープである。郡塚2号窯ではbのタイプのみが出土しているが、同窯跡では遺物の採集点数が限られているため、aのタイプが存在しているかどうかは不明である。蓋Iの口径は17~18cmのものが大半であるが、14・17・20のように、口径13cmの小型のものが若干含まれる。小型の蓋については、対応する器種を強いてあげるとすれば、坏B Iであるが、坏B Iの口径が9~11cmで、小型の蓋との間に口径で2~4cmの差がある。

蓋IIは口径が大きく約20cmある。蓋IIについては坏Bのうち68と対をなすものと思われる

る。蓋IIは落合1・2号窯では坏B蓋IIIに分類されているもので、同1・2号窯ではつまみは扁平であるが、本窯跡では宝珠形である。

坏BはB IIのほか、小型のB I、前二者に含まれない少数のB IIIがある。B IIについては、前項で述べた通り、高台が短く直立するか、わずかに外側に踏ん張るものと高台の幅が広く、高台の底面を内側に傾けるものとかある。郡塚2号窯にも後者のタイプの高台をもった坏Bが出土している。

口径は15~16cm、器高は3.5~4cm前後である。43・52~56・61・63のように体部下半から底部外面にかけてへら削りしているものもあり、注目してよい。

65は形態的には、稜坑に近いが、稜は鈍く、セットになる蓋も出土していないので、稜坑とすることについては、やや不安がある。

坏Aについては、口径12~13cm、器高3.5~4cm前後のものが大半である。底部と体部の境は丸く収めるものが多い。108・109は口径が広く、体部下半から底部外面にかけてへら削りしており、明らかに坏Bに共通する形態である。

小皿の形態も各種あるが、そのうち、口縁部を大きく外反させる69~72は『平城宮XI』の皿Eに該当するものと思われ、郡塚2号窯からも出土している。『平城宮XI』によると、皿Eは燈明皿として使用されたようである。

長頸壺については、大半は19~29cmの器高をもつが、30cmを超える大型のものもある。また114・117・118のように若干形態の違うものも少数含まれるが、大半は肩部が扁平で、肩部と体部の境は稜をもち、沈線を施す。落合1・2号窯の長頸壺の体部が算盤形で、体部と肩部の境に沈線をもたないのに対して、やや古い形態を残す。

甕は口縁部の形態からみると多種ある。大きさも30cm前後の小型のものと80cm以上の大型のものがある。甕Iと共通する形態の甕は落合1号窯にも出土例がある。

本窯跡の甕の中で注目したいのが、口縁部から頸部にかけて突帯と波状文をもつ甕IVである。古墳時代の甕を思わせる手法を用いているが、いずれも焼き歪みや窯壁の融着の跡が残り、明らかに本窯跡で焼成されたものと判断される。この突帯と波状文をもつ甕は京都府周山3号窯址⁽¹⁾からも出土しており、平城宮I段階に比定されている。本窯跡は後述のとおり、平城宮II段階に併行する時期の窯跡と考えており、同じく平城宮II段階に併行する時期の京都府マムシ谷窯址⁽²⁾とともに、周山3号窯址よりもさらに新しい段階まで波状文が残されていることになる⁽³⁾。

以上が本窯跡における各器種の特徴である。落合1・2号窯と本窯跡の器種構成と比較してみると、本窯跡で焼成されている壺蓋、水瓶・小型の皿・小型の短頸壺類・四耳壺・広口壺などは落合1・2号窯では見当らない。また、落合1・2号窯にあって、本窯跡にないものは、皿類・環状のつまみのある蓋等である。器種の多様性という点では、落合1・

2号窯を圧倒している。また、坏Bとそれとセットになる坏B蓋の口径は、本窯跡に比べ、落合1・2号窯の方が小型化しており、長頸壺についても、前述の通り、落合1・2号窯のそのの方が形態的にみて新しく、落合1・2号窯と比較すると、本窯跡の方が時期的に古く位置付けられる。

郡塚2号窯については、採取資料が限られているため、比較することはむずかしいが、器種・形態等を見る限り、本窯跡とほぼ並行する時期と考えてよからう。

続いて、本窯跡の絶対年代について、触れておきたい。奈良時代の須恵器については、平城宮の編年を基準にして、各地で編年が進められているので、ここでは、平城宮の編年を参考にする。

まず、本窯跡で出土している水瓶は、平城宮では、今の所、その出現は平城Ⅲの段階まで溯る。また、長頸壺については、大半が平城Ⅰの段階の長頸壺に近似するが、114は平城Ⅱ段階のS D 485出土の長頸壺の形態に近い。また、鉢Ⅰはいわゆる鉄鉢と呼ばれる『平城宮Ⅺ』鉢Aに該当するが、本窯跡では、尖底のものではなく、すべて平底である。平城宮では、鉢Aの底部の形態は平城Ⅱ段階までは平底が中心で、Ⅲ段階になって、尖底のものが出現し、以後尖底の方が一般化することが指摘されている。⁽⁴⁾ 甕は口縁部から頸部にかけて、突帯および波状文をもつものが出土しているが、前述の通り、口縁部から頸部にかけて、突帯および波状文を巡らす甕は京都府周山3号窯址から出土しており、平城宮Ⅰ段階に比定されている。また、同じく口縁部に波状文をもつ甕が出土している京都府マムシ谷窯址は、平城Ⅱの段階並行の窯である。

以上、各器種についてみると、甕などに古い要素をもつものもあるが、概ね平城宮の第Ⅱ段階の遺物に共通する形態のものが多い。また前述の通り、本窯跡は各種の小型貯蔵形態の遺物をはじめ、多様な器種構成をもつが、この器種構成の多様性は平城Ⅱ段階のS D 485出土遺物に見られる特徴である。⁽⁵⁾ これらの点から、本窯跡は平城宮第Ⅱ段階に相当する時期の窯と判断される。

(森内秀造)

註(1) 宇野隆夫他『丹波周山窯址』1982年 京都大学文学部考古学研究室

(2) 森 浩一・大井邦明他『マムシ谷窯址発掘調査報告書』1983年 同志社大学地学学術調査研究会

(3) 本窯跡群中の地福窯からも波状文をもつ甕が出土している。

(4) 西 弘海「平城宮の土器」(『土器様式の成立とその背景』1986年 西 弘海遺稿集刊行会)

(5) 『平城宮発掘調査報告 VI』奈良国立文化財研究所 1975年

川 端 窯

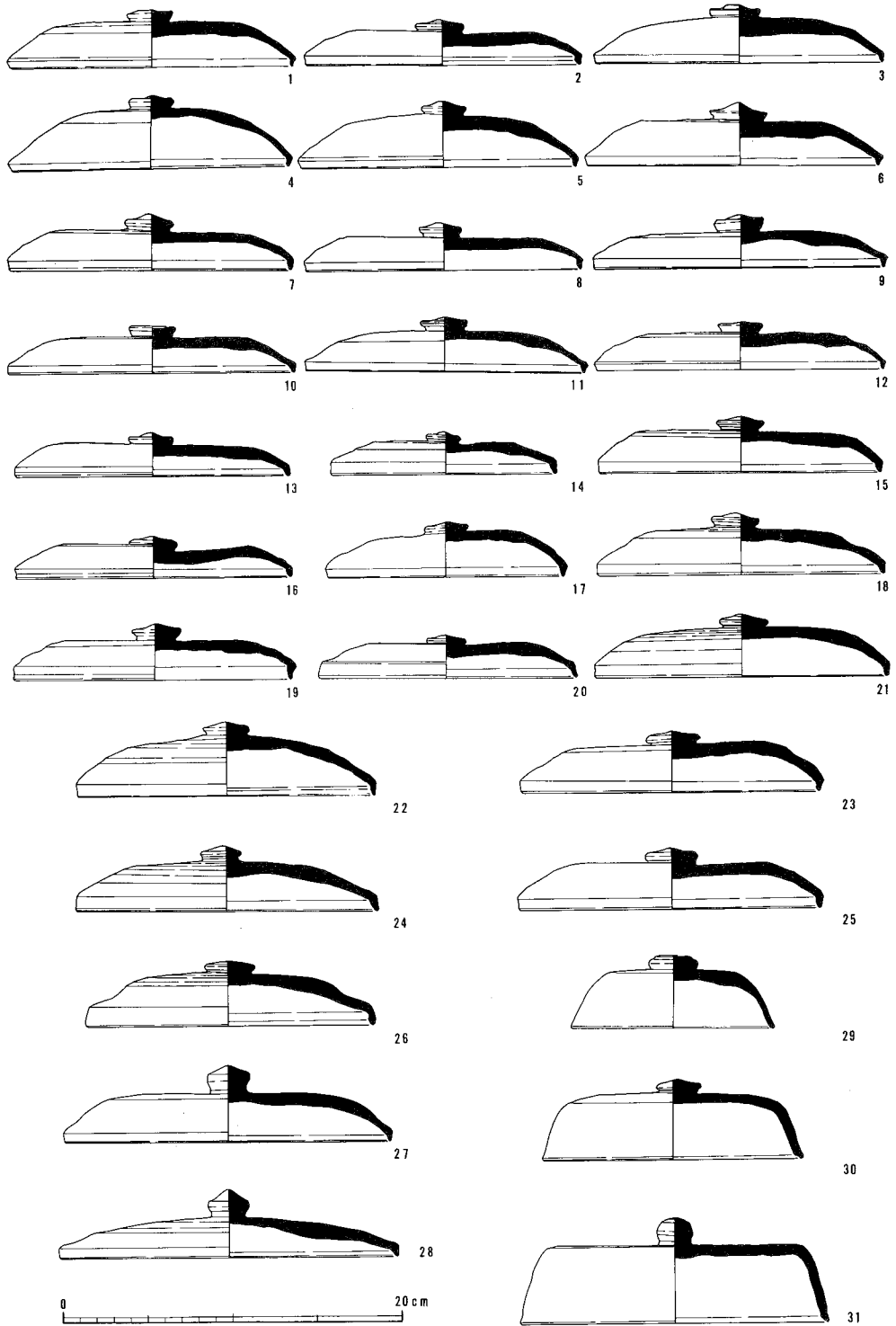
第13表 器種構成比較

窯名 器種	川 端 窯		郡 塚 2号窯	落合2号窯	落合1号窯	落合1号窯 落合2号窯 II	備 考
	器 種	遺物番号		I (古)	I (新)		
蓋	蓋 I	1~26	蓋	坏B蓋 I	坏B蓋 I	坏B蓋 I	口径12cm
				II	II	II	口径14cm
	蓋 II	27・28		坏B蓋III	坏B蓋III	坏B蓋III	口径20cm前後
	×			坏C蓋	坏C蓋	坏C蓋	口径20~25cm
	壺 蓋	29~31・119		×	×	×	
×			壗B蓋	壗B蓋	壗B蓋	稜壗蓋	
坏	坏B I	32~35		坏B I	坏B I	坏B I	口径12cm
	坏B II	36~63	坏B	II	II	II	口径14cm
				III	III	III	口径20cm
		64 (稜壗?)		壗B	壗B	壗B	稜壗
		65		×	×	×	
	坏B III	66・67		坏B II b	坏B II b	坏B II b	
			68		坏C	坏C	坏C
	×			坏C	坏C	坏C	口径20cm以上
	坏 A	85~109	坏A	坏A I	坏A I	坏A I	口径12.5cm
				II	II	II	口径13cm
III				III	III	口径15cm	
高 坏	146~149		×	×	×	小型	
	150		高坏	高坏	×	大型	
皿	小 皿	69~72	皿	×	×	×	(皿E)
		73~84		×	×	×	
	×			皿A I II	皿A I II	皿A I II	高台なし
	×			皿B	皿B	×	高台付
壺	長頸壺	110~118	壺	壺A	壺A	×	(壺K)
	(壺D)	120		×	×	×	
	(壺C)	121・122		×	×	×	
	(壺E)	124		×	×	×	
	(壺B)	136		×	×	×	
	(壺L)	138・139		壺B	壺B	×	
	小型壺	123		×	×	×	
		125		×	×	×	
		126		×	×	×	
	短頸壺	127~130・137		壺D	壺D	×	(壺B・Q)
直口壺	134・135		×	×	×		
直口壺	131~133		壺E	×	×		
壺 脚	206・207		×	×	×		

川 端 窯

窯名 器種	川 端 窯		郡 塚 2号窯	落合2号窯	落合1号窯	落合1号窯 落合2号窯	備 考
	器 種	遺物番号		I (古)	I (新)	II	
壺	広口壺 (壺Q・H)	141		×	×	×	
		142~144		壺C	×	×	
		145		×	×	×	
瓶	水瓶	140		×	×	×	
	平瓶	151~153		平瓶	平瓶	×	
	横瓶	192		×	×	×	
鉢	鉢 I (鉢A)	155・157・159		×	鉢A	×	
		154・156・161		×	×	×	鉄鉢
		160		鉢C	鉢C	×	
		158・162		×	×	×	
	鉢II(鉢F)	163~165		×	×	×	すり鉢
	鉢 III	166		×	×	×	
	鉢 IV	169~176		×	×	×	
	鉢 V	177		×	×	×	
	×		鉢B	×	×		
甌	甌	167・168		?	×	×	
盤	盤	178		×	×	×	
甕	甕 I	179~183・194		甕B	×	×	
	甕 II	184~186・189		×	×	×	
	甕III	187・188・190 212・199~201		×	×	×	
	甕IV	203~211		×	×	×	
	甕V	191・193・195 ~197・198		×	×	×	
		×		甕A	×	×	
たこ壺	たこ壺	203		×	×	×	

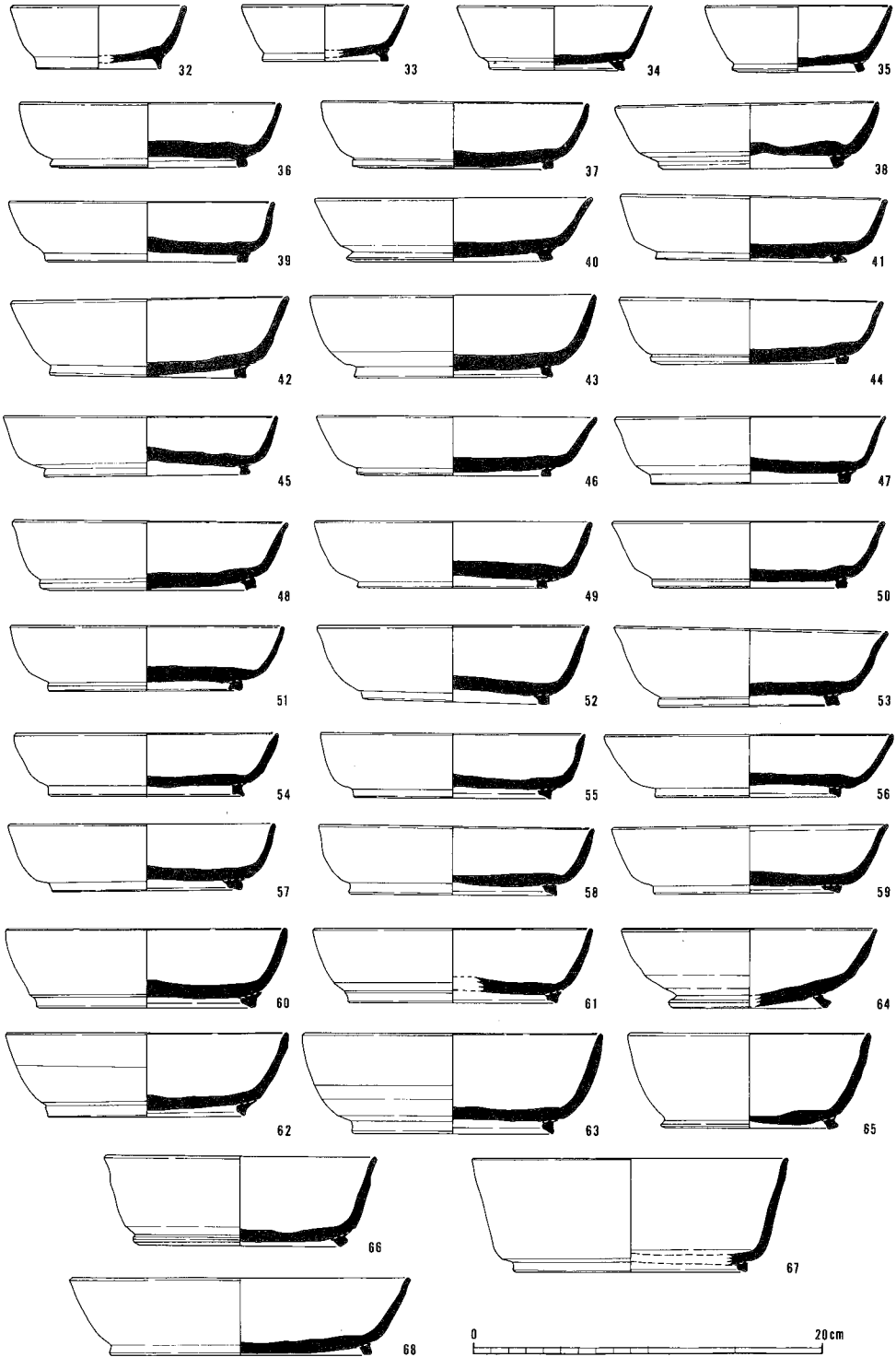
註 ()は『平城宮XI』の器種分類による。
×印 は出土していないことを示す。



(1·2·6·8·10·13·16·19 : 窯体
 3~5·9·11·12·14·15·17·18·20~31 : 灰原、7 : 前庭部)

第81図 出土土器 (2)

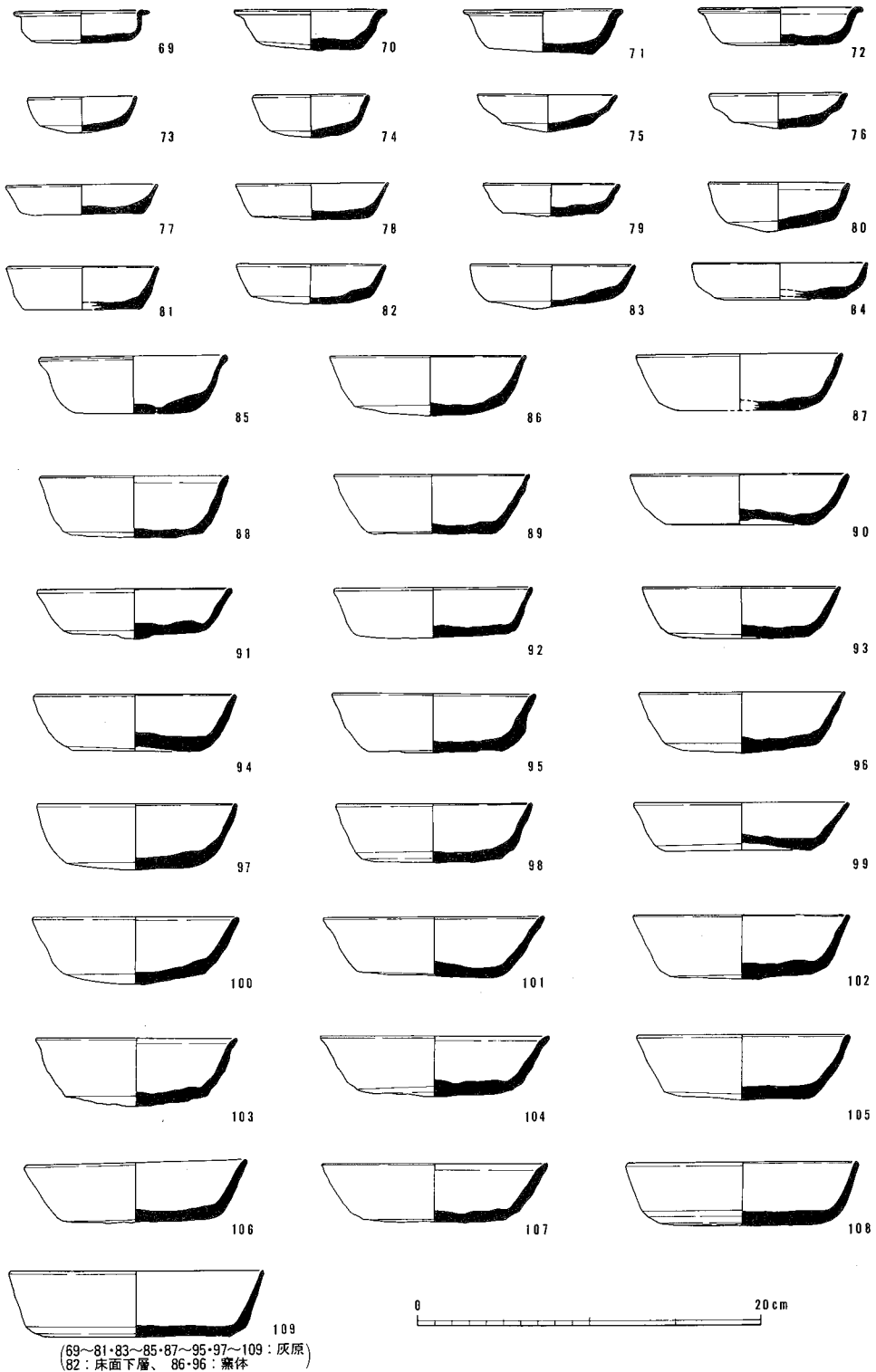
川端窯



(32~35・37・38・42・43・51~53・57・58・60~68：灰原
36・39~41・44~50・54~56：窯休、59：前庭部)

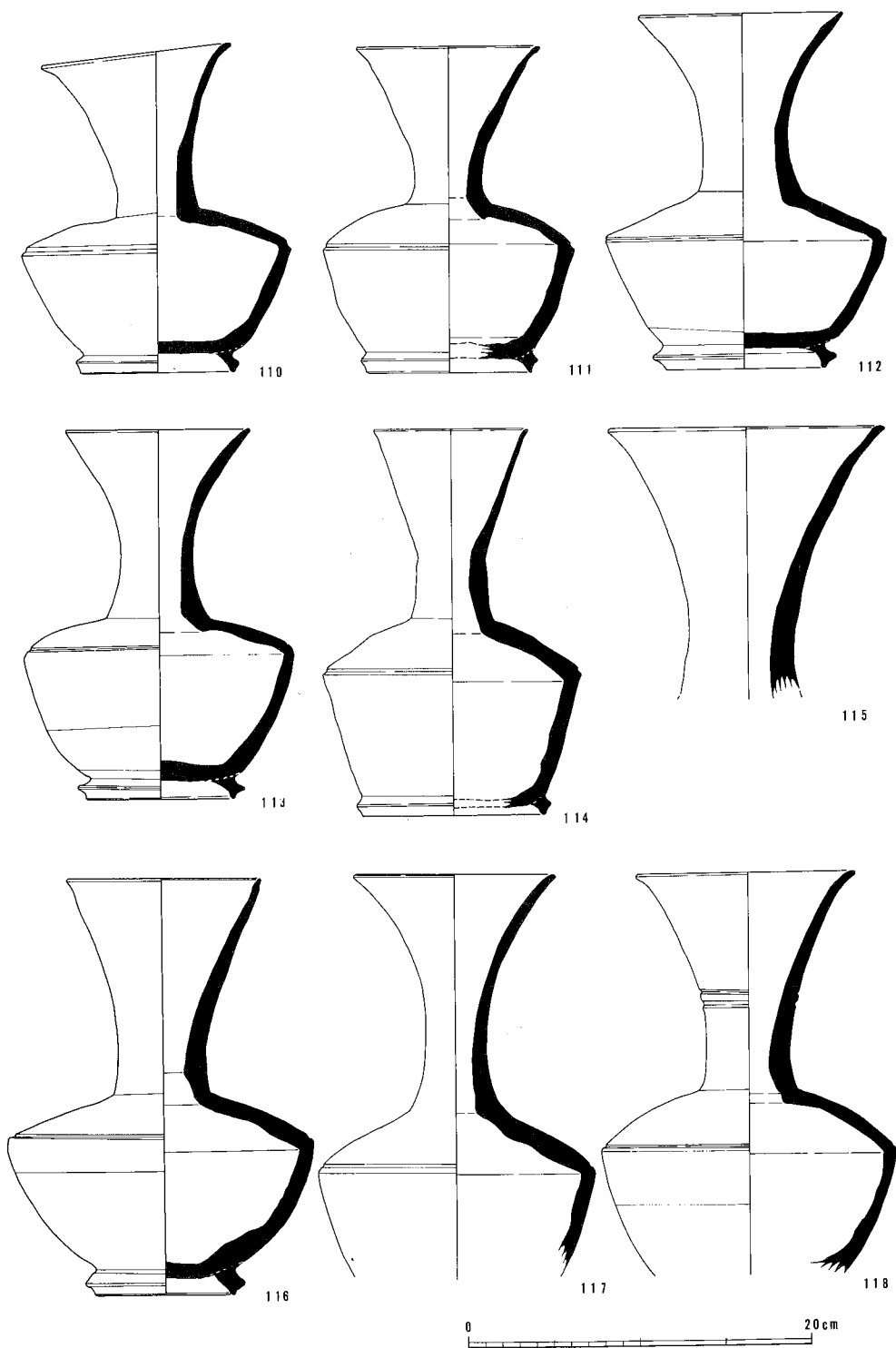
第82図 出土土器(3)

川端窯



第83図 出土土器(4)

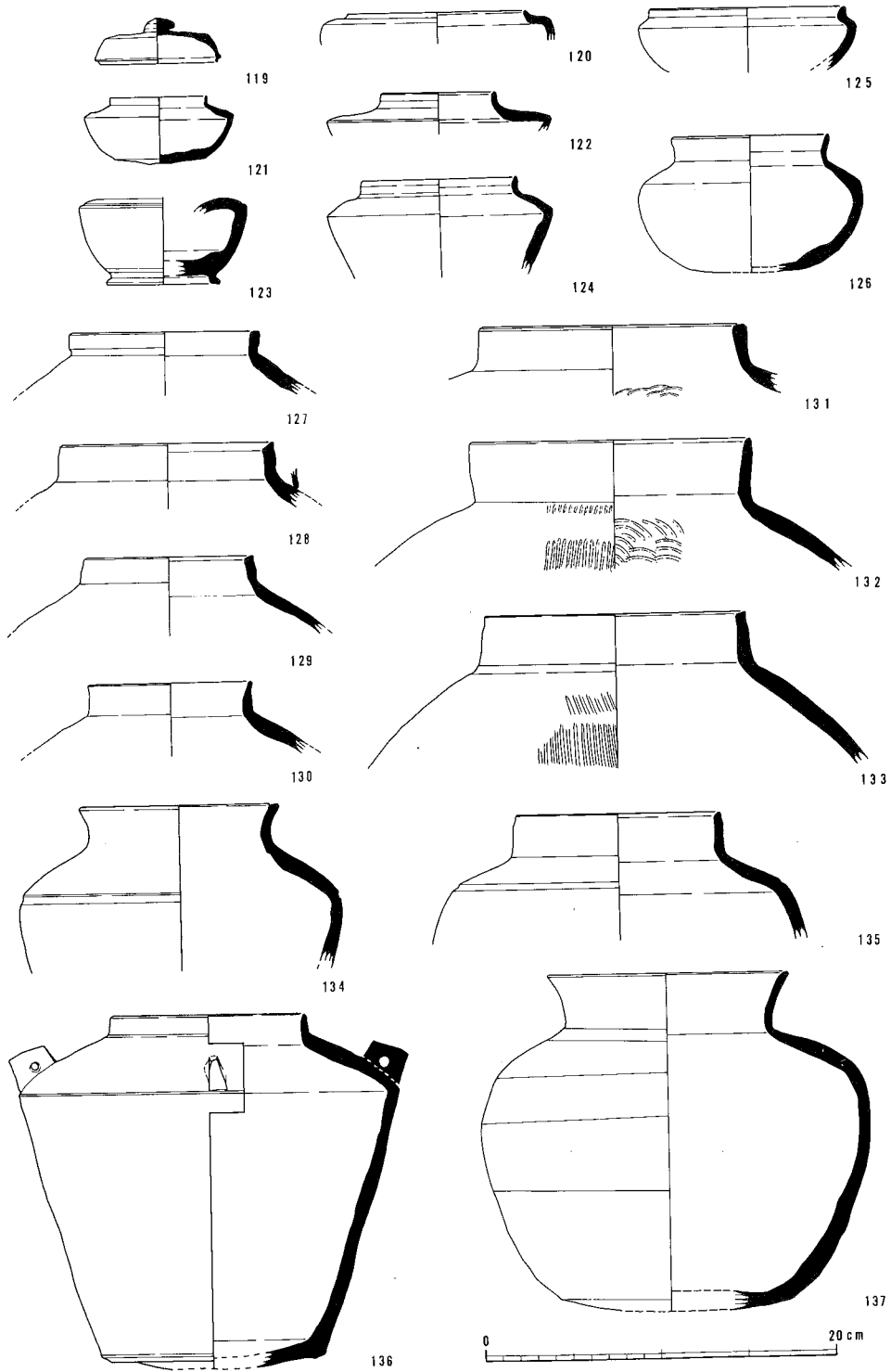
川端窯



(110~118: 灰麻)

第84図 出土土器(5)

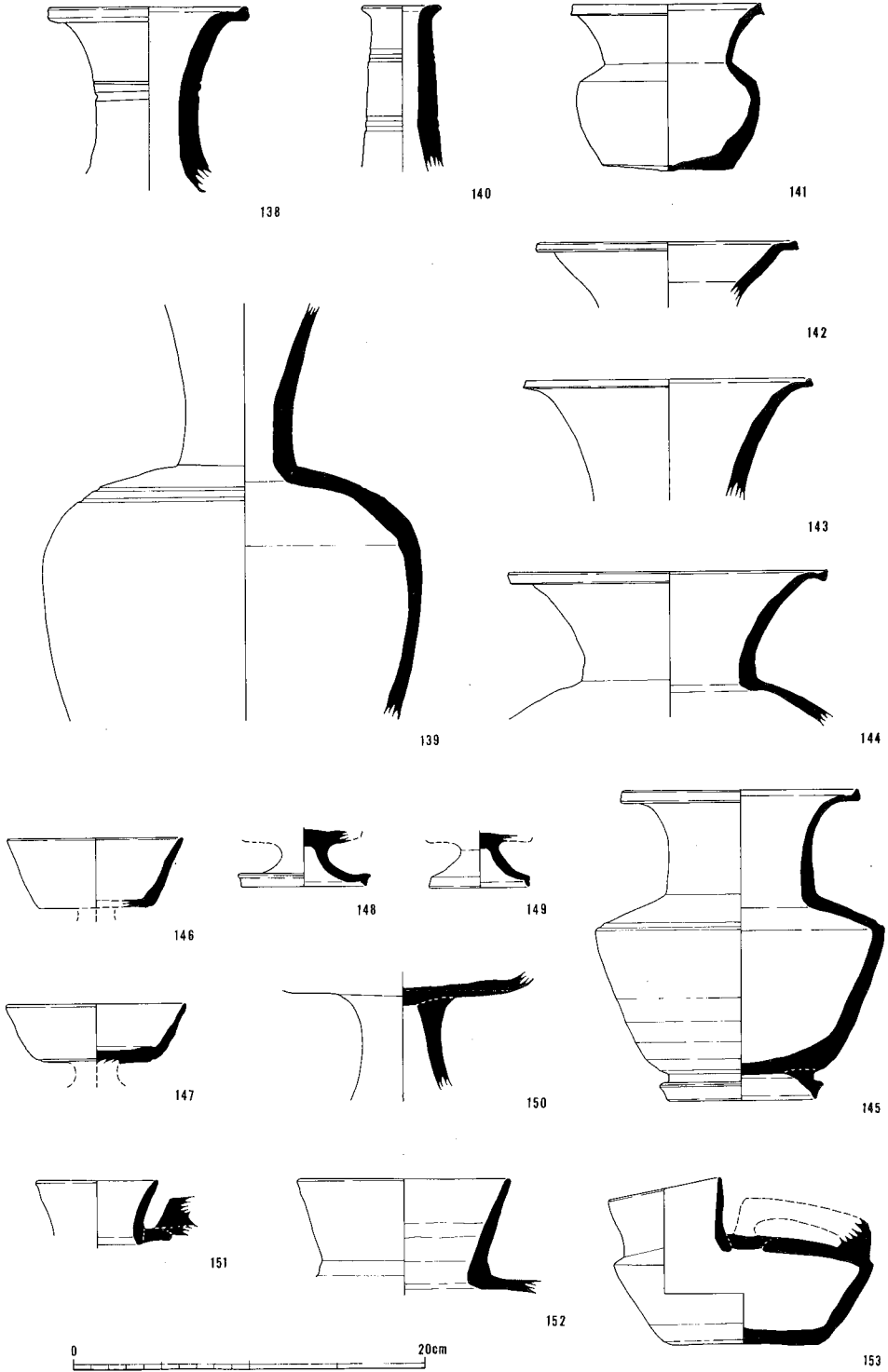
川端窯



(119~122・124・126~128・130~136: 灰原
123: 前庭部、125: 焚口、129: 表土、137: 窯体)

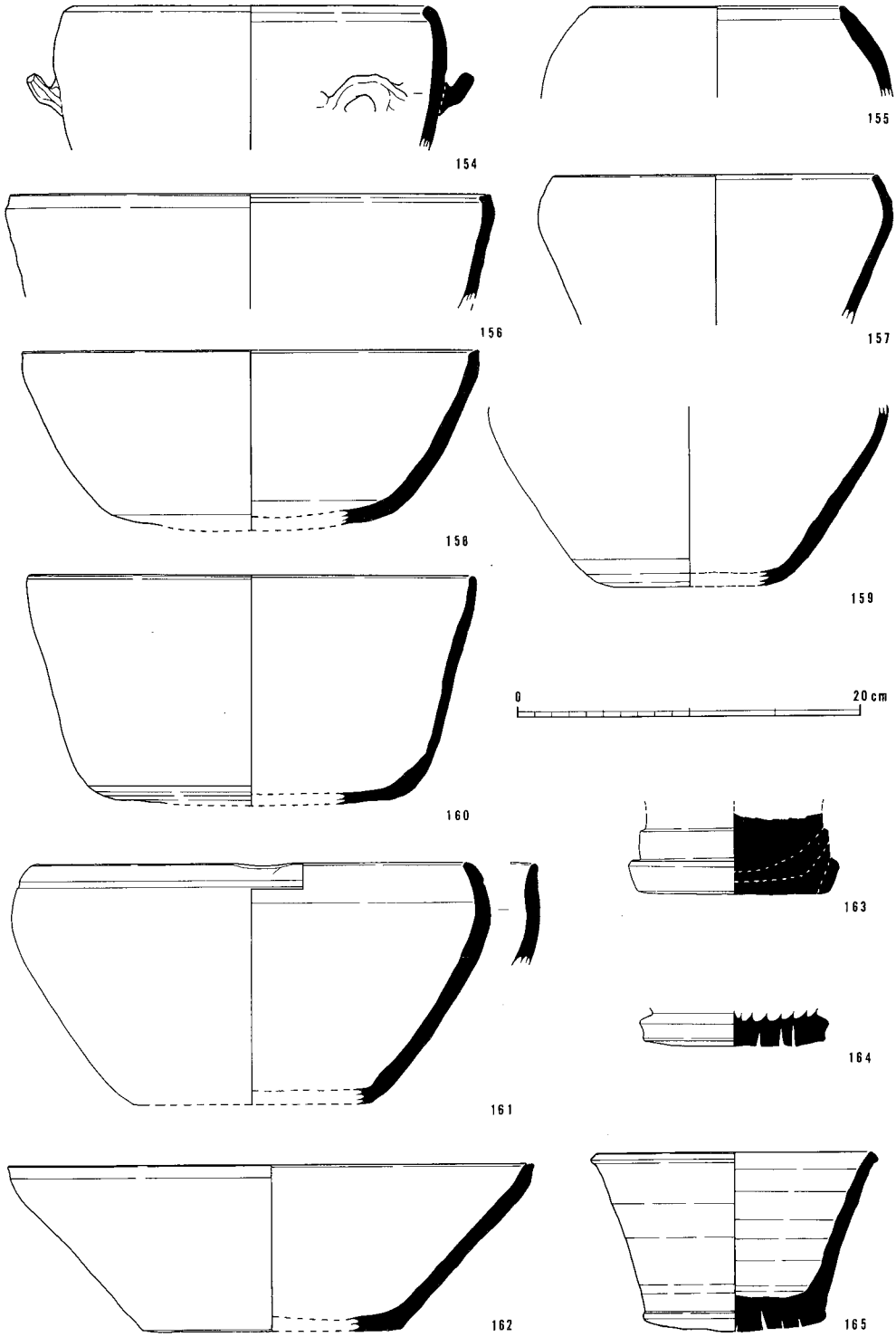
第85図 出土土器(6)

川端窯



(138~153: 灰原)

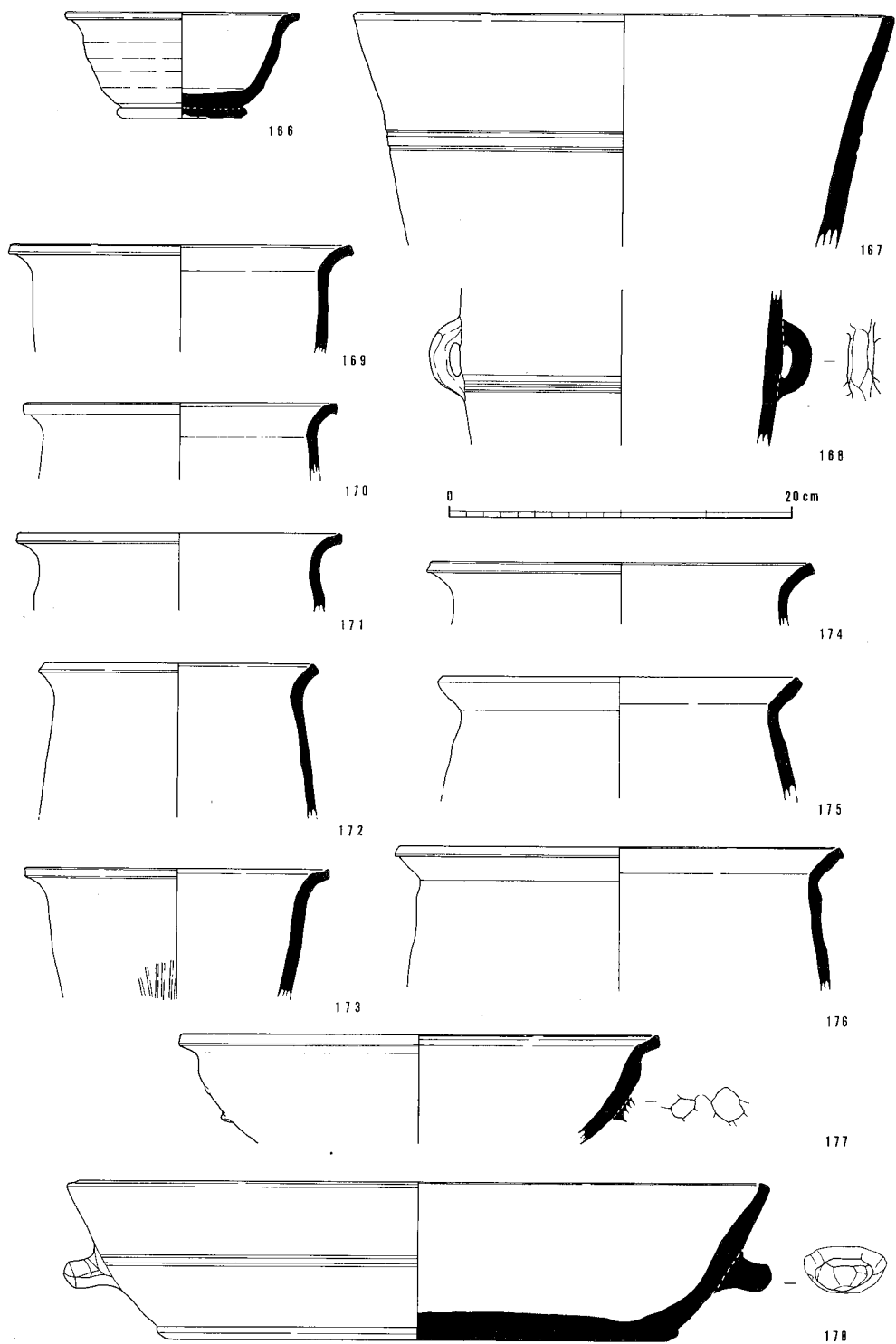
第86図 出土土器(7)



(154 : 表土、155・157 : 麻体)
(156・158~165 : 灰原)

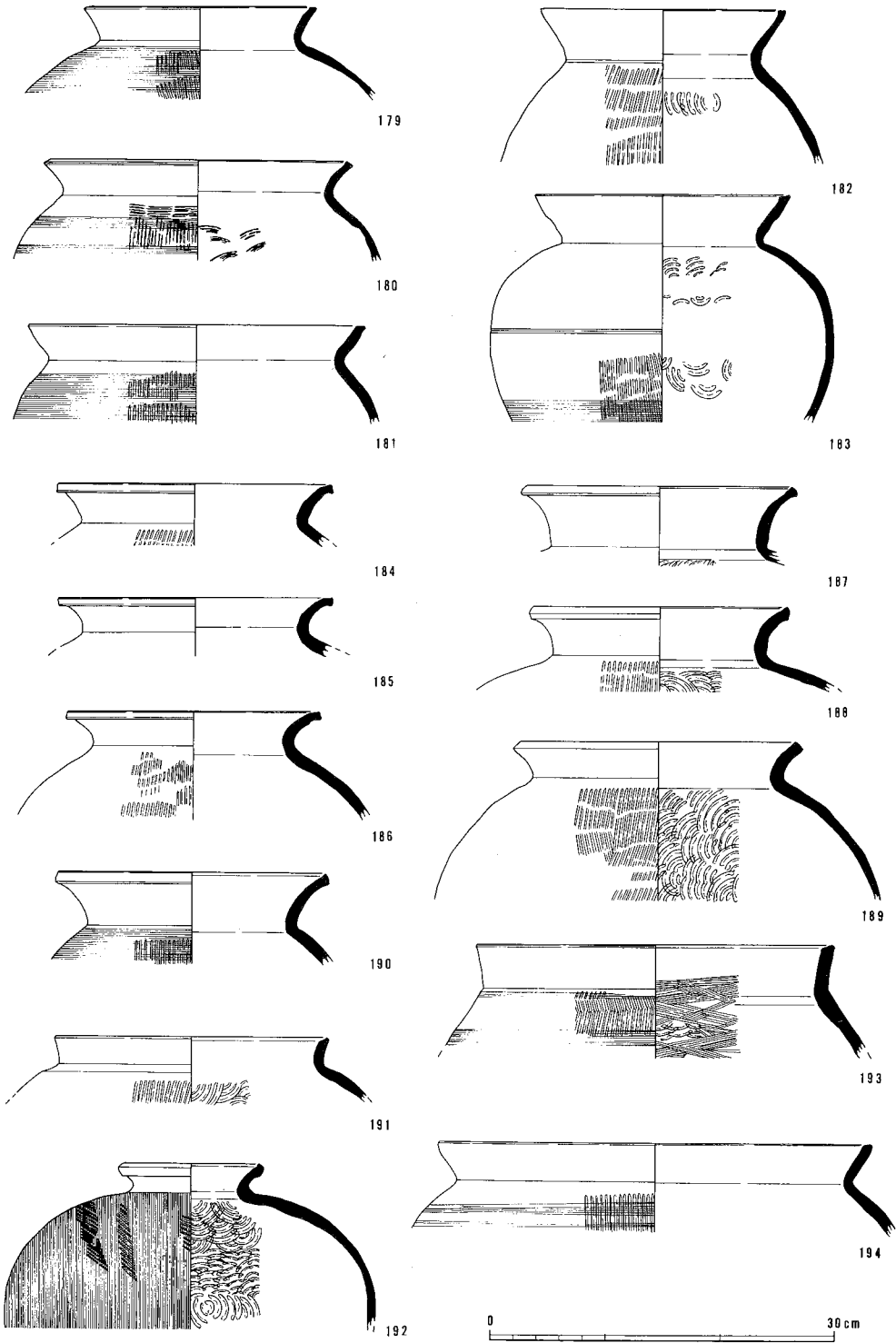
第87図 出土土器 (8)

川端窯



(166~175・177・178：灰原)
176：残片

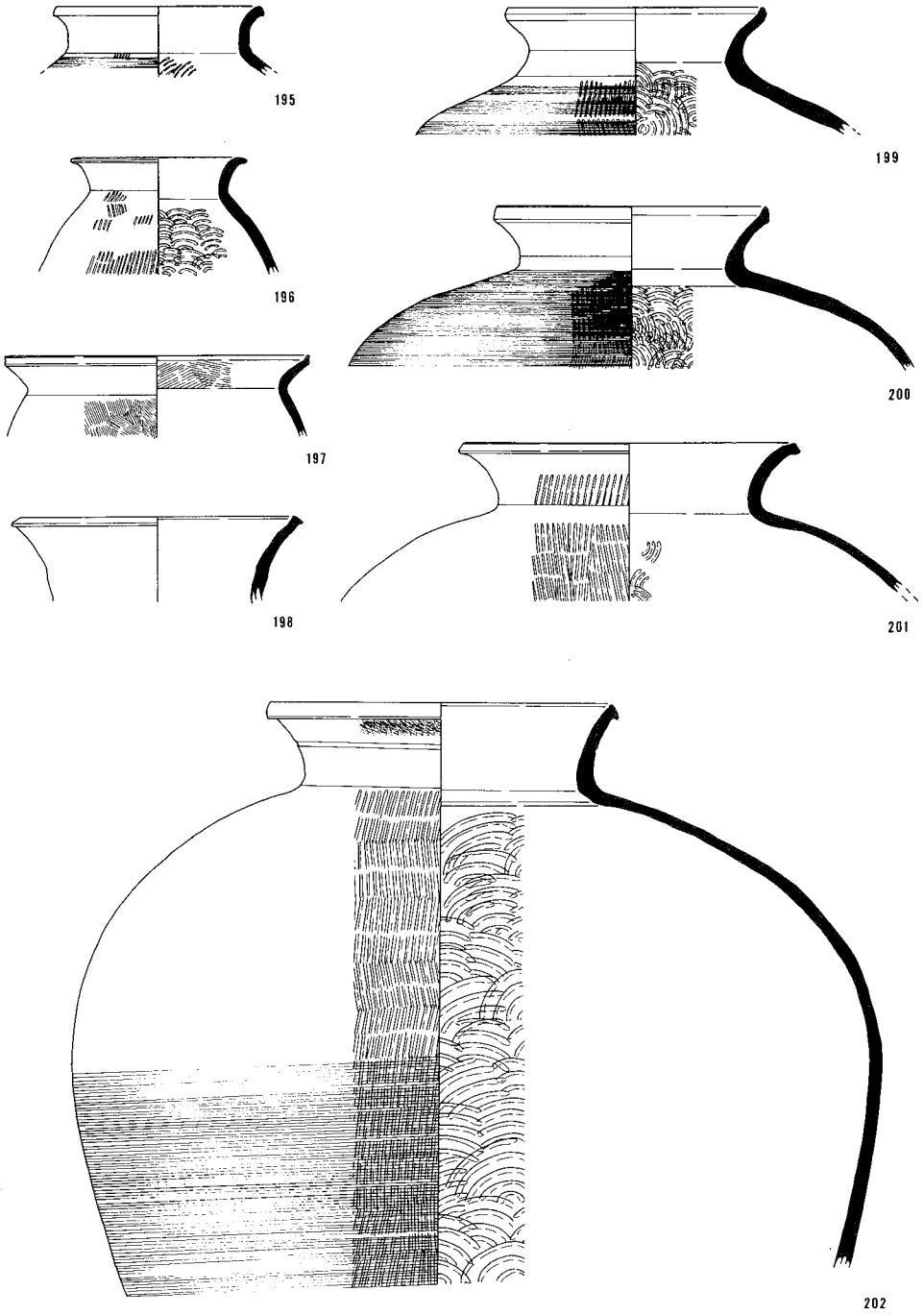
第88図 出土土器（9）



(179・180・182～187・189・190・192・194：灰原)
 (181・191：前庭部、188・193：表土)

第89図 出土土器 (10)

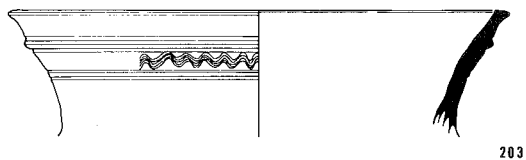
川端窯



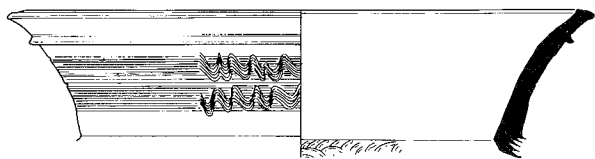
(208~212: 灰原)

第90図 出土土器 (11)

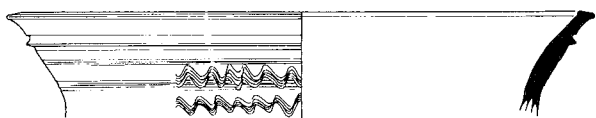
川端窯



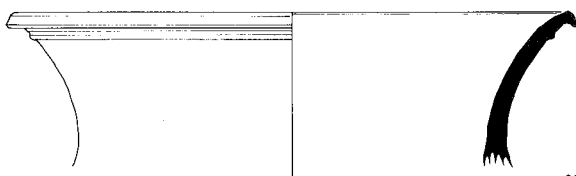
203



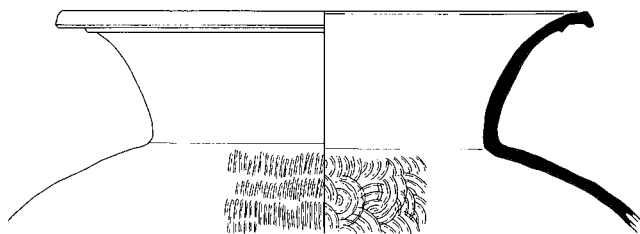
204



205



206



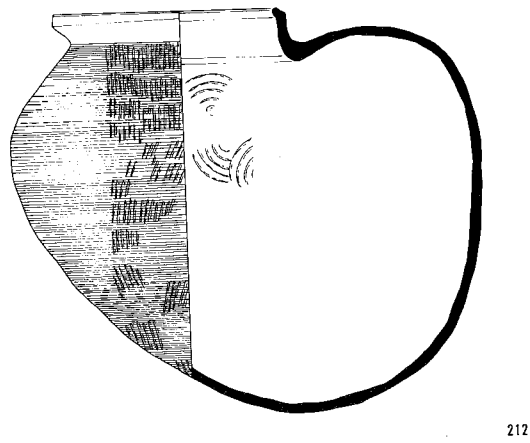
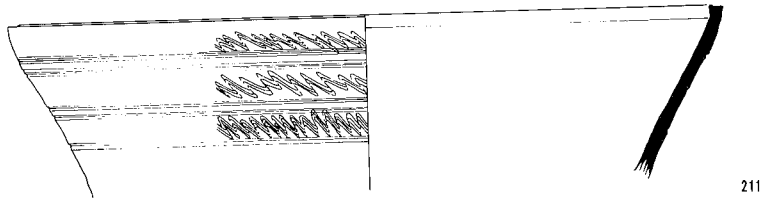
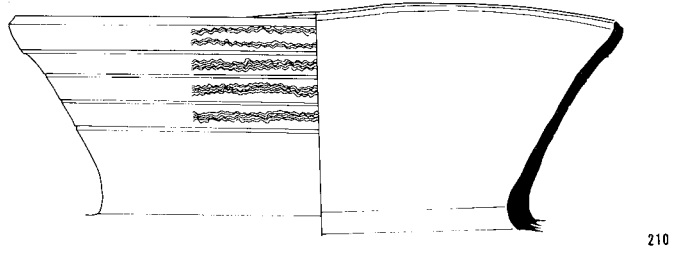
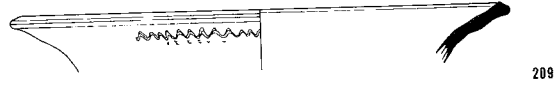
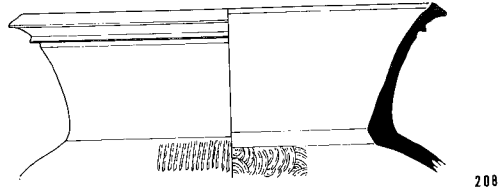
207



(195~200・202：灰原)
(201：表土)

第91図 出土土器(12)

川端窯



(203~207 : 灰原)

第92図 出土土器 (13)

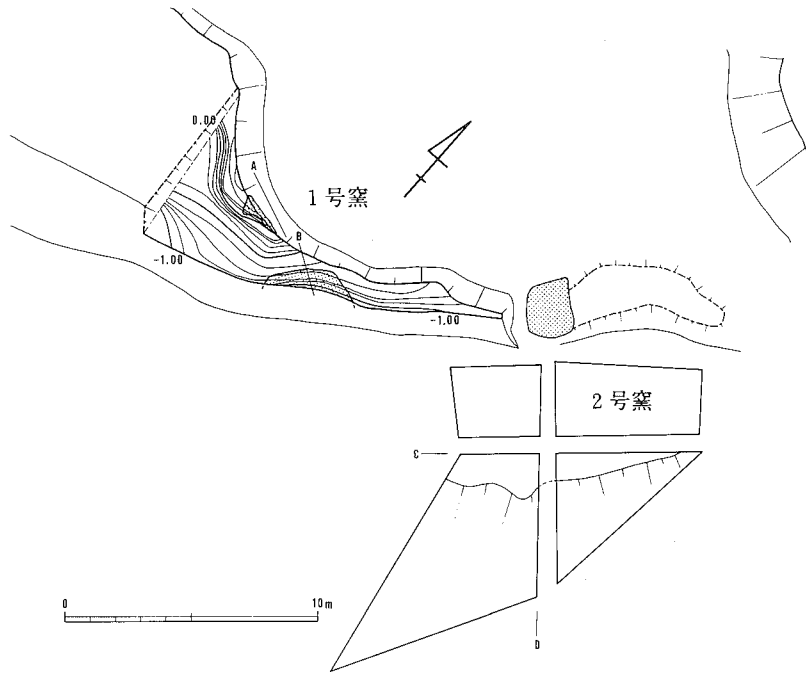
第2節 ^{ぐんづか}郡塚窯 (AN-88)

1. 立地

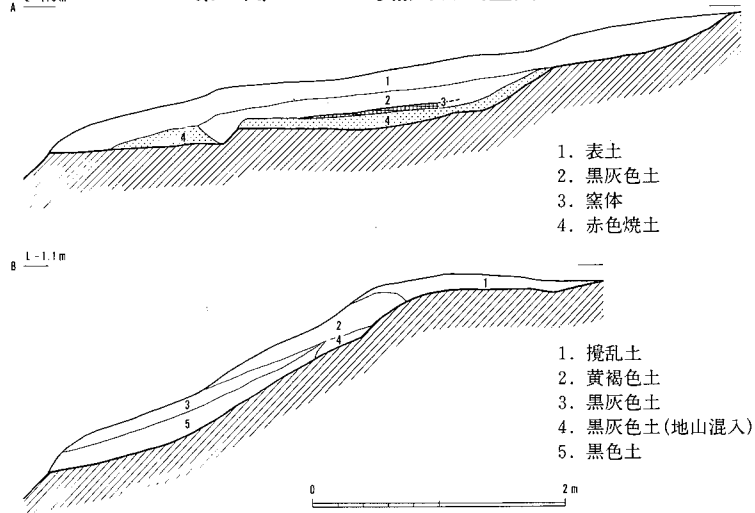
郡塚1号窯は(旧称AN-88 A窯)三田市末野字郡塚1,895番地に所在する須恵器窯である。1号窯は分布調査によって発見されていた須恵器窯であるが、1号窯の東側約10mの地点で新たに

1基の窯跡が発見されたため、2号窯(旧称B窯)として合わせて調査を行った。

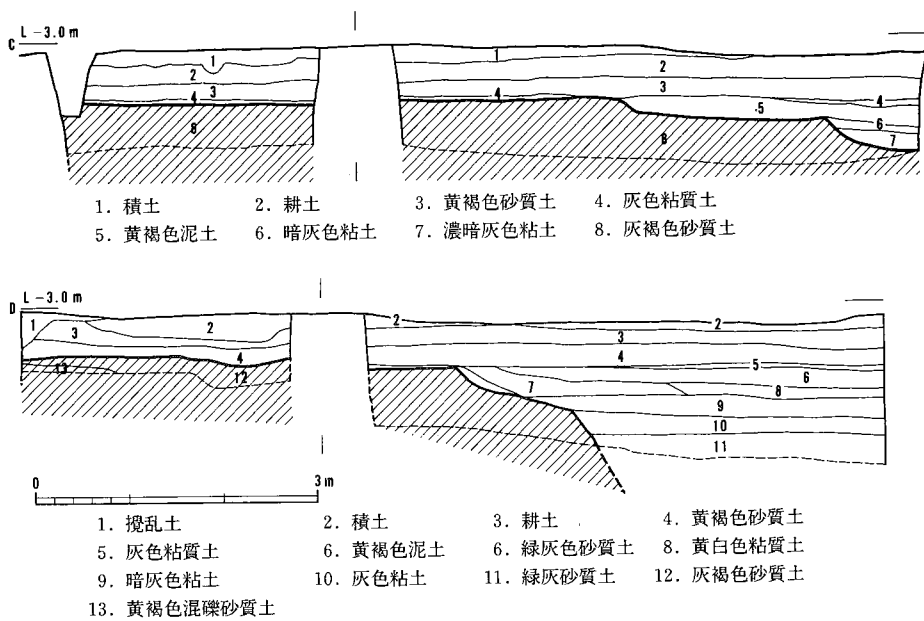
窯跡は青野川を主水系に開析する幾筋かの小支谷のうち、黒川と青野川の合流点から上流へ約110mの右岸に開析する小支谷の南斜面に立地する。調査開始時点では窯跡はそのほとんどを失っており、僅かに窯体の一部ではないかと推定される程度の痕跡を留めていただけであっ



第93図 1・2号窯地形測量図



第94図 1号窯土層断面図



第95図 2号窯土層断面図

た。このように窯の遺存度が劣悪であるのは、窯跡のある付近一帯が土取りによって大きく斜面が削り取られていたことによる。この土取りが行われたのは、重機の爪痕がはっきりと残っていたので、調査を実施した昭和53年からさして古い時期ではないとみられる。また、斜面下方は水田の造成のため斜面裾部が削られ、灰原も消失していることが考えられた。

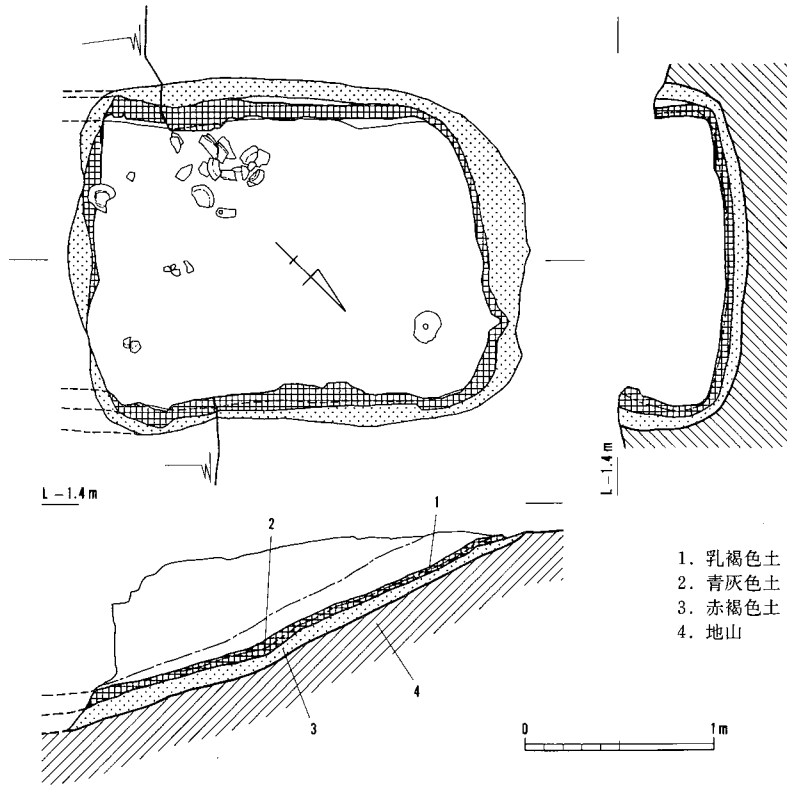
2. 1号窯の構造

破壊が著しく辛うじて窯体床面の一部と思われる長さ約55cm、幅約18cmの灰色の還元状態に焼けた個所が残っていただけである。この窯体の一部と推定される焼け面の下方に長さ約1m、幅約3mの三角形状に灰原の一部と思われる炭化物を含んだ層が検出された。

このように1号窯は遺存度が極めて劣悪で、その規模、構造については一切明らかにすることができなかった。

3. 2号窯の構造

2号窯は1号窯の東約10mの地点で発見された窯跡である。床面、側壁は共に地山を掘り込んでつくられた半地下式構造の窯である。1号窯と同様、窯の遺存度は良くないが、1号窯に比べると窯体遺存部分は幾分多い。窯体残存部は長さ約2.3m、幅約1.5mで、窯体前部、後部ともに削平され失われている。窯体残存部は焼成部の床面の一部と、側壁であると思われる。残存する床面の傾斜角度は下半部では14°、上半部では25°を測り、主軸方位はN44°Wである。側壁は遺存度の良好なところで、高さは床面端より約50cmである。側壁上



第96図 2号窯実測図

部は幾分内方へ傾斜する傾向があるので、おそらく残存部より上方は天井部になるのであるろう。壁面はスサ入り粘土を貼りつけ、床面には砂を敷いた痕跡が認められた。

窯体残存部下方は約2mの落差があり、窯体、前庭部などはすでに消失したと考えられるが、下方の水田面にトレンチを十字に設定し、灰原の存在の有無を確認するための調査を行った。このトレンチでは、耕土、床土の下は灰褐色砂層とシルトが互層状に堆積し、その中に黒褐色土がブロック状に薄くみられただけで、灰原は小支谷の旧流路によりその大半が流失したものと思われる。以上のように、2号窯の遺存状況も必ずしも良くなく、出土遺物も非常に少ない。ただ、窯体床面上で数点の坏が出土し、2号窯の時期を明らかにすることができた。

4. 1号窯の出土遺物

窯体、灰原の大半が消失していたため、出土遺物は極めて少量で、いずれも小破片である。図示した須恵器は、窯体、および灰原出土のものはほとんどなく、攪乱土や後述の2号窯灰原出土のものが多いが、窯体、および灰原出土の須恵器と同様の様相を示しているので、1号窯に伴う遺物と考えてよいと思われる。

1号窯出土の須恵器で確認することのできた器形は、坏・蓋・有蓋高坏・甕・甕・壺・

器台である。

蓋 (1~5)

いずれも天井部の大半を欠損しているため、器高については不明で、坏蓋が高坏蓋かの区別も明らかでない。復元口径は10cm前後のもの、13cmほどのものがある。1、2は天井部と口縁部をわける稜は比較的鋭さを残すが、3~5はやや鈍くなっている。端部は僅かに外方に屈曲し、端面をつくる。回転ヘラケズリの観察できるものは、天井部の約1/2程度が時計廻りの回転ヘラケズリをおこなっている。

坏 (6~9)

小破片では高坏との区別は困難である。立ち上がりはいずれも内傾し、8以外は底部の形態が明らかでないが、底部は丸みをもつと思われる。復元口径は10cm前後で小型である。口縁部は端面をつくるが、いずれも凹線が明瞭ではなかったり、認められないものもある。全体に丁寧な調整であるが、回転ヘラケズリは底部約1/2程度で、回転ヘラケズリの方向は蓋と同様、時計廻りである。なお、8は蓋との重ね焼きの痕跡がみられる。

高坏 (10~18)

高坏は坏部と脚部の接合するものはない。坏部は脚部剥離痕跡を残し、坏部と確認できるもの(10、12)の他は、坏との区別は困難である。いずれも口縁部端面をつくるが、明瞭な凹線をもつものと段をつくるものがある。その他の調整手法は坏と同様である。脚部はいずれも短脚である。脚端部の形状はわずかに異なるが、すべて有蓋高坏の脚部であろう。三方円孔透かしで、カキ目を施すものを通例とするが、なかにカキ目を施さないもの(15)、方形透かしのもの(14)が1例ずつみられた。

甕 (16)

口縁部片のみである。短く外方にのびる口頸部の双方に波状文を巡らす。器壁はきわめて薄く、焼成は堅緻である。

壺 (20)

口縁端部、および胴部下半部を欠損している。壺片であろうとみられるが、小破片のため径は不確かである。口縁部と胴部の境線には凹線が巡らされ、胴部上半には列点文が施されている。把手付きかどうかは不明である。

甕 (21、22)

中型甕と大型甕とがある。中型甕は口縁部下端が下方に突出する。口頸部には装飾はないが、体部はカキ目が施されている。大型甕は頸部下半を欠損している。凸帯と櫛描き波状紋とを組み合わせる口頸部をつくる。甕体部には平行叩き目文と格子ふう叩き目文の2種がある。平行叩き目文内面の同心円文は、意識的にナデ消されている。一方、格子ふう叩き目文の内面は同心円文をそのまま残し、粗い。

器台 (23、24)

24は脚部片で、外反しながら大きく裾へひろがる。脚端部は外方へふんばる。脚部はカキ目調整され、方形4方透かしをあけている。23は筒形器台の筒部片である。2条単位の凹線の間を波状文で飾っている。方形4方透かしである。

5. 2号窯の出土遺物

2号窯に伴うとみられる須恵器は、坏、蓋、小皿、壺、甕などがある。そのうち最も多いのは坏で、蓋がそれに次いで多い。

坏A (7~12)

わずかに丸みを残す底部に、外傾度の大きいまっすぐのびる口縁部をつける。観察できた全ての坏Aは口径12~14cm、器高3cm前後のものが多い。底部外面はヘラ切りのまま不調整で、内面には仕上げナデを施している。

坏B (13~20)

高台を付ける坏である。坏Aに比べると、いずれも口径が大きいのが特徴である。底部は扁平で、外傾度の大きなまっすぐのびる口縁部をつける。口径15~16cmのものに限られ、器高3.5~4cmである。高台は矮少化が著しく、底部と口縁部の境よりかなり内側に付けるものが多いが、16、18のように屈曲部付近に外方にややふんばった高台を付けるものもある。しかし、この形態の高台が形式差を示すかどうかは、窯体の残存状況、遺物量などの条件から明らかにすることができなかった。坏Aと同様、底部外面はヘラ切りのまま不調整で、内面は仕上げナデを施している。

蓋 (1~6)

天井頂部は丸みを失い、扁平になりつつある。また、天井部が大きく陥没したものがみられる。しかし、天井縁部の屈曲したものは認められない。端部は鋭く屈曲し明瞭な稜をつくるものと、屈曲が鈍いものがある。つまみは宝珠つまみの形態をかりうじてとどめるものと、つまみ中央がくぼみ中心部が突起するものがある。口径は16~18cmに収まり、前記の坏Bに対応する蓋と考えられる。天井部は扁平な部位に回転ヘラケズリが施され、内面中央にはナデ調整される。

皿 (21)

口縁端部が外方に大きく屈曲する小型の皿である。底部はヘラ切りのまま不調整である。

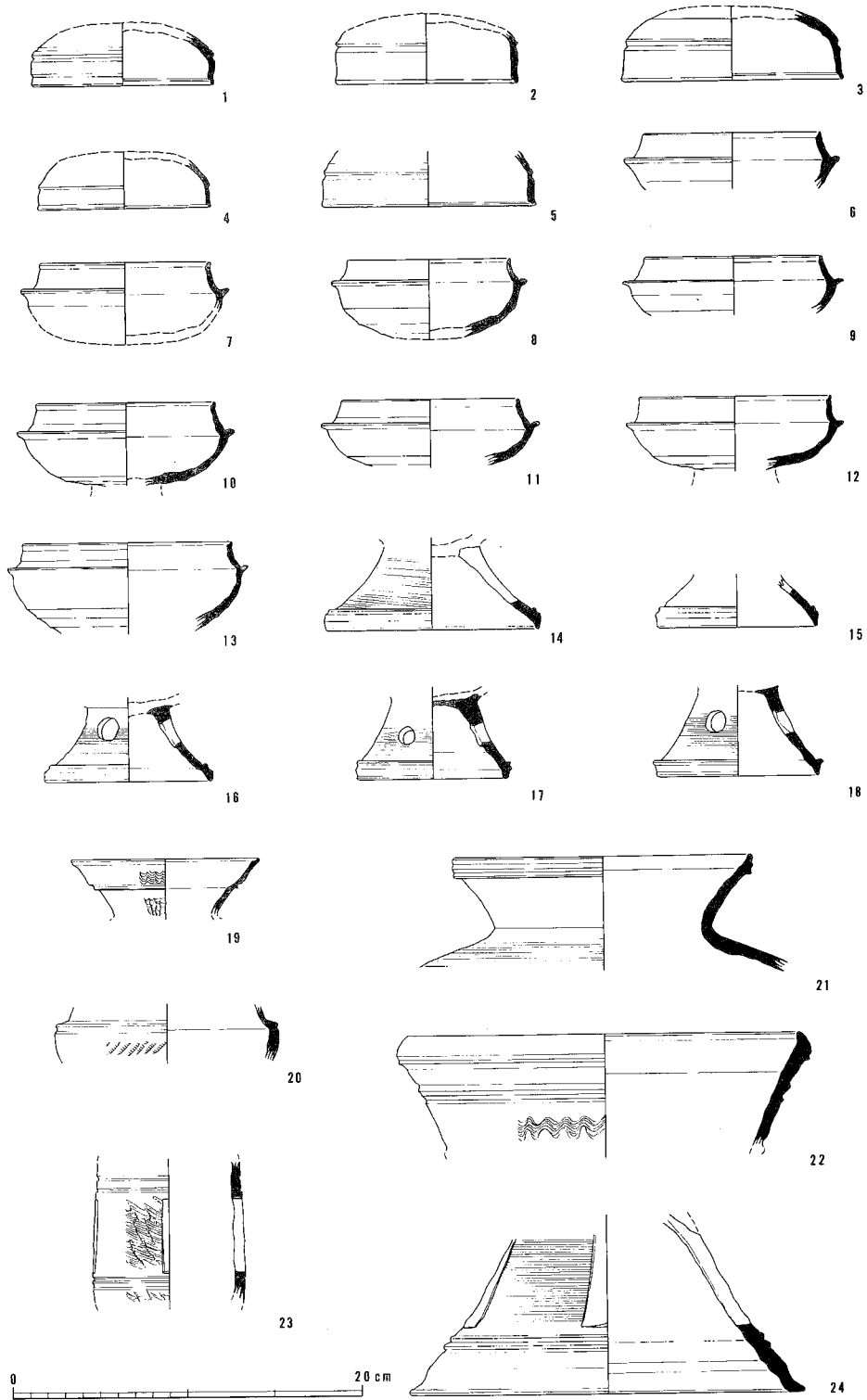
壺 (23~26)

いわゆる長頸瓶である。口縁部、頸部、底部はいずれも残片であり、接合するものはない。

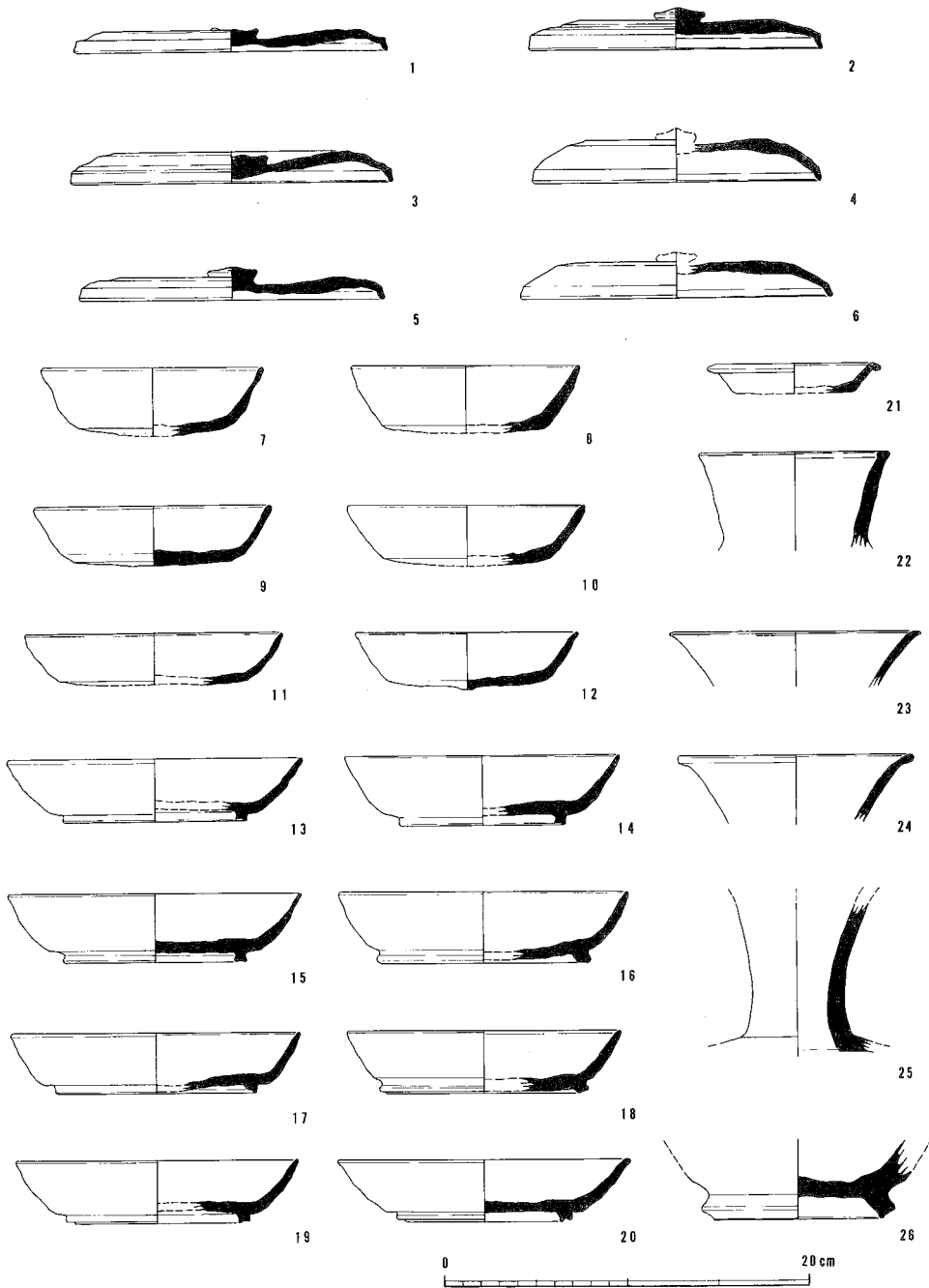
6. 小結

以上、郡塚窯跡出土の須恵器についてその概要を示したが、残念ながら窯の遺存度が極

郡塚窯



第97图 1号窯出土土器



第98図 2号窯出土土器

端に悪く、また、出土土器も稀少であり、十分な検討は不可能である。特に1号窯は兵庫県下では相生市那波野丸山2号窯、竹野町鬼神谷窯などと共に最古の窯跡であるとみられ、あるいは前記の窯跡に先行する可能性もあるが、須恵器の出土量の少なから両窯との比

較も十分には行えないのが実状である。

1号窯の出土資料は型的には新古2型式が想定できる。ただ、先後の型式とも各器種のセット関係に欠落があり、同一型式に収まることも考えられる。また、先後の型式の時期が異なるとすれば、別に窯跡が存在していた可能性も考えられなくはないが、調査ではその痕跡すら明らかではなかった。

古型式に想定できるものに、甗(19)、甕(21)、埴(20)がある。いずれも焼成が極めて良好で、器表は青灰色に還元しているが、断面は赤褐色を呈する。I期前半の要素をまだ残している一群である。なお、平行叩き目文をもつ甕体部片もこの型式に属するものであろう。

新型式には埴、高埴、甕、器台などがある。古型式とした一群に比較すると、やや焼成が悪く、器表、断面とも灰色を呈する。埴、蓋でみられるように、底部もしくは天井部が丸みをもち口径の小さい小型のものが多いのが特徴で、回転ヘラケズリ範囲も約 $\frac{1}{3}$ 程度である。このような特徴から、新型式はI期後半に併行すると考えられ、1号窯出土須恵器の大半もこの型式のものであろう。

このように1号窯出土とみられる須恵器は、その特徴から新古の2型式の存在を想定したが、特に古型式の位置付けについては、出土量の問題から、型式差とみるべきかどうかについては解決できなかった。しかし、郡塚1号窯がI期の窯跡であることは間違いなく、三田末窯跡群中でも最も古い窯跡であることが判明した。兵庫県下では先に触れたように、播磨地方、但馬地方でI期に溯る窯跡が知られており、兵庫県における地方窯の成立時期がこのころであったことを示している。

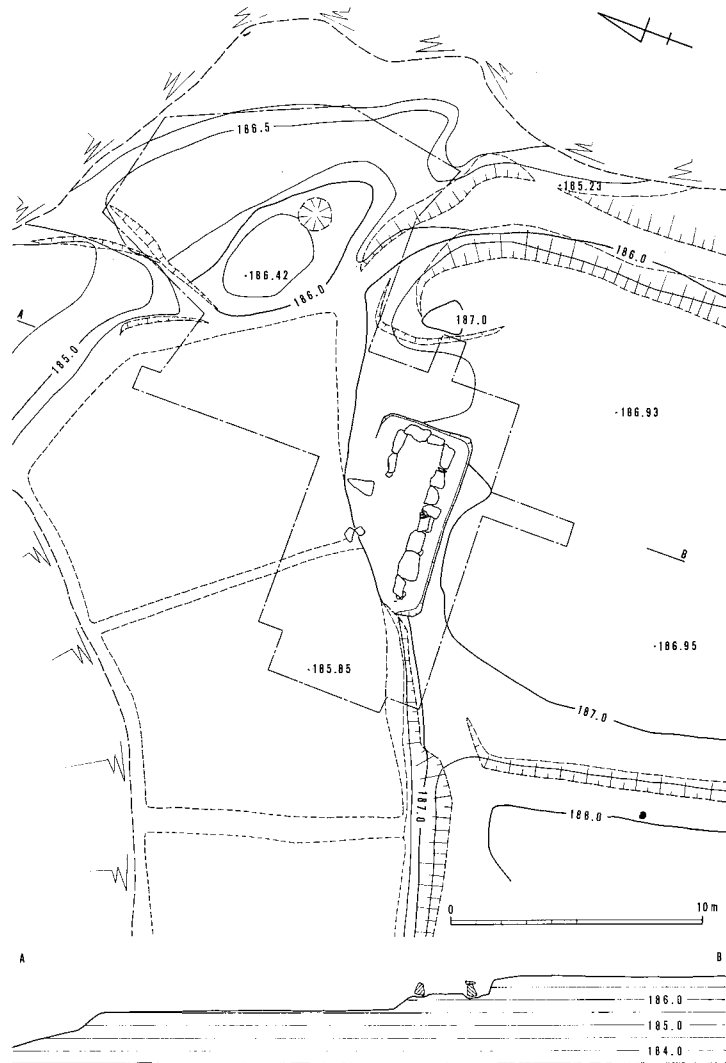
一方、2号窯は三田末窯跡群が盛期をむかえる時期の窯跡で、2号窯前後から平安時代前半にかけて操業が最も盛んになるのは他の窯跡の報告に詳しいところである。2号窯の資料も限定されており、その時期は明確ではないが、埴、および蓋の形態から、平城II期、もしくは中村編年IV型式第2段階前後に対応するのではないかと考えられる。(井守)

第3節 ^{みちひがし}道東古墳 (AN-104)

1. 位置

青野川に開析された段丘上の緩やかな斜面上に立地している。青野川で開析された谷は深く、黒川との合流点付近はより深い谷が形成されている。合流点北側の青野川の西側の段丘上で、緩やかな起伏はあるものの比較的広い平坦面の東端である。古墳の位置する丘陵は東側へ15m位で段丘崖となっている。南西方向の平坦面は末野大池を中心に水田が拡がっている。道東古墳南側は現在、牛舎となっており、地形が大きく変わっており墳丘近くは栗林となっている。

道東古墳周辺の開拓は、昭和20年代後半から末野開拓と称されて行われてきた。その際に現況（調査段階の）に近い地形になったものと思われる。が、やや平坦に近い状態に切り盛りした程度で大きな改変とは考えられず、段丘上に立地することに変わりはない。周囲にも他に古墳は存在していた可能性が高いが、開拓などによって残存していない。隣接して存在した古墳状隆起(AN-105地点)も古墳の残欠かとも思われた



第99図 地形測量図

が、調査では積極的に古墳と判断出来なかった。地元在住の方々に聞くと小字道東から郡塚にはツカが多くあったと記憶されており、古墳群が存在していた可能性が高い。

2. 墳丘

墳丘は、末野開拓をはじめとする現在の開墾によって大きく人工の手が加えられている。基底石ならびに一部の2石目の石材が残っているだけで、南側壁については露出していた。南側は牛舎関係の荒地に、北側は畑地となっており、本来の墳丘はほとんど残っていなかった。ほぼ、石室を境として地目が変わっており、法面に側壁石材が露出していた。現状から墳丘を推定することは困難なうえに、古墳がダム水没のラインである186mライン上に位置するため高い方は用地外となっており十分な調査が行えなかったので、墳丘値を決めることは難しい。石室掘り方は検出できたが、墳裾は掘り割りには検出できなかった。ただ、東側で地形の落ち込みが見られ、墳裾と考えられなくもない。186.5mのコンタラインが大きく南側へ入り込んでおり、一見墳裾を示すかのように見えるが、調査時にも里道として使われており、道として機能するよう削られた部分と考える方が妥当かもしれない。北側一帯は畑を作る際に手が加えられ、全く旧態を残しておらず、耕作土中や下から須恵器片が近世陶磁器など後世の遺物とともに出土している。

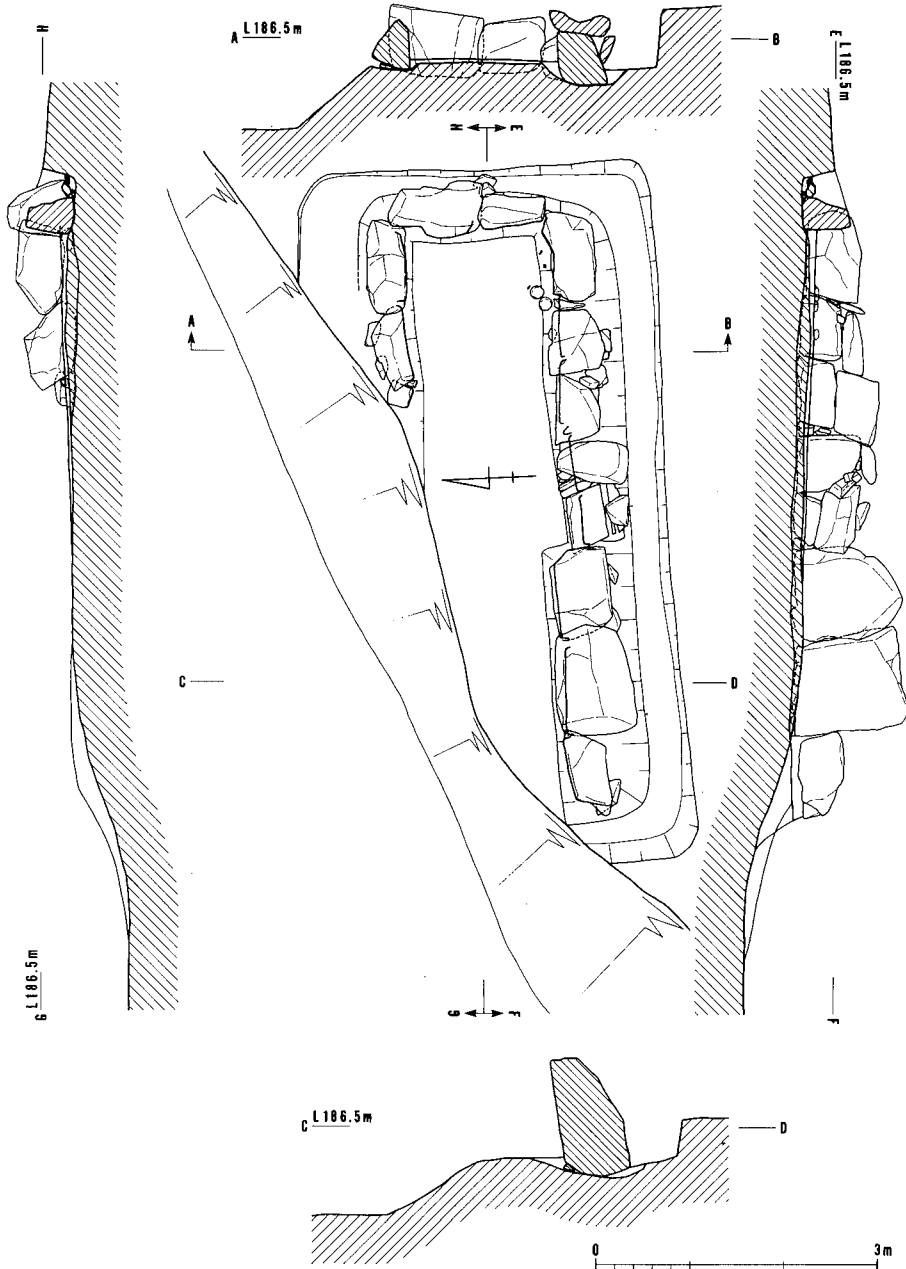
このように道東古墳は、石室の大半も含めて墳丘は残存しておらず、墳丘規模を推定する資料は得られていない。ただ、石室の規模や周辺の残された地形から推定して、大規模な墳丘とは考えられず、20mを超えることはないという消極的な資料しか得られていない。石室は残存長6.3mと普遍的な規模の古墳であり、北東に墳丘かとも思われるような地形や東側8mの付近に丘陵の自然地形が残っていることから上記の結果が考えられるだけである。

3. 内部主体（横穴式石室）

調査着手段階すでに側壁の一部が露出しており、墳丘も削平されていたので、主体部の残存状態は悪いだろうと考えられた。調査を行ったところ、北側壁については、2石を除いて欠失していたが、南側壁・奥壁は基底石と一部の2石目の石材が残っており、墓壙も北側を除いて検出された。墓壙が残存していたことにより、石室の規模もほぼ決めることが可能となった。墓壙開口部側のコーナー部を検出したため墓壙の最大値以内であることが明らかとなった。墓壙は隅円長方形に地山である黄色粘質土をほぼ垂直に掘り下げている。墓壙はほぼ東西に設けられており、長径（東西）7.40m、短径（南北）3.74mを測り、深さは0.4m前後である。石材を据える部分のみ溝状に約0.2m深掘されている。溝は石室プランに即して穿たれている。石室内部はプラン通りに袖を有しているが、外部は墓壙に平行に直線的に掘られている。玄室部での幅は0.4~0.8mだが、羨道部では1m前後と広くなっている。

道東古墳

主体部は、片袖式の横穴式石室で、主軸が現在の磁北から3°振っているが、ほぼ東西に主軸方向を採っている。西方向に開口しており、丘陵斜面とは直交している。残存している石材だけを見ても袖石ならびに袖石の隣の羨道部の石の2石が大型の石材である。この2石のみ用石法も縦積みと異なっており、他は全て横積みである。石材の掘り方も袖石が最も深く掘っている。基底石は厚い方を下にして安定を図っているが、2石目は横積



第100図 石室実測図

みの影響もあろうが、その限りでなく後部に石を置くことによって安定させている。石材は地元山塊で採取される流紋岩を使っている。当然のことながら、平滑面を内側に向けて構築している。平滑な面は節理面と考えられる。

石室の規模は、残存長（ほぼ全長に近い値と思われる）6.30mで玄室長は2.48mを測る。玄室の幅は奥壁の前で1.42m、最大幅1.60mを測り、0.32mの袖を南側に設けている。石室の残存高は、玄室で0.74m、羨道で1.12m残っている。袖部で上面の平らな角礫が6点集中しており、床面にも数点の石が見られた。敷石の可能性もするが明らかでない。

石室内は再利用されていた。玄室内で北側の削平された部分であるので、石室を意識して利用したとは思われないので、再利用というのは間違っているのかもしれない。ただ、空間を共有しただけかもしれない。主軸をN40°Wにとる墓で、2基のピットを掘り、そこに釘で十字架状に横木を打ちつけた細長い板を立てている。先は尖っておらずピット内に立てたものと考えられる。ピットは玄門よりの方が大きく径0.2mを測る。2本の板木間は0.5mで木箱状のものを間に納めたものと考えられる。犬・牛などの家畜の墓であろうか。時期も近世以降と思われる。

4. 遺物出土状態

石室の遺存状態は悪く、床面も保存状況は良好とは言えない。床面から出土した遺物は少なく、須恵器坏身2点、土師器坏1点、耳環1点、鉄鏃1点の5点だけである。これらは石室中央よりやや奥の南側壁沿いのところから出土している。須恵器は2点とも伏せた状態で出土しており、土師器が10cm余り離れた玄門寄りに床と側壁に接して傾いて検出されている。鉄鏃は小型のもので奥壁寄りに切先を奥に向けて出土しており須恵器と鉄鏃の間から耳環は出土している。他の遺物は石室埋土や下方の畑の中から出土している。特殊扁壺も同様に北側畑の耕作土中から数点に分かれて出土している。耳環も1点は石室埋土中から床面と約10cm離れて出土している。

5. 出土遺物

出土遺物は、土器5点・鉄器1点・耳環2点だけであった。

(1) 土器（第101図）

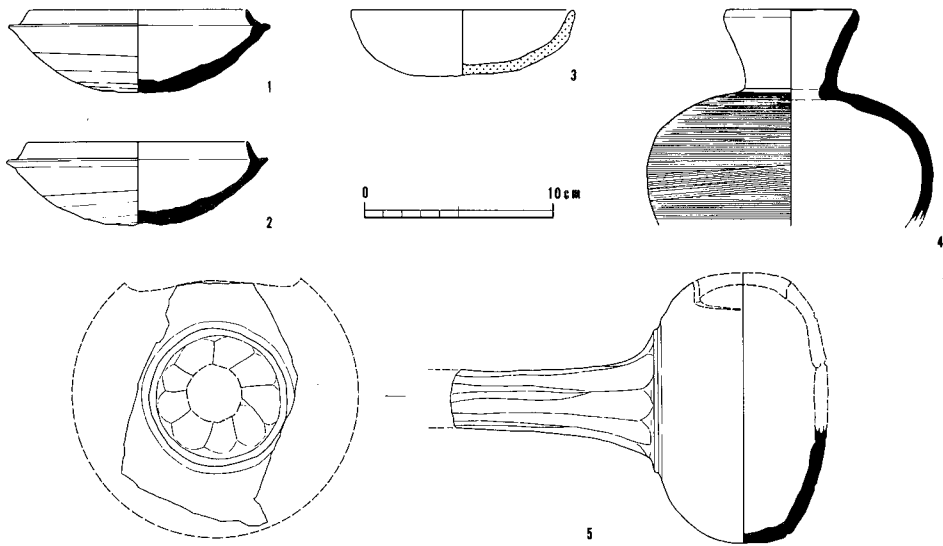
須恵器が4点・土師器が1点のみ図示できた。

坏A（1・2）

1・2とも小型化傾向のもので、立ち上がりは内傾し、低くなってきている。また底部中央はやや尖りぎみとなる。双方とも内面中央に一方の仕上げナデを行い、回転ヘラケズリを底部の $\frac{1}{3}$ 程度に亘って施している。ケズリの方向は左回りである。

法量については、1は口径11.5cm、器高4.4cm、2は口径11.6cm、器高4.4cmを測る。

直口壺（4）



第101図 出土土器

漏斗状に開く口頸部で、口縁端部は僅かに上方へつまんでいる。底部は欠けているが、体部は球形に近いものである。体部外面全体にカキ目調整を施す。

口径6.7cm、腹径15.2cm、現存高11.6cmを測る。

特殊扁壺（5）

破片のみの出土で残存部は少なかったが、先出している三田市・中西山3号墳の特殊扁壺を元に復元を行った。器高15cm前後はあったと思われる、切り取り部分については、筒部側の一部が現存したのみで形状は不明である。器表は3条の凹線文を巡らす、加飾はない。体部中央の円孔部にあたる横位には、筒部（現存長10cm）が付くが中西山3号墳のように10面体に丁寧に面取りされたものではなく、面取りは意識されているが粗雑に削られていた。体部の凹線文の数や面取り等の整形が中西山3号墳と比すると雑だが、筒部の付き方などは非常に類似するものである。

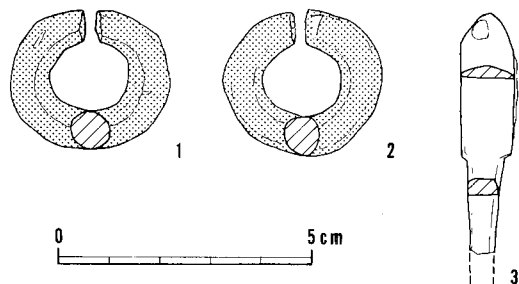
土師器・坏（3）

全体的に厚手のつくりでポツリとしている。口縁端部を丸く収めているのみである。一部にはヨコナデ調整跡が認められるが、内外面とも磨滅が著しい。淡褐色を呈する。

口径11.9cm、器高3.55cmを測る。

(2) 銅製品（第102図）

銅製品には銅芯銀張の耳環が2点出土している。1は長径3.16cm、短



第102図 出土耳環・鉄器

径2.81cmで、環部径0.8cmのほぼ正円に近い形を呈する。開き部幅は2.0cmを測る。2は長径3.16m、短径3.06cmで環部径0.78cmのやや楕円形を呈する。開き部幅は1.55cmを測る。いずれも銀張の遺存状態は良い。

(3) 鉄器 (第102図)

鉄鏃の3が唯一出土するだけである。折損しているため明確な型式は分からないが、片丸造の鑿箭式になると思われる。現存長4.8cm、刃部幅1.05cm、刃部厚0.25cmを測る。

6. 小結

道東古墳は、段丘上に立地する古墳で、本来は数基から成る古墳群の1基であったろうと思われる。しかし、末野開拓などで破壊されたため、調査段階では単独で立地する古墳であった。天井石はもちろんのこと側壁・奥壁も大きく損壊を受けている。墳丘もほとんど削平されていたため、墳丘規模も明らかではない。石室墓壙の掘り方の規模などから10mを余り超えない程度の墳丘と想定される。主体部は、横穴式石室で残存長6.3mを測る。石室掘り方は長径7.4m、短径3.74mの隅円長方形に検出していることから、石室規模も推定出来る。残存長6.3mと大きく変わらない数値であろう。石室は片袖の石室で玄室の幅1.60m、長さ2.48mで、袖は0.32mを測る。袖石と羨道部側の隣りの2石だけが大型の石材で縦積みされている。床面は、敷石がなされていた可能性もある。

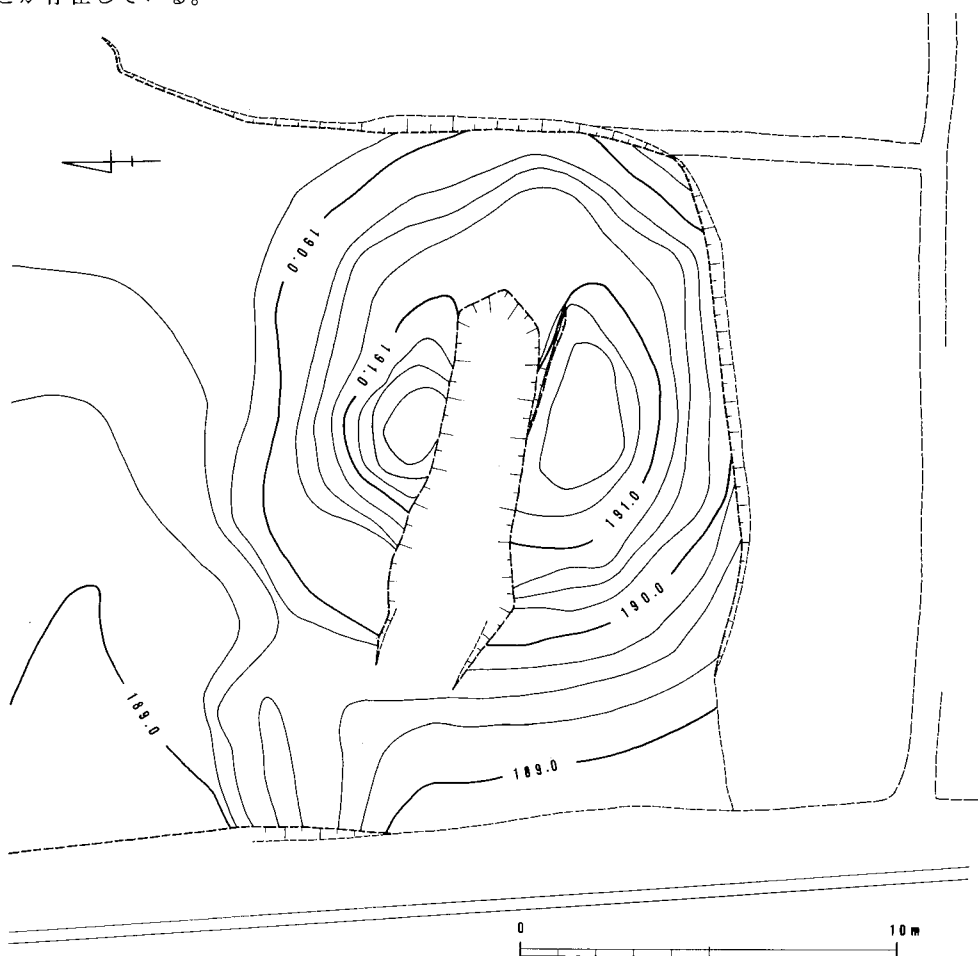
出土遺物は、石室内からは須恵器坏身2点、土師器坏1点、耳環1点、鉄鏃1点の5点だけである。須恵器から6世紀後半の築造と考えられる。石室外から須恵器壺と特殊扁壺が出土している。特殊扁壺は、全国で9例の出土例のある数少ない特殊な遺物である。そのうちの3点が兵庫県下の丹有地区に集中していることになる。最近、京都市内でも出土しており、丹有地区に中心のある特殊遺物と思われる。三田市・中西山3号墳例に比較すると、装飾はなく全体的に粗雑なつくりである。ただ、整形技法は非常に似通っている。道東古墳例が後出かと思われる。

(渡辺・高島)

第 4 節 ^{ふたごづか} 双子塚 2 号墳 (AN-203)

1. 位置

末野字道東に所在する古墳で、青野川によって形成された段丘上に立地する。緩やかな起伏はあるものの平坦面上に立地する点は道東古墳と共通する。当墳の方が平坦面の中央部に位置している。道東古墳は北東約100m離れており、丘陵上に位置する求メ塚古墳は北方約220mの地点に存在する。また、北西約200mには時期の遡る朱づめ古墳や宮脇13号墳などが存在している。



第103図 1号墳地形測量図

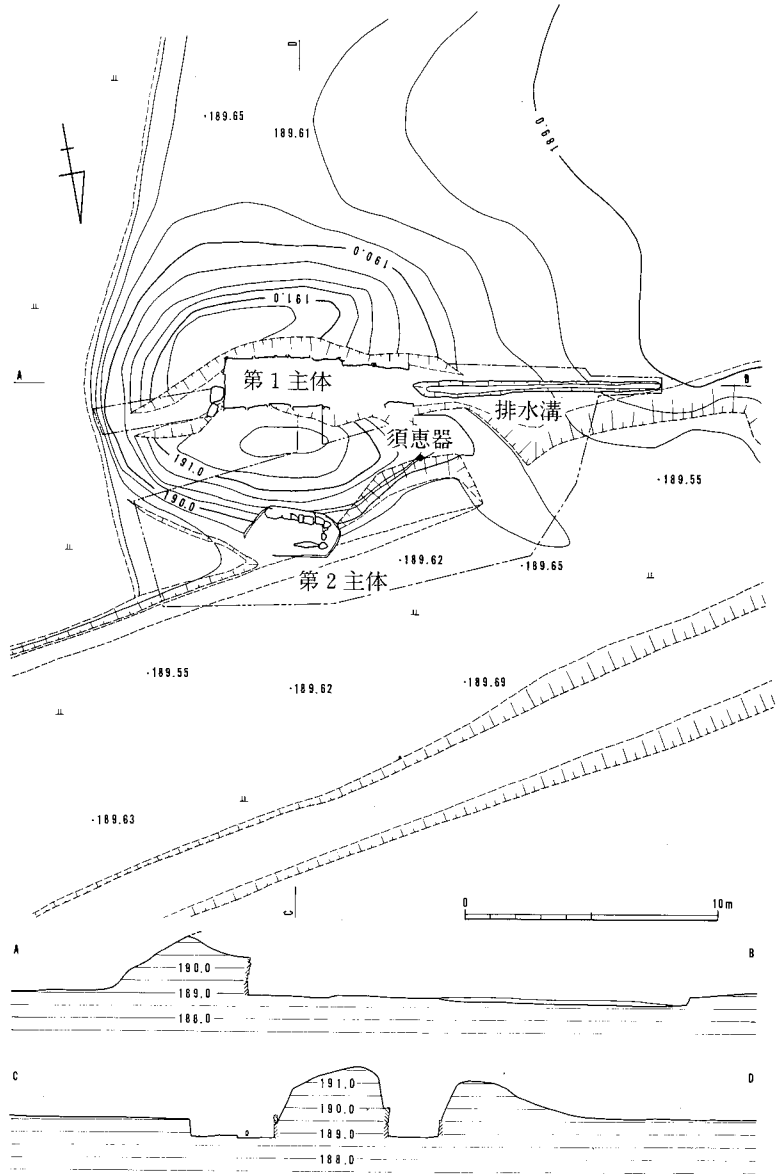
双子塚 2 号墳は、古墳名で表されているように南に約12mの裾間の距離をおいて双子塚 1 号墳があり、現時点では 2 基で構成されている。地元で遺跡名として残っていることから、2 基で構成されていたものと思われる。

2. 外形

石室が露出しており、墳丘中央部も削平を受けているが、墳裾部分については比較的旧態を保っている古墳である。調査着手前の協議によって墳丘の保存が図られ、道路部分についても盛土工法が採用されることに決定していたので、全面調査は行っていない。盛土下になる墳丘北側部分と奥壁側に墳丘築成を確認するための試掘溝を1本ずつ入れたにとどまっている。

古墳は、平坦面上に築かれているため、墳丘は明瞭である。北および東側は水田となっており開墾されているが、大きな削平は受けていないようである。西・南の二方向は現在椎茸栽培地となっているが雑木林に近い状態で旧地形に近いものと思われる。1号墳の墳裾での標高値が近いことから平坦面に構築されたことが明らかである。

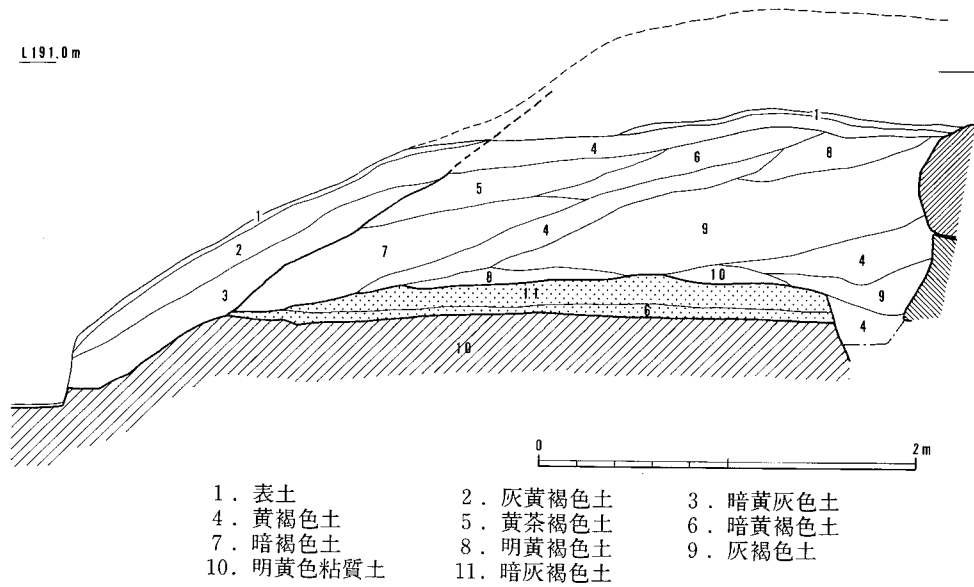
墳丘は、平坦面に存在することからも正円に近い状態で、15mの円形である。ただ、第2主体の墓廬の規模などを、考慮すると、径18m前後の円墳と考えられる。残存高で2mを測るが天井石など残っていないことから、それ以上であることは明白である。



第104図 2号墳地形測量図

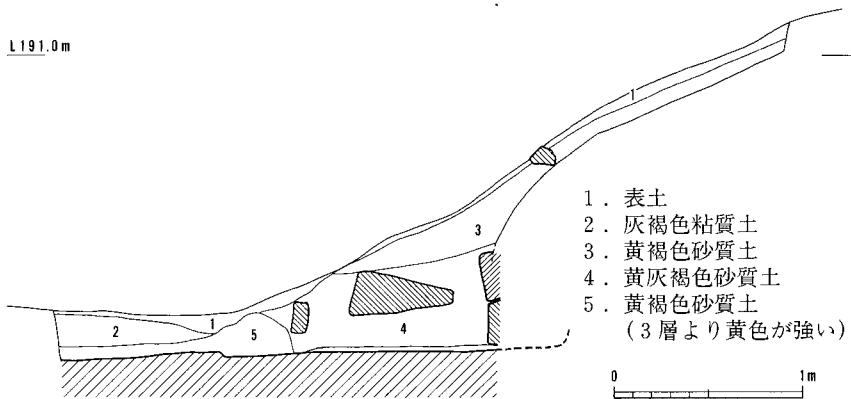
近い状態で、15mの円形である。ただ、第2主体の墓廬の規模などを、考慮すると、径18m前後の円墳と考えられる。残存高で2mを測るが天井石など残っていないことから、それ以上であることは明白である。

双子塚 2号墳



第105図 東トレンチ南壁土層断面図

石室の位置はその一部も露出しているが、墳丘中央部が大きく陥没していることから明白である。奥壁側は僅かに残っているが、墳丘中央部の落ち込みが墳丘を南北に二分するほどである。奥壁に直交して設定したトレンチの結果から、墳丘築成の一部が明らかになった。墳裾部分を削り出して墳丘を画し、低い台地状の部分に墓壇掘り方を築いている。墓壇は旧地表と考えている暗灰褐色土から掘り下げている。トレンチ幅が狭く、保存が前提となった調査のため、墓壇底面まで掘り下げられなかったが、玄室床面の標高188.9mであることから現状で1m以上の深さを持つ墓壇であることが判った。墳丘は石室構築に併せて行っている。基底石および2石目までを最初の構築段階として、旧地表面から盛土を行っている。次に第3石目上面までを同一層で盛っている。この段階で墳裾近くまで盛土が達しており、墳丘の多くの部分を占め、平面的にはほぼ完成した状態になっている。そ



第106図 墳丘北側土層断面図

の上層は、層が細かく分かれており、地山土と有機質の混ざった土との互層になっている。平面的な作業を終え、垂直的な墳丘を築く作業に入ったためであろうか。天井石を架構したのちも同様に盛土を行ったものと推定される。残存高で1.8mを測るが、天井石が全く残っていないことから、さらに1m以上の墳丘があったことは十分に予想される。

3. 主体部

(1)第1主体（横穴式石室）

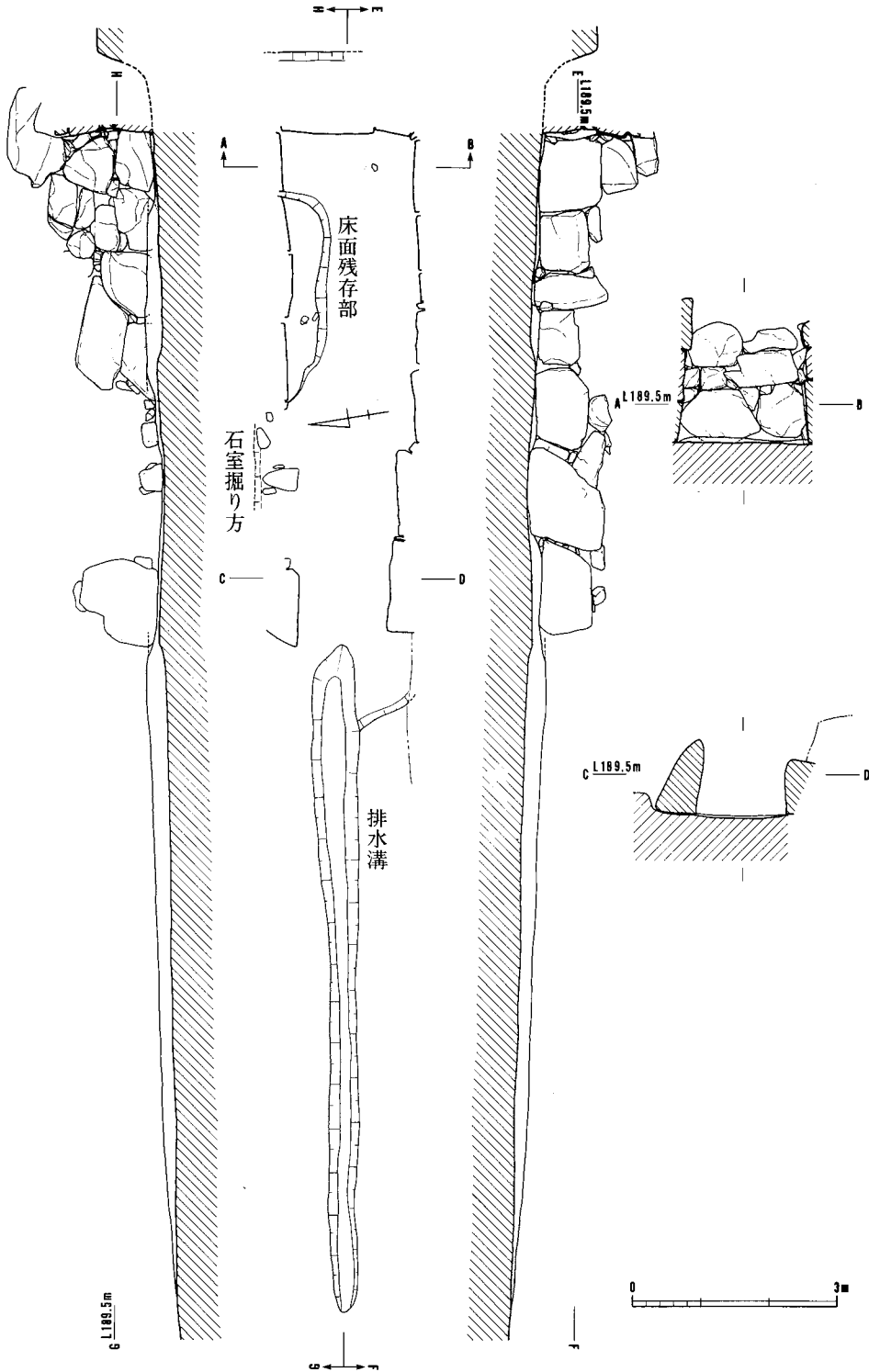
墳丘中央に位置する主体部で、位置関係などから当初の主体部と考えられる。石室部分が落ち込んでおり、石材も露出していたように保存状態は必ずしも良好とは言えない。天井石は全て取り除かれており、側壁・奥壁ともに上部は欠失している。床面も攪乱を受けており、北側壁の羨道部分は基底石まで損失しているなど保存状態は悪かったが、平面プランは確認出来た。片袖式の横穴式石室で、残存長7.2mを測る。北側壁は、袖に対応する部分から羨道部にかけてほとんど損壊を受けているが、かろうじて閉口部の1石だけが旧態を保っていた。石室の平面プランは、奥壁部が最も広い幅を持ち、1.95mの数値が得られ、徐々に狭くなっていくプランを取っている。小さな袖を設けており、0.35mの幅を有している。玄室長4.6m、羨道長2.6mと玄室の方が長い。玄門部で推定1.5mで羨門部で1.3mを測る。石室は、奥壁近くが最も良く残っており、3石目まで見られる。

石材は地元で採取される流紋岩で、比較的大型の石を使用している。殆ど基底石しか残っていないため、推測の域を出ないが、基底石は大型の石材を横積みを使用している。奥壁も同様の横積みが採用されている。南側壁の1石のみが縦積みされているが、他と比べて大型の石材ではなく、普通の大きさである。通常の横穴式石室に見られるような袖石もしくは袖石に対応する石材を縦積みするといった用石法は用いられていない。現状では、羨道部の羨門から2石目の石が最も大きな石を使用している。石材間の裏込め石・詰石も多くはなく、大型の石材で構築されている。玄室の縦積みされた石と、羨道の大型の石材のレベルがそろっており、目地を通してのように思われる。そのために縦積みの石材を1石だけ使用したことも十分に考えられる。その間は小型の石で高さを揃えたと考えるのが妥当であろう。当然ながら石室内側に平滑面を持ってきている。

奥壁は、平面で2石の石を使い3段目までが残存している。立面観は大型石室の印象を与えないが、幅1.95mと近隣では大型のクラスに入る石室である。特に大型の石材を奥壁に利用したとは思われないが、石材は最大長1.2mとやや大型のものを使用している。

当墳の石室の特徴は、大型の石室であること以外に排水溝が検出されていることも挙げられる。現状では羨門部から主軸上に9.8m延びている素掘りの排水溝である。外に行くほど細くなっていき、羨門付近で最も広く幅0.8mを測る。深さは、0.4mが最深で徐々に浅くなっていき、自然消滅的になくなっている。

双子塚2号墳



第107図 2号墳第1主体実測図

石室は保存度が悪いことから断定は出来ないが、持ち送りがなされているようである。残存部の上面では床面の幅より約0.35m幅を減じている。崩壊による傾斜もあろうが、当初からある程度は持ち送っていたものと考えられる。

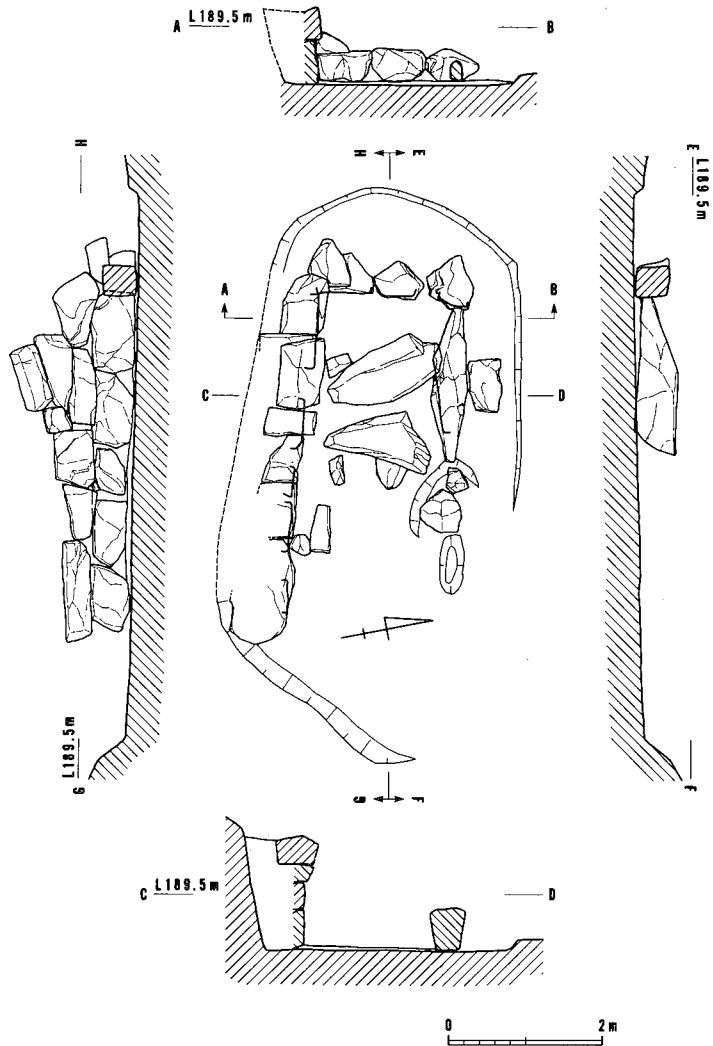
(2)第 2 主体 (小竪穴式石室)

墳丘北側に構築された主体部で、明らかに墳丘を削って墓壙を築いている。古墳の保存が決定したことから、大きく墳丘を損なうことを避け、墳丘中央部にまで調査の手を加え

なかった。そのため、明瞭に土層の切り合い関係・堆積状態や墳丘再構築の盛土の状況など確認していない。墳裾近くに位置していることから盛土がほとんどなかったことも土層堆積を観察する妨げになっている。ただ、主体部上面に墳丘盛土である黄褐色砂質土が存在することから、再度墳丘を築いたものと思われる。

北側壁は、開田のため旧態を残していなかったもので明らかでない。石室も同様に、北側は西側の 1 石だけが確実に原位置を保っている。他

の残存している 2 石も原位置を保っているものと思われ、また長径40cmの石の抜き跡も 1ヶ所検出している。そのため、南壁と同じ程度の残存長が計測される。しかし、東側小口部分は全く残っていないことから石室の全長は知り得ない。ただ、墓壙は東側部分で弧を描いており規模は推定出来る。墓壙の規模などから考えると、石室の全長は現存長に近い数



第108図 2号墳第2主体実測図

値であろうと推測される。墓壙は長径3.8m、短径1.9mの不定楕円形である。石室は、幅0.8mで残存長は、幅0.8mで残存長は1mを測る。南壁が最も残存状態が良好である。1ヶ所だけ4段目まで残っている。用石法は全て横積みで、地元で採取される流紋岩を使用している。石材を積む際、粘土質の土を石材間に詰めており、裏込め石・栗石はほとんど使われていない。一部しか残っていないが、3・4石目は持ち送って内傾していることから石室高は残存高の0.8mに近い数値であろうと思われる。短辺側壁の1辺は欠失しているものの石室の規模や用石法から後期の小竪穴式石室と考えられる。

4. 遺物の出土状態

第1・第2主体ともに石室床面まで後世の攪乱を受けていくことから、当初の副葬状態は想定出来ない。第1主体は玄室の北側壁部分しか床面は残っておらず、出土遺物は原位置とは思われない。

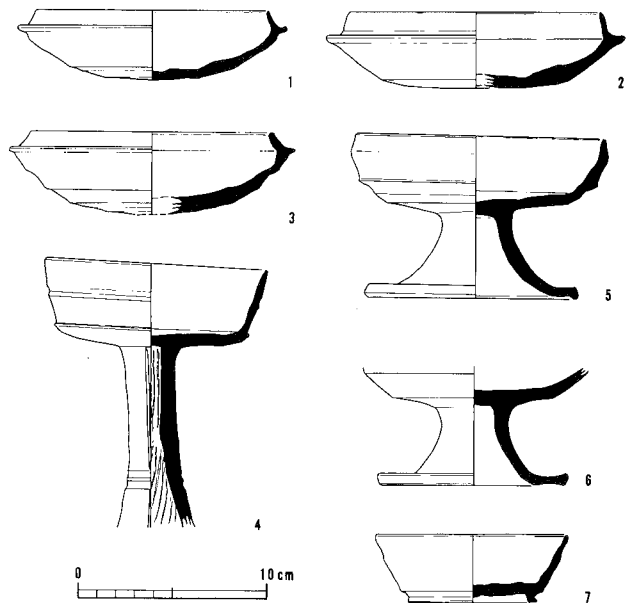
第2主体も石室を再利用されているため当初の埋葬面は近世墓の墓壙以外の部分しか残っていない。その部分からは1点も出土していない。近世墓は0.8~1mの不定円形の土壇墓で、南側寄りの土壇内から六道銭を意識したものと思われる寛永通寶5枚が副葬されていた。5枚の銭は糸で結ばれており、頭髪とともに布に包まれて置かれていた。寛永通寶は裏面に「文」の字が鑄出されたいわゆる「文銭」であることから、寛文8年(1668)という上限が与えられている。銹着が著しいことから、始めから直接繋いでいたことが窺われる。

原位置を保っていたのは羨門北側の墳裾部分で検出された須恵器大甕である。完形品を意図的に破砕したもので底部に近い部分に打撃痕が見られる。口径45cm、最大腹径89cm、器高114cmを測る大甕で、出土状況から墓前祭祀と考えて良いと思われる。上に墳丘が盛られているだけで、土壇などの施設は見られなかった。

5. 出土遺物

双子塚2号墳の遺物に関しては、須恵器8点の出土を見るのみである。

坏A(1~3)



第109図 2号墳出土土器(1)

立ち上がりが低く、やや内傾の強いものである。回転ヘラケズリの範囲も½か、それ以下に狭まっている。ケズリの方向は左回りである。2はケズリを行わずヘラ切り未調整である。

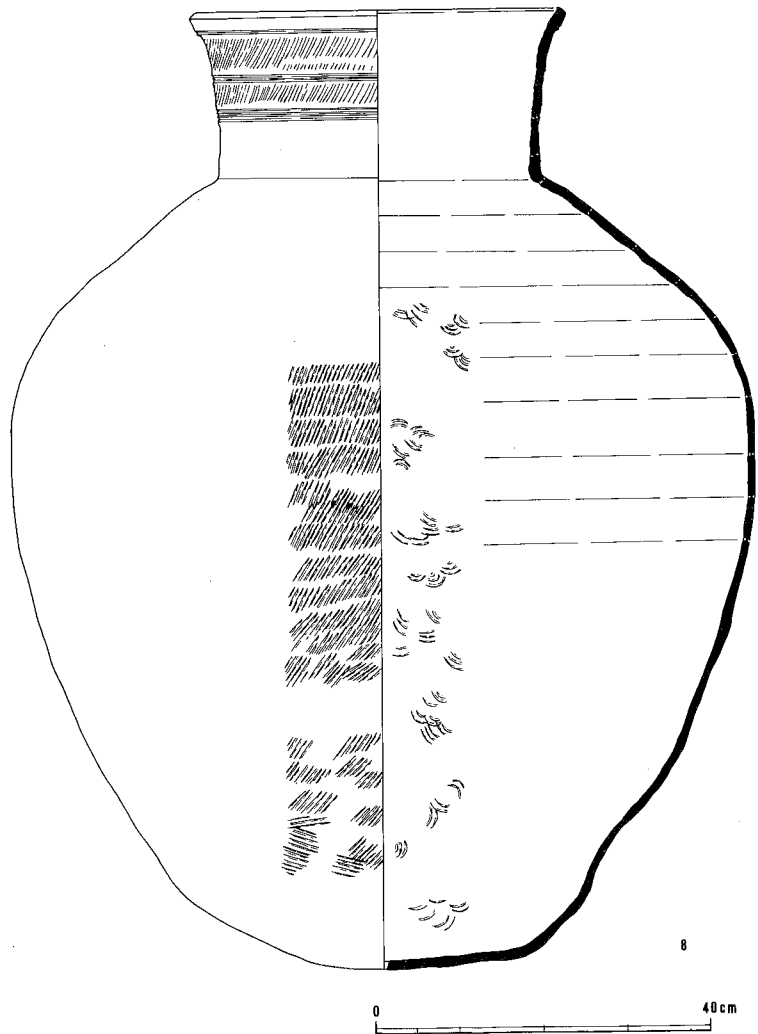
法量については1は口径約12.3cm、器高約3.7cm、2は口径約13.2cm、器高約4.0cm 3は口径約12.7cm、器高約4.5cmを測る。

高坏（4～6）

3点とも無蓋高坏である。4は長脚となるが、5・6は短脚のものである。

4の坏部は、浅く体部中央に1条の凹線が巡る。それに続く脚部は裾部が欠損しているが、2条の凹線を境として上下に2段3段透かしが穿たれている。透かしは退化的なもので、ヘラで切り込むことで透かしとしている。筒部内面はシボリ目が顕著である。口径約11.6cm、現存高14.2cmを測る。

5・6の坏部は蓋を逆転させたようなもので、口縁部と坏部底とを画する稜が見られるのみである。脚部は「ハ」字形に開き、裾部で若干水平方向にのびる。脚端は5は僅かに下方に屈曲するが、6は上方に肥厚させている。双方とも外面に自然の付着をみる。



第110図 2号墳出土土器（2）

5 は口径約13.1cm、器高約8.65cm、脚部約11.1cm、6 は脚径約9.7cm、現存高約 6 cmを測る。

坏 B (7)

高台を持つ坏で、口縁部は外上方へ直線的にのび、端部は丸く収める。底部外面はへら切りのままである。口径10.3cm、器高3.6cm、高台径6.8cmを測る。

甕 (8)

すでに記しているように、口径45cm、最大腹径89cm、器高114cmを測る大甕である。ほぼ直立する口頸部で、口縁端部は内側に若干つまみ出している。頸部は 3 条の凹線で画し、その間は櫛描斜線文を施す。肩の張らない体部で、最大径は真ん中よりやや上位にもつもので、底部に焼成後の穿孔が認められる。

6. 小結

双子塚古墳群は、2 基の円墳から成る古墳群である。1 号墳は用地外であったが、地形測量を実施した。規模などの点で 2 基の円墳は類似点が多い。墳丘中央の石室部分が溝状に掘り下げられており、墳丘を南北に二分している。現状での墳丘2.5m、直径15m前後の円墳である。南側墳裾部分は開田のため欠失している。2 基の規模の差は認められず、ほぼ同規模である。主体部も横穴式石室と考えられ第 1 主体と同規模と考えて大過ないだろう。

2 号墳第 1 主体の床面はほとんど旧状を残していなかったが、周辺では最大規模の石室である。全長7.2m、幅1.95mの大きさに三田市域の大型石室と比べて遜色ないものである。志手原 1 号墳は現存長8.60m、幅1.85mで、中西山 3 号墳は全長9.4mである。

通有の場合、大型石室には排水溝が見られるように、石室規模を象徴するようである。大型石室の排水溝は概して立派で、この点でも遜色ないものである。現状では羨門から主軸方向へ直線で9.6m延びているが、石室内が削平されているため、不明である。石室内にも続いていたものと推測される。素掘りの排水溝で、石など伴っていない。

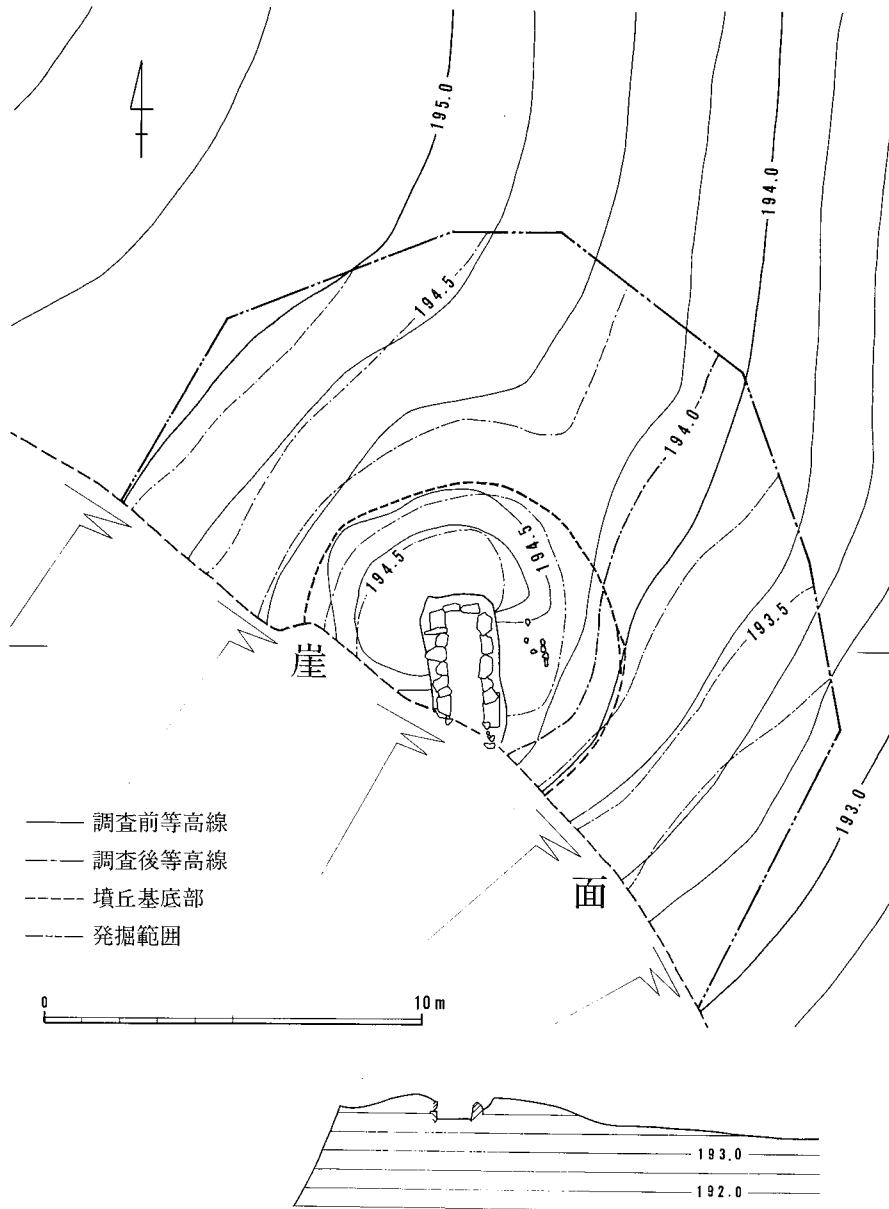
石室の規模の割に出土遺物は残っていなかったため、遺物は少数で見劣りする。須恵器から築造時期は 6 世紀後半と考えられる。

(渡辺・高島)

第5節 ^{もとめづか} 求メ塚古墳 (AN-201)

1. はじめに

求メ塚は昭和54年度の土取り工事に際して、新しく古墳の可能性が注意されたが、なお墳丘の低平なことや雑木が密生していることから、確実に古墳であると断定するまでに至らなかった。



第111図 墳丘図

昭和56年に求メ塚の所在する末野字求メ塚の地点は、ダムに注ぐ古谷川の改修工事に要する土取り採集地として選定された。そのため県教委は確認調査を実施し、横穴式石室を埋葬施設とする古墳であることが明らかになった時点で、青野ダム建設部と保存についての協議を重ねた。しかし工法変更の不可能なこと、採取跡地をダム水没者の移転地とする話が整っている点などから、発掘調査を実施することとなった。なお、本古墳は『昭和56年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』において、「求女塚古墳」として報告しているが、この度地籍図によって「求メ塚古墳」と訂正することにしたい。

2. 立地

求メ塚は県道曾地中三田線の西に接して所在し、海拔194.5mの東から西に向って下降する丘陵突端部にある。昭和54年度の土取り工事のため、高さ約6mの崖面となり、墳丘の約 $\frac{1}{4}$ はすでに損傷をうけていた。

3. 墳丘

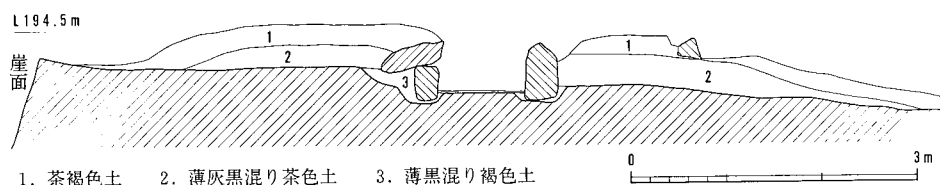
古墳は海拔194.5mの傾斜面地、いわゆる山腹部に位置するが、傾斜は北々西から南々東に下降する地形で、高位部をわずかに掘り割り、墳丘を明確にしている。墳丘基盤面は山腹であることから、顕著な隆起を示していない（第112図）。

墳丘の築成は旧表土を除去し、石室掘り方を穿ち、石積みと並行して茶褐色土を盛っている。第1回目の盛り土は石室積石最下段の上端部で終わり、その盛土上で墳丘を取り巻く列石を積み上げている。列石は $40 \times 30 \times 20$ 程度の割石を使っているが、墳丘東側の一部が遺存しているのみであった。

墳丘の規模については、南東部付近が自然傾斜面となっていて、明確な基底部分が摺り合えないことから正確を期し難い。しかし、海拔194mの等高線は明らかに墳丘のカーブを描き、海拔193.5mの等高線は丘陵地形を示していると見られる。海拔193.75mの等高線付近を墳丘基底部と考えると、径9m程度の円墳と想定される。

4. 埋葬施設

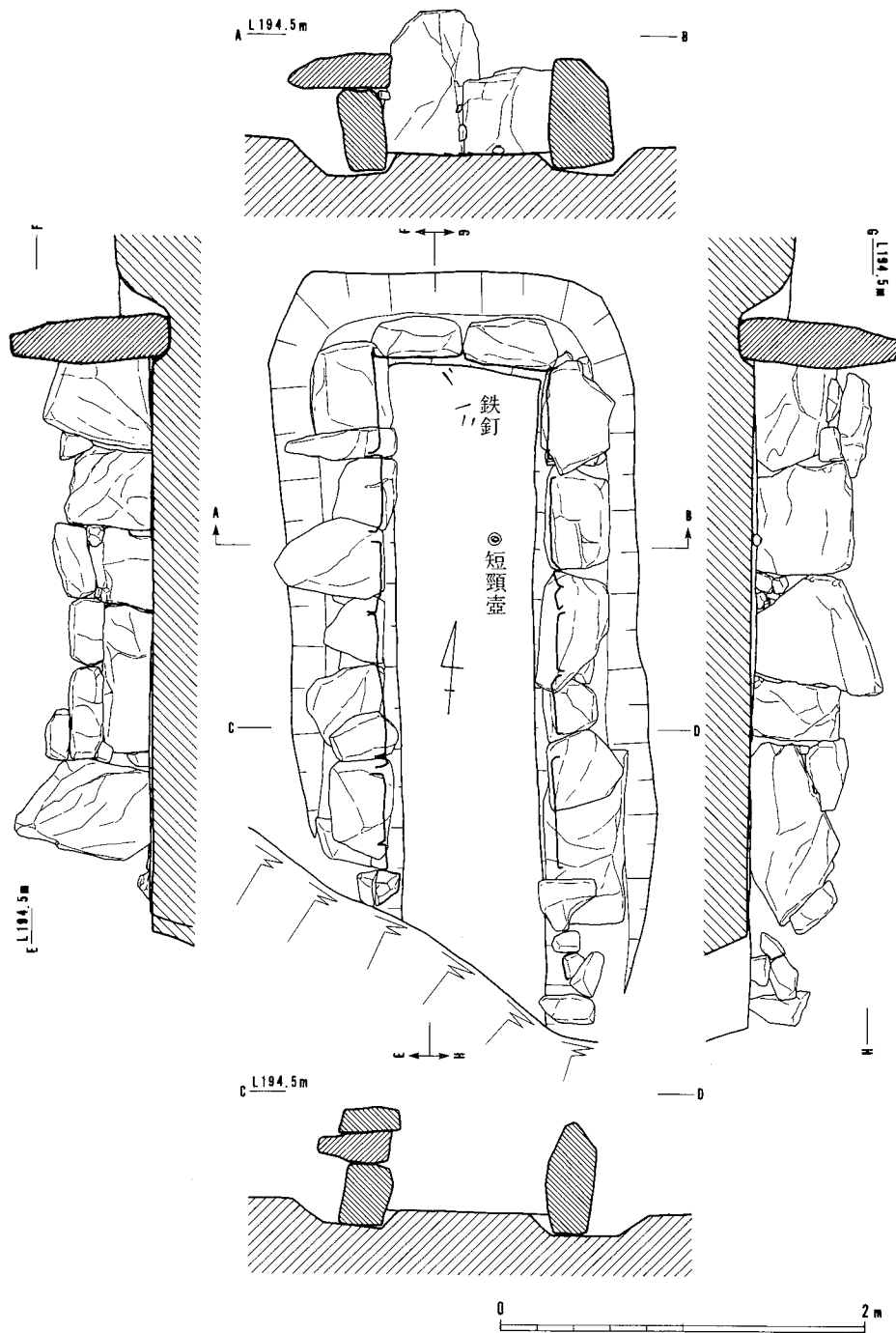
横穴式石室は主軸をN5度Eに向け、ほぼ南に開口する無袖式の石室である。石室は奥壁に2石、左右側壁はともに5石が残っているが、一部に3段の石積みが見られる他は、下段の石が遺存するに過ぎない。天井石と思われる石材も付近には認められなかった。



第112図 墳丘東西断面図（右が東）

求メ塚古墳

石室石積みは50×60×35cm程度の石を平均とする割石を、縦及び横に据えている。石積み最下段は大型の石を使い、上段には小型の石を積み上げている。石室南端部の左側壁は(奥壁に向かって)、石積み下底の詰石のみが残っているに過ぎない。また右側南端の石積



第113図 石室図

みも、2石の小割石が地山上に認められ、その上に2石の小割石が乗っているが、二次移動の可能性が高い。石室南端部はさらに1石程度の側石があったと想定されるが、現状においては、確実な左側壁の下底詰石まで全長2.85m、奥壁幅0.95m、羨門部0.94m、高さ0.7mが遺存している。

石室の掘り方は長さ4m、幅1.95mの隅丸長方形に掘り込み、石積みをする地点では旧地表面から深さ0.3m程度の「コ」の字状に穿ち、石室内床面は20cm程度掘り残している。

石室床面の状況は、地山を掘り残して基壇を造り出しているが、その上に化粧土が置かれていたかどうかは不明であった。ただ奥壁・側壁の石と石室内床面との隙間には、削り取った地山土を詰めて床面を平坦にしている。

石室内部には排水および特別な施設などは認められなかった。

5. 遺物の出土状況

石室内の出土遺物はきわめて少なく、奥壁部で鉄釘・刀子・鉄鎌が、石室中央部付近で小型高台付短頸壺が出土したのみである。遺物はほぼ床面上からの出土であった。

そのほか、墳丘表土層から須恵器大型甕の破片が出土している。

6. 遺物

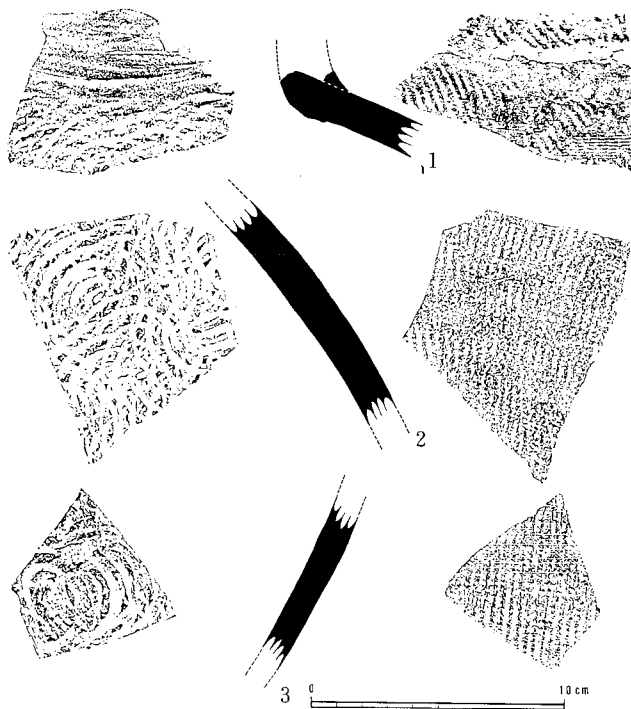
求メ塚古墳出土の遺物は、須恵器と鉄器のみである。

(1) 土器 (第114・115図)

第115図の須恵器は唯一完形の、小型高台付短頸壺である。口縁部は上方に僅かにつまみあげた程度の長さで端部は丸く、体部中央よりやや上方で最大径をもつ肩の張ったものである。法量は口径3.9cm、器高4.15cm、最大径6.8cm、高台径4.0cm、高台高0.3cmを示す。

調整は口縁部から体部にかけて、内外面とも回転ナデを施し、底部外面はヘラキリ後ナデを行う。

第114図の須恵器 3点



第114図 墳丘表土層出土須恵器

は甕の肩部と体部片である。断面は比較的厚く、大甕であろう。

(2) 鉄器 (第116図)

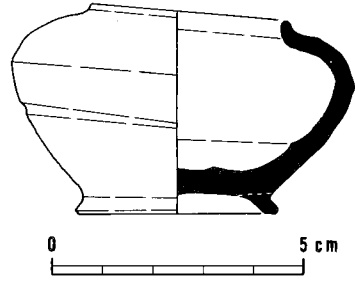
鉄釘 (1~3、6~10)

1は頭部先端を少し伸ばしたあと、「9」字形に折り曲げている。頭部幅と胴部幅の差は見られない。頭部に僅かではあるが横方向の木質部が残っている。先端部は鑿の刃状を呈する。全長9.8cm、頭部幅0.55cm、胴部断面は0.5×0.35cmある。

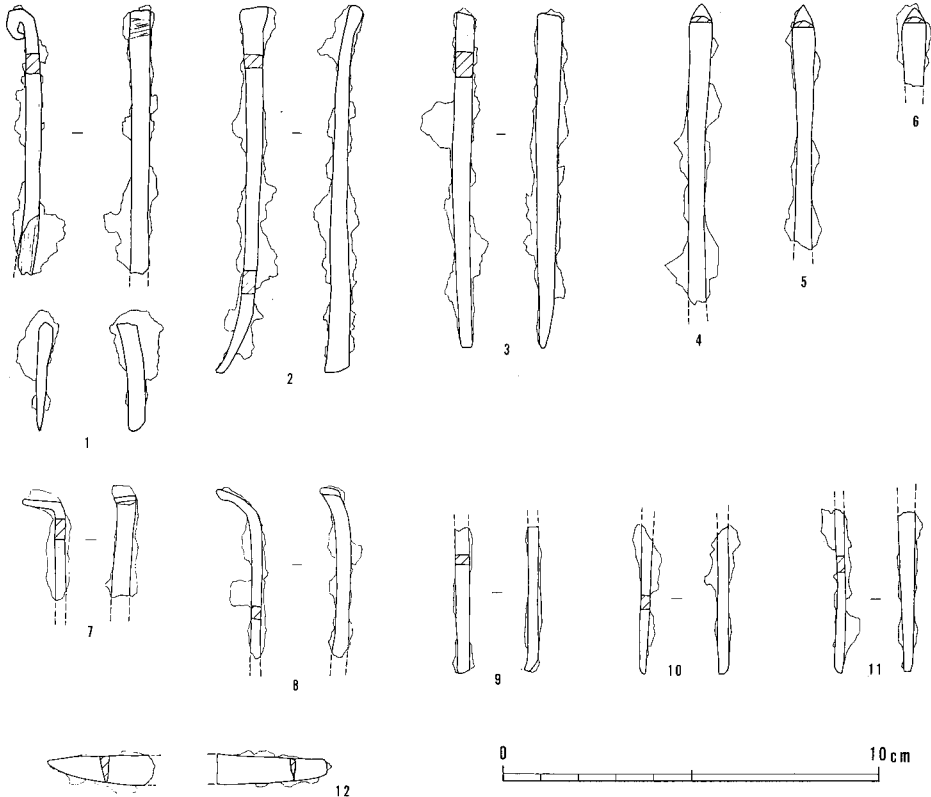
2は全体的に若干ねじれており、頭部は平たく逆台形状に張り出し、先端部は鑿の刃状を呈する。全長9.7cm、頭部幅0.8cm、胴部断面0.5×0.35cmを測る。

3の頭部は扁平で折返しがなく胴部と同じ太さを呈し、先端部はシャープさには欠けるが角錐状となっている。全長8.8cm、頭部幅0.65cm、胴部断面0.6×0.5cmの寸法を示す。

7・8は若干様相を異にするが、頭部の一端をそのまま一方に折り曲げ、胴部との境は見られないものである。7は現存長2.7cm、胴部断面0.4×0.3cmを、8は現存長4.45cm、胴



第115図 石室内出土須恵器



第116図 石室内出土鉄製品

部断面0.35×0.25cmを示す。

9～11は鉄釘の先端部と思われる。9は現存長3.85cm、10は現存長3.9cm、11は現存長4.2cmを測る。

鉄鏃（4～6）

3点とも刃部のみで、基部を残すものはない。刃部の形態は3点とも同じで、尖根状を呈する。これらは片丸造りで、篋被部は全て折損しているため、棘部を有しているかどうかは不明である。4は現存長7.9cm、刃部幅0.6cm、5は現存長6.45cm、刃部幅0.6cm、6は現存長2.0cm、刃部幅0.6cmある。

刀子（12）

切先片と茎片と思われる。切先片は現存長2.75cm、棟厚0.2cm、茎片は現存長3.0cmを示す。

7. 小結

本墳はダムを望む丘陵突端部の、海拔194.5mに立地する。墳丘は緩やかな斜面に築かれた径9mの円墳で、中段に列石を配している。墳丘の築成は斜面地を若干整えた後、埋葬施設の墓壇を穿ち、横穴式石室の石積みと平行して盛り土を行っている。墳丘の高さについては不明であるが、埋葬施設との関連からみても、それほど高いものでなかったと想定される。

埋葬施設は南に開口する無袖の横穴式石室で、残存する全長2.85m、奥壁幅0.94mの規模を有する。高さは0.7mが残っているが、もともと2mを超えるものであったとは考え難い。石室石積みはやや大型の割石を下段に使い、上段に小型の石を積み、面を比較的揃えた状況で行っている。石室床面は地山を掘り残して基壇を造り出している。このような埋葬施設の構築方法は、ダム建設用地内では落合古墳との類似が指摘される。

遺物出土量はきわめて乏しく、また出土状態も確実に古墳の築かれた当初の年代を示しているとは即断でき難い。特に土器の出土は少量で、墳丘からの大型甕の破片3点と、石室内の小型高台付短頸壺1点のみであった。小型高台付短頸壺は直立する口頸部をもち、高さに対して胴径の大きい体部へと続き、裾張りの強い高台を有する。このような類例は正倉院のなかの薬壺にもみられ、およそ8世紀中葉頃の年代を示すものと考えられる。

鉄製品は木棺の釘・鉄鏃・刀子の出土があったが、いずれも銹化が著しく詳細に観察出来ない点も多い。鉄鏃は3点が検出されたが、いずれも尖根式の実用品とみられ、篋代に棘状突起を備えたものは認められない。これらは時期の細分を行うに至らないが、全長約10cm、刃部の厚み約0.5cmと小型化していることから、古墳時代の中では最も新しい要素を示しているものと思われる。したがって、求メ塚は7世紀中葉頃に築造され、8世紀中頃に再利用されたものと考えられる。

（檀本・高島）

第6節 ^{もとめづか} 求メ塚遺跡 (AN-87)

1. 位置

末野字求メ塚・北浦字道心ヶ谷にまたがって所在する遺跡である。青野川右岸の比較的広い平坦となっている段丘面の北端にあたり、段丘内の谷部に広がる遺跡である。谷は比較的急な斜面で東側方向に広がっている。調査前の地目は水田で、比高差の大きい小面積の水田が段々になっている。谷は、青野川が大きく蛇行した部分につながっており、その谷の奥部に位置している。

2. 調査結果

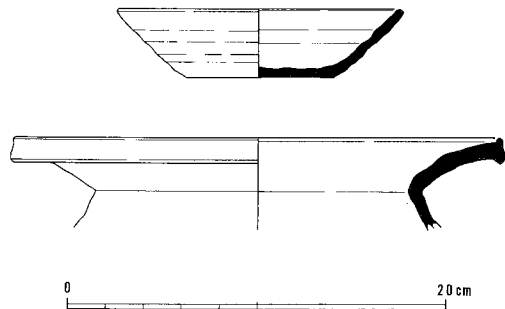
昭和54年度の確認調査の結果、第2次調査を必要としたAN-87地点の全面調査を実施した。狭長な谷地形の水田2枚が対象となっていたが、北西の標高の高い水田は調査不能となったので南東の標高の低い水田1枚を全面調査した。

その結果、包含層は認められたものの時代の相異があり層序も順堆積でなく逆転しており、夾雑物の混入もあり、二次堆積の可能性が高いものと思われる。土器類もそう多いものでなく須恵器が最も多く、弥生土器、土師器、陶磁器が少量含まれている。時期的に幅のある遺物である。

全面調査を実施した当初の目的の遺跡の性格とは異なって、床土を除去した面から数えて4時期以上の前代の水田面を確認した。新しいものは、現代に近いものかもしれない、古くても室町前後ではなかろうかと考えられる。

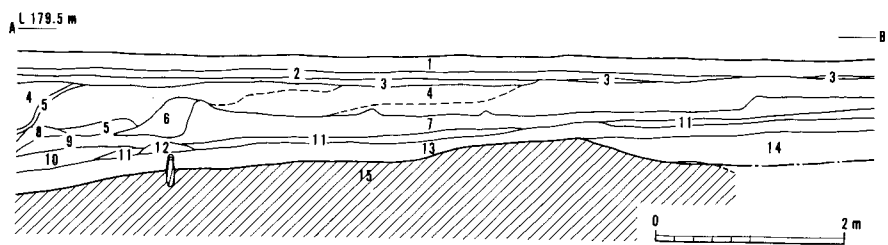
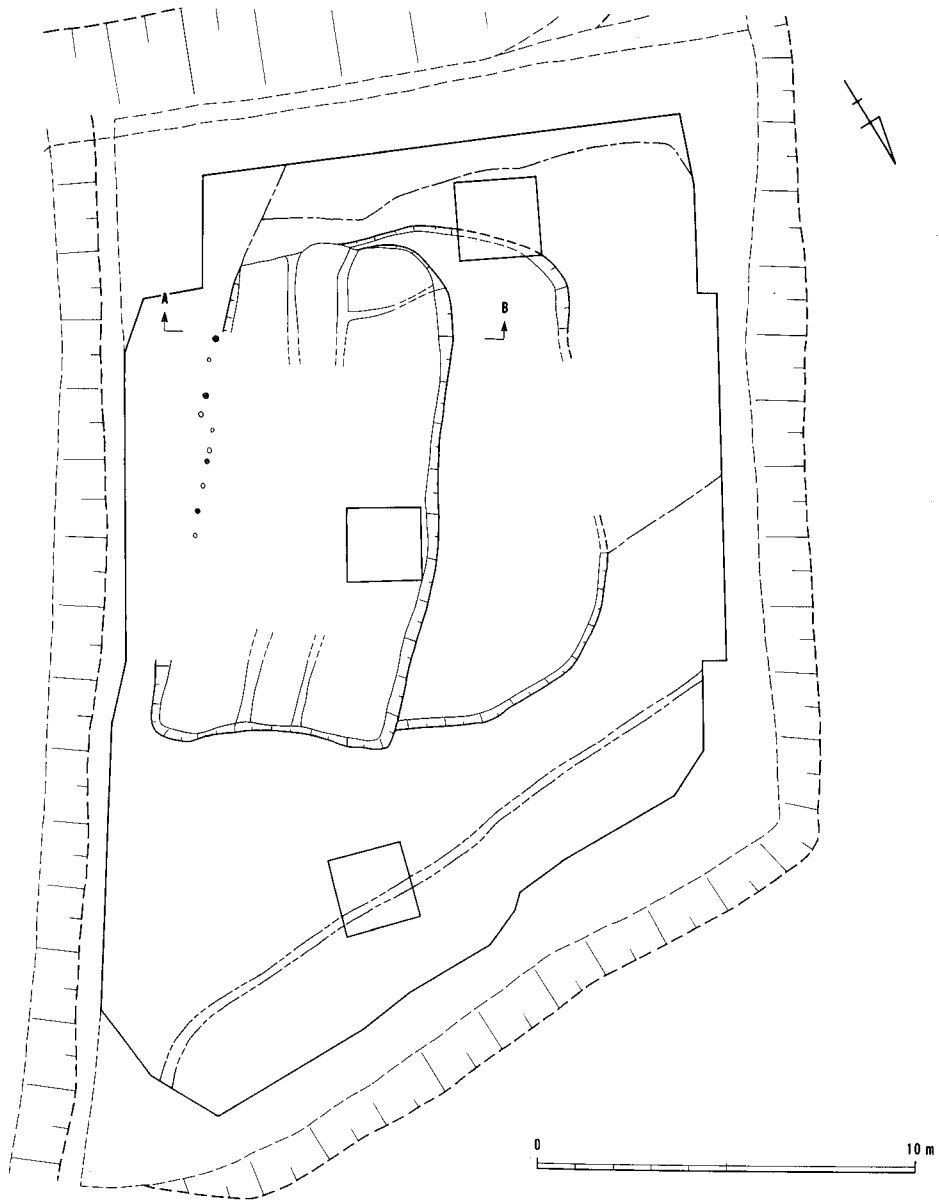
平面で検出した最下層の最初に築かれた水田面の数値を代表させておく。幅70~90cmの大畦畔を長辺13m、短辺6.5mの長方形に巡らせている。水田面との比高差は10~15cmであり、外側に暗黄褐色の砂礫土で固め補強している。南東側の長辺にピットを10基検出し、そのうち4基には杭が残存していた。畦畔の基礎を固めるためのものか、大畦畔を胴木を伴って構築するためのものか即断できないが、畦畔に伴うことは事実である。大畦畔の中に幾本かの幅12~25cmの小畦畔が存在する。中央部を下面まで下げてしまい平面で検出出来なかったが、短辺に3本の小畦畔が作られている。面積は狭小で、4㎡前後の区画になる。谷地形を最大限利用した水田であることが窺われる。

包含層を確認したので、その遺跡の主体を確認するため南方を坪掘したが、遺構など認められなかった。北西方向は建設予定地外で調査対象地ではない



第117図 出土土器

求メ塚遺跡



- | | | | | |
|---------|------------|-----------|------------|---------------|
| 1. 耕土 | 4. 黄褐色砂礫土 | 7. 灰褐色砂質土 | 10. 灰色粘質土 | 13. 灰色砂質土 |
| 2. 床土 | 5. 灰色粘土 | 8. 灰色砂質土 | 11. 灰黑色粘質土 | 14. 褐色粘質土 |
| 3. 黄色粘土 | 6. 暗黄褐色砂礫土 | 9. 暗灰色砂質土 | 12. 褐色粘質土 | 15. 黄色粘質土(地山) |

第118図 調査区平面図・土層断面図

ので、調査は行っていないが、末野字求メ塚周辺に可能性が考えられる。

3. 出土遺物

出土遺物量は少なく、コンテナ(セキスイTS-28)に3箱である。完形品はなく、図上で完形となるものも1点だけである。図化可能なものも数少なく、大半は表面磨滅した2次堆積の遺物である。須恵器が最も多く大半を占める。甕・埴・皿の器種が出土している。土師器も埴・皿の破片である。中世の遺物とくに12～13世紀の土器が最も多いが、遡る時期の土器も少量含まれている。陶磁器は全て近世のもので水田面より上層から出土している。丹波焼甕や染付磁器の破片などである。

(渡辺)

末東地域



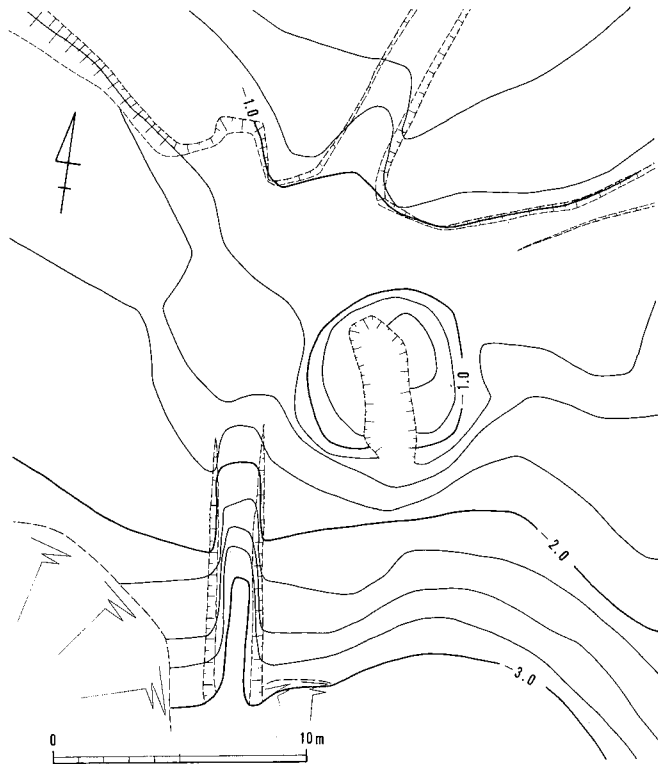
第7章 末東地域の調査

第1節 ^{おちあい}落合古墳 (AE-24)

1. 立地

発掘調査地区分による末東地区 (AE-24) にあって、青野ダム建設用地内の南端に位置する。古墳の立地する丘陵の南西眼下は、青野川と黒川の合流点であり、ダムサイトの建設される地点に所在する、川端遺跡・川端窯跡などを望むことができる。

古墳は北から南に延びる丘陵突端部にあつて、緩やかに下降する南斜面に立地している。丘陵の幅は割合広く、かなりの平坦地が認められることから、分布調査および確認調査を実施したが、周辺には古墳は存在しないようで、単独に築造された古墳であるらしい。



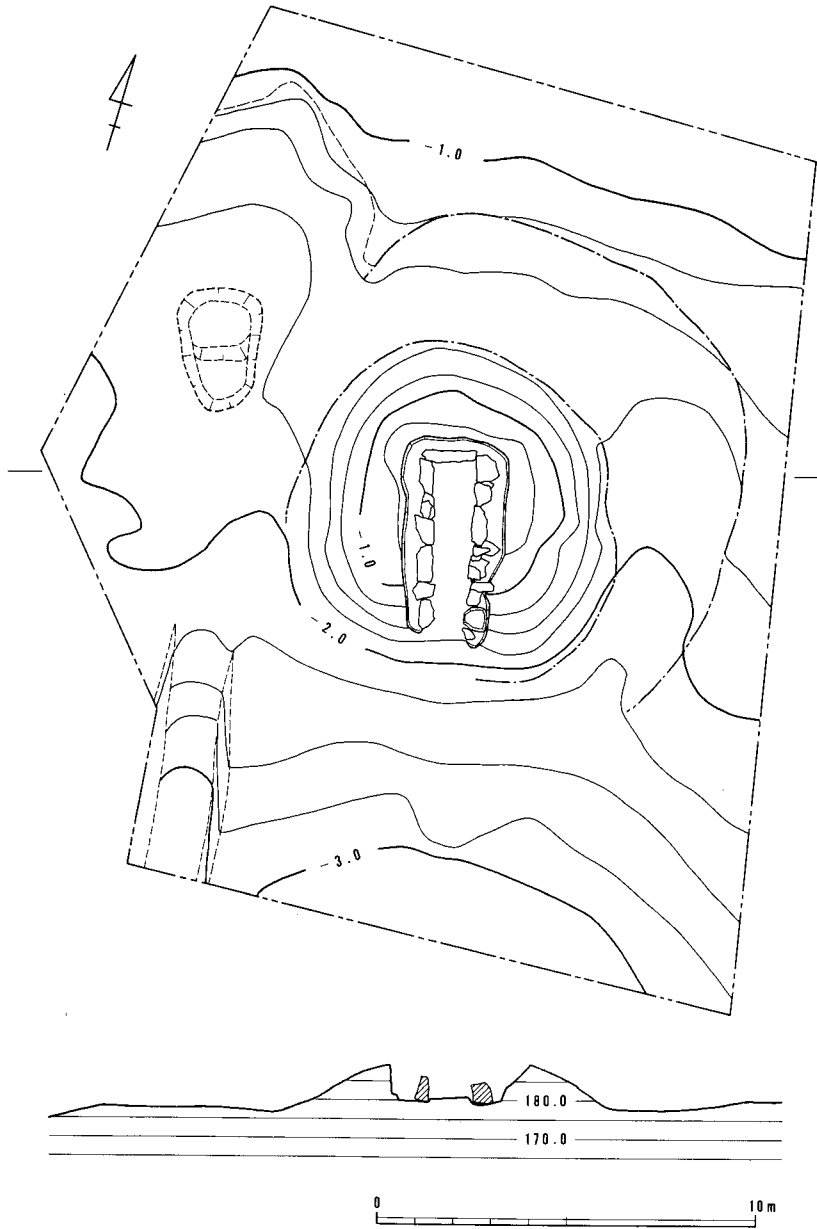
第119図 地形測量図 (調査前)

本墳は南に向かって緩やかに下降する丘陵稜線

上にあつて、南北に通じる山道と、東からの山道が合流する地点の南側に位置する。山道による墳丘の損傷は軽微で、墳丘北西裾部が僅かに削平を受けている程度である。しかしながら、墳丘の中央部は長さ6m、幅2mの乱掘墳が穿たれ、横穴式石室の側石が露出していた。

発掘調査は南北26m、東西20mの範囲を全面に調査したが、葺石や埴輪などの外部施設は検出されなかった。また墳丘西側の土壌も、新しい焼き火跡であり、古墳にともなうものでなかった。

調査の結果、墳丘の基底部は東西および北側に、浅い掘り割りが認められた。その幅は

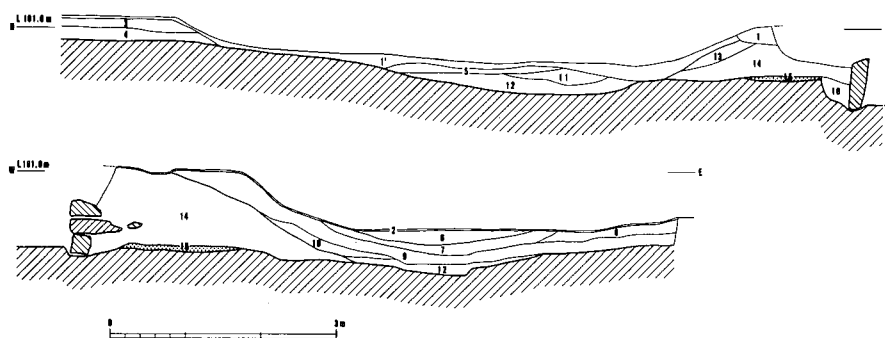


第120図 地形測量図（調査後）

東側で約2.8m、丘陵高位部の北側は約3.5m程度である。この掘り割りを基準にすると墳丘規模は、南北9.2m、東西8.8mある。墳丘の高さについては旧状を知りえないが、現状では東側の掘割り底部から約1.2mが遺存している。

墳丘の築成は旧表土を取り除き（南北トレンチの南側、すなわち地形の最も低い地点には一部旧表土を残す部分もある。）、墳丘中心部に盛り土を行い（現状での厚さ約0.43m）、その盛り土を包むように厚さ約0.14mの化粧土を盛っている。墳丘中心部の盛り土に

落合古墳



- | | | | |
|------------|----------|-----------------|-------------|
| 1、攪乱土 | 5、現道路影響土 | 9、淡黄色土 | 13、淡黄色土(盛土) |
| 2、表土 | 6、赤褐色土 | 10、淡黄褐色土(流土) | 14、明黄色土(盛土) |
| 3、黄褐色土(流土) | 7、暗黄褐色土 | 11、青灰色土(周溝埋土) | 15、旧表土 |
| 4、褐灰色土(流土) | 8、暗灰黄色土 | 12、青灰色粗礫土(周溝埋土) | 16、墓抔埋土 |

第121図 墳丘断面図

は層序を認めることができなかつた。墳丘外方の掘り割りの深さは東側で約0.2 m程度で、地山を掘り込んでいる。従つて径9 mの円形基盤を形作る状況となっている。

横穴式石室の構築と盛り土との関係は、地山上に積み上げた盛り土に、石室の掘り方が認められないことから、盛り土開始前に掘られたことが明らかである。

3. 埋葬施設

埋葬施設は墳丘中央部に構築された無袖の横穴式石室である。現状は全ての天井石を失い、奥壁・側壁の石組もほぼ最下段を残すに過ぎない。

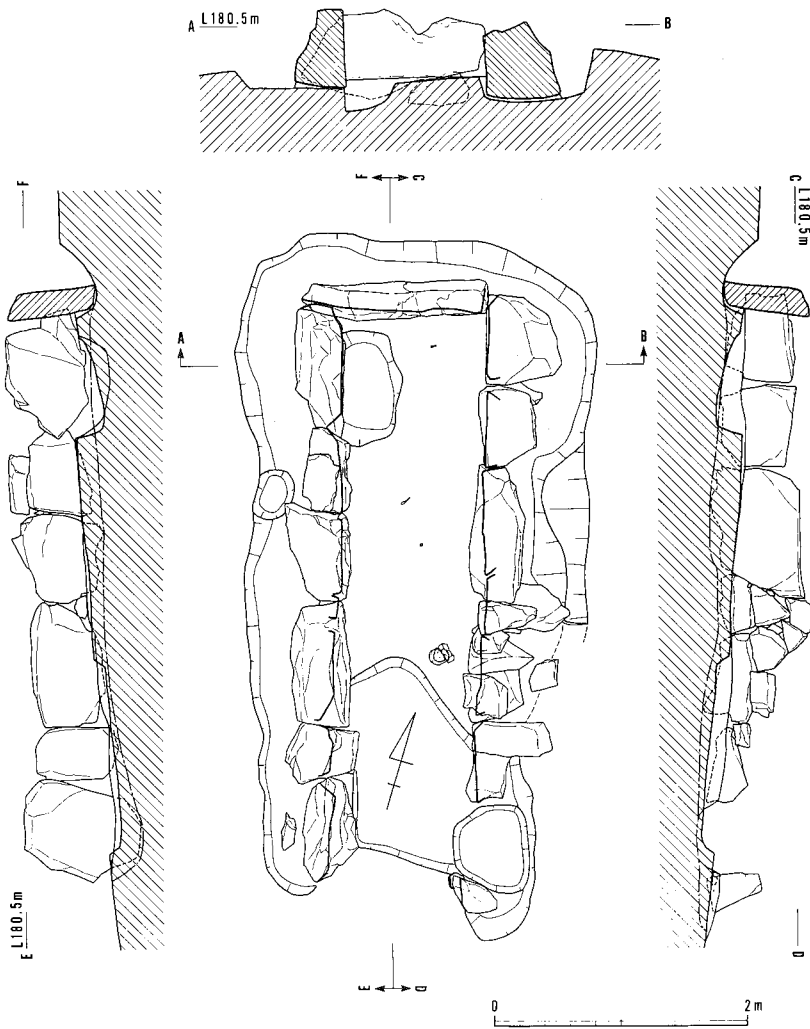
墓壙の掘り方が墳丘築成以前に穿たれたことは、先に述べたところである。その規模は奥壁側の幅2.8 m、羨道側2.2 m、長軸の長さ5.5 mある。掘り方内部の石室内床面に該当する部分は、幅1.1 m、厚さ0.1 mが掘り残されている。

最下段の奥壁と側壁との関係は、奥壁に向かって右側壁と左側壁の、石の配置状況が異なっている。石はいずれも小型で厚みのないものであり、石室内部に石の広く長い面を見せるように置かれている。墓壙内の石の据え方は、掘り方底部に若干の高低をもたせているが、ほぼ平坦で石の凹凸は土を置いて調節している。

石室内法の規模は、羨門部の遺存が旧状を残しているか否か不明であるが、現状では全長4.7 m、奥壁幅1.1 m、羨門幅1.1 mあって、無袖式ではあるが奥壁部と羨門部との幅は、かなり正確な同規模の施行となっている。また壁面も整然と面を揃えた状況である。石室の高さについては知ることができないが、墳丘規模や石室規模などからみて、高い石室であったとは想定できない。現状では0.6 mが遺存している。

石室の主軸開口方向は、ほぼ南に近いN17度Eにあって、傾斜地下位に羨道入口をおいている。

落合古墳



第122図 石室実測図

4. 遺物出土状況

石室内床面において原位置を保って出土した遺物は皆無であった。また地山を掘り残した床面上に、化粧土的な置土があったかどうか、確認出来る状況ではなかった。原位置から遊離した遺物のうち、奥壁に近い地点からは鉄鏃(第124図2)、石室中央部で鉄釘(第124図1)、耳環が出土し、羨門近くにおいては須恵器坏(第123図3)が出土した。

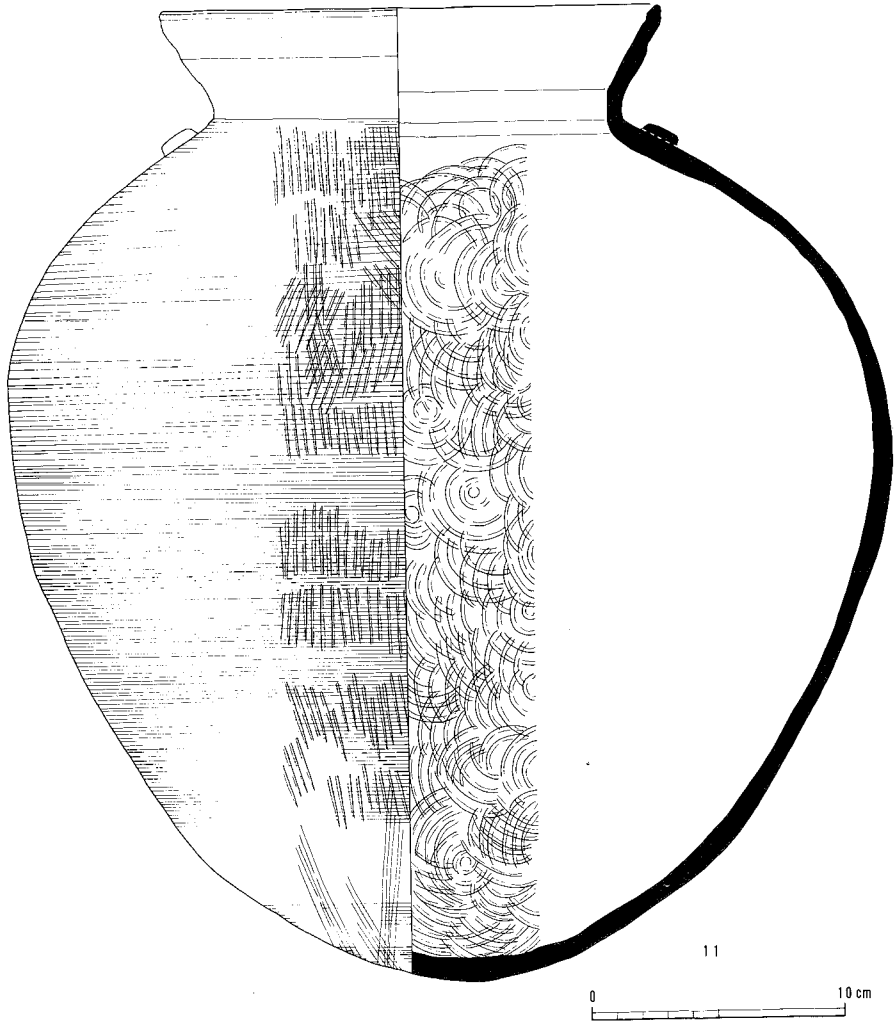
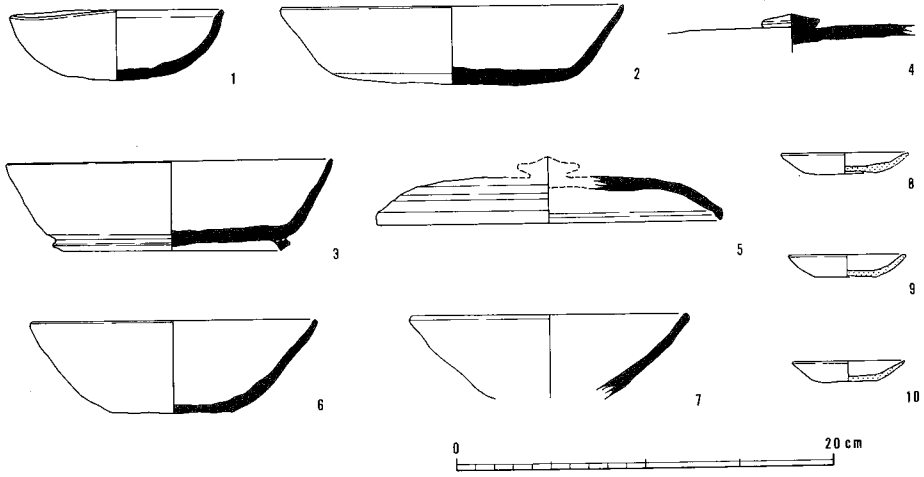
5. 遺物

落合古墳出土の遺物には、須恵器・土師質土器・鉄器・耳環などがある。

(1) 土器 (第121図)

土器の出土が極めて少なく、須恵器8点、土師質土器7点であった。須恵器の器種としては、坏、蓋、埴、甕のみであった。

落合古墳



第123図 出土土器

坏 (1~3)

1は蓋・坏逆転後のタイプで、底部から丸みをもって上方へ内彎気味に伸びるものである。底部はヘラキリ後ナデ調整である。

2は高台を持たない平底のタイプで、若干歪んでいるが、底部と口縁部の境は丸みもち、外反する口縁部へと続く。底部は回転ヘラケズリ調整である。

3は高台を有するタイプで、高台は比較的lowく、外方へふんばる。口縁部は外上方へ伸びる。

蓋 (4・5)

4は扁平な宝珠形をつまみをもつものである。口縁部は欠損している。

5は天井部中央のつまみ付近を欠いている。口縁端部は下方に短く屈曲し、断面は三角形を呈する。

碗 (6・7)

7は底部が欠けているが、6と同様の平底を呈すると思われる。底部から外傾する口縁部へと続き、端部は丸く収める。底部は糸切り調整を行う。

甕 (11)

短く「く」の字形に外反する口頸部で、口縁端部は面をなさずやや尖りぎみに仕上げる。体部は肩の張りが少なく、真ん中よりやや上位で最大径をもつ。頸部直下に円形の粘土粒を2か所に貼り付けている。元は4か所にあったかも知れない。体部外面は縦方向のタタキ目、底部付近は粗い刷毛目の後、全体にカキ目調整を施す。内面は比較的大きい同心円タタキ目が明瞭に残る。

口径 19.7 cm、高さ 38.4 cm、胴部最大径 34.8 cmを測る中型甕である。

土師質土器 (8~10)

灯明皿である。底部は平底のもの、真ん中が上がっているものがあり、糸切り調整を行う。

(2) 銅製品

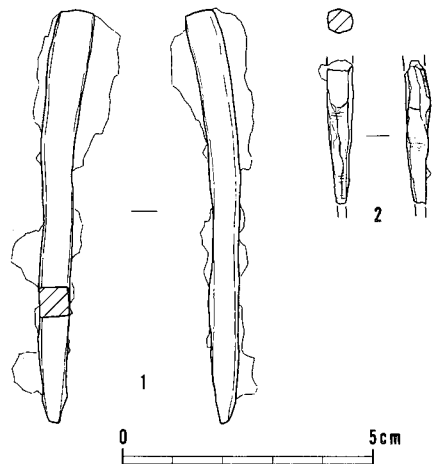
耳環が1点出土した。

(3) 鉄器 (第124図)

鉄器は鉄釘と鉄鏃の茎部片の2点である。

1は鉄釘で全長 8.2 cmを測り、比較的短いものである。頭部は曲がっておらず、胴部とほぼ同様の太さである。

2は茎部片で僅かだが木質部が残っている。



第124図 出土鉄器

6. 小結

落合古墳は径9mの円墳で、墳丘外方に浅い掘り割りを配している。古墳の築成は旧地表面をわずかに整え、埋葬施設の墓壙を穿ち、横穴式石室の石積みと並行して盛り土を行っている。葺石や埴輪の類は施されていない。

横穴式石室は無袖式で、整然と面を揃えた石積みである。石室は残存の長さ4.7m、幅1.1mの小規模な埋葬施設である。石室の高さは不明であるが、2mに達する規模があったとは想定出来ない。このような石室は、本書に報告の求メ塚古墳に見られる。

遺物の出土はきわめて乏しく、石室内からの出土は第123図の3の坏のみであった。また、墳丘上から出土した第123図1の須恵器は、本墳出土遺物の中では最も古い様相を示すもので、11の甕も同様の時期とみられる。これらの土器は7世紀中葉の所産である。2～5の土器は8世紀前半期の年代観を示し、石室再利用時の遺物と考えられる。

本墳の築造が以上の土器の時期とすれば、この地域の終末期古墳の実態を窺う上で、貴重な資料を提供したものと考えられる。

(櫃本・高島)

第2節 ^{おちあい}落合窯 (AE-124)

1. 立地

落合1・2号窯は、三田市末東字落合435番地に所在する。

両窯は、青野川と黒川の合流点より黒川に沿って北北東約75mの小支谷の最奥部東斜面に立地し、谷口部より1号窯、2号窯と呼称する。

1号窯と2号窯は、それぞれ標高約185～187m、184～187m、傾斜角27°、25°の斜面中腹のほぼ同一の立地条件のもとに構築されているが、主軸の方向を約76°違える。

(山田清朝)

2. 遺構

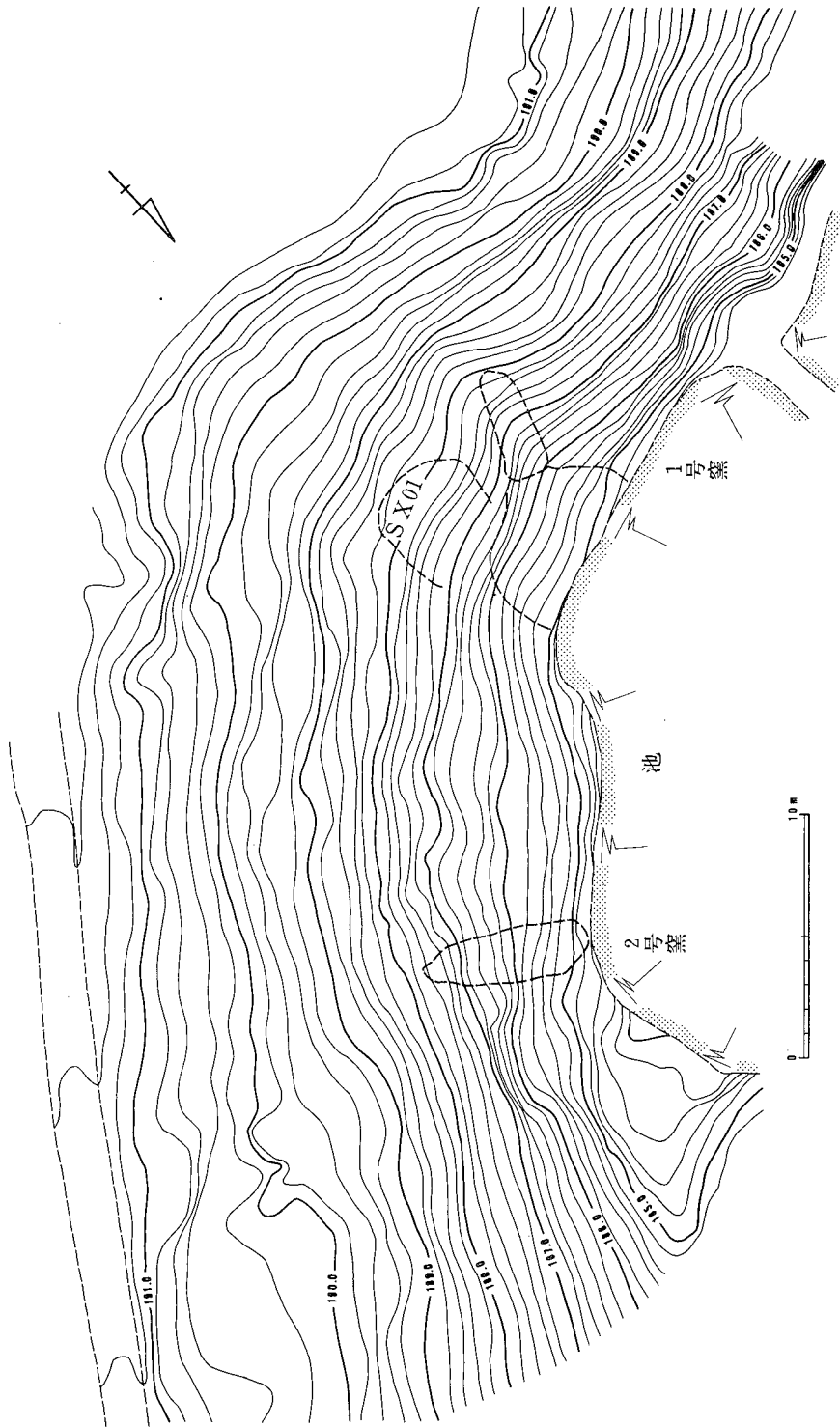
(1) 1号窯

本窯体は一部岩盤を利用しながら基盤層の黄褐色土を掘り込んで構築されており、スサ入り粘土で天井部を架構した半地下式の無階段の窖窯である。主軸方向はN21°Wを指向し、ほぼ等高線に直交する。調査当初より天井部はすでに窯体内に崩落した状態で検出された。また、煙道部は遺存せず、その構造は全く不明である。床面及び側壁の遺存状態は、後述するように良好である。それぞれ断ち割り後の断面観察によって、床面には細砂の補充、側壁には部分的な補修が認められ、少なくとも2回に及ぶ操業が看取できる。窯体の現存長は4.30mを測る。

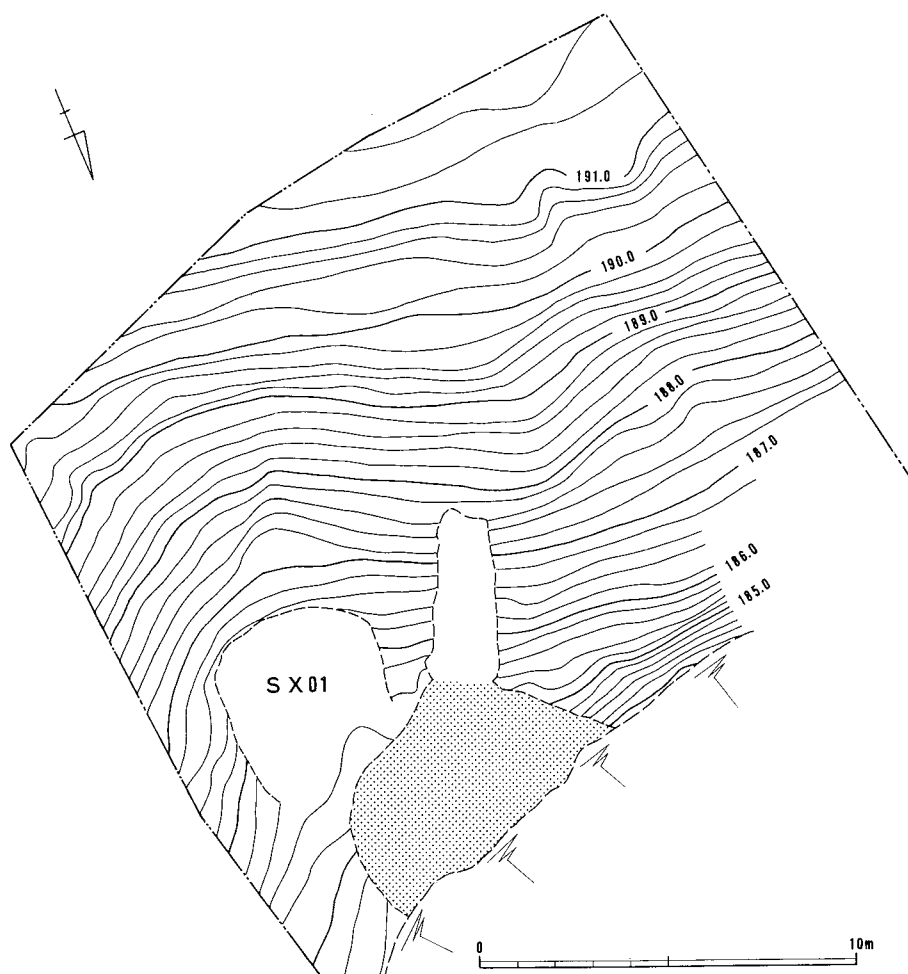
燃烧部 焚口の標高は185.35mで、明確ではない傾斜変換点の標高は185.45mを測り、焼成部に向かって緩やかな傾斜面を呈している。現存長0.65mで、床面幅には大きな変化はなく、最大幅1.45mを測る。東側壁は窯壁塊があたかも積み上げられたような状態で検出された。燃烧部における同様な施設は管見に触れないが、いずれもその間隙に土器を含まず、床面に接しているため、窯体修築の際に窯壁の一部を構成していたものと考えておきたい。

焼成部 現存長3.56m、最大幅1.45mを測る。床面はほぼ平滑であるが、焼成部内においても、傾斜変換点が認められて、床面の傾斜角は下半で20°、上半で40°を測る。傾斜変換点までの下半においてのみ床面の補修が認められ、上半においては基盤層を掘削したそのままの状態で使用している。側壁の遺存状況は比較的良好で、最大残高46cmを測り、部分的に補修が認められる。

なお、焼成部の下半から燃烧部を中心に須恵器がほぼ全面に遺存していた。これらの遺物は転落して原位置を保っていないものの、一括資料として扱える。窯体の天井部をこれらの土器群の上に崩落した状態で検出したことから、焼成中窯体を放棄したものとも考えられる。しかしながら、やや焼成の甘い灰白色を呈するものが多いこと、原形を保持する



第125图 1・2号窯地形測量图 (調査前)



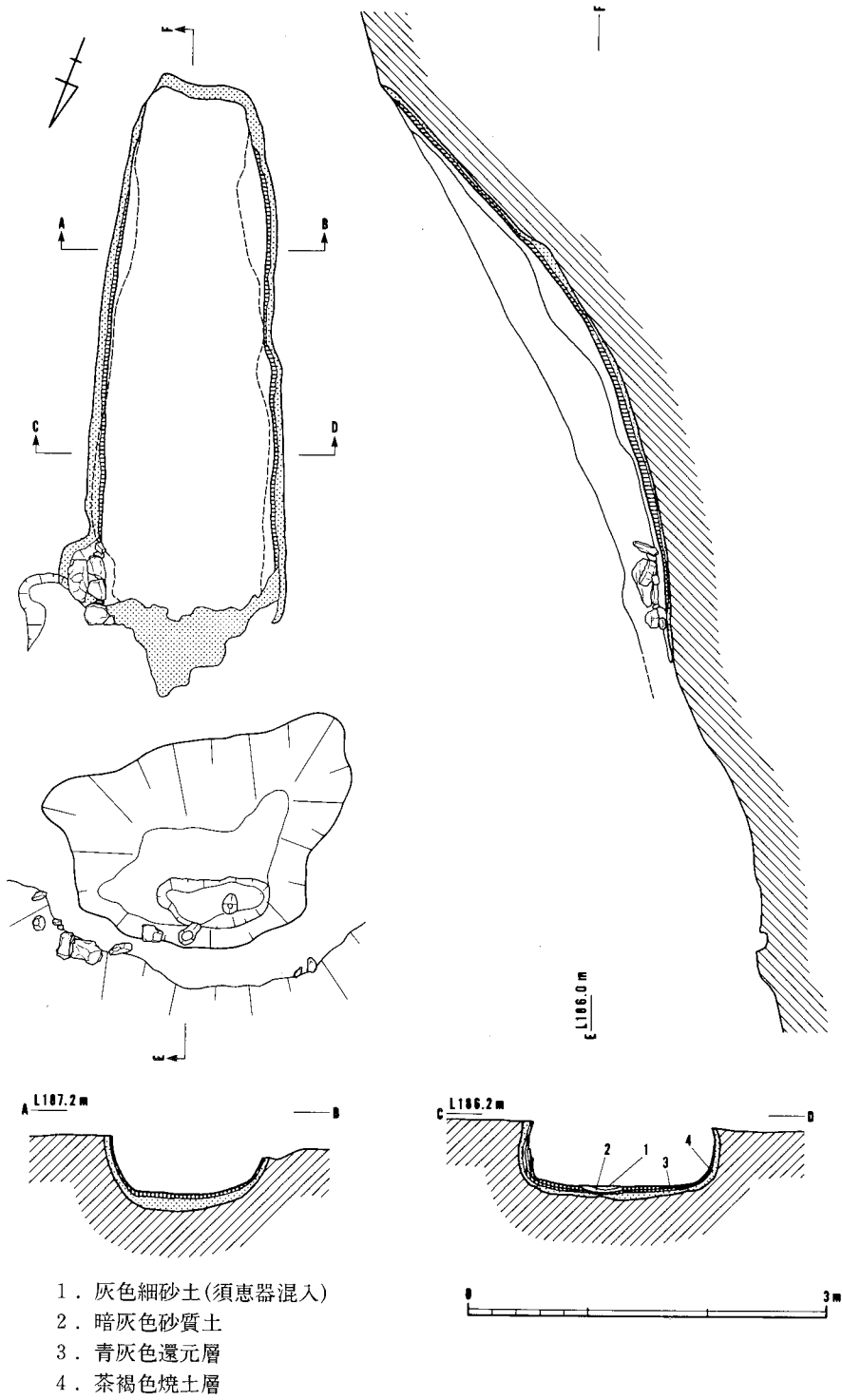
第126図 1号窯・S X 01 地形測量図（調査後）

遺物が少ないことや、土器を床面に固定する際に使用されたとされる細砂が青灰色を呈した還元状態で遺存しており、この砂の中に大半の遺物が埋れていることなどから、重ね焼の最下段部を構成していた土器群を製品の窯出しの際そのまま放棄したものと考えておきたい。また、この土器群の中には、2号窯の灰原二次堆積層で検出された須恵器甕と接合可能な口縁部片が焼台として含まれていることを付記しておく。

前庭部及び灰原 焚口の前面には長径 2.59 m、短径 1.71 m、深さ 0.41 m の不整形な落ち込みがある。さらに、この落ち込みを取り囲むような形で、斜面下方側の幅 18~40 cm をテラス状に掘り残しており、最大人頭大の角礫の配石が一部で認められている。両遺構上には灰層がかぶっているが、これらを前庭部として把握することにする。

灰原は焚口より窯体主軸方面に 4.7 m、主軸線より東側へ 3.2 m、西側へ 3.0 m にわたる範囲で扇形に広がっている。灰原の末端は溜池造成の際削平されたものと考えられ、当初

落合窯

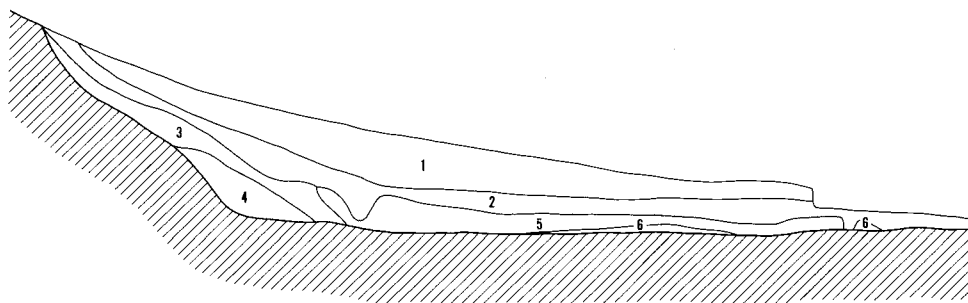


第127图 1号窯窯体実測図

落合窯



L 186.8 m



1. 淡茶褐色(炭混入)土

2. 黄灰褐色土

3. 暗黄褐色土

4. 淡褐色土

5. 明灰褐色土

6. 暗茶褐色土

第128図 SX01実測図

はさらに下方へ広がっていたものであろう。なお、灰原には間層もなく、厳密に分層しえなかった。

(2) SX 01

当遺構は1号窯窯体の東側に接して位置し、基盤層の黄褐色土を掘り込んで形成されている。斜面を掘り込んでいるため、斜面下方側は明確に画されておらず、平面形態が馬蹄形を呈し、長径4.6 m、短径4.0 m、床面積は約10 m²を測る。床面は黄褐色土のままでほぼ平坦で、柱穴・貼床等の施設は認められない。なお、西北隅部において基盤層より成る床面より5~10 cm浮いた状態で須恵器と炭化物を集中して検出している。調査中においても降雨によって集中する谷筋に位置するため、覆土の状況より放棄後流入土によって徐々に埋没していったものと思われる。

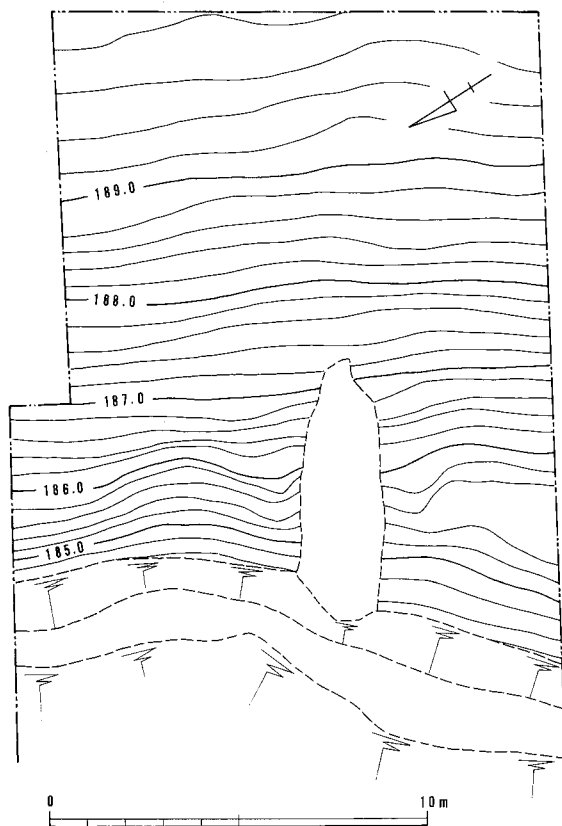
さて、本遺構の性格については、当初には天井部の構築用の粘土を採集した痕跡であった可能性も見逃せない⁽¹⁾が、最終的には製品の選別等を行った作業場的な機能を果していたものとしておく。灰原出土の遺物と接合可能な遺物があることがこの傍証として捉えられよう。

(山本雅和)

(3) 2号窯

窯体 窯体は旧地表面を掘り込んで構築された半地下式の構造をなすが、煙道部・燃烧部の一部・焚口部は全て流失し、燃烧部の一部と焼成部を確認したにとどまる。また、前庭部及び灰原についても後世の削平により遺存していなかった。窯体は、主軸方向は等高線に直交し、N 56°W (磁北) を示す。

検出した窯体は、すでに天井部が崩落しており、床面と側壁を検出したにとどまる。残存長7.1 m、最大幅は1.9 mを測り、1号窯に比べて大型である。傾斜角は燃烧部で20°、焼成部上半で33°をなす。側壁についても、遺存状況は比較的良好で、



第129図 2号窯地形測量図 (調査後)

床面よりほぼ直角に立ち上がり断面「コ」字形をなし、最大で40 cm残存する。

床面の断ち割り後の断面観察によると、青灰色の還元層が部分的に重複し修復の跡が認められ、少なくとも2回以上の操業が想定される。

灰原 溜池をつくるため、燃焼部以下を削平されており、プライマリーな状態での灰原は認められなかった。

付属施設 窯体を取り囲む周溝等の遺構は確認できなかった。しかし、窯体の西側斜面で約3×1.5 mのわずかな平坦部を確認することができた。しかし、この平坦部の性格については、これに伴う遺物はなく断定はできないが、SX 01と同様に作業場的なものの可能性が考えられる。(山田)

3. 出土遺物

さて、落合1号窯・2号窯は立地からして近接し、これから述べるように遺物の特徴からみても有機的な関連を持つという認識から、同形態を採る器種については同じ器種名で呼称するのが妥当であると考えた。ここでは、まず両窯の出土遺物についての器種分類を概括し、個々の特徴についてはそれぞれ別項で窯毎に報告することとする。

(1) 須恵器の器種分類の概要

器種分類に際しては、須恵器についてのみ行い、基本的には『平城宮発掘調査報告XI⁽²⁾』を参考にしながら適宜設定していった。器種分類のうち、坏A・坏B・坏B蓋についてはより細かな分類を行い、小文字のアルファベットで表示し、それぞれが土器型式に相当するものと理解している。

なお、調整については特記しない限り回転ナデの記述は省略する。また、ロクロ回転の認められるものはいずれも右回転である。

胎土は小型供膳形態のものについては細かい砂粒を含むものが多いのに比して、大型供膳形態を含む大型器種のもの概してよく精選されているようである。

以下、各器種の特徴について詳述していこう。

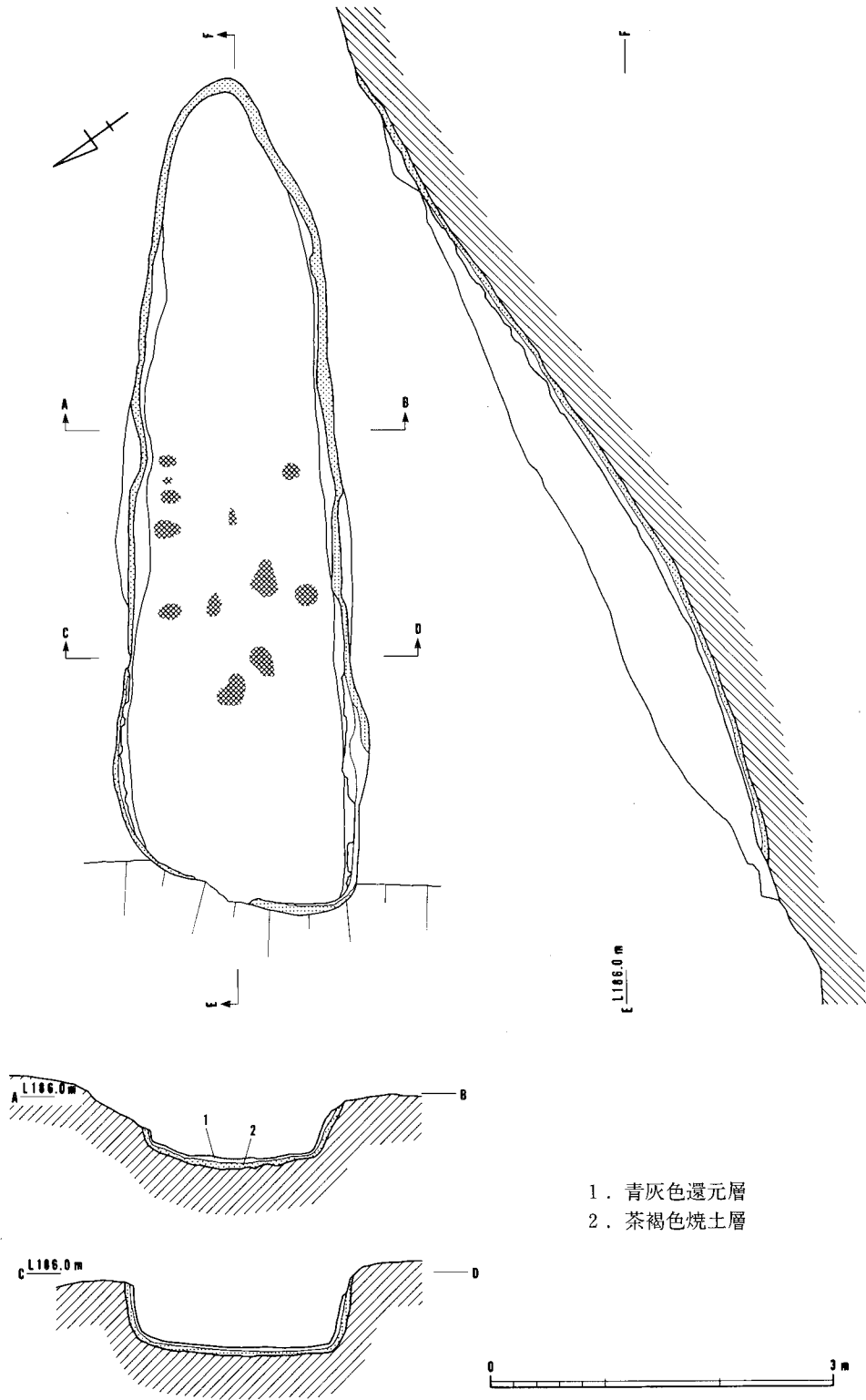
坏A 平らな底部と斜め上方にのびる口縁部から成る。調整は底部外面が回転ヘラ切り未調整のものが大半を占め、仕上げナデを施すものも認められる。

a類—わずかに突出する底部と斜め上方にのび、端部が外反する口縁部から成る。口径12.5 cm前後、器高3.7 cm前後で、径高指数は30前後である。

b類—平らな底部より不明瞭な稜を有して斜め上方へのびる口縁部から成る。口縁端部は丸く収める。口径13.0 cm前後、器高3.5 cm前後、径高指数は27前後である。

c類—平らな底部より稜を有して斜め上方へ直線的にのびる口縁部から成る。口縁端部はまっすぐにつまみ上げる。口径13.5 cm前後、器高4.0 cm前後、径高指数は30前後。

落合窯



第130图 2号窯窯体实测图

坏B 坏Aの底端部に高台を付す形態。高台は内端部接地、外端部接地の両者が併存する。調整は底部外面に回転ヘラ切り未調整で高台を張りつけるものと、回転ヘラ削り後高台を張りつけるものがある。また、底部外面に爪形状圧痕が高台の内側に接して一周するものもある。坏Bは基本的には坏Aに高台を付したのと考えられ、坏Aと同様に形態分類を行うと、b・cの2類に分けられ、a類に相当するものは確認できなかった。さらに、法量よりc類についてはI（口径12cm）、II（口径14cm前後）、III（口径20cm）の3類に分けられる。

坏B蓋 平らな天井部と屈曲しない口縁部から成るもので、坏Bとセット関係にあると考えられる。調整は天井部外面に回転ヘラ削り後回転ナデによってつまみを張りつける。つまみの形態より2類に分けられる。坏Bと対応するように、法量よりI・II・IIIの3類に分けられるが、I類は顕著ではない。

a類—擬宝珠形つまみを有する。口縁端部は下方へ短く屈曲して終わる。

b類—扁平なつまみを有する。口縁端部は短く内彎し、丸く収める。

坏C 坏Bに比して法量が大きいだけでなく、重厚な感を与えるものである。底端部に外端部接地の高台を付す。調整は底部外面がヘラ切り後回転ヘラ削りで、その範囲が体部下半に及ぶものが多い。

坏C蓋 なだらかな丸みをもって天井部と短く屈曲する口縁部より成る。つまみは扁平である。調整は天井部外面に回転ヘラ切り後回転ヘラ削りを施し、つまみ周辺は回転ナデで仕上げる。

坏D 斜め上方にまっすぐのびる口縁部からなり、端部はわずかに内傾する凹状を呈する。調整は底部外面に回転ヘラ削りを施す。

坏E 底部内面に断続的な刷毛調整（5本/cm）を施すのが特徴的である。調整は底部外面を回転ヘラ切り後ナデで仕上げる。

坏F 鈍くS字状にのびる口縁部から成り、端部はほぼ水平な凹状を呈する。調整は底部外面を回転ヘラ切り後ナデ及び指頭圧で仕上げる。



第131図 坏E内面調整写真

坏A いわゆる銅椀模倣形態を採るもので、口縁端部は内傾する凹状を呈する。調整は底部外面が回転ヘラ削り、内面が不整ナデ仕上げである。

坏B 銅椀模倣形態を採り、稜坏と呼ばれるものである。口縁部の下半に回転ヘラ削り調整が施され、口縁部と底部の境に明瞭な稜を有する。

a類—丸みを持つ底部から稜を有して外反気味にのびる口縁部をもつ。口縁端部を丸く収め、内面が凹状を呈する。

b類—平らな底部より斜め上方へのびる口縁部をもつ。口縁端部は概して鋭く内傾する平坦面ないしは浅い凹状を呈する。

c類—平らな底部より内彎しながらのびる口縁部を有し、端部を小さく外反させる。

壙B蓋 平らな天井部に環状つまみを有し、大きく屈曲する口縁部から成る。調整は天井部外面が回転ヘラ削り、内面が不整ナデ、つまみは貼りつけによる。壙が3形態に分類しえたのに対して、それぞれのセット関係が明らかにできていない。

皿A 平らな底部と内彎気味にのびる短い口縁部からなる。調整は底部外面を回転ヘラ削りで仕上げる。火だすき痕を認めるものが含まれる。底部と口縁部の境界が不明瞭なものが古相を示すと考えられる。法量より I (口径 15 cm 前後)、II (口径 20 cm 前後) の 2 類に分けられる。

皿B 端部に高台を付す平らな底部と外反気味にのびる口縁部からなる。調整は底部外面が回転ヘラ削りで一部口縁部下半まで及ぶものがある。底部内面は不整ナデである。口径 20~25 cm とばらつきが見られるものの、法量による細分はできない。

a類—口縁端部を上方へ拡張するもの。

b類—口縁端部を丸く仕上げるもの。

高坏 短い口縁部をもつ坏部とラップ状に開く脚部からなる。

a類—口縁端部が内彎して終わるため、内側が凹状を呈する。坏部の底部外面を回転ヘラ削りで仕上げる。

b類—皿Aに脚を付したもの。

c類—坏部の底部と口縁部の区別が明瞭でないもの。脚部が確認できなかったため、別器種の可能性も考えられる。法量より大小の2類に分けられそうである。

鉢A 内彎して立ち上がる口縁部と丸みを帯びた尖底からなる。資料数が少なく明確にできないが、口縁端部のつくりより細分できそうである。

鉢B 外反する短い口縁部と上位に最大径をもつ体部からなる。口縁端部は上方へ拡張する。

鉢C 平底と長くのびる口縁部からなるバケツ状のもの。口縁端部は内傾する凹状を呈する。

壺A ラップ状に開きながら立ち上がる口頸部と肩部に稜を有して大きく張る体部から成る。底部端に高台をふす。口縁端部の収め方、口頸部中位の凹線の有無、体部の形態と肩部凹線の有無で細分できそうである。体部外面下半に回転ヘラ削り調整が施される。

壺B 平底を呈するイチジク形の体部と緩やかに外反しながら端部を上方へ大きくつま

み上げる口頸部から成る。体部最大径よりやや上位に凹線を巡らすものがある。大・小の2類に分けられそうである。

壺C 高台を有する扁平な卵形の体部と外傾してのびた後端部付近で大きく外反し、上方へつまみ上げられる口頸部から成る。体部外面下端には回転ヘラ削りが認められる。

壺D 短く外反する口縁部と扁平な卵形を呈する体部からなる。

壺E まっすぐ上方に短くのびる口縁部を持ち、端部は丸く収める。肩部には4個の把手が貼りつけられる。体部外面は平行叩きの後カキ目、内面は同心円文叩きを丁寧にナデ消す。

甕A 大きく外反する口頸部をもつ。口縁端部は概して上・下方へ拡張され、凹状の端面を有する。法量より小型(a類)・大型(b類)の2類に分類できる。体部外面は格子風叩き、内面は同心円文叩きを半スリ消しで仕上げる。

甕B 外傾してまっすぐのびる口頸部をもつ。口縁端部は外傾する平坦面を呈する。体部外面は平行叩きの後カキ目、内面は同心円文叩きをスリ消し。

(2) 1号窯の遺物

1号窯の遺物は窯体内(床面を中心とする)・灰原・SX 01・灰原二次堆積層の4ヶ所の出土地点に大別できる。各遺物の出土地点は第14表のとおりである。

検出した須恵器の器種には、坏Ab(1・2)、坏Ac(3~27)、坏BbII(49~63)、坏BcII(64~90)、坏BcIII(97~100)、坏BbI蓋(28)、坏BaII蓋(29~34)、坏BbII蓋(35~48)、坏BbIII蓋(91~96)、坏C(105~107)、坏C蓋(101~104)、坏D(108)、坏E(109)、埴A(110)、埴Ba(114)、埴Bb(115・116・118)、埴Bc(117)、埴B蓋(111~113)、皿A I(119~123)、皿A II(124~129)、皿Ba(130)、皿Bb(131~136)、高坏a(137)、高坏c(138・139)、鉢A(140・141)、鉢C(142)、壺A(143・144)、壺B(145・146)、壺D(147)、平瓶(148)、甕A(2号-148)の19器種31形態に及び、他に土師器甕(150)と硬質土師器(151)がある。この中でも、特徴的な資料について若干補足しておこう。

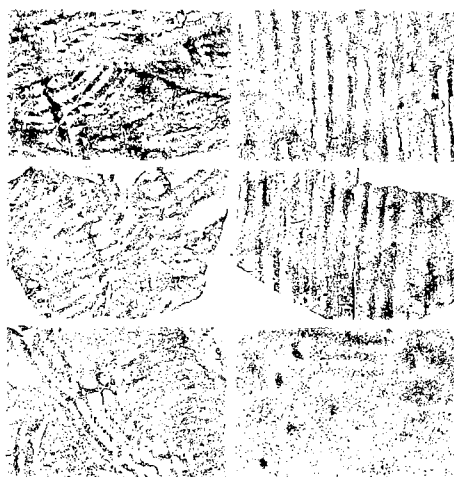
(94) はつまみの形態が端整な宝珠形を呈し、口縁端部は下方から折り返した後丸く収めるもので、法量よりみて坏BIII蓋に分類しているが、他とは著しく形態を異にする。色調は暗緑灰色を呈し、他の坏BIIIとは胎土・色調も相違し、坏BbIIに酷似している。本来、坏BIIIとセットをなすのではなく、鉢のような他の器種の蓋として用いられたものと考えられる。

(108) は坏Dに分類できるもので、底部~体部下半にかけて不整ヘラ削り調整で仕上げている点の特異である。

(109) は坏Eに分類できるものである。底部内面を弧状に刷毛目調整(5本/cm)する手法とともに、形態的にも平安時代後半以降の埴に近いという点からも非常に特徴的である。

なお、同手法によるものをこの他に2個体分確認している。

(118)は坩Bb類で、底部外面の高台周辺に爪形状圧痕が認められる。高台内のほぼ中央に集中するもの、高台の内側に接して半周するもの、高台の外側に集中するものがある。高台の内側に接するものは高台貼りつけ時に生じたものと考えられるが、他の二者についてはその成因が判然とせず、二者の長軸が直交することがてがかりとなるかもしれない。



第132図 1号窯の甕の拓影

(142)は鉢C類に分類できるもので、口縁端部に直径1.5cm前後の馬蹄形の袢りが4方向に入れられている。この袢りを何のために入れているのか類例もなく明らかでない。

(150)は土師器の小型甕で、口縁端面は若干の凹状を呈し、端部は上方へつまみ上げられる。口縁部内面は4~5本/cmの横刷毛、外面がヨコナデ、体部外面上半はカキ目状の横刷毛、下半は縦刷毛、内面はナデで仕上げられる。口径13.2cmで、淡黄褐色を呈する。

須恵器の甕の体部の成形・調整については、外面が平行叩き(3本/cm)一内面同心円文半スリ消し、外面格子風叩き(3mm角)一内面同心円文半スリ消し、外面縦刷毛(6~7/cm)一内面同心円文スリ消し、外面縦刷毛(4~5本/cm)一内面斜め上方への刷毛(4本/cm)、外面縦刷毛(4~5本/cm)一内面下から上へのへら削りの5種類が確認できた。それぞれの口縁部端部の形態については不明である。また、内面の同心円文アテ具に亀裂が認められるものがある(第132図)。(山本雅)

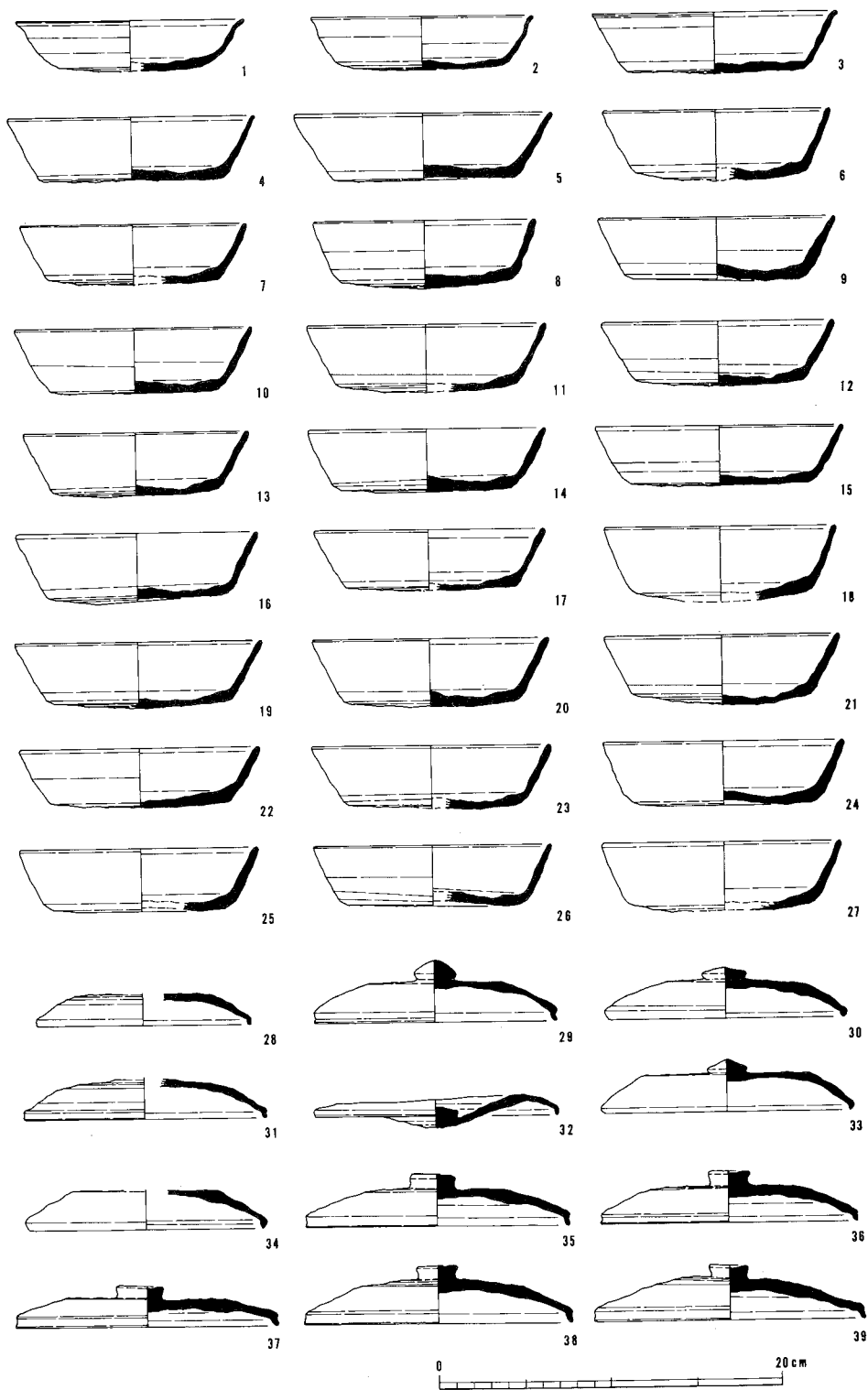
(3) 2号窯の出土遺物

出土遺物は、窯体内及びその下方の谷部(灰原二次堆積層)より出土した。窯体内出土遺物については、燃烧部から焼成部にかけての床面よりまとまって出土したが、大半は焼成部からずり落ちたもので、原位置を保っているものは認められない。しかし、最終操業に伴う最も新相を示す資料と考えられる。また、灰原二次堆積層のものについては、二次

第14表 2号窯遺物出土地点一覧表

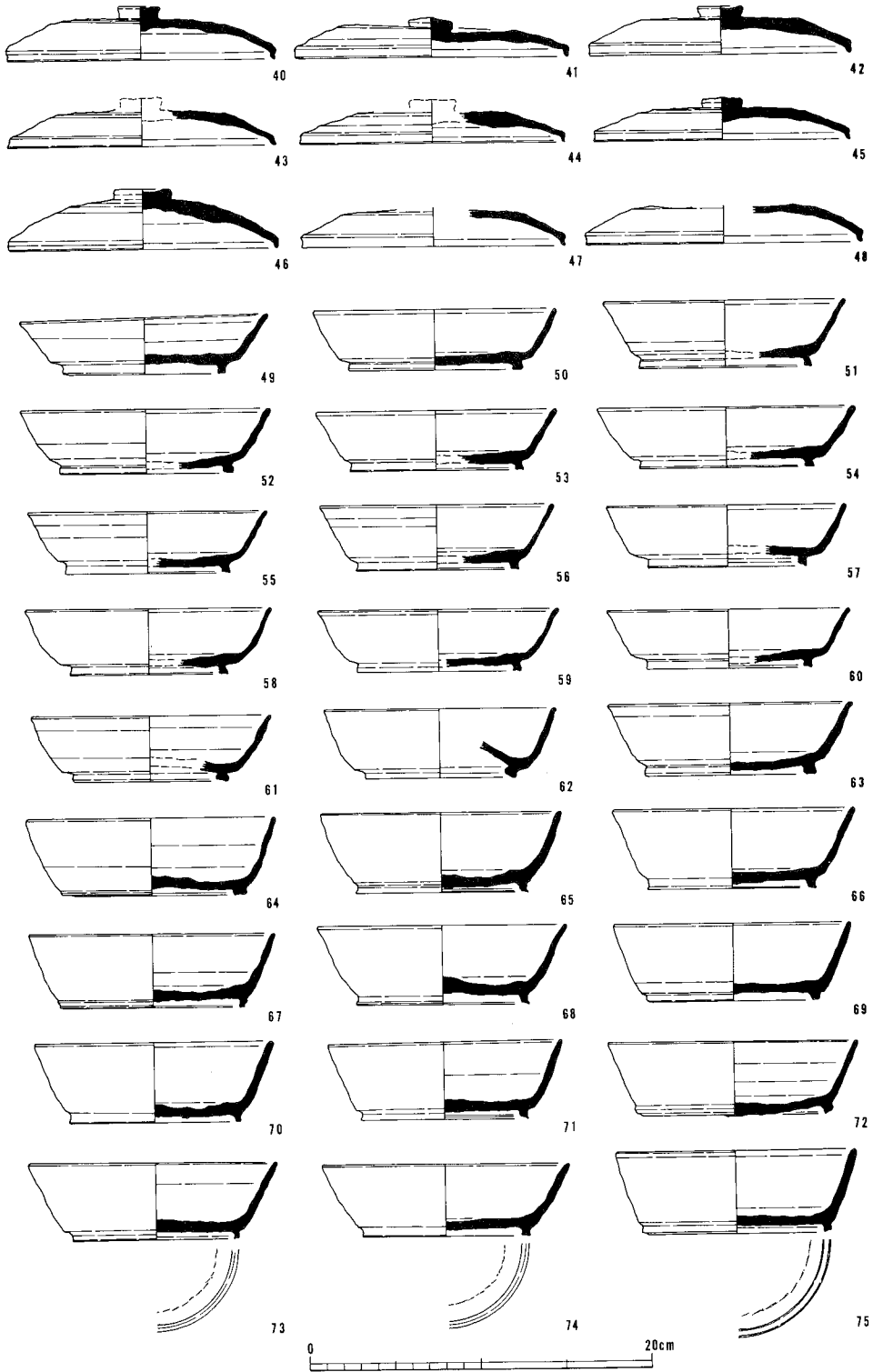
窯体内	8, 13, 14, 20~33, 55, 60, 61, 87, 90, 95, 97, 99, 102, 106~119, 124, 148
灰原二次堆積層	1~7, 9~12, 15~19, 34~54, 56~59, 62~86, 88, 89, 91~94, 96, 98, 100, 101, 103~105, 120~123, 125~147, 149~157

落合窯



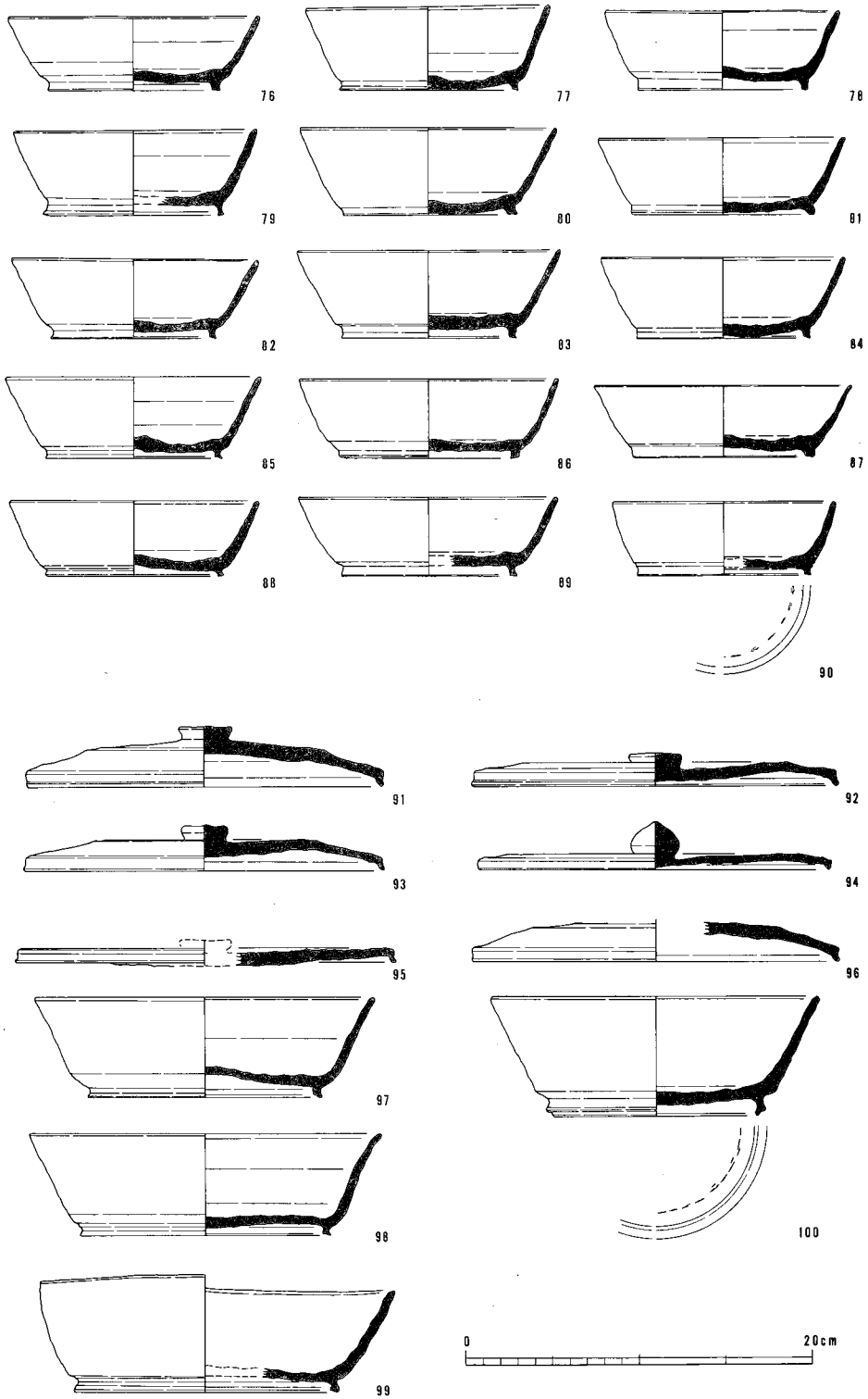
第133图 1号窯出土土器(1)

落合窯



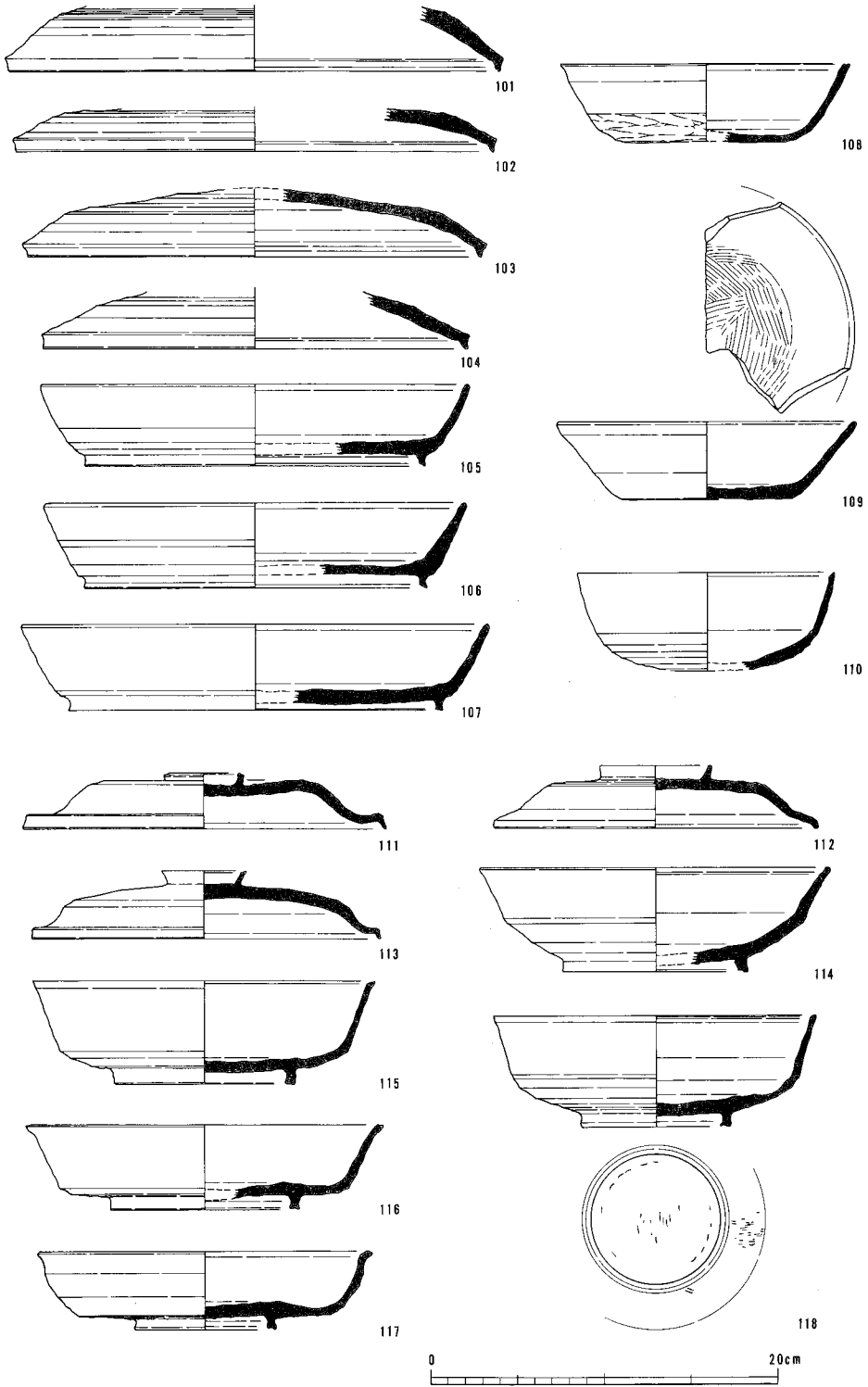
第134图 1号窯出土土器(2)

落合窯



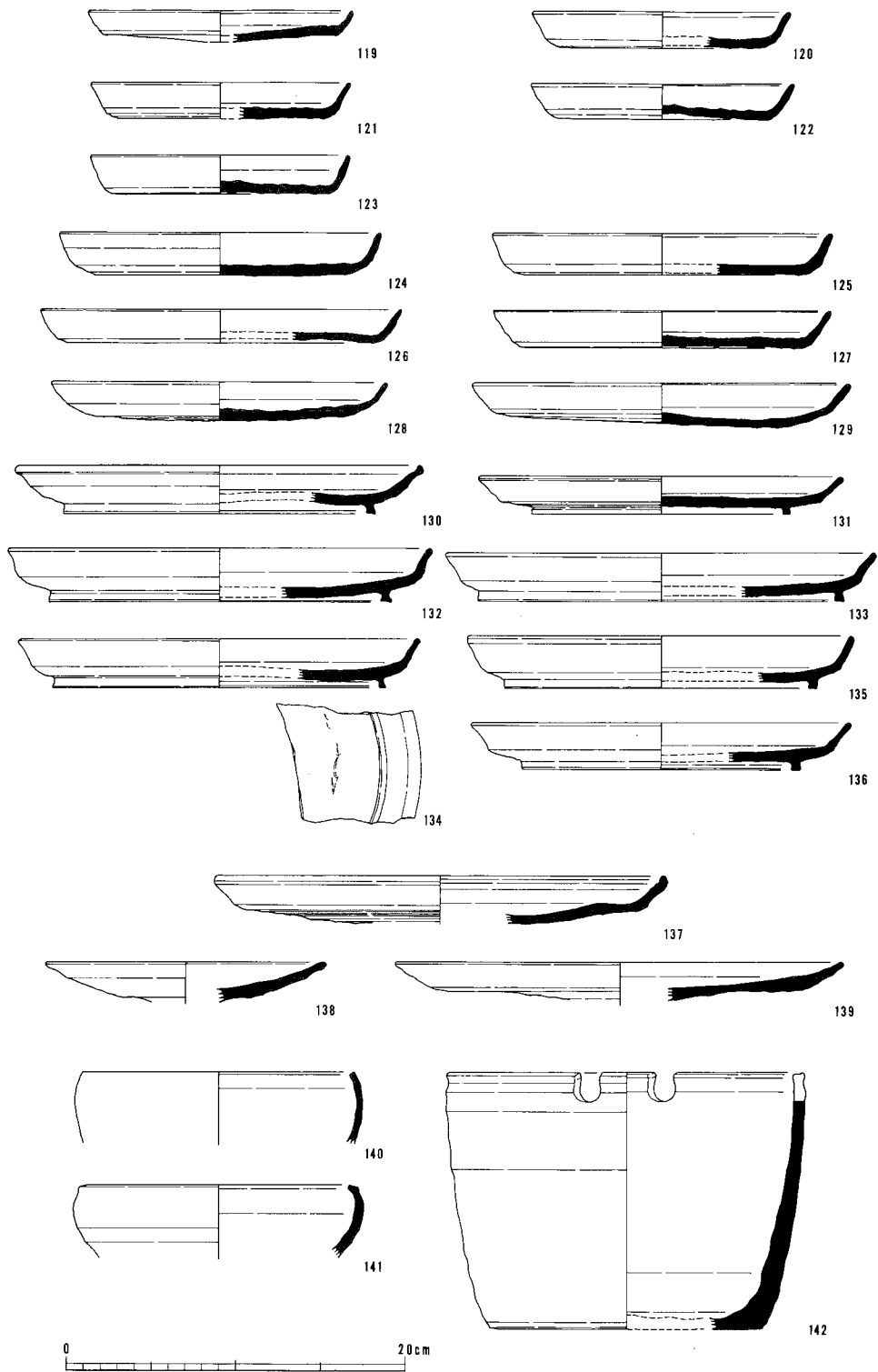
第135图 1号窯出土土器(3)

落合窯



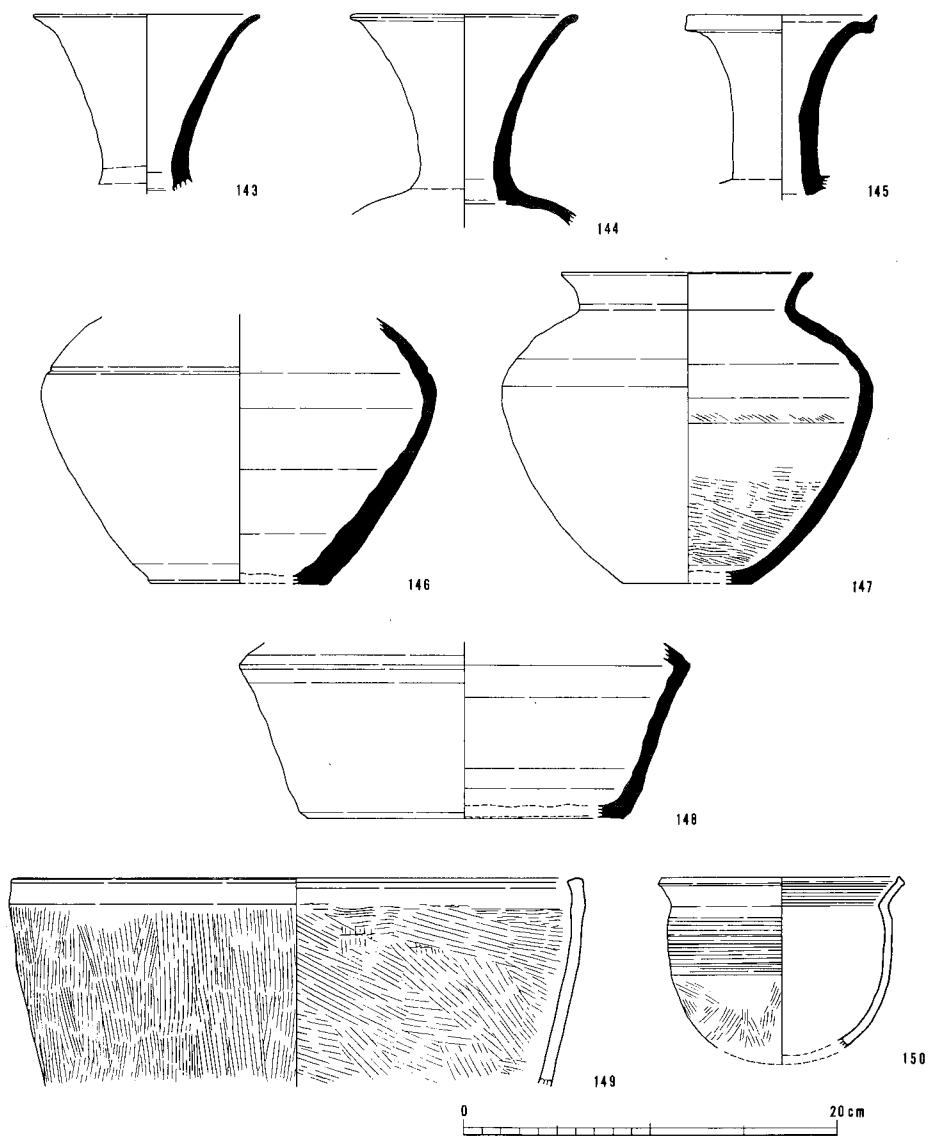
第136图 1号窯出土土器(4)

落合窯



第137图 1号窯出土土器(5)

落合窯



第138图 1号窯出土土器(6)

第15表 1号窯遺物出土地点一覽表

窯体内	4~8, 10~21, 23~27, 29, 35~40, 44, 61~68, 70~89, 91, 92, 95, 97~100, 108~111, 116~118, 120~123, 128, 148
灰原	1~3, 28, 30~34, 42, 43, 45, 47~50, 53, 54, 56~70, 94, 96, 102, 104, 105, 112, 113, 115, 119, 125~127, 129, 130, 134~137, 142, 143, 145, 146, 148~150
SX01	9, 22, 46, 90, 93, 113, 114, 122, 124, 125, 131, 144
灰原二次堆積層	51, 52, 55, 101, 103, 106, 113, 132, 133, 139, 140, 141, 147
流土	41, 69, 107, 138

堆積であることから一括して扱うことにした。

器種としては須恵器・硬質土師器・土師器がある。

①須恵器

坏A・坏B・坏B蓋・坏C・坏C蓋・坏D・坏F・埴B・埴B蓋・皿A・皿B・高坏・鉢B・鉢C・壺A・壺B・壺C・壺D・平瓶・甕A・甕Bの計21器種が出土している。以下、2号窯を特徴づける主な器種について検討していくことにする。

坏A (1~33)

a類 (1~18) b類 (19~30) c類 (31~33) の3タイプからなる。a類は大半が灰原二次堆積層出土であるのに対して、b・c類の大半は窯体内より出土しており、a類に対してより新しい傾向を示すものと考えられる。

坏B (62~83, 88~93)

b類・c類の2タイプがある。法量による分類において、III類については明確に分類できるが、II・IIIについては明確に分類しがたい。III類に該当するのはb類のみである。b類については全て灰原二次堆積層出土のものであるが、c類のなかには図示できなかったもので窯体内出土のものが、わずかではあるが認められる。c類の方がわずかに新しい傾向を示しているといえよう。

坏B蓋 (34~61, 84~87)

坏Bに対応し、a類・b類があるが法量についてのI類とII類の分離は困難である。a類については34~39のように明確にa類に分類されるものと、48~51のようにつまみの中央部がわずかに突出する程度でb類により近いものと形態差が認められる。a類に分類されるものは全て灰原二次堆積層出土である。b類についてもa類に近い形態のものから明確にb類に分類されるものまで形態差が認められる。a類と異なりb類には窯体内出土のものが認められ、より新しい傾向を示すものといえ、坏Bで分類したa類・b類にそれぞれ対応するものと考えられる。

埴B (104・105)

口縁部のみのもので、底部のみのもとの2点が出土している。前者はb類に、後者はa類に分類されるものである。

皿A (106~119)

I類 (106・107)、II類 (108~119) の2類とも出土しているがII類が圧倒的である。II類については、口径が18.6~23.0 cmとやや幅をもち、特に口径が23.0 cmのもの (119) についてはIII類とすることも可能である。皿Aはほとんどが窯体内出土のものであり、新しい傾向のものといえよう。

高坏 (120~122)

a類 (120)・b類 (121) の2タイプとも認められるが、122についてはいずれに分類されるかは不明である。

壺A (125~135)

壺類のなかで最もまとまって出土したタイプである。すべて灰原二次堆積層より出土したものである。窯体内より出土したものは認められない。器種分類の項でも触れたように、口縁部の形態・口頸部の仕上げ方法・体部の形態においてそれぞれ細分が可能である。まず、口縁部の形態においては、端部を水平近くまで外反させるもの (125・127・132)、わずかに外反させるもの (128~130・133~135)、ほとんど外反させないもの (126・131) との3タイプに分類できる。口頸部については、中位に凹線を施すもの (127) と施さないもの (125・126・128~135) とに分類できる。さらに、体部については、上半部と下半部の長さにおいて下半部のほうが若干長く、わずかに内彎気味のもの (125・126・133)、下半部のほうが約2:1の比率で長く直線的で、底径も前者より大きいもの (132) との2タイプに分類できる。前者については、肩部稜線の上側に凹線が施されることも一つの特徴である。

壺B (136~139)

壺A同様、すべて灰原二次堆積層から出土したものである。個体数は少ないが、法量により大・小に分類が可能である。底部外面を除いた大半は回転ナデにより仕上げられているが、体部下半の底部付近にわずかに回転ヘラ削り調整が施されている。

壺C (140~142)

当器種もすべて灰原二次堆積層出土である。量的には少ないが、肩部の形態においてわずかに屈曲気味のもの (142) と屈曲が認められないもの (141) とに分類が可能である。

壺D (145)

口径20.1cmで口縁部が直口し、4方に把手のつくいわゆる四耳壺である。体部外面は、叩き整形のあとカキ目調整が施されている。他は回転ナデにより仕上げられている。

壺E (146, 147)

口径が10cm前後の壺Dを小型にしたタイプのもので、口縁部がわずかに外反し把手のつかないものである。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

②硬質土師器

ここで硬質土師器としたものは、単に土師器の形態を模倣したものではなく、元来土師器として作られたものが須恵器と同じ窯を使って還元焼成されたものである。つまり、胎土は砂粒を多く含みしまりが悪く、調整技法についても刷毛仕上げを基調としたものである。用途不明品と土師器分類の甕が出土している。

用途不明品 (153)

本来は口縁部の部分と底部の部分からなり一個体には接合できないのであるが、胎土・調整技法・焼成状況が酷似しているため同一個体とみなし、図上で復元した。逆L字形に開く高台をもつ底部からわずかに斜上方にやや外反気味にのび中位からは逆に内彎させ、中位より上半部に最大径をもつ。口縁部端部は内側へのつまみ出し状のナデ仕上げにより上端面をもつ。底部は高台を残す以外は不明である。また、最大径部分の位置には把手が付く。観察しえたのは一方のみであるが、二方につくものと推定される。体部外面は縦方向の刷毛調整で、内面の上半部は縦方向の刷毛調整の後ナデ、以下は下から上へのヘラ削り調整の後ナデにより仕上げられている。口径 29.8 cm、高台径 18.0 cm、器高（復元高）32.0 cmを測る。

なお、この土器の器種については上半部については一見したところ甑と類似するが、下半部については甑とされものなかに本品のように高台のつく類例がみあたらないため、用途不明品として報告することにした。

甕 (152)

図示しえたのは1個体のみであるが、量的には少しまとまって出土している。口縁部を「く」の字形に屈曲させるもので、体部以下は不明であるがおそらく以下において検討する土師器と同じ長胴型のもと考えられる。口縁部外面は横ナデ調整、内面は横刷毛調整、体部外面は縦刷毛調整、内面はナデ調整により仕上げられている。

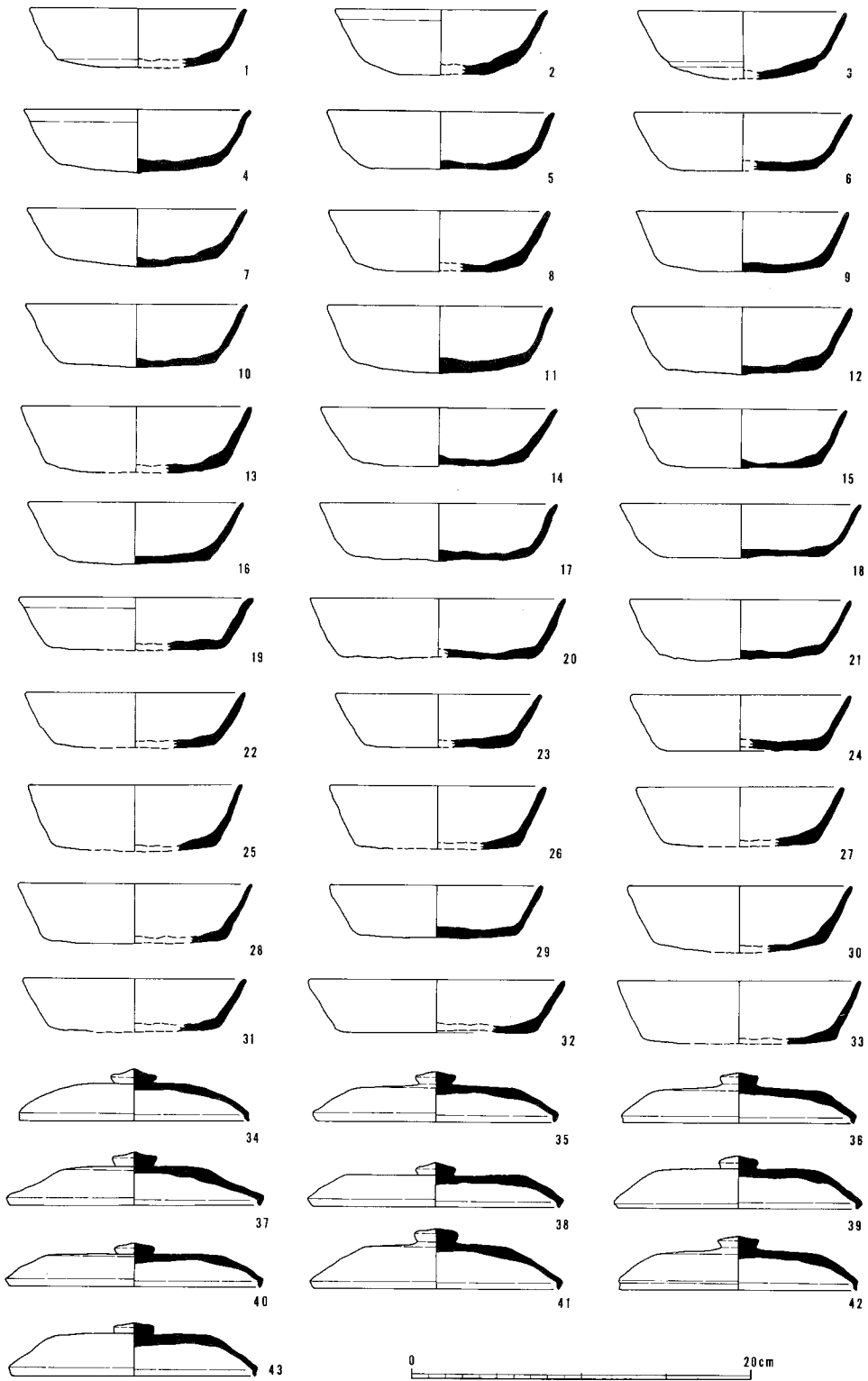
③土師器 (154~157)

甕が少しまとまって出土している。図示したものは少ないが、その法量において大・中・小の三つに分類が可能である。小型のもの(154)は、口径 12.8 cm、器高 8.5 cmで、体部は球形で口縁部を「く」の字形に短く外方に屈曲させるものである。中型・大型のものも口縁部は「く」の字形に屈曲するもので、口径がそれぞれ 16.9 cm、23.0 cm、26.6 cmを測るが、底部まで復元できるものはない。長胴型に分類されるものと考えられる。3タイプとも口縁部内外面は横ナデ調整、体部外面は横刷毛内面は縦刷毛調整により仕上げられている。(山田)

(4) 焼成器種構成

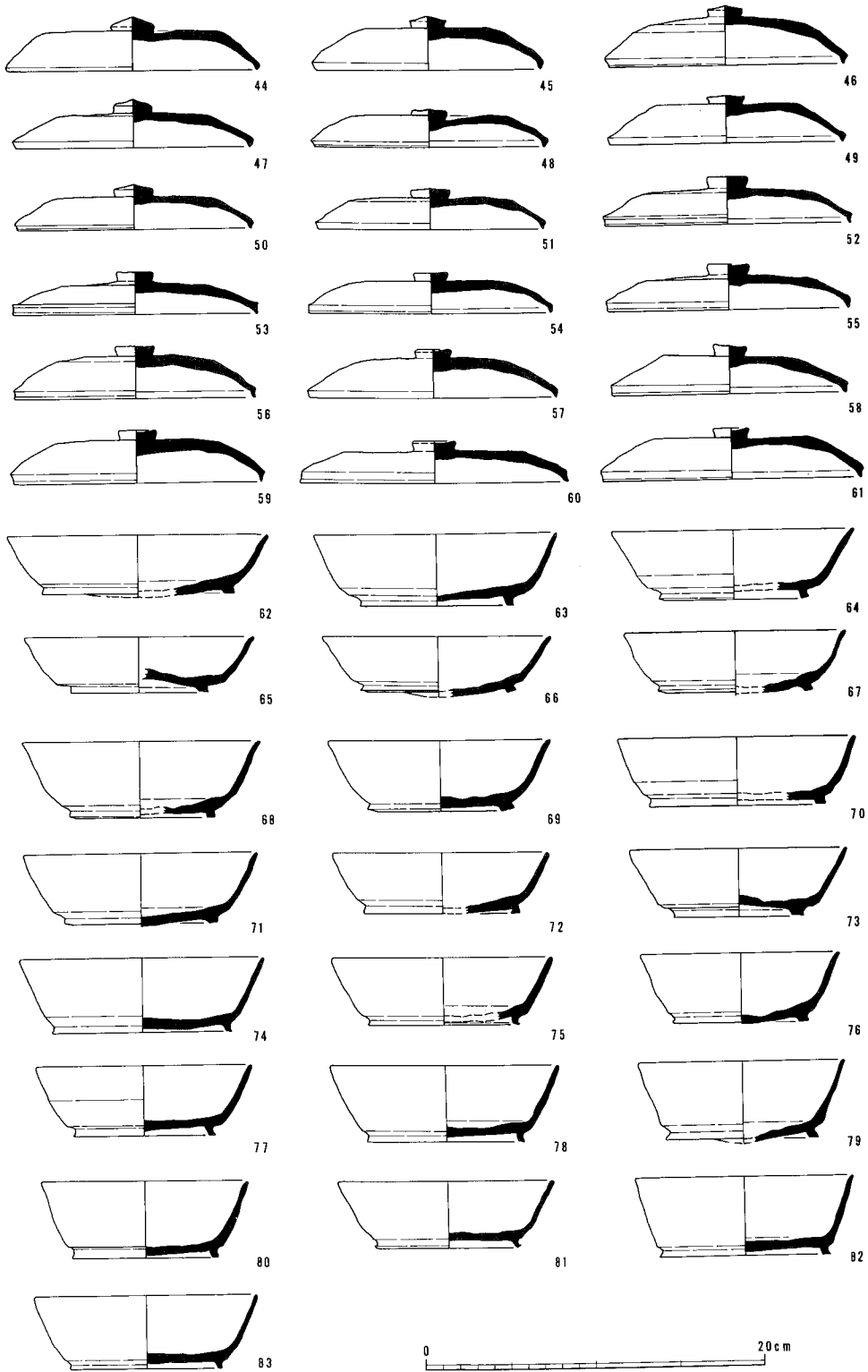
落合1号・2号窯で焼成された須恵器の器種は第15表のとおりで、他に土師器と硬質土師器がある。これらは、それぞれの窯体内・灰原・灰原二次堆積層より検出したもので、その量は膨大なものである。そこで、この資料を処理しながら各器種の焼成比率を検討するため、個体数の算出を試みた。個体数については、本来口縁部計測法で行うのが最も有効であるとされているが、ここでは各遺物を接合した後1/4個体以上遺存するものを1個体として便宜的に扱っている。このため、実測図を掲載していても個体数量化には反映していない資料もある。なお、貯蔵・調理形態を採るものについては遺存状況を実際は把握

落合窯



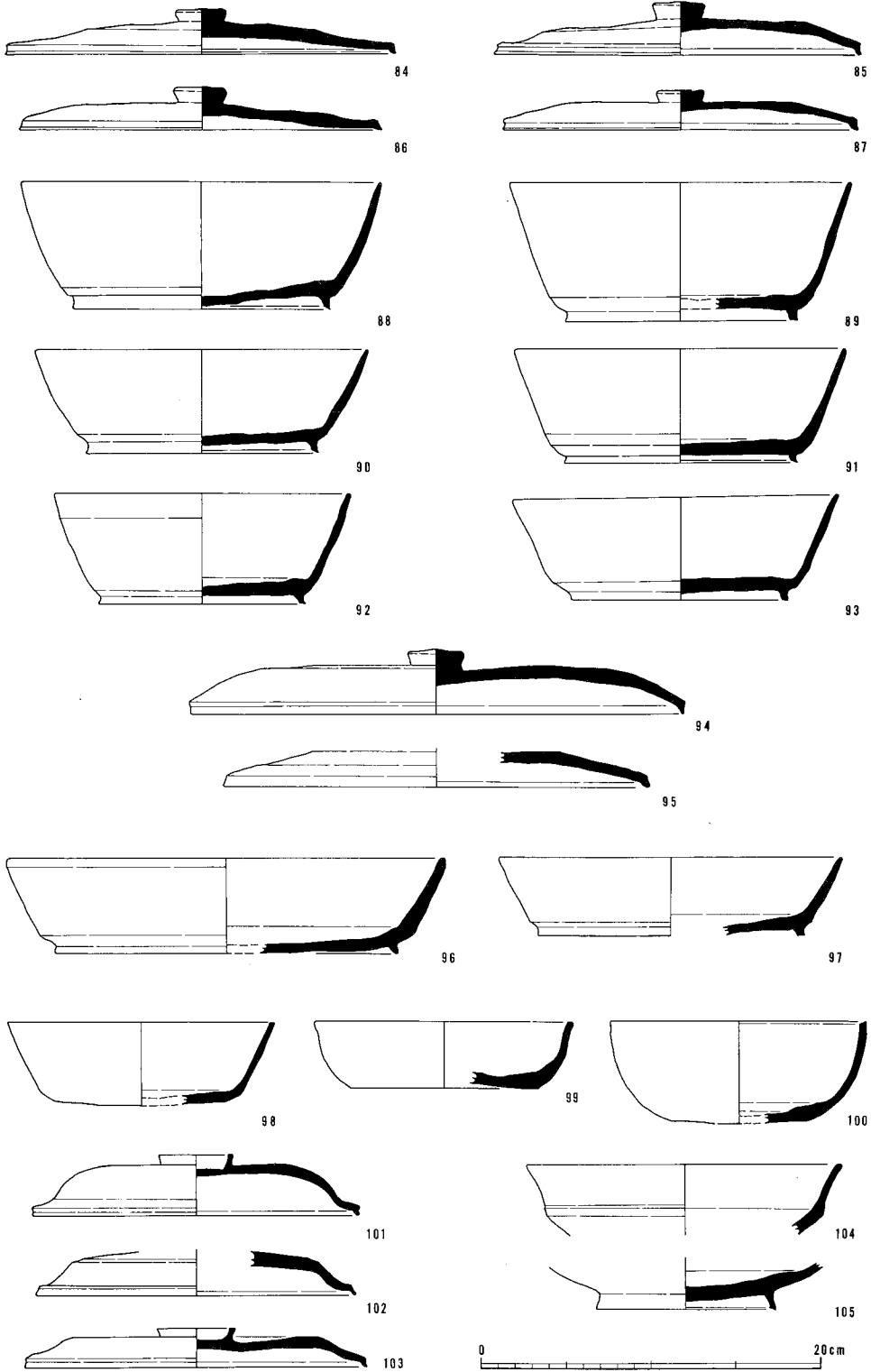
第139图 2号窯出土土器(1)

落合窯



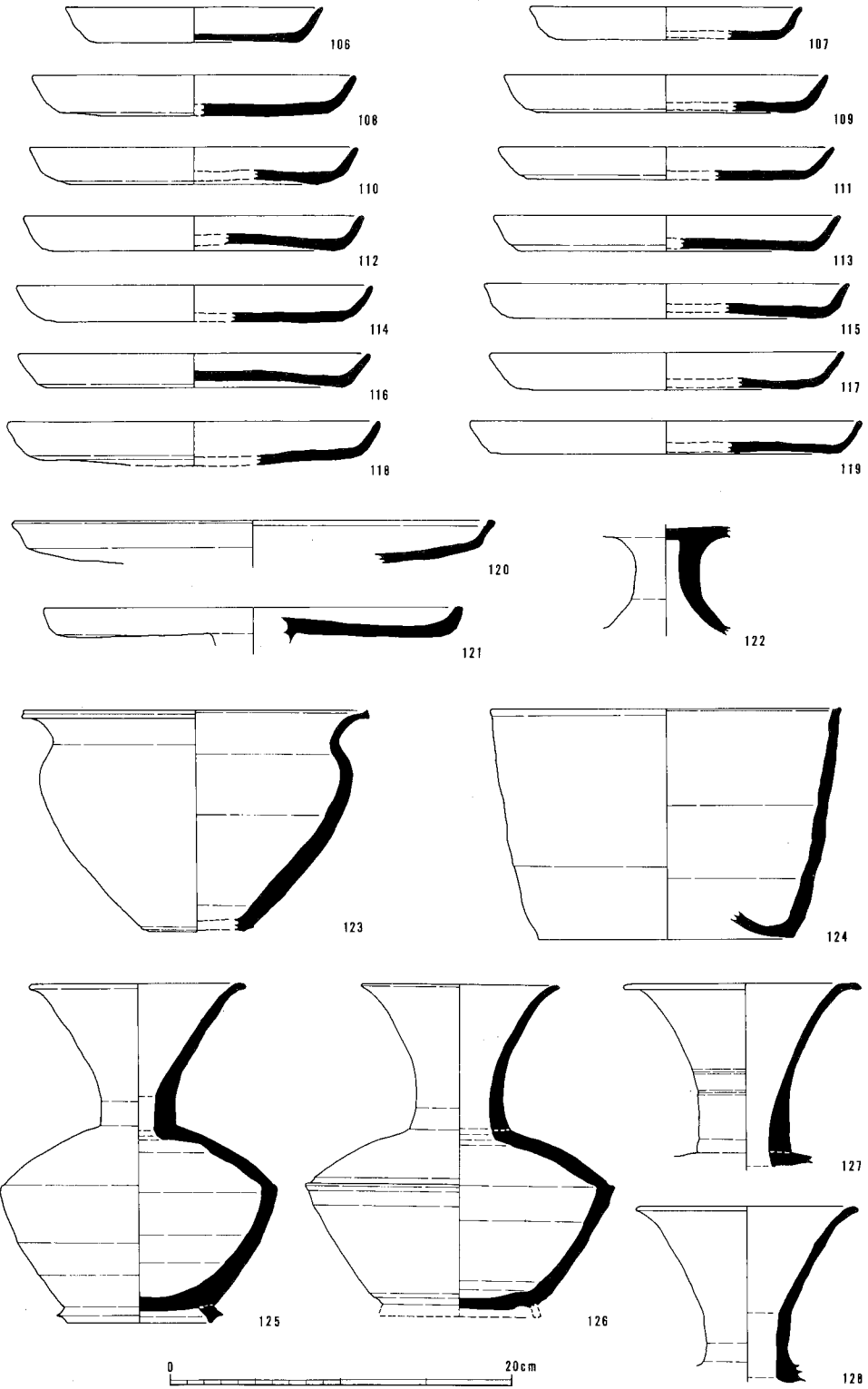
第140图 2号窯出土土器(2)

落合窯



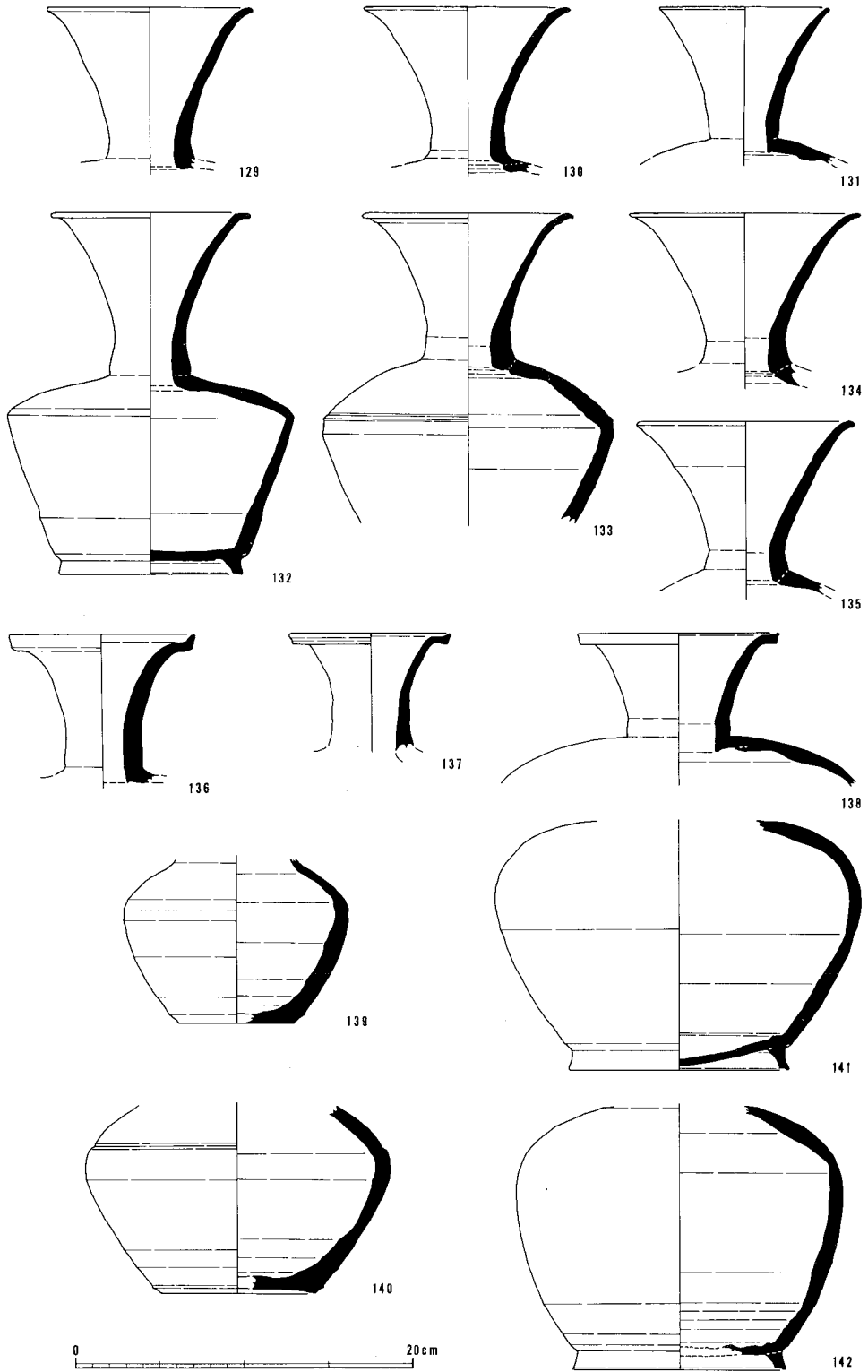
第141図 2号窯出土土器(3)

落合窯



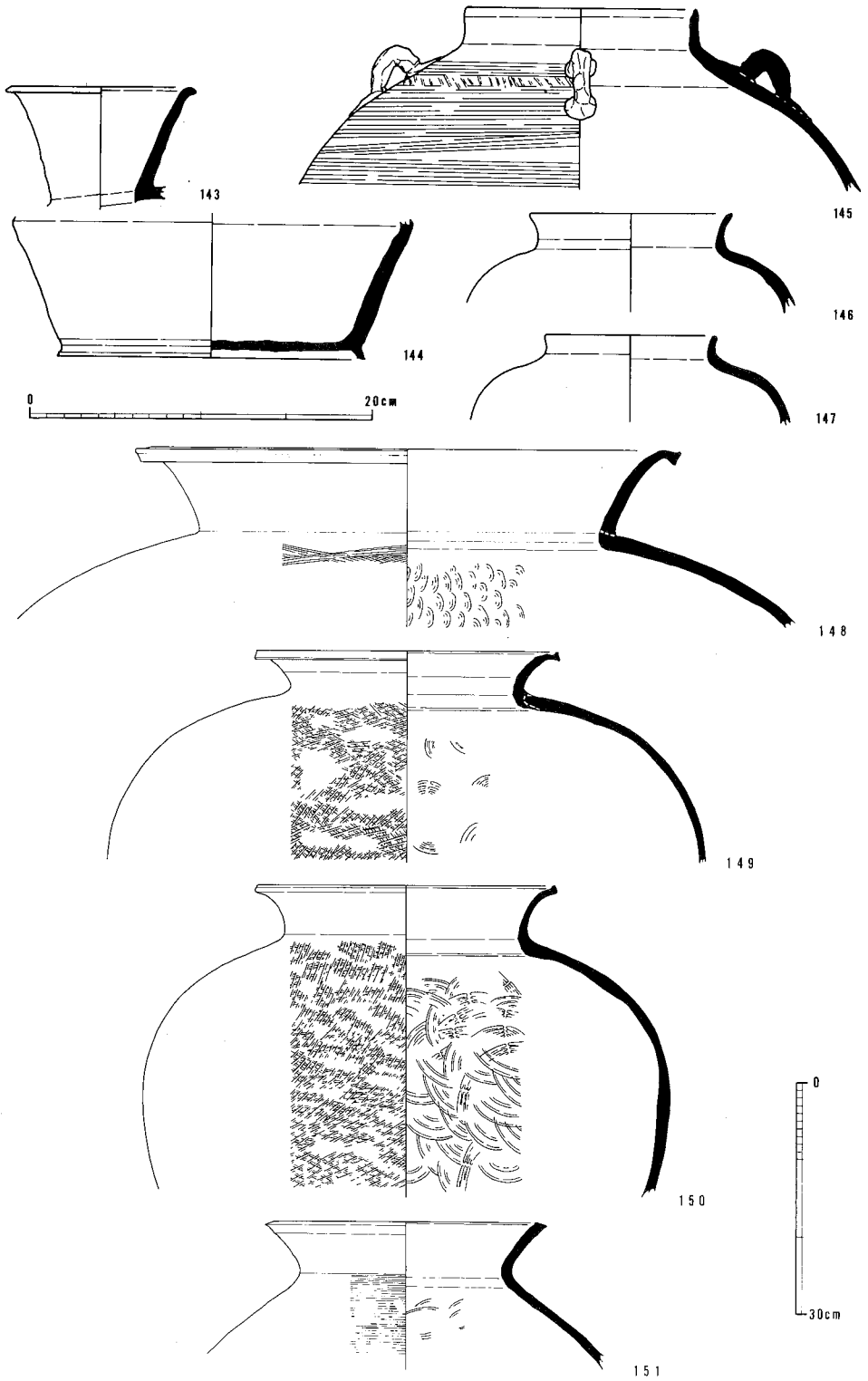
第142图 2号窯出土土器(4)

落合窯



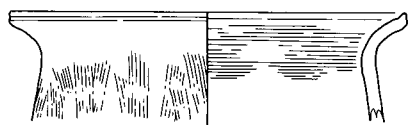
第143图 2号窯出土土器(5)

落合窯

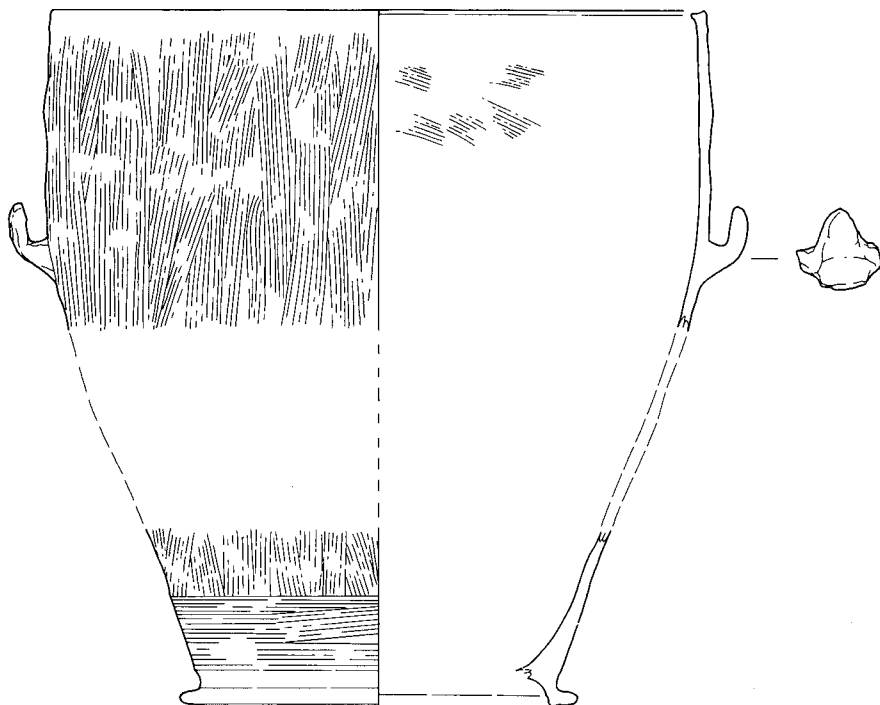


第144图 2号窯出土土器(6)

落合窯



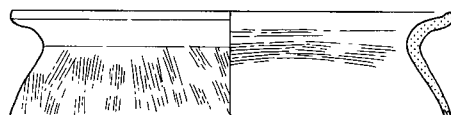
152



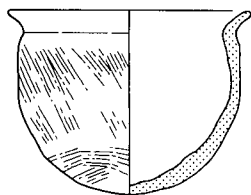
153



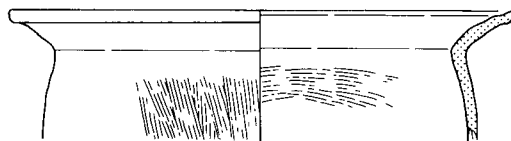
154



156



155

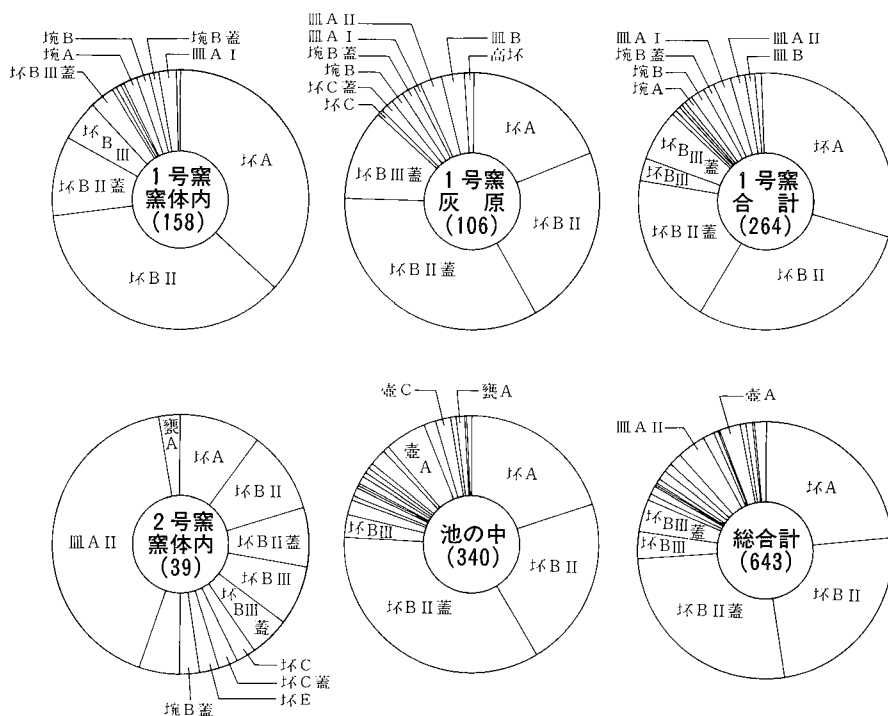


157



第145图 2号窯出土土器(7)

落合窯



第146図 1・2号窯焼成器種構成グラフ

し難いため、数量算出実質的には供膳形態中心の結果となっている。各数量は第15表のとおりで、これをグラフ化したものが第146図である。

1号窯の器種構成 まず、1号窯の場合、焼成器種は18器種を数える。第146図で明らかかなように、環Aと環BII・環BII蓋で全体の約75%を占め、その中で環Aと環BIIがほぼ等しい比率で焼成されている。また、法量や胎土等の特徴から環BIIは環BII蓋と、環BIIIは環BIII蓋と基本的にセット関係を持つと考えていたにもかかわらず、数量的には必ずしもそうは言えないことが判る。

ところで、1号窯窯体内の資料は、天井部が崩落して床面に遺物が多く遺存していたことは、最終作業面での焼成量の一部を占めていることは明らかで、数量算出による約160個体を数える土器が1号窯における1回の焼成個体数を何らかの形で反映しているものとして把握できる。この点については、遺構の項で述べたように、窯出しの後床面に放棄されたものと判断しているため、1回の焼成量の全体とは言い得ないかもしれないが、器種構成復元過程のひとつとして呈示しておく。また、実際には何個体の土器が1回の焼成で製品化されたかについては推し量るすべもない。ただ、陶邑TK321号窯⁽⁴⁾やマムシ谷窯⁽⁴⁾などの焼成途中で天井部が崩落したとされる窯跡資料と比較すると、窯体規模が当窯の方が小さい点を考慮してもやはり土器量の少ない感は免れないところであり、先の窯体放棄の推

定を土器量の面から示唆するものと考えている。
(山本雅)

2号窯の器種構成 特に1号窯との比較を中心に検討していきたい。坏A・坏B・坏B蓋が過半数を占めることについては1号窯と同様である。しかし、1号窯との大きな違いを示すのは、1号窯には認められない壺類・甕類の各型式が認められることである。それぞれ2号窯に伴う須恵器全体の中で9%・2%を占めている。また、先に検討した時期差を考慮に入れると、これらの壺・甕類は甕Abを除いてすべて灰原二次堆積層より出土しており、古相を示す一群に分類されるものである。つまり、操業当初により近い古相段階においては、壺・甕類の占める割合は先に示した割

第16表 須恵器出土地点別個体数一覧表

出土地点 器種	1号窯			2号窯	灰原2次	総合計
	窯体内	灰原	合計	窯体内	堆積層	
坏A	58	20	78	4	68	150
坏BII	53	24	77	4	73	154
坏BII蓋	16	34	50	3	118	171
坏BIII	8	0	8	3	10	21
坏BIII蓋	5	12	17	2	7	26
坏C	1	1	2	1	2	5
坏C蓋	0	2	2	1	4	7
坏D	1	0	1	0	1	2
坏E	1	0	1	1	0	2
坏F	0	0	0	0	0	0
碗A	3	0	3	0	1	4
碗B	3	2	5	0	3	8
碗B蓋	2	2	4	1	2	7
皿A I	5	1	6	2	2	10
皿A II	2	3	5	16	2	23
皿B	0	3	3	0	6	9
高坏	0	1	1	0	3	4
鉢A	0	0	0	0	0	0
鉢B	0	0	0	0	0	0
鉢C	0	1	1	0	0	1
壺A	0	0	0	0	18	18
壺B	0	0	0	0	5	5
壺C	0	0	0	0	6	6
壺D	0	0	0	0	2	2
平瓶	0	0	0	0	0	0
かめA	0	0	0	0	4	5
かめB	0	0	0	0	1	1
かめC	0	0	0	0	2	2
合計	158	106	264	39	340	643

合より高かったものと推測される。したがって操業当初より壺・甕類といった大型品の生産をある程度前提としていたものと言えよう。

さらに、出土土器全体のなかではわずかな量ではあるが、硬質土師器が含まれていることは注目される。巽淳一郎氏がすでに紹介している⁽⁵⁾ように、他の同時期の古窯跡においても全く認められないことではない。しかし、その意義付けについては今後の検討課題としたい。

また、灰原二次堆積層出土の土師器についてであるが、図示したものは4個体分に限られるが、実際は少しまとまって出土している。この土師器については、灰原二次堆積地を挟んだ窯体とは反対側の南向き斜面での確認調査においても、灰原二次堆積層出土とはほぼ同じ量が出土している。この斜面は灰原二次堆積地へと連続するため、灰原二次堆積層出土の土師器についても、当斜面出土のものとの関連性も考える必要がある。確認調査においては遺構は全く認められなかつたため、その意義付けについては明らかにしえないが、当地の窯を営んだ工人集団が操業時に使用したものとの可能性も考えられる。(山田)

4. 小結

(1) 遺構

以上1号窯・2号窯について述べてきた。両窯とも規模においては両窯の間に差が認められたものの、同じ立地条件のもとに構築されている。そして、灰原についても一部共有していると考えられる。また、以下で述べるように、遺物においても両窯相互間に時期的変

遷ないし同時性を認めることができ、この二つの窯は有機的な関連性をもって操業されていたものと考えられる。(山田)

(2) 出土遺物

前節でみたように、落合1・2号窯の遺物は様々な点から豊富かつ特徴的であると言える。ここでは、時期比定に向けて、先の分類に基づいてさらに検討を加えよう。

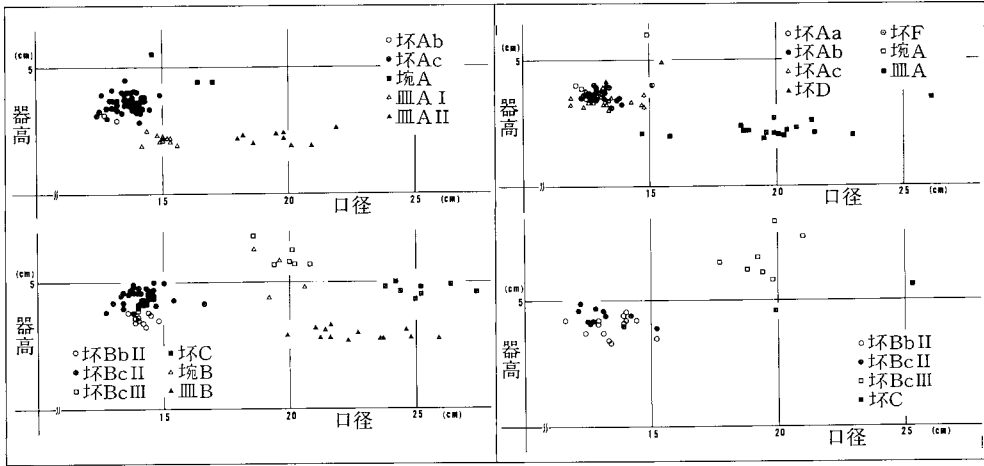
まず、出土地点・状況をあわせて、細分した供膳形態の坏A・Bを中心に須恵器のグルーピングから進める。1号窯の場合、窯体内遺存一括資料が最終操業に伴うことは明白であり、坏Ac・坏BcIIがこの土器群の主体を占めることから両窯の最新相を示すことが判る。また、1号窯灰原出土の遺物に関して言えば、状況的にみて第1回操業に伴うものと考えられ、坏Ab・坏BbIIから構成される点からも妥当であると言える。前面の灰原二次堆積層のものについては、地形的にみて、1号窯単独のものとは考えがたく、その帰属を明確にし得ず、資料的価値の低くなることは否めない。しかし、1号窯だけでなく両窯の器種構成を考える上での補助資料として重要な位置を占めることが指摘できよう。

一方、2号窯については、窯体内遺存一括資料が1号窯に比して量的にめぐまれないことや灰原が明確でなく灰原二次堆積層の資料を操作するため、層位的にはやや判断を困難にしている。しかしながら、操業面が2枚確認できた点をあわせると、坏Ab・坏BbIIを主体とする灰原二次堆積層の資料と坏Ac・坏BcIIを主体とする窯体内資料に二分でき、それぞれの各操業面に対応するものと考えられる。

こうしてみると、両窯の第1回操業では坏BbIIを同時に主体としている点が指摘できる。それぞれの坏BbIIをみると、両者の資料が大きな型式差を持つとは言えず、2号窯では坏Aaと共伴し、それが旧態を保持していることに加えて、2号窯坏BbIIの方がやや径高指数が低い点からも、2号窯の方が同型式内にあってもやや溯る要素をもつと考えて大過なからう。

次に、これらの土器群の変遷を法量分布図(第147図・第148図)をもとに検討する。落合窯跡群における供膳形態を採る器種のみ限定したものである。坏A・坏Bについてみると、径高指数はそれぞれ似通った数値を示しているものの、型式が下がるにつれて法量の拡大傾向が看取できる。また、II段階における坏BのII・III類、皿AのI・IIの器種分化も先に指摘したように顕著である。

ここで、あらためて層位と土器型式をあわせながら、落合窯跡群における操業を整理すると、2号窯第1回操業→1号窯第1回操業→1号・2号窯第2回操業の順に変遷したと考えられる。そして、これを坏A・Bだけでなく、他の器種との共伴関係を加えて、先の土器分類をもとに示すと以下ようになる。なお、共伴関係が状況的に妥当と考えられるものについては括弧内に示し、明確でないものについては列記していない。



第147図 1号窯法量分布図

第148図 2号窯法量分布図

I 段階 (古) — 坏Aa・Ab・坏BbII・坏Bb蓋・皿A・高坏・壺A・甕Aa

(坏C・坏C蓋・坏F・鉢B・壺D)

I 段階 (新) — 坏Ab・坏BbII・坏BbII蓋・鉢C

(埴Ba・鉢A)

II 段階 — 坏Ac・坏BcII・BcIII・坏BbII蓋・BbIII蓋・坏D・坏E・埴A・埴Bb・Bc・埴B蓋・皿A I・A II・壺C・甕Ab

上記のように変遷をみる事ができた落合窯跡群はいつごろの時期に比定できるのだろうか。供膳形態の器種を中心に当窯跡群がその一支群に属すると考えられる末窯跡群中の他の古窯跡との比較において考えていきたい。

当窯跡群内において、I 段階からII 段階への変遷を認める事ができた。その変遷を端的に示しているのが坏A・坏B・坏B蓋である。まず、坏A・坏Bについては、底部から口縁部にかけて不明瞭な稜を有して立ち上がり口縁部端部を外反させるものから底部に対して口縁部が稜をなして屈曲し、口縁部端部まで直線的にのびるものへの変化である。次に坏B蓋については、つまみの形態において頂部が突出し擬宝珠形をなすものから頂部が凹む形態のものへの変化である。

以上のように当窯跡群内における坏A・坏Bを中心とした変遷を認める事ができた。ところで、このような変遷の延長上にある古窯跡は末窯跡群の報告段階においては認められない。しかし、この流れの前段階に位置すると考えられるものとして、当窯跡とともに報告する川端窯跡をあげることができる。川端窯跡においては、坏Aは底部と体部の境は稜が不明瞭であり、口縁部端部においても外反するものが認められる。坏B蓋についても、つまみの形態が頂部が突出し擬宝珠形ないしそれに近い形態のものばかりである。このような特徴は、落合2号窯〔I 段階 (新)〕により近いことを示すと言えよう。

このような、坏A・坏B・坏B蓋を中心とした川端窯跡から落合窯跡への流れは、他の器種についても認めることができる。まず壺Aにおいて、落合2号窯出土のものは川端窯跡出土のものと一部同形態のものも認められるものの、口縁部高と体部高の比率において口縁部高の比率が低く、全体的にやや新しい傾向を示している。また、川端窯跡の時期については、平城宮編年の平城宮土器IIないしIIIと考えられていることを考慮に入れると、川端窯跡の方が供膳・貯蔵形態の土器においてその細分型式がより豊富であること、川端窯跡においては認められない稜椀(埴B)が落合窯跡群において認められることなども落合窯跡群の方がより新しい傾向にあることを首肯するものといえよう。

以上のことから、落合窯跡群は川端窯跡に続く時期のものとして大過ないものとする。なお具体的な時期については、末窯跡群における相対的編年の確立を待つこととし、本報告においては川端古窯跡に続く時期のものであることを指摘するにとどめたい。

(山本・山田)

- 註(1) 向田裕始「VIII. まとめ一窯跡と工房址について」『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』(財)広島県埋蔵文化財調査センター 1981. 3
- (2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告XI 第一次大極殿地域の調査』奈良国立文化財研究所学報第40冊 1981
- (3) 京都大学文学部考古学研究室『丹波周山窯址』1982
- (4) 中西靖人「高蔵寺第321(TK321)号窯」『陶邑V』大阪府文化財調査報告書第33輯 大阪府教育委員会 1982. 3
- (5) 同志社大学校地学術調査委員会『マムシ谷窯跡発掘調査報告書—同志社大学田辺校地内所在遺跡の発掘調査報告II—』同志社大学校地学術調査委員会資料No.14 1983. 3
- (6) 巽淳一郎「古代窯業生産の展開 西日本を中心にして」『奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会 1983年

小野地域



第8章 小野地域の調査

第1節 伊勢貝遺跡 (AO-3・4)

1. 立地

伊勢貝遺跡は三田市小野字伊勢貝に所在し、当初AO-3・4地点と呼ばれていた遺跡である。小野地区は西を飯盛山に南・東にかけて花山の山々に囲まれた、狭長な盆地状を呈する地にある。遺跡は黒川の開析によって形成された、微弱な河岸段丘上に立地し、標高186m付近にある。

2. 調査の経緯と経過

この遺跡は昭和49年3月に行われた分布調査において発見された。分布調査時は須恵器・土師器・陶磁器の破片の他、土錘やサヌカイト製の石鏃なども採集された。

分布調査の結果に基づいて昭和51年、青野ダム埋蔵文化財発掘調査団が小野地区遺跡範囲確認調査を行った。調査は黒川左岸の河岸段丘や沖積低地に約30箇所の試掘壕を設けた。その結果、小野集落の南西側に形成された河岸段丘上に、東西100m、南北250mの範囲に土壇・柱穴などが検出された。しかし、遺構密度も少なく、遺物量も僅かなことから、第2次確認調査が必要であると判断された。

伊勢貝遺跡の第2次確認調査は、兵庫県教育委員会が昭和52年5月～7月に実施した。



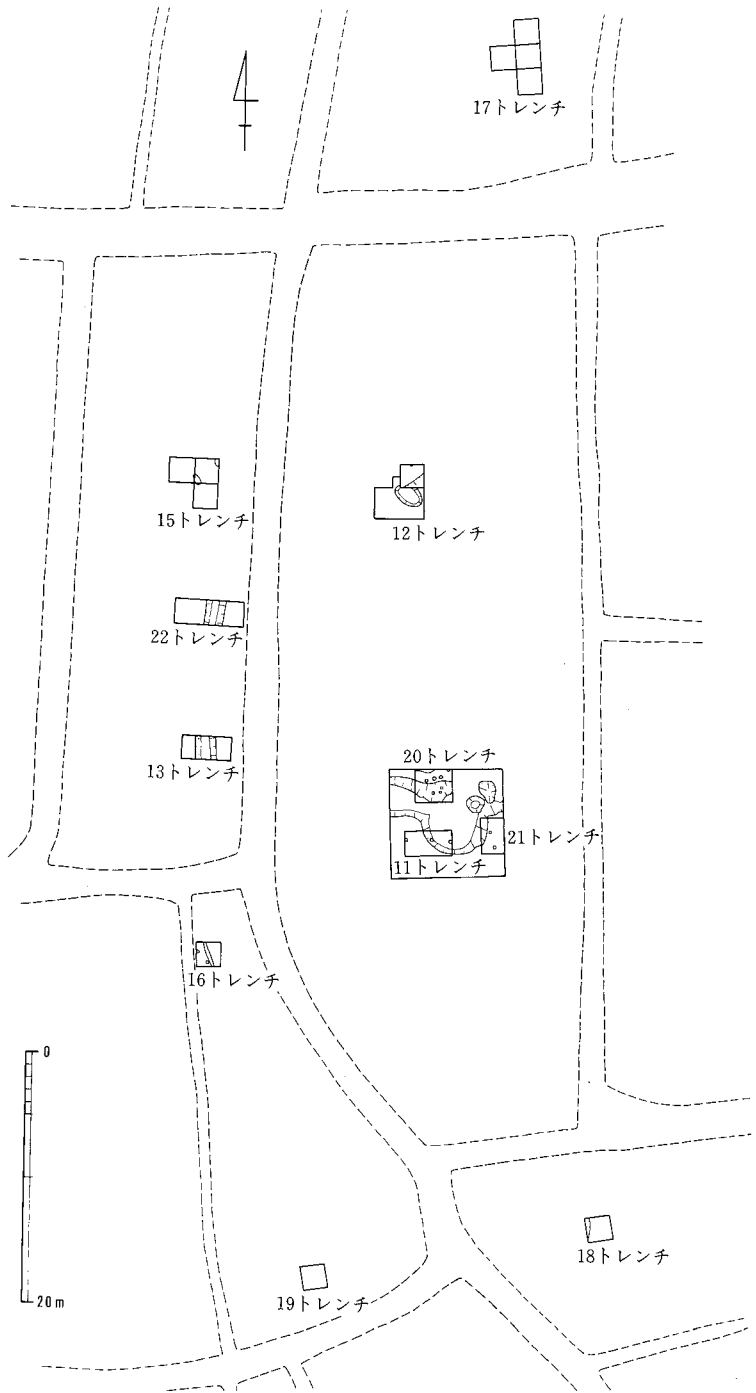
第149図 調査区遠景

3. 土層

伊勢貝遺跡では柱穴や円形遺構が検出された。中位河岸段丘上の地区、その西側に位置する低位河岸段丘上には南北方向の溝があり、南端では柱穴や溝が検出された。

中位河岸段丘上の円形遺構が検出された面には、北の17トレンチ III層茶褐色土から縄文土器が出土した。

また円形遺構の検出された11・20・21トレンチでの土層はI層黒色耕土、II層黄茶褐色土(床土)、III層暗灰茶褐色土、IV層灰黄色中砂、V層暗茶褐色土(遺物包含層)、VI層暗黄茶褐色土(遺構ベース)となっている。一方、西側の13トレンチでは、X層黄褐色土上面で灰色砂が堆積した溝が検出された。南端付近の19トレンチでは、I・II層は変わらずIII層灰褐色砂質土に僅かな土器があり、IV層暗灰色砂質土に土器が多く存在した。V層黄茶褐色砂質粘土層で遺構面が予想されたが検出できず、VI層青灰色粘土となった。



第150図 遺構全体図

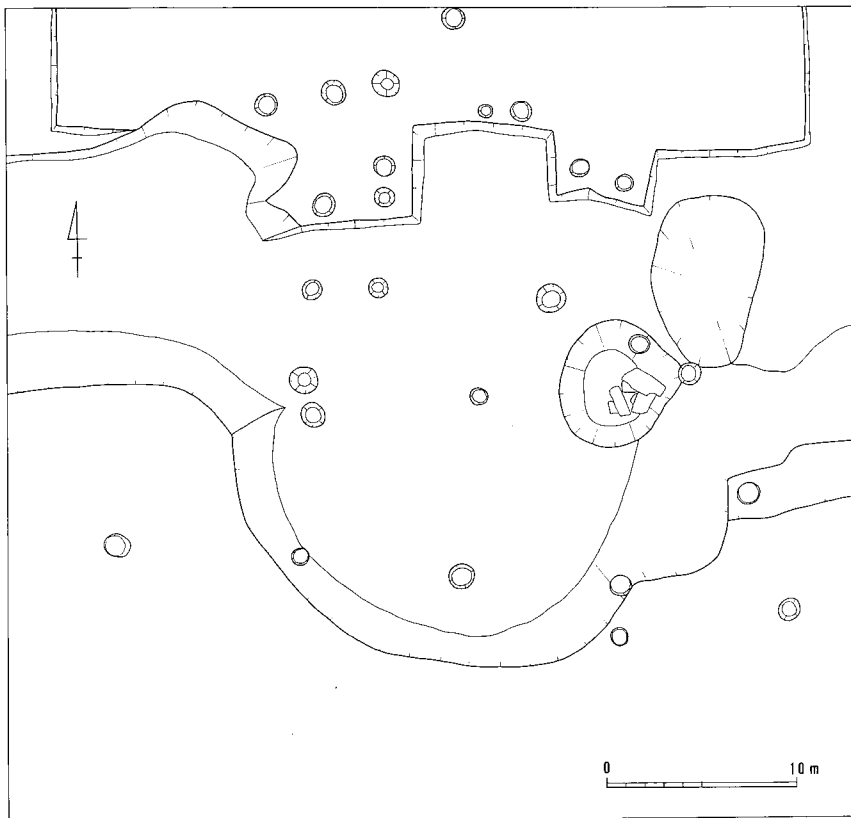
4. 遺構の状況

調査の結果、円形状遺構、柱穴、溝、土壇などが検出され縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、石器などが出土した。

17グリッドからは縄文土器の深鉢(1)などが小片ながらも、多数出土した。その中には、生駒西麓産と考えられる鉢が出土した。

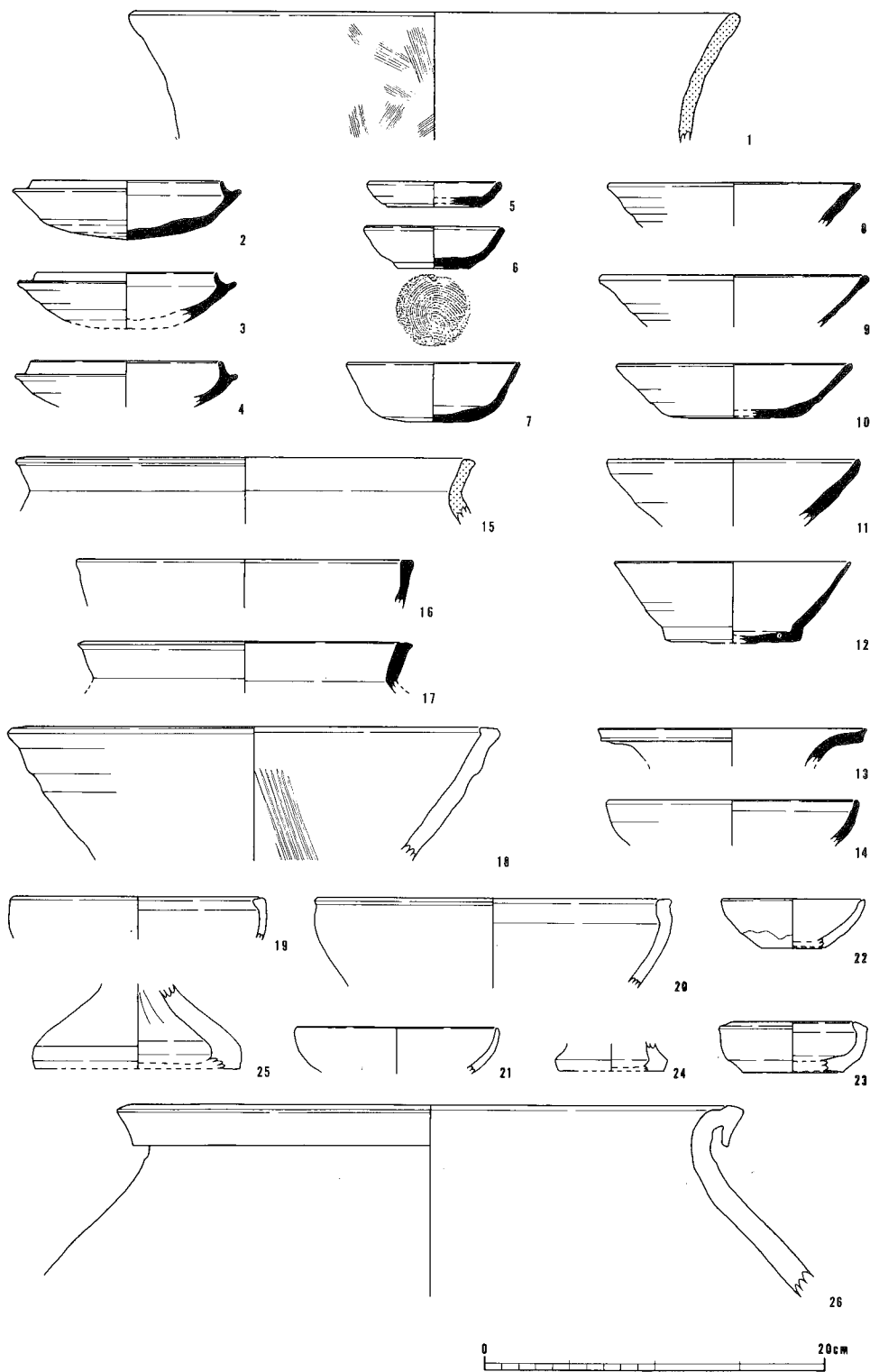
円形状遺構は11・20・21グリッドにわたって確認されたため、拡張し、検出されたものである。遺構は径約4m、深さ50cmであるが、北側の肩部は不明である。また東西方向にかけて溝状の遺構が続くことが判った。遺構の底面には径1.2mの土壇があり、人頭大の集石がみられた。出土遺物として須恵器椀、土師器などがあり、平安時代後半(10世紀)頃と考えられる意味不明の遺構である。

13・22グリッドでは幅1.5m、深さ60cmで南北方向にのびる溝が検出され、須恵器(10・12)が出土した。16グリッドでは幅30cm、深さ10cmでやや西寄りに振った南北方向の小規模な溝が検出された。またこの溝に隣接する柱穴からは須恵器(3)が出土した。この他、12グリッドでは2.4m×2mの土壇が検出された他、15グリッドでは80cm×40cm、深さ20cmの土壇が検出され、ムクロジの実が出土した。柱穴については多くの試掘場で検出されたが、



第151図 11・20・21トレンチ円形状遺構

伊勢貝遺跡



第152図 出土土器

建物の規模が判明するまでに至らなかった。

5. 遺物

出土遺物には遺構からのものの他、包含層からのものが多く、縄文～中・近世のものまでが混在しているところもある。

縄文土器(1)は口縁が僅かに開きみになる縄文後期の粗製深鉢型土器口縁部である。外面に不定方向のハケ目調整がみられるが残存状態が悪く、砂粒が目立つ土器である。

(2～4)は古墳時代のもので、(2・3)は口縁端部が斜め上方に短くたちあがり、底部のヘラゲズリの範囲は狭い。(3)は前者に比べて口縁端部のたちあがりほぼ上方に直立するものである。(7)は底部に丸みを持ち、口縁にかけて開くもので7世紀後半の坏身であろう。

平安時代後期の須恵器として、(5・6)は小型の坏で、底部は糸切りである。12世紀のものである。(8～11)は口縁が大きく開くタイプの坑或は坏で、いずれも口縁外面に重ね焼きの跡を残すものである。各々の体部上半の形態が異なり、端部付近で外反するもの(8・9)や、直接的に開くもの(10)、端部付近で内彎するもの(11)などがある。(12)は体部は直線的に開き、底部は平底高台である。三田市相野付近の窯でつくられた可能性があり10世紀の資料であろう。土鍋として(16・17)は須恵質のもの、(15)土師質のものである。

陶磁器としては器種が多く、不明のものがある。(18)は丹波焼のスリ鉢で内面に6条のクシガキがある。18世紀のものである。(19)は丹波焼の鉢で外面に鉄釉・内面に灰釉が施釉されており、18世紀後～19世紀前のものである。(19)も丹波焼きと考えられる鉢で、近世のものであろう。(21)は美濃焼の坑で内外面は白濁釉で、18世紀後～19世紀前のものである。(22)は美濃焼の天目坑で、器高が低く、16～17世紀であろう。(23)は産地は不明の小鉢で、外面に鉄釉がみられる近世陶器である。(26)は丹波焼の甕で口縁が折りかえされ、N字状口縁をしめし、口縁内面と体部外面に灰がかぶっているもので、13世紀中～後半と考えられる。その他(24・25)は丹波焼であるが器種不明である。

6. 小結

第2次確認調査の結果、調査区北部では、円形状遺構・土壙・溝・柱穴が検出された。これらの遺構の時期は出土遺物から平安時代後半のものと考えられ、縄文土器が集中して出土した17グリッドを含め、南北100m、東西40mの範囲に集落跡が存在することが予想される。

また南部については4グリッド付近に遺構が存在し、南北30m、東西50mの範囲についても遺跡になろう。なお当遺跡については干し上げ工事により保存された。(深井)